

---

# とあるナニカの音声魔術士(ヴォイス・ソーサラー)

モーラン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるナニカの音声ヴォイス・ソーサラー魔術士

### 【Nコード】

N8453S

### 【作者名】

モーラン

### 【あらすじ】

青年は気がつくと、『とある魔術の禁書目録』の舞台である『学園都市』の学校で高校生をしていた。  
ライトノベル『魔術士オーフェン』に登場する能力『音声魔術』をその身に宿して

(ああもう、何だっというんだよ…!)

意味がわからない。

午前の白い日差しが差し込む、ありふれた校舎の一室で。

心中でうめいた青年は、何故自らが現在の状況に身をおいているのか、その一点に説明を求めたい一心で、目の前のノートパソコンの中身を片っ端から漁っていく。

年の頃は16、7だろうか。

一般的な青年、といって誰もが思い浮かべるカタチをほぼ、ずれなくなぞった容姿は、焦燥にかすかに歪んでいた。

ひらかれていく、マイコンピュータとドキュメント以外、彼にとっては見たこともきいたこともない名前のアプリケーションがずらずらと表示されていくデスクトップ。

ぺらぺらといって差し支えない厚さに抑えられたそのパソコンのスペックの高さに舌を巻きながら、彼はまず、目に付いたアプリケーションを起動させる、

これは…ブラウジングソフトのようだ。

瞬時に立ち上がり、ポータルサイトを表示するノート。

その速さに驚く間もなく、表示されたヘッドラインに浮かぶ文字を見て、青年の焦りは一気に驚愕へ引き上げられ、そして次の瞬間にはあっさりとハンゲアップする。

『学園都市』 『超能力開発』 『ツリーダイアグラムによるお天気【情報】』

「どうした須臣？次の授業は視聴覚室だけ？遅れようもんなら先生にすけすけ見る見る強要されるぞ？」

呆けた彼にどこかで聴いた様な声と共に、肩をポン、と叩かれる感触。

呆然としたまま彼が振り返るとそこには、当たり前のようにツンツン頭の高校生がいた。

視界に納まった光景と、かけられたセリフに対して、彼は心の底からこう思う。

「ごめん、マジで意味がわからない。」

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

「なんていうか、状況の整理をしないとやってられない感じだね…」

そうして、わけが判らないまま授業をやり過ぎて迎えた放課後。何処にでもあるファミリーストランの一角に場所を移して。

フライドポテト、それにドリンクバーのコーヒーという、これまたありふれたセットの前でくだんの青年は薄いノートを開いた。

呼び出すのは、メモ帳アプリ。

モニター画面いっぱい白紙を広げ、つらつらと文字を打ち込んでいく。

僕は大学生

「気がついたらなんか高校で高校生やってたけど、僕はれっきとした大学生だったはずだ…」

なの上条当麻の同級生

打鍵する指先が震える。

僕が居る、ここは学園都市

震える指が、タイプミスを犯す。

何食わぬ顔で修正を入れてから、彼は新たな言葉を書き加えた。

名前はそのまま須臣 桐。何故かこちらの学籍を持っている。

「憑依でも素直な召喚でもなく若返って学籍、戸籍つきで現実から移行って、なんなんだろう…?」

『とある魔術の禁書目録』の世界に、

5

また、指先が震えた。

それを意識しておさえこむと、バックスペースを連打後、残りを打ち込んで文章を完成させる。

『とある魔術の禁書目録』の世界に、僕はいる？

視線が、打ち込まれた文章をなぞる。

そして彼は、ひとくち、目の前のコーヒーを口に含む。

苦味に舌を浸しながら、また、指先を繰る。  
今度はなぜか、指が震えることはなかった。

ヴォイス・ソーサラー  
音声魔術士として

「そりゃオーフェンは好きだったんだけど…」

青年…桐はポテトをかじりながら脳裏に構成を編み上げる。

またたくまに完成していく、世界を騙す、仮初の力。  
間違いなく出来ると、確信してしまう自分にうんざりしながら、桐は構成を霧散させた。

「いきなりこんなのが使えるようになってもなあ…そもそも『この世界』、それ以上の規格外がうるうるしてるんだし…」

もぐもぐと口を動かしながら、しばし黙考し

(とりあえず波風には出来るだけ触れないように生きていくしかないかな…学生寮があつて学籍があるんだから、学園都市で暮らすのには困らないはずだし。孤児でも生きていけるっていうのは、学園都市様々つてことか…)

ポテトを飲み込むと、桐はうーんと伸びをする。

気持ちを入れ替えると、カチャカチャとキーボードに向かって文章を書き込んでいく。

絶対に、禁書目録なんて厄ネタには関わらないようにす

ること

原作知識をフルに使って、この世界でひっそりと生きよう。

手に入れたチカラは、ただ、還る為に。

ひとしきり、打ち込み終わるとソフトの右上のクローズボタンにカーソルを合わせ、青年は文章を保存することなくアプリケーションを終了させた。

それから重ねてデータの掃除を済まし、その終了を確認してから無線LANのスイッチをオンにする。

「さてと、とりあえず寮の場所、見つけないとな……」

すぐにアクセスポイントに接続し、ネットにつながるノートパソコン。

整えられた通信環境に感心しながら、桐はタッチカーソルを滑らせるのだった。

…バカみたい。

思うとおりに進むわけ、ないのに。

NEXT .

TO





## Phase 2

翌日が休みだったのは、桐にとって幸運だった。  
彼のもの、として存在していた部屋に、何もなかったからだ。

カチャリ

「さてと、鍵は開いたし、ここでいいみたいだね……って?!」

……。  
……。  
……。

数瞬、沈黙が流れ、そして。

「……………」

パタン（そつと扉を閉じる音）。

これが、彼が寮の自室を初めて開いた時のリアクションのすべてである。

一山いくらな感じの安っぽくて無機質な、『須臣 桐』という表札の掛かった部屋を開くと。

まず、そこにはベッドがなかった。  
当たり前のように冷蔵庫もなかった。  
テレビどころか、ラジオすら転がってなかった。  
そもそも家具の類が見当たらない。当然カーテンすら掛かっていない。視界に映るのは、寒々しいフローリングだけ。

端的に言うと、完全に空き部屋だった。

「…これ…なんかのイジメ？」

ぼやいても当然家具は出てこず、桐はそのまま、固いフローリングの床で夜を過ごした。

彼は心の底からこう思う。

…いや、なんか扱い、ひどくない？

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

「まあ、世界が僕に優しくくないのはずっと前から知ってたけどさ…。  
『こつちの世界』も優しくないってひどいよね…」

ぶつぶつと独り言をつぶやきながら、桐は昼過ぎの学園都市を歩いていた。

ひたすらテンションが下降気味なのは、自分が置かれている現状をしっかりと把握してしまったせいだ。

所持金 5607円  
銀行残高 2302円

「なんでこんなにあるな所持金なんだろ…叫んでいいかな？『不幸だー！』って……はあ……」

自虐ネタがダイレクトに自分に刺さり、桐はさらに落ち込む。

「こんなことだって知ってたら、昨日ファミレスでポテトとドリンクバーなんて頼まなかったのに……」

だが、昨日の自分を責めても始まらない。

昨夜から、着のみ着のままの自分を一時、見下ろして、桐はぶんぶん頭を振った。

「とにかく。まずは何か仕事を見つけないと。怖いからまだ調べないけど、このままじゃ家賃払えずにあの空き部屋すら追い出されるハメになりかねないし」

と、自分の言葉にとつなずき気合を入れたところで

唐突に爆発音と白い閃光が、視界を覆った。

「…うあ！…くう、我は紡ぐ光輪の」

突然の爆風に全身をあおられて、桐はとっさに防御のための構成を編み上げ、対応する言葉を口にしようとする。  
が、

(…って、この術式じゃ派手すぎる…！)

『それがあまりにも滑らかに出来たことには全く疑問を持たず』に、青年は脳裏に浮かぶ構成に魔力を流すのを意図して抑えた。

「ヨツシャ！！引き上げるぞ、急げ！」

「ウス」

先程の爆発は、銀行の入り口からだった。

そして吹き飛んだ入り口から出てくる、札束が覗く鞆を下げた三人組の男たち。

まだ青年といって差し支えない彼らを見て、桐はようやく事態を悟る。

「…いつら、銀行強盗…?!」

半ば反射的に、掌を彼らに向ける。

意識に編み上がるのは『魔術士オーフェン』の魔術の代名詞ともいえる、純白の光熱衝撃波を撃ち込むための緻密な構成。  
しかし、こちらの構成にも魔力が流し込まれることはなかった。

(ダメだ、これも目立ちすぎる…！)

先と同じく維持を放棄され、脳裏の構成が霧散する。  
そこに、新たな声が響き渡った。

「『風紀委員』(ジャツジメント)ですの！！器物損壊および強盗の現行犯で拘束します！！」

三人組の前に飛び出した少女が、右腕につけた腕章を強調しながら朗々と謳いあげる。

そのまま、にらみ合う両者。

「えっと、あのツインテールと口調 白井黒子?!」

めまぐるしく変わる状況の至近にいる桐は、脳裏の構成を切り替えながら状況を再確認する。

(白井黒子 『禁書目録』の脇役とはいえ、学園都市というくくりの中ではかなり上位のレベル4、テレポーターの『大能力者』(レベル4)だったはず…)

少女と違って差し支えない黒子の姿を侮ったのだろう。

三人組がどこかいやらしく笑うのを、桐は視界に納める。

(負けることはなさそうだけど、三対一だしな。変に逃げられても厄介だろうし。原作に出てこない状況だから、ここは手伝っても問

題ないか？)

『とある魔術の禁書目録』を、小説という形でしか知らない青年は、『つい昨日、ひっそりと生きようと自らに課しておきながら』ごくごく自然にそう思考する。

『その歪みに気付かぬまま』、方針を決め、桐は改めて自身のチカラを編み上げた。

選ぶのは、嫌でも目を引いてしまう派手な光と熱を操る術式ではなく、あえて衝撃に特化させた風の一撃。

その構成が完成すると同時に、桐は声を振り絞った。

同時に掌を振り上げ、サイドスローを放つように術式を解き放つ。

「我は撫でる獅子の鬣！」

その『音声』の響いたセカイで。

桐の掌から標的までの最短距離を、獰猛な風が生まれ、奔った。

地を這うように駆け抜けた不可視の空気の塊が、逃げようとした三人目にぶち当たり、その身体を無力化させる。

そこに遅れて、べちゃり、と不吉な音を残して。

…くすくす。

いい様になりそうね？

E  
X  
T

T  
O  
N



学園都市のレベル4、『風紀委員』の白井黒子にとっては、それはごくごくありふれたシチュエーションでしかなかった。学生崩れのチンピラとの三対一など、むしろ簡単すぎてあくびが出してしまう。

「……そういう三下のセリフは…、死亡フラグですわよ？」

ただ、避けて、飛ばす。

図体だけの一人目を、最小限のツークションで無効化。

「はっ、戦う前から手の内を見せてどういっつもりですか？」

三人の中で唯一のレベル3をあっさり制圧し、逃げた最後の一人に意識を振り分けようとしたところで、

「我は撫でる獅子の鬣！」

誰かの声と共に、逃げた最後の一人に一陣の風が襲い掛かっていた。同時に、とある女子中学生の制服に、遅れてべちゃり、と不吉な音を残して。

それを見た黒子は思う。

…あらあら。

よくよく、運のない方なのでしょうが？

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

P h a s e : 3

「…なんとか、なったかな……？」

初めて行使したチカラの反動を味わいながら、桐は安堵に身を委ねていた。

ある意味、マイナーな元ネタの中でも特にイレギュラーなものを必要に迫られて使ってしまったのにもかかわらず、発動に成功することが出来たからだ。

（元ネタも汎用性はおかしなことになってるし、多少のブレも構成さえ編めればなんとかなるのか）

そこまでひとりごちてようやく、訝しげな目をこちらに向けているツインテールの少女に気付く。

「っと、ごめん、余計なことだったかな？邪魔するつもりはなかったんだけど……」

思わず謝罪しようとする桐に、黒子は表情を緩めてこたえた。

「いいえ、ご協力には感謝しますですの。できれば、お名前をお伺いしたいところなのですけれど……」

だが、その声をダレカの声が無遠慮に遮る。

「あー、黒子？」

「はっ……はい！……ですの！……」

ほのぼのとしたかけた場の空気をぶつ切りに切って落としたのは、どこか静かな女生徒の声だった。

黒子の連れだろうか？

桐の立つ場所からは同じ制服を着ているということしかわからない、その女生徒の首元で、パチツと剣呑な火花が散ったように見えた。

（ …… あ、あれは！？ ）

青年を衝撃が襲う。

「いちおう、誰のせいでもないってのは理解はしてるのよ……でも、この私の行き場のない怒りは一体どうすればいいんだと思っ……？」

「お、お姉さま？死人に鞭打つような真似はよされた方が…」

(『お、お姉さま』って…)

黒子がそう呼ぶ少女を、桐は一人しか知らない。

「じゃあ、ヒトにとぼっちり食わせるようなヤツにお仕置きぐらいはしたって…許されるわよねえ!!」

少女が振り向くのに合わせて、桐は弾けるように後ろへ跳んでいた。同時に総身に走る危機感だけを理由にして構成を展開、発動させる。

「わ、我が指先に琥珀の盾！」

差し出した指先を中心に、桐の目の前の空気が圧縮され硬化する。同時に紫電が走り、

それは少女から放たれた電撃を弾いて霧散させた。

「…え、防いだ…?!まさか、アイツと同じ…?」

何事かつぶやき、今度はポケットから何かを取り出そうとするその少女に、黒子ともう一人、『風紀委員』の腕章を付け、頭に花を飾った少女があわてて止めに入る。

「お、お姉さま！さすがに『レールガン』はやりすぎだと思えますの…!」

「な、なにがなんだかわかりませんが、あぶないのはダメですー!」

わけが判らなくなりながらも、止めに入ってくれたふたりに感謝しつつ、桐も両手をあげて敵意がないことを示す。

「ほ、ホントになんだかわかんないけどとにかくごめん、気に食わないことがあったなら謝るから…」

そして、気付いた。

彼女の服に、べったりと生クリームがついてしまっていることに。

(うあ、これを僕がやっちゃったのか？よ、よりもよって学園都市のレベル5に…)

状況を理解して、改めてパニックになりかける桐。

「こらっ黒子っ、抱きつくくなっ」

「だーめですよー。こうでもしないとお姉さま、善意の協力者の方に容赦なく手を出してしまうんですものー」

「ああもう！わかったから離れなさい！！」

叫びと共に黒子を振り払う少女。

若干腰の引けた桐に、黒子にお姉さまと呼ばれた少女はどこか警戒しながら、探るような言葉を吐いた。

「まあ…悪かったわね。あんたには訊きたい事もあるんだけど…」

そこで自らをじっと見つめる『風紀委員』(ジャッジメント)のふたりを振り返って、やれやれと頭を振る。

「あー、まあ、今度でいいわ。とにかくいきなり仕掛けたのは謝罪させて」

予想以上に穏便な対応に、桐はほっと胸をなでおろした。

その直前に聴こえてしまった、『訊きたい事』、というきな臭いフレーズを出来るだけ意識の外に押しやって、軽く手を振ってみせる。

「いや、それはこちらが悪かったことだし…クリーニング代、請求してもらっていいから」

自分の懐事情を思い返してへこみながらも、青年は身を切る思いでそう提案する。

しかし彼女は、こともなく答えた。

「んー？別にそんなのいいわよ。寮のクリーニングに出せばいいんだし。じゃ、黒子、私は行くわね。後始末に関わるのも面倒だし」

それだけをいいおくと、彼女はすたすたと歩いていつてしまった。桐も自然に、彼女と反対の方向へと歩き出す。が、その前に、なぜか黒子が回りこんできた。

「あら、どこに行こうとされてますの？」

「あ、いや、終わったみたいだし、部外者はとっとと帰ろうかなーって…」

出来るだけにこやかな表情をつくって対応する桐。負けないくらいにこやかに、黒子は明るく話す。

「いやですわ、部外者なんて。私たち、これから事のあらましを報告しなければなりませんの。当事者の方の証言があると、いろいろとスムーズに片付くのですけど?」

「あ、いや、これから僕、マジでバイトの面接に行かないといけなくて」

「残念ながら先程の案件に対応しなければならぬ以上、今のあなたに行動の自由はございませんわね。ところであなたのお名前はなんておっしゃいますの?」

さらににこやかに近づくと黒子。

(もしかしなくても厄介ごとになってる気がする、けど…)

にこやかな少女に気圧されながら、全力で逃げ出した場合、逃げ切れるかどうかを桐は試算する。

(公権力のバックアップ付きのテレポーター相手に、その縄張りの町で鬼ごっこしたら?)

答えは、考えるまでもなかった。

あきらめて、青年は両手をあげる。

「はあ…。僕は須臣、桐だよ。学籍番号は569812541xx  
x。…とりあえず、早く終わらせてくれると助かるんだけど?」

そうして返した言葉は、本人が意図したよりも弱々しく、その場に響いたのだった。

ま、わるくないわね。  
…。

E  
X  
T

T  
O  
N



変則的なトリップからまだ、2日目。

来たばかりのこの世界で、『風紀委員』に連行される生徒の気持ちを味わうことになるとはさすがに思っていなかった。

桐は上手く回らない状況に落ち込みながら、取調べだか事情聴取のようなものを無難にこなす。

「スオミ キリ 学籍番号は569812541xx能力はレベル3...ですわね」

「...だからそうだってさつきから何度も言ってるよね...?」

いや、無難にこなすつもりだった、のだが。

三重に張られたロックを抜けた先、風紀委員の第177支部の中。青年はやくたいのない質問の繰り返しにうんざりとしていた。

この部屋に入ってから、そろそろ3時間。

すでに2時間ほど前に、約束していたコンビニバイトの面接の時間は過ぎ去っている。

途中まで、どこか申し訳なさそうにこちらをちらちら見ていた初春も、今は別の机で自分の仕事らしきものに向かっていた。

「成績も悪くないですわね...というかこれならもつと上の学び舎にも潜りこめそうなものですね。あれだけの確な挙動を可能とする風使いは、この学園都市に何人もいないでしょう?」

いつの間にか風使いにされていることに關しては、都合がいいのであえて触れずに、桐は何度目かとなるデタラメを繰り返した。

「それについてもさつき答えたよね？パターンに能力を特化させているからこそその高性能だつて。ゼロから粘土をこねて像を作るんじゃない、初めから理想像の型を取っておいてそこに粘土を詰め込むようなものだから、あんまり出来がよくなっても見栄えだけはするつて」

うんざりと返される言葉に、齒切れのよい声が応える。

「たしかに、そうお聴きましたですの。∴そして引き止めるのもこのあたりが限界みたいですね」

さらりと本音を吐きながらはあ、とため息をついて、黒子はふるふるとかぶりを振った。

ディスプレイに表示されている時計に眼をやって、

「門限まで後三十分…まあ、ぎりぎり逃げ切れないこともないと思いますの」

桐にとっては意味不明な言葉を吐くと、黒子は席を立った。

「とにかくご武運を。ああ、お姉さまに傷のひとつでもつけたらぶつ殺しますわよ？」

さらに意味の取れない言葉を重ねて、黒子は扉を開けた。心底やれやれと嘆息しながら立ち上がり、桐は思う。

やっぱりとんでもない所だね…学園都市って。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase・4

年下の女の子が相手とはいえ、マンツーマンの尋問は心に悪い。  
精神的に疲弊しながら、桐は何処かの中学の校門をくぐった。

すでに夜といって差し使えない時間帯。  
無駄にした一日を虚しく振り返りながら、桐はとぼとぼと家路を歩  
く。

「待ってたわよ」

とぼとぼ。

「昼間は悪かったわね。ただ、確かめたいことがあると放って置け

ない夕チなの」

寝起きのように上手く回らない頭を振って、おっくうそうに青年は視線をもそもそと取り出した携帯の時計表示に向けた。

時刻は8時過ぎ。

夕食をとる時間…というか、間違ってもバイトの面接、およびアポイント取りには向いてない時間にあらためて肩を落とす。

「だから、答えてもらっわよ…って無視するんじゃないっ!!」

「うあっ!!」

間に合わせの不完全なものだったとはいえ、走ってきた雷撃に、思わず発した声をキーにチカラを使ったのは奇跡だった。

急速に圧縮された空気の壁が電撃を押しとどめ、あたりの空間へと霧散させる。

「我が指先に琥珀の盾…って、いきなり何が?!ってうあ、ビリビリ?!」

改めてチカラをかけなおしたところで、目の前で肩をいからせている御坂に気付く。

(…この子、何でこんな時間にこんなトコに来てるんだよ?!)

「ビリビリ…ねえ。ムカつくわ、そんなとこまであいつと同じだなんで…!!」

さらに数条、紫電が走る。

しかしそれも、あっさりと空気の壁に阻まれて消えた。

「ああもう！あいつといいあなたといい、一体どんな仕組みなのよ？！」

（あいつのは幻想系なら問答無用の『幻想殺し』だし、僕のは単に絶縁体である空気を高圧の壁にすることで絶縁性を増してるだけだよ！）

などと言えるわけもなく、桐はバックステップしながら別の言葉を叫ぶ。

「だから、何でいきなり出会いがしらに攻撃して来るんだよ！！」

しかもレベル5が。

（スキルアウトの雑魚ならまだわかるけど、明らかにボスクラスが向こうからひよひよいとエンカウントしてくるのはどうなんだよ！！）

心中で絶叫しながら、桐は続けて構成を編む。

「やっぱり電撃は効かないか…なら、これで！」

少女の手にじわじわと砂のようなものが集まり、黒い剣を形作る。

「砂…いや、砂鉄の剣…？」

「…ふうん、わかるんだ？砂鉄が振動してチエーンソーみたいにな

つてるから、触れるとちょーっつと血が出たりするかもね」

（なんでこんなところで原作に出てきた凶悪な能力を向けられてるんだ僕は!?!）

桐は歯噛みしながら構成を入れ替える。

目前の美琴が黒い剣を振るのが見えた。

さらにバックステップ。

その場に残しておいた空気の壁がやすやすと切り裂かれるのを感じて、改めて戦慄した。

（なりふり構っていられる状態じゃ…ない!?!）

思考と共に、右手を掲げる。

「ちょこまか逃げ回ったって、コイツには…」

「我掲げるは」

「こんな事もできるんだから!?!」

「降魔の剣!」

鞭のように伸びる黒い剣。

対して、差し出すように掲げられた青年の手に、ふっ……と剣を握っているような重みが加わる。

力場でできた、不可視の剣。

両者が触れ合い、桐の“剣”はその力場を開放させる。それはごっそりと、黒い剣を吹き飛ばした。

「そんな、磁力を砂鉄ごと吹き飛ばした？」

(ごっしか、ない！！)

桐は無言のまま視線を鋭くすると、すばやく右掌を美琴に突きつけた。

有無を言わさない桐の態度に、びっくりとする少女。

「悪いけど、チェックメイトだよ。』ここから先は、洒落じゃすまない』」

表情は毅然と。

内心で冷や汗をダラダラと流しながら、桐は颯爽とした態度で言葉を放つ。

「…な、なんだってのよ」

「御坂さん、だったかな。学園都市に5人しかいないレベル5。たかだかレベル3の僕にこだわる必要なんかないよね？」

そのまま少しだけ、会話で状況を引き伸ばす。

視界の端に映った車が見間違えてないことに感謝しながら、桐はできるだけ広範囲に影響を及ぼす構成を編み上げていった。

「君の特技は、レールガン、だったよね？破壊力と言えば最強に近いカードだ。でも忘れてないかな。核爆弾はヒトを殺せるけど、一

本百円のボールペンだって、使い方によってはピトを殺せるんだよ？」

「な、なによ…?」

「いや、この先はきつと、そういう世界になるって話かな？ピリピリ全開でじゃれる相手なら他にいるんだから、そっちで満足するのをおすすめしておこうかなって、ね！」

言葉を切った瞬間、桐は後ろに跳ぶ。

同時に、叫んでいた。

「我は乱す光列の檻!!」

声と共に構成に力を流し込み、チカラを発動させる。ぐにやり、と、美琴の周りの世界が歪んだ。

「な、なにこれ？光が歪んでる…?ええい、こんなの?!」

がむしゃらに動こうとした美琴に、ぼつりと桐は言う。

「あれ、不用意に動いてもいいのかな。今の話、聞いてた？」

滑り込ませるようにつぶやいた一言に、少女の動きが止まる。

だがそれを確認することすらなく、桐はノータイムで振り向き、走ってきた車を止めて強引に乗り込むと、迷うことなく運転手に向かって叫んだ。

「ヘイタクシー!!!!早く出して!!!!僕の命が危ないから!!!!!!」



数日後。

その運転手は酒の席でその時のことをこう、飲み友達に吹聴することになる。

あの時の兄ちゃん、なんか必死すぎて面白かった、と。

…。  
はあ、つまんない。

E X T

T O N

出費は容赦なく、残金を減らしていく。

タクシー代、しめて1280円。

そして現在の所持金は、3806円

ちなみに収入の目処は、全く立っていない。

(うう、これはもうマジで、飢え死にの危険が…)

桐は世知辛くも現実的な問題に頭を悩ませながら、学校への道を律儀に歩いていった。

初夏の日差しが、じりじりとコンクリートを焼きはじめる、朝の遅い時間。

「小萌先生にでも泣きついてみようか…？二つ返事で泊めてくれたあげく、ちよつとよさげな焼肉食わせてくれそうだし…」

『原作』のあのシーンを思い返し、小さな担任に本気で頼りたくなってきたいる自分に朝から落ち込みながら、教科書代わりのノートが入ったかばんを背負いなおす。

「とにかく、バイトを探さないと。こんな状態じゃ、学生の身分って結構大事だけど…どうしようもないならスキルアウトもどきになることも考えなきゃなのかな？…はあ、ぞつとしない……」

学校まで、片道30分強。

当然のようにバス代をケチって歩く桐は、こころ思う。

生きていくって、世知辛くって大変だよね…。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase・5

「神様って意外と僕を見捨てないんだ!!」

放課後。

学生課、と書かれた看板のぶら下がる、とあるカウンターの前で。

桐は朝方とは正反対の喜色を浮かべ、万歳三唱でもしかねない勢いでカウンターに喰らいついていた。

若干引いている事務のお姉さんの態度は歯牙にもかけず、もらったファイルを速読並みのスピードで読み下す。

「じゃ、じゃあここにあるバイトならほぼ無条件で雇ってもらえるって事なんですよね?!」

「え、ええ。基本的に学生課が身分を保証しますから、面接も形式的なもので済みますよ」

ありありと引いているお姉さんの言葉に、無言でガッツポーズを決める桐。

定職無しでじりじりと残金が減っていく状態はやはり、彼の精神をひどく圧迫していたようだった。

意気揚々と何枚かの書類をコピーし、学生課の電話を借りて面接と出勤のアポイントをとってから、桐は足早に学校を出る。

「早速今夜から出勤かあ。うん、今日は気分良くご飯が食べられそうだね！」

「ご機嫌よさそうでなによりですの。須臣さん？」

うきうきしながらの独り言にかぶせられる、どこか特徴のある声。聴きたくないものを聴いてしまった気がして、桐はぴたりと立ち止まった。

「どうなさいましたの、須臣さん？まさか昨日の今日で、私の顔をお忘れになられたというわけではないですわよね？」

ふふん、とでもいいいたげな表情に、特徴的なツインテールが揺れる。そこには、常盤台中学の制服に身を包んだ少女。白井黒子が立っていた。

「…正直、昨日はいろいろ忘れちゃいそうなくらいひどい目にあっただけだね。というか何の用かな、白井さん？僕のほうにはもう、君にどうこうされるような用事はなかった気がするんだけど？」

「まあ、つれないお言葉ですの。昨日、お姉様とはあんなに楽しそうに遊んでいらしたのに。私にその優しさの半分でも分けていたいただきたいものですわね？」

(昨日のあれ、知ってるのか…)

勝手な言い分に、桐の頬が引きつる。  
思わず返す言葉に、皮肉が混じった。

「君が昨日、帰り道にあの全自動ビリビリ娘がてぐすね引いて待っているから気をつけてくださいですのって教えてさえくれていれば、今この場で比較的優しい対応も取れたと思うんだけどさ。それで、何の用なのかな？」

「あらあら、あのお姉様から逃げ切れたというのは、むしろ誇っていいことですよ。あの後、お姉様はひさびさに楽しそうにされていましたのよ？ “あの殿方” 以外のことであんなにはしゃぐお姉様、初めて見ましたの。それはもう、こちらが嫉妬してしまうくらいに…ねえええ…!!!」

にこやかにギリギリギリと、持っていた封筒をねじりあげる黒子。

(…うわぁ…やっぱ筋金入りなんだ…このホンモノ…しかもなんかへんな意味で嫉妬されてる…?)

知っていた通りの黒子の性格にちょっとビビりながらも、正直知りたくなかった事実を突きつけられて、桐は頭を抱えそうになった。

(これは目をつけられちゃったってことだよね…。ああもう、努めて考えないようにしてたのに。あのビリビリ中学生、自分に敵意がなくてなおかつ倒しきれなかった人間に興味持つように出来てるのかな…?)

原作でも明らかに発言がリュウだったし、と彼女にとっては失礼な感想を桐は浮かべる。

(うっ、どうしよう…。だからって今さらビリビリもらってぶっ倒れて見せても許してくれないだろうし…それ以前にスタンガンってとっても痛いんだよな…)

「ああ、目的を忘れるところでしたの。今日はこちらをお届けにあがったのですわ」

そういうと、黒子は絞りすぎた雑巾のようになった封筒を手渡してきた。

差し出されたものをなんとなく、受け取ってしまう桐。

「これは、何かな…?」

「感謝状と金一封ですわ。感謝状は私どもから、金一封は銀行の方からです」

「それは嬉しい、けど…これ、中身終わってない?」

訝しげな顔で、リレーのバトンのようになった封筒を確かめてみる桐。

「感謝状のほうはどうせ紙ですし。別に額に飾るわけじゃないですから問題ありませんでしょう？金一封のほうは非接触式のマネーカードですから…」

そこで何かに気付いたように、はっとした表情を見せる黒子。

そしてすぐに平静な顔にもどると、そのまま表情を変えずに彼女はつぶやいた。

「…まあ、問題ありませんわよね？」

「いやなんかものすごく看過できないレベルの問題があったよね！」

叫びながら桐は、あわてて封を開けてみる。

中身はぐしゃぐしゃになった上質紙と、明らかに捻じ曲がったプラスチック製のカードが3枚。

確かめるまでもなく、ダメそうだった。

「ほ、ほら万が一、中のチップが無事ならカードとしては使えますし！」

「…言った。万が一って言った。今はっきりと」

う…、と言葉につまる黒子。

なんだかいろいろ馬鹿馬鹿しくなって、桐はさっさと会話を切り上げる事にする。

「あー、うん。わざわざ届けてくれてありがとう、確かに受け取ったよ。それじゃあまたいつかどこかで」

自分で聞いてもわかるくらいはつきりとした棒読み口調で会話を切り上げると、貰ったものを学生カバンに押し込んで、桐はその場を後にするべく、早足で歩き出すのだった。

…ここは進捗待ちね。

いえ、方針の転換が必要かしら？

T  
O  
N

E  
X  
T



早足で去っていく青年を見送って、黒子はため息をついた。

「少々、おふざけが過ぎましたかしらね…？」

どうやら怒らせてしまったらしい。

先ほどまで向き合っていた青年、須臣 桐の表情を思い返しながらか、黒子は未来的な形状の携帯を取り出した。

「全く私もヒマではないですよ。『風紀委員』の人材不足って罪ですわね」

口紅のような円柱からシート状の本体を取り出し、通話モードへの移行を行いながら、黒子は初春に調べさせた桐のプロフィールを反復する。

成績、通学態度ともに優等生といって差し支えないだろう。

成績は上位グループ、遅刻欠席は昨日までの記録では共にゼロ。

次いで、チカラの強度はレベル3。

なぜか、どの系統の能力かは、プロフィールシートに明記されていなかった。

考えにくいことだが、記載もれだろうか。

まあ、わざわざ資料を当たるまでもなく、彼の能力は実際にこの目で見たのだから、記載されてなくても特には困らない。

レベル3 いや、精度だけで言えばおそらくレベル4にも迫る、風使い。

あえて名付けるのなら『大気制御』とでも呼ぶべきだろうか。

しかし、それも些細なことではない。  
なにより、学園都市230万人の頂点。たった7人しかいない、レ  
ベル5の第三位：敬愛するお姉様を出し抜いた人間として、黒子は  
桐に大きな興味を抱いていた。  
なかなかつながらない通話にいらだちながら、黒子はつぶやく。

「さて、どうやって引つ張り込んで差し上げましょうか？」

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase・6

「ちよーっと、もったいなかった、かなあ……」

バイトまでもう、あまり時間がなかった。  
ポケットの小銭のわびしさにへこみながら、桐はスーパーで出来合  
いの安い弁当をかごの中に入れる。

「今さらだけど、何でこんなに所帯じみてるんだろっ…？ここは一応、ファンタジーの中のはずなのに…」

と、そこで、どこかで見た人間と目が合う。  
いや、合ってしまった。

「あ、須臣さんじゃないですか。『風紀委員』の期待のホープの低い背と丸っこい肩。ぱたぱたと近づいてくる歩調にあわせて、頭に飾られた色とりどりの花を模した飾りが揺れる。そうして、飴玉を転がすような甘ったるい声で断定してきた少女に、桐は最速で否定の言葉を返した。

「いや、誰が?!」

「あれ、違いましたか？黒子さんから何も聞いていません？」

「そうだね、聞いてないな…仮に聞いてたとしても迷わず断るだろうし。そうだ、君から『風紀委員』のみんな、特に白井さんに伝えておいて貰えるかな？話がカケラも見えないけど、僕は全くやる気無かったって」

「初めて聞いたというのに一瞬も迷わずに即答したあげく、ノートイムで私を伝言役に仕立て上げますか…侮れませんか」

ごくり、とつばを飲み下す初春に心持ち肩を落として、桐は辛抱強く言葉を選んだ。

「いや、『風紀委員』自体は意義のある活動だとは思っし、そうやってみんなに貢献するのは素晴らしいことだとも思っけど…」

「じゃあ一緒にやりましょうよ！正直、現場で動ける人は何人いたって困らないんですし。というか早く人集めないと、そのうち私まで危ない現場に駆り出されちゃいそうで怖いんですよ…」

「ああ、そうなんだ…」

なんか本音が聴こえた気がして桐は、どこか温度の低い目で少女の花瓶のようになっっている頭を見下ろした。  
話を変えよう、と話題を探す。

「…まあ、僕が『風紀委員』って言うのはちょっとないかな？それ以前にただ生きていくことに忙しかったりするしね。…ところで初春さん、だっけ？何かの買出し？」

「はい！名前を覚えて頂いて光栄です。ええ、買出しは買出しなんですけど…」

そこまで言うと初春は、照れくさそうにカゴの中身を青年に示して見せた。

カゴの中にあるのは、色とりどりのおかし、お菓子、御菓子。  
正直、空腹を抱えた桐には目の毒な光景だった。

「今日もしばらく詰めてなきやいけないんで、夜食代わりにいろいろと。須臣さんは？」

「僕は…うん、似たようなものかな？」

自分のわびしいカゴの中身を見せる気にはならず、桐はなんとなくこたえをにごした。

今夜のバイトが終わればとりあえず、明日のご飯を心配せずに済む。嗜好品を含めた生活の向上はその後にすればいい。

小さなその現実にはすがって、桐はそつと、心の中で涙をぬぐった。と、

「それより、その携帯。さっきから鳴ってないかな？」

言いつつ、桐は少女のカバンについている外ポケットを指差す。布越しに携帯のイルミネーションが光っていたからだ。

「ああホントだ！ありがとうございます。って着信がいつぱい…ああ、こっそり抜け出してきたのがばれちゃったんでしょうか…」

わたわたと、どこかコミカルな仕草であわてる少女。

（ああ、確かに原作ではこんな子だったよな…）

「それじゃ、僕はこれで」

あいまいな笑みを作り、軽く手を振って会話を切る。

何事か携帯で話しながらも、重い物カゴを持った方の手で律儀に手を振り返してくれた少女に笑みを深めつつ、桐はレジへと歩いていった。

「…！」

そこで、青年はあることに気がつく。

財布を取り出す途中で立ち止まり、カバンからあるものを…と取り出して、店員に指し示した。

「 すいません、これ使えますか? 」

… まあ、いいか。

最低限の生活は保障してあげないとね?

E X T

T  
O  
N

「うーいはるーん おっはよーーん!!」

「!?!? ? … ツ!!ぎゃわあー!!!!」

登校時間。

ばつとスカートが跳ね上げられ、おへその辺りまでダイレクトに朝の澄んだ空気が触れる感触に、初春は悲鳴を上げながら振り向いた。

「おっ、今日は淡いピンクの水玉かー」

「だっ…男子もいる往来でこの暴拳ッ!?何すんですか佐天さんっ  
!!」

悪びれたところのない親友に噛み付く初春。

しかし抵抗むなしく再度柔らかかな布がめくられたところで、初春はさらに見られたくない人間に気がついてしまった。

「あ、あああ須臣さん?!な、なんでこんなところに!!」

取り乱す初春の視線の先には、平凡な印象ながら整っている、と言えないこともない風貌の青年が苦笑交じりにパタパタと手を振っていた。

気にしないで、のジエスチャーなのだろうか?ひとしきり手を振ったところで、彼は大回りになるわき道へそつと消えていこうとする。その背中に、動転した初春は絶叫した。

「須臣さん、その須臣桐さん！！なんでそんな僕は何も見なかったよ的な動きでそくさ逃げようとしてるんですか?!」

青年がピクリ、と反応して立ち止まる。

その背中に容赦なく、集中する視線。

「だから須臣さん、誤解、誤解なんですよ！いいですか須臣さん、これは佐天さんの悪ふざけであって私がこんな趣味してるってわけでは全然全くこれっぽっちも…！聞いてますか須臣桐さん！！」

耐えきれなくなったのだろう。

いやおう無しに振り向き、早足で初春たちへと駆け寄ってくる青年。ゼロ距離まで近づいたところで彼は初春の肩をしっかりと掴んで正対する。

「そんなに焦らなくていいから落ち着いて欲しいっていうか朝っぱらから人の名前を連呼しないでもらえるかな?! ヒトがせっかく気を使ってそつとフェードアウトしてあげようとしてたのに!!」

掛け合い漫才のようなその一幕を見て、佐天は思う。

なんかこれ、ちょっと面白くなりそう…。



「じゃあ、初春の新しい彼氏ってわけじゃないんだー？」

「なんでそうなるんですか！？っていうか新しい彼氏って！！私には前の彼氏もないというのにー！！」

親友をからかいながら、その肩越しに佐天はその青年を覗き見る。さっきの剣幕は特別で、基本的にはおとなしい人なのだろうか？どこか曖昧な表情で笑みを浮かべながら、先程から怒るでも注意するでもなく自分たちの話につき合ってくれている青年。その態度が彼女の目には、ひどく大人びて見えていた。

（良く見ると、顔もそれなりに整っているのよね…髪もさらさらだし。ヘンに色入れてないのは好印象かも）

ぼんぼんと初春をからかいながら、須臣という名前の先輩を観察している…

「もう佐天さん、ヒドイですよ…」

と、初春が本格的にすねてしまっていた。

「ごめんごめん、ちょっと調子に乗っちゃった」

あわてて謝る佐天。

隣の青年も、なだめるのに協力してくれる。

「まあまあ、彼女も悪気はなかったんだろっしき。それで、隣にいる友達を紹介はしてくれないのかな？」

「あ、そうでした。この子は…」

上手く話題を変えてくれた青年に好感を持ちながら、一歩前になると、佐天は明るく自己紹介した。

「あたしは佐天涙子です！初春の親友やってます、よろしく!!」

「そ、そうなんだ？僕は須臣桐。初春さんの知り合いやってます、よろしく、かな？」

茶化した受け答えに戸惑いながらも合わせて返してくれた青年に満足して、佐天は親友に向き直った。

「あ、そーだ。初春が聞きたがってた新曲ゲットしたからこれで機嫌直して？」

そうして、世間話をしながら三人で登校を続ける。

途中、佐天が取り出したプレイヤーの名前を間違えた桐に佐天が突っ込みを入れたり（Ipodと言われても佐天たちには何のことだかわからなかった）、流行に疎い初春を佐天がからかったりしながら

ら、三人は和やかに通学路を歩いた。そして。

「ああ、それじゃあ僕、こっちだからこれで」

と、桐が別れようとした時、佐天は思わず、口走ってしまっていた。

「す、須臣さん、あたしたち今日の放課後、服を見に行こうと思うんですけど、一緒にどうですか？第七学区のセブンスミストってお店なんですけど」

言ってしまったから佐天はしまったと思う。

(と、唐突だったかな?)

「いえあの、ヘンな意味とかじゃなくて！あの店、メンズものスペースも結構あったと思うし、初春との掛け合いが面白かったから、もうちょっと見ていたいなーって。あたしも話してて面白かったし、これっきりって言うのももったいないなってそれだけで…」

あわててフォローのために口を開くが、どんどん墓穴を掘っていく佐天。

そんな彼女に桐は、とりなすように笑みを浮かべた。

「いや、そんな慌てなくてもいいよ。昨日臨時収入もあったことだし、僕も服は近いうちに見に行きたいとは思ってたんだ。今日は8時までなら時間もあいてるし。でも、本当につきあわせてもらってもいいのかな？」

桐の言葉に、佐天は表情を明るくすると、ぶんぶんとうなずいた。

「買い物行くなんて今初めて聞きましたけど…それに私風邪っぴきなんでちょ…もが！もがが…！！」

そのまま何か言いかけた初春の口をごくごく自然な動きで滑らかに塞ぐ佐天。

「それじゃ、また放課後に！」

待ち合わせの場所を打ち合わせると、彼女は初春を引きずって、にこやかに歩いていったのだった。

……………むう。

なんか気に食わないわね。

EXT

TON

早朝、通学路の途上。

鉄の塊に打ち込まれる重い蹴りの音に続いて、ガシャ、と缶飲料の落ちる音が響く。

「とまあ、以上が昨日の夕方に起こった事件ですの…聞いてます？お姉様」

「聞いてるわよ。連続爆破事件とかいうやつでしょ」

取り出した飲料のラベルにハズレだという表情を隠そうともせず、美琴は興味なさげに答えた。

「正確には、ケラヒト連続虚空爆破事件ですの」

植え込みのふちからすいっと立ち上がった黒子はそのまま、美琴の缶飲料についたアルミのマークをコツンと指差す。

「アルミを基点にして、重力子の数ではなく速度を急激に増加させて、それを一気に撒き散らす…ようは『アルミ缶を爆弾に変える』能力ですの」

不穏な言葉に、美琴の表情がかすかに歪んだ。それにかまわず、黒子は説明を続ける。

「ぬいぐるみの中にスプーンを隠して破裂させたり、ゴミ箱のアル

ミ缶を爆破するといった手を使ってきました。爆発の前に前兆があるので死亡者こそ出ていませんが、まだ犯人の特定ができていませんの」

自分の発言を自分で検証するような表情で、ツインテールの少女は言葉を止めた。

プルタブをあげながら、その後を美琴が引き継ぐ。

「能力者の犯行なんですよ？ だったら学園都市の『書庫』（バンク）にある全ての学生の能力データをあたって該当する能力を特定すれば、容疑者を割り出せるんじゃないの？」

「妙なのはそこです。それができるほどの能力者は学園都市に一人だけ。…でも、その本人は病院で昏睡中ですよ。アライは完璧ですの」

「…『書庫』（バンク）のデータに不備があるってこと？」

言われて、黒子は最近知り合った、とある青年を思い出す。

しかし今は関係のないことだと打ち消して、あごにあてていた指を軽く噛んだ。

「そうですね、あるいは…システムスキャンといってもこちらのケースも非常に稀なですけど… 前回の身体検査後の短期間で、急速に力をつけた能力者の犯行という可能性もありますわね」

すでに何度も繰り返した推論と、その結論とを舌の上で転がしながら、黒子は思う。

いよいよキナ臭くなってきていますわね…。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase・8

学園都市の科学力に感謝しよう。いや、耐久力にでもいいけれど。桐は機嫌よく、待ち合わせ場所に向かっていた。明日の食事すら心配していた彼が、人並みに服とか言い出せるようになった理由。

それはひとえに、あの金一封のマネーカードが生きていたからだっ

た。

それも3枚のうち、過半数の2枚が。カードのチップが生きていると知った後の桐の行動に迷いはなかつた。

弁当の清算が終わり次第、スーパーのレジを使ってチップの中でかろうじて無事だった残りクレジットを全てお財布ケータイに移行。精算済みの弁当も忘れずに持ち帰り、そのままきっちり日払いの深夜バイト（昼夜を徹しての書庫整理の夜番）をこなして現金収入

を獲得。

そうして彼は、その一日で6800円の現金(うち800円は名目上は交通費。もちろん彼は歩いた)と、10万円分のクレジット(うち280円は弁当代に使用。彼は飲み物に水道水を選んだ)を手に入れたのだった。

「さてと、待ち合わせ場所は第七学区の入り口そばだったかな？」

今日の授業の合間、あらかじめノートパソコンで確かめておいた地図を思い出しながら、桐は余裕をもつてのんびりと歩く。

待ち合わせ場所に差し掛かったところで、季節の花を模した飾りを頭いっぱいにつけた少女と、その親友を見つけた。見つけたのは良かったのだが。

「あ、洋服見に行くなら私も一緒にいいかしら」

同時に桐の視界に、同じく最近、見慣れてしまった感のある常盤台の制服の少女が映っていた。

「…うわぁ……」

不思議な巡りあわせに桐は思わず、その場で空を仰ぐ。

「もちろん大歓迎です!!ですけど、あたしらが行くこうしてるの、フツのチェーン店ですよ?常盤台の人が行くような所じゃ…」

「いや…あんまそーゆーの関係ないわよ。ウチって」

そうして、どうしようかと桐が見ているうちに、向こうではさくさくと話がまとまってしまったようだった。



美琴が人待ち顔の中に加わるのを見て、桐はそつとため息をつく。

「約束、してるしな…。出て行かないわけにもいかないよね、これ…」

異性でかなり年下とはいえ、まだ周りを把握しきれていない桐にとって、せつかくできた知り合いは貴重だった。

同時に心の中で、原作の知識を引っ張り出しながら検証してみる。

(前はポーっとしているところにいきなり攻撃されたような気がするけど、御坂って姿見ただけで問答無用で仕掛けてくるような子だったかな…?)

絶対にNOとは言えないものの、だいたいの場合、上条のほうに問題があったような気がする、と桐はひとりうなずいた。

(じゃあ、前回は何か僕のほうに手落ちがあって仕掛けられたってことなのかな…?正直、仕掛けられた時のことはぼんやりしてたせいでほとんど覚えてないし…。ちゃんと普通に、礼を失さないように接すれば、少なくとも問答無用で攻撃はされない…?)

この世界に来て以来、初めて生まれた金銭的な余裕のせいだろうか。青年は比較的楽観に満ちた結論を引き出して、彼女たちの前に行くべく、笑顔を作った。

ありつたけの心の準備を胸に仕込んで、そのまま、ゆっくりと近づいていく。

「こんにちは、待たせちゃったかな？初春さんに佐天さん、それに御坂さん…って、ああ、奇遇だね？」

語尾が震えなかったのは褒めてもらってもいいだろう、と青年は思う。

明るいその挨拶に、初春たちはそれぞれの反応を示した。

「あ、須臣さん！待ってましたよー！」

「こ、こんにちは！いえ、あたしたちも今来たところですよ！」

気負いなく挨拶を返してくる初春と、どこか緊張しながらも、どちらかといえばほっとした表情で桐を歓迎する佐天。そして…。

「…ア、アンタ…?!」

絶句する御坂さん。

ある意味わかっていた反応に、桐は笑みを崩さずに話を続ける。

「あれ、初春さん、マスクしてるけど風邪かな、大丈夫？」

「あはは、なんとか。それより須臣さん、御坂さんとお知り合いなんですか？」

「そうだね、知り合ったのはつい最近なんだけど…って何かな？」

数瞬の絶句後、我を取り戻し、猛然と彼の袖を掴んだ御坂に逆らわず、桐は強引に引っ張られて2人から離れたところへと移動した。

「アンタ、なんで…いや、どういつつもりよ?!」

噛みつかんばかりの御坂の剣幕にビビりながらも、それを表情には出ずまいと、桐はにこやかな笑顔を心がける。

「ホントに成り行きで、ただの偶然だよ。僕も君にここで会うとは思ってなかったんだ」

そして桐は笑顔を崩さず、いかにも何かを思いついた、という態度をとって見せた。

「…そうだ！ところで、せっかく会えたんだから確認しておきたいことがあるんだけど」

滑らかに言葉を進める。

自分のペースに巻き込まれてくださいと心中で絶叫しながら、桐はまず、強めの言葉を突きつけた。

「僕はそうなりたくないんだけど、御坂さんは僕の敵になりたいのかな？」

説得にはまずインパクトを。

それでも、これでキレられてしまったら終わりだった。

桐は致命的な命題をさらして、否定の言質を取りに行く。

「な、なんでいきなりそうなるのよ。会うなり敵がどうこうって」

ごくごく常識的な返答が返ってくる。

だが、その言葉こそが桐の欲しいものだった。

問答無用で攻撃された過去は棚に上げて、心中で喝采する桐。

「だよ。この間は取り込んでたし、ハッキリでああ言ったけど、僕も君に敵対したいわけじゃないんだ。何度も言うけど、僕的能力はそんなに強くないから」

「でもアンタ、私の電撃を簡単に防いでたじゃない？確かに全力で撃ったわけじゃないけど、それにしたって完全に遮断するのは…」

戸惑いながらも否定しかける御坂の前に、桐はすばやく構成を編み、その言葉を遮る。

「単に相性の問題だよ」

発したコトバを通して構成にチカラを流し込むと、桐はその指先に円盤状に緩く空気を圧縮したものをつくりだした。触れてもらえるように、すっと差し出す。恐る恐る、それに触れる美琴。

「これ、空気を圧縮してる…？」

「そうだね。これ以上説明する必要はないと思うけど…どうかな？」

「風使い…いえ、空気使いとでも言うべきかもね。そういえば最初に会ったとき使ってたのも突風だったわね…」

それで、納得してくれたのだろう。表情に理解の色が灯り、御坂の敵意が和らぐ。

能力に対しての誤解は都合がいいので黒子の時と同様に放置することにして、桐は判ってもらえてほっとした表情を作った。

（ここまでではほぼ及第点だね。これなら次の話題はどちらに転んでもいいかな…）

そうして、桐は次の話題に移る。

「納得してくれたところで…僕は急な用事が出来て帰ったほうがいいかな？」

「え？」

「いや、僕がいると気を使っちゃうかなって」

演技も混ぜているが、確かに相手に気を使ったセリフ。

それを常盤台のお嬢様は、迷うそぶりも見せずふんとハナで笑った。

「なんでそうなるのよ。アンタが先にあの子等と約束してたんでしょ？私は後からそれに加わっただけ。敵対してない知り合いが同行するのを、私がわざわざ嫌がる必要はないでしょう？」

そこで意地悪く視線を鋭くする美琴。

「もちろん、アンタがあの子らに悪さするようなら、それなりの対応をしなければいけないけどね…」

どうやら自分は、この常盤台のエースに同行の許可をもらったらしい。

そう桐が気付いたのは、そう言い捨てた彼女が、どこか照れ気味にふたりへと駆け寄ってからのことだった。

…器用なことね。  
これはもう、性質なのかしら。

E  
X  
T

T  
O  
N

一緒に歩いてみると、彼は思った以上に人当たりのいい青年だった。

（まあ、前のときは状況が状況だったってことなのかしらね…）

もしかしたら、面倒見もいいのかもしれない。

その場の全員にさりげなく気を配りながら、会話をスムーズにする青年を美琴は何の気なしに意識に上らせていた。

きな臭い爆弾魔の話をやかに切り上げて、初春の体調を気遣い、佐天から話題を引き出して、違和感なくそれを美琴にふる。

その、変に特別扱いされない感じが、彼女にはどこか心地よかった。

「あー。『幻想御手』（レベルアップ）があつたらなー」

話の流れの中、不意に、初春の親友と自己紹介した少女 佐天涙子が、空を仰いでこぼす。

「え、何ですかそれ」

「僕も知らないな、それって？」

須臣にひょいっと顔を向けて尋ねられて、佐天が赤面する。

「いやあくまで噂ですし…詳しいことはあたしも知らないんですけど…」

どこかあわてた素振りでも自分の掌に視線を移すと、彼女は続けた。

「あたし達の能力の強さ（レベル）を…簡単に引き上げる道具があるそうなんです…」

「道具…ですか？」

相槌のように入れられた親友の質問に、佐天は答える。

「うん、それが『幻想御手』（レベルアップ）。ま、ネット上の都市伝説みたいなもんなんだけどさ」

後半は親友の方を向いて、苦笑いしてみせた佐天は、そしてポツリとつぶやいた。

「でもさ、本当にあるならあたしでも…」

（『幻想御手』（レベルアップ）か…）

後輩2人と先輩1人のたわいない話を聞きながら、美琴は思考に沈んでいった。

同時刻、同場所。

たまたますれ違った男女4人組の中の一人に、『風紀委員』の腕章を見かけたとある少年は暗い笑みを浮かべながら思う。



僕が僕を救う…僕を救わなかった『風紀委員』はいらない…。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase・9

女の子の買物物は長い。

桐はそれを、知識としては知っていた。

「へー、『超電磁砲』（レールガン）ってゲームセンターのコインを飛ばしてるんですか？」

「まあ50メートルも飛んだら溶けちゃうんだけどね」

「でも必殺技があるとカッコイイですよー。あたしもインパクトのあるやつ欲しいなあ。お、須臣さん、こんなのどうですか？うーん、ちょっと大人っぽいかなあ？？」

実感は、今この瞬間に、ひしひしとしているところだったが。

(はあ、長いね…)

第七学区のショッピングモールの一角にある洋服店、『セブンスミスト』。

この店に来てから、すでに1時間強がたとうとしていた。

和やかなくせにどこか物騒な会話の中からボールが自分に回ってきたのを自覚して、桐は慌てて会話に参加する。

佐天の手にある、柔らかなスウェット素材のテーラードジャケットを見て、

「ああ、いいんじゃないかな？シルエットは大人っぽいけど、柔らかい色と素材だし。カジユアルにシヨートパンツとかと合わせればまとまるし、佐天さんに似合うと思うよ」

すらすらとこたえる。

そんな桐に、佐天は目を丸くした。

「須臣さん、詳しいんですね？…そういうのって、やっぱり付き合ってる彼女さんに教えてもらったりするんですか？」

そうして、どこか居心地悪そうに桐に尋ねる少女。

(…思ったより、懐いてもらえてるのかな？)

そんな後輩の幼い疑問を、彼は軽く笑ってごまかした。

「さあね？ご想像にお任せしておこうかな。さてと、じゃあ僕はあっちの方に行ってるね？初春さんたちは向こう行っちゃったし…あ

そこまでついていくのは避けたいからさ」

そう言つて、かわいらしいパジャマが飾られている区画を見やった。その先にはさらに敷居の高い水着、下着売り場が並んでいる。桐の意図を察して、後輩の少女がにんまりと笑う。

「えー、ついてきてくれないんですかー？ 須臣さんの意見、聞きたかったのに」

邪気は少な目のそんな態度に、桐はただ、肩をすくめてみせることで答えた。

そのまま同じフロアにあるメンズコーナーへと足を向ける。彼にとつて、洋服店『セブンスミスト』の品揃えは悪くなかった。学園都市らしく、若者向けに偏っているくらいはあったが。

「ま、いいか、安ければ何でも」

最初に何着か試着してサイズの当たりをつけると、桐はぼんぼんと服を選んでいく。

「こつこついうのも最新素材のモニターだから安いつて事、なんだろうな…」

と、2パターンほど普段着の類を選び終わったところで…。

「御坂さん、須臣さん!!」

携帯を片手に初春が、どこか切羽詰った様子でこちらを見つめていた。

そのただならぬ様子に、桐はあわてて彼女に駆け寄る。

「どうかしたのかな？」

「それが、今、白井さんから電話が…ここに、ガラントシ虚空爆破事件の前兆があつたつて…!!」

先に話題に上った、爆弾魔の名前をあげる初春。

「何ですって?!この店が標的？」

美琴が声をあげる。

「そうみたいです。すみませんが避難誘導に協力してもらえますか？」

「…。わかったよ。悪いけど、『風紀委員』の名前で館内放送の方を頼めるかな？」

この場の最年長として、桐には断るといふ選択肢はなかった。いつもよりもしっかりとした声で頼んでくる初春に、うなずいて答える。

そして、手分けして避難を誘導した。

多少手間取ったところもあったが、数分後に避難を完了させる。

確認のためだろうか、ガラソとした構内を見ながら、美琴はうなずいた。

「よしっ、とりあえずこれで全員…」

「ビリビリっ、あの子は？」

たまたまいた客のひとりで、同じように避難を手伝っていたツンツン頭の高校生が駆け足でもどつてくると御坂に尋ねる。

「は？まだ戻ってなかったの？」

「人が多すぎてわかんねーけど、たぶんまだ……ってよかった、無事だったみたいだな」

探していた少女が初春に向かって歩いていくのを見つけて、安心する高校生。

「こっちも問題なさそうだよ。僕らももう出たほうがいいと……」

そんな中に、メンズコーナーを見回ってきた桐が、声をかけながら彼らに合流しようとした、その時。

「逃げてください！！あれが爆弾です！！！！」

少女を抱きしめて、ぬいぐるみをはねとばした初春の絶叫が響いた。

「……っ！！」

何かを考える暇は、なかった。ついでに、迷う時間も。

とっさに飛び出した桐は右手を掲げる。

爆弾。

威力はわからない。

(下手なチカラじゃ止めきれないかも知れない、なら…)

視界が、拓ける。

一瞬が、引き伸ばされる。

引き絞るような集中の中、桐は全力で構成を編んだ。

限界ぎりぎりまで自らのチカラを支払い、最小限の構成を、最緻密に紡ぎあげる。

感じるのは、世界を騙す者に許された、仮初めの全能感。

メキメキとぬいぐるみの材質を巻き込みながら収束していく『爆弾』に向けて、桐はそのまま構成の狙いをしぼった。

(この世界から在る意味ごと、消えるよ…!!)

「我が契約により 聖戦よ終われ！」

白い光が、『爆弾』を包む。

そして、それは、瞬いた。

そのまま、半瞬を待たずして、光は消える。

ただ、それだけ。

しかし、そのときにはもう、『爆弾』は消滅していた。

（対象物の情報破壊による存在発生源の除去 意味の消失。まだ終わってないけど…とっさに出した切り札にはなんとか、なっただかな…）

身体が使い果たしたチカラにいまさら気付いたかのように、桐はふらりと倒れかかる。

そうして、彼は、全く同じ姿勢で走りこんでいた青年に気付いた。都合が良かったので、肩を預けるように倒れこみながら、桐は余力を振り絞って最後の構成を編む。

（カモフラって…大事だよね…）

ぼんやりとした意識の中、緩いことを思いながら、ぽつりと、呟く。

「…弾ける…！」

威力など皆無。

起こしたのはただ、大気を収束させて破裂させるといふ、現象だけ。

それは、まるで紙鉄砲のような乾いた音を、洋服店に響かせたのだった。

及第点はあげるべきかしらね。

…それにしても、いちぢらももう少しスマートにできないのかしら。

E X T

T O N



「そつちにはそつちの事情があるんでしょうけど…」相談に乗る前に『一発殴らせてもらっわよっ」

(私は、間に合わなかった)

『爆弾魔』の実行犯を抑える間にも、美琴にはそれが酷く気になっていた。

とっさのことだったから、という言い訳を、彼女は自分に許さない。こぼれたコイン。

思い返しても痛恨のミス。

結局、初春さんたちを救ったのは、アイツだった。

空気使い、須臣 桐。

本人の話では、空気の壁を張り巡らせて爆発を限界まで抑え込んだ…とのことだったが、あれはそんな生易しいものじゃない、と美琴は感じていた。

爆発を抑え込んだ？ちがう、あれは押さえ込んだのだ。あまつさえ、そのまま押し潰した。

残ったのは、乾いた音だけ。

成果は、無傷の洋服店。

レベル4を押し潰すレベル3？

不意に浮かんだ冗談にもならない矛盾をねじ伏せながら、美琴は思

う。

あれがレベル3だなんて…バカにしてる。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

10

Phase .

テストが終わると、次は身体検査だった。

最終日までテストなのかと不思議な気はするが、それが『学園都市』なのだから気にするだけ無駄なのだろう。そう桐は思う。

「それじゃ須臣ちゃん、チカラを使ってみてくださいねー！」

初めて聞いたときは目を疑ったその体型と口調に改めて驚嘆しながらも、桐は丁寧に構成を編んだ。

「我は撫でる獅子の鬣」

サイドスローのように振った腕に合わせて、風の塊が大地を走り、そのまま目標にぶち当たった。

一拍置いて、幼いと断じていい声が記録を述べる。

「記録をいいますねー？発動初速は300m/sec 発動まで1842秒 30m先の標的に誤差12cm 総合評価はレベル3つてところですねー。さきほどの空気の壁とあいまって、もう立派な風使いさんです。後ひとつ突き抜けるものがあれば、レベル4も夢じゃないですよー」

能力を偽る…というか、勘違いされるのに慣れてきた桐。

当然、今回も否定するそぶりすら見せることなく、ランク付けを受け入れる。

(これで長かった期末テストも終わる…)

と、彼はうーんと背筋を伸ばした。

出来に不満はないが、普通のテストと古今東西の雑学のクイズ番組を合わせたような内容のテストは、桐にはどこか新鮮だった。

(一応意識と知識は大学生だしね…求められる知識の幅はこっちのほう幅広い気はするけど。まあ、ダブらなければいいんだし…)

と、真面目なこと？を考えている桐に、どこか申し訳なさそうな声がかけられる。

「ただですね、先生謝らないといけないのですよ。これまでの須臣ちゃんの記録なのですが、システムの手違いで反映されてなかったようなのです。もちろん今回の計測データは先生が責任もって反映

させますし、これで進路が不利になるようなことは先生がさせませんから、そこは安心してもらってよいのですが…」

一言一言にこちらを気遣う姿勢が感じられる先生の口調に、桐は逆に申し訳なくなりながら不用意な相槌をはさんだ。

「いや、それは先生を信じてるからいいんですけど…結局何が問題なんですか？」

気軽に尋ねた内容に、幼く見える担任の目がなぜか潤んで、

「す、須臣ちゃん…信じてるなんて…先生冥利に尽きるのですよー  
！！」

とマジで感激してしまった小萌先生をなだめること数十分後。

「ようはなのです。須臣ちゃんの能力名、決まってるんですよ。システムの不備を指摘してくれた『風紀委員』のほうから、候補がひとつ上がってきてますけどどうしますー？」

『風紀委員』っていうと、黒子のほうからだろうか。

「こづいづのって、僕の立場から選べるものじゃないんじゃない？」

「たしかにそうです。ですがいつまでも空欄というわけには行かないですし、今回は特別なのですよー」

「『風紀委員』の方から上がってきている能力名は？」

「『大気制御』で来てますが…先生としてはこちらをもじって、」

空気制御』(ヌマーティックコントロール)をオススメしたいですねー」

ふむ…と桐は首をかしげ、

「じゃあ、それをお願いします」

と、気楽に言ったのだった。

そして放課後。

バイトに行く前に腹ごしらえでも…と思っていた桐の前に、ドラッグストアからクスリの袋をさげた少女が出てきた。見知った顔に、声をかける。

「こんにちは、佐天さん。奇遇だね」

「あ、須臣さん！こんにちは！」

「その袋…なにかの薬みたいだけど、どうかしたのかな？」

(…って、女の子にする質問じゃなかったかな…)

問いかけて、失言に気づく。

しかし佐天は、気にした様子もなくあはは、と笑って見せた。

「初春が風邪をこじらせちゃって。さっきもお見舞いに行ってきたんですけど、大丈夫そうなのでいったん切り上げてきました」

「そうか、この間も風邪気味って言ってたよね。マスクしてたし…。切り上げてきたってことは、体調はもう落ち着いたんだ？」

「ええ、熱自体はたいしたことないです。むしろヒマに耐え切れな  
いみたいで」

しょうがない子ですよ、と笑う佐天に、桐はのどかな気持ちで微  
笑んだ。

「でも、たいした事ないみたいでよかったよ。優しい友達もついで  
るみたいだしね」

「…やや、や、優しいだなんてそんな！親友なら当たり前のことを  
しているだけで…！」

何の気なしにかけた言葉は、思ったよりも彼女をあわてさせてしま  
ったらしい。

女の子って難しいなあ、と思いながら桐は言葉を続ける。

「それじゃあ、これから戻るんだよね、途中まで一緒に行く？」

…ふう。焦ったわ、全く。

さて、どんな目にあわせるのがいいかしらね…。

EXT

TON



「う〜〜〜む…」

少し早めの夏本番、といったところだろうか。

照りつける陽射しのもと、夏休みへの開放感に湧く周囲とは裏腹に、常盤台の制服に身を包んだツインテール、白井黒子は唸っていた。

「どうしたのよ、難しい顔して？」

成績落ちた？と訝しげな表情で尋ねる先輩 御坂美琴の言葉にも表情を変えず、黒子は質問に質問を返す。

「お姉様、昨日の虚空爆破事件クラビトンの犯人、本当にお姉さまが捕まえた男で正しいんですの？」

「そうだけど？」

にじんできると汗をぬぐいながら、屈託なく返された言葉に、黒子はさらに表情を歪ませる。

「『書庫』の登録データでは、容疑者の能力は…異能力（レベル2）判定となっておりますの」

「うそっ！？明らかに大能力（レベル4）クラスだったわよ、あれ」

予想外の黒子のセリフに、驚く美琴。



破壊力こそその目で見ることはなかったものの（ここで美琴はナニカを思い出して顔を軽くゆがめた）あの発動前の予兆は明らかに大能力に迫っていた。

だからこそ、美琴は躊躇わず切り札を使おうとしたのだ（ここでも美琴はナニカを思い出して眉間にしわをよせた）。  
それなのに。

「ええ、こちらで観測した前兆から見ても間違いありません…です  
から、これはつまり…」

言いかけて、沈黙する黒子。

セミの鳴き声がかたまする路上で、彼女はたつぷりと間を取った。  
思慮深げにゆっくりと美琴を見やり、

「どづいう事、なのでしょう？」

「……………」

あらためて沈黙が流れる。

「ま…まあ、煮つまつてるなら一度休んで頭を切り替えましょ」

どうにもならなさそうなその沈黙に、美琴は気を取り直してそう提案した、そこに。

「あ、御坂さん、白井さん、昨日はお世話になりました」

「…こんにちは、今日も暑いね？」

佐天涙子と、須臣桐。

見知った二人組が、道の向かいからやってきた。  
何の根拠もないことだとは知っていながらも、美琴は思う。

コイツなら、どういづことが判ったり、するのかしら…？

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phrase .

1  
1

掛け値なしに。

この世界に来て初めて口にする、甘いものだった。

口に広がる氷の冷たさと、安っぽいシロップ漬の桃の風味を味わいながら、これくらいの贅沢は許されていいよね、と桐は思う。

男が1人に女の子が3人という状況では、えてして男は相槌役になりやすい。

話題に適当に話を合わせながら、彼は思考を巡らせていた。

(今日は7月19日か)

7月19日。夏休み最初の日。  
すなわち、禁書原作開始の日だった。

(でも、自分から関わりに行くことはないのかな？そうでなくてもいろいろあったし…)

桐にとって『禁書目録』が厄ネタだという認識は変わっていなかった。

安っぽいスプーンで氷を削りながら、思いかえす。

(そういえば、昨日のあの場所に上条もいたんだっけ…あの時、チカラ使い果たしてフラフラだったからまともに言葉もかわしてないけど)

ポンコツになってもバイトだけには顔を出した自分を内心で褒めながら、果肉の部分をスプーンの先でつついた。

(まあ、どの道話をしていてもこれから始まるインデックスの一件でまとめて忘れ去るんだろうし、仕方ないか。確かにアイツが何を知ってたかには興味があるけど…介入してアイツの記憶の保全を命がけでやりたいとは思えないし、出来るかもわからない。あげく、運よく保全に成功したとしてもその後の改変に責任が持てるかも怪しい…)

氷の碎片を舌の上でとかしながら、リスクしかない、と結論する。  
その間、女の子たちの話題は共感性から初春の容態、そして間接キスを含んだじゃれ合いへと移っていた。

(それでも、何がしかのアクションを起こさないといつまでたっても帰れない、か…)

必要以上に関わらないように一歩引いて、思索を続ける。

(どこかで動かなきゃ話は進まない…基本的には誤解してもらって能力の内容縛りでチカラを使っても、それなりに身は護れるだろうし…)

桃のひとつかけを残して、残った氷を飲み下した。

(それでも、必要に迫られたらそうも言ってもらえない気もするけど。規格外にはどう頑張っても空気系以外のチカラも必要になってくるだろうし、使わずに死ぬのは避けたいしね。ああ、必要といえば生活費だってなんとかしないと秋冬越えられない…)

植樹されている木に背を預けて、名残惜しげに最後の一口を口に含む。

(なんにしても、まずは生活費かな。この休みの間に稼いでおかないと。その上で適宜、動いてみるってことでいこうか)

密かに(せせこましくて)建設的な決意をする桐。

そんな彼の耳に、すっと真面目な声色が滑り込んできた。

「昨日言ってた『幻想御手』(レベルアップ)っての、もう一度詳しく黒子に聞かせてやってもらえないかしら」

促されて、説明をする佐天。

考えをひと段落させた桐もなんとなく、その説明に集中する。

使用者の能力のレベルを底上げする、『幻想御手』（レベルアップ）。

ここ最近多発する事件の犯人のレベルと、『書庫』（バンク）に登録されたレベルとが食い違い続ける現状。

尋ねられた佐天が、うわさを思い出しながらぼつぼつと話す。

「自称ですけど、『幻想御手』（レベルアップ）を使ったって奴らがネットに書き込みをしてるみたいです。ただ怪しい連中っていつか、不良っぽいのはつかでどこまで信用できるか……」

その言葉で、常盤台コンビは不良に聞き込みをすることに決めたらしい。

さっさと挨拶をすると、なぜか二人が二人とも桐を一瞥した後、慌しく立ち去っていった。

残された佐天が、ポツリともらす。

「……………え？『幻想御手』って、マジモンなんですか？」

これも利用に、なるのかしらね。

……………。

E  
X  
T

T  
O  
N

「あー、見つからないなあ、『幻想御手』（レベルアップ）」

自室の机。

ありふれた椅子の背もたれに反り返るようにして伸びをしながら、佐天涙子はもらした。

机の上には、乱雑に積み上げられた資料の山が、ここまでの彼女の努力を物語っている。

何ページかめくって諦めた数冊の専門書を土台に、『幻想御手』（レベルアップ）の記事が掲載されている雑誌、タブロイド、ネットのページをプリントアウトしたもの。

彼女に思いつく限りの調査だったが、それらは今のところ、空振りに終わっていた。

さらに伸びをした彼女の視界に、出しっぱなしのミュージックプレイヤーが映る。

「お…」

佐天は緩慢な動きでそれを拾い上げるとバッテリーの残量を確認した。問題なし。

「ここいつにも何か新曲いれとくかね…何かオススメのヤツあるかなあ」

ひらきっぱなしのブラウジングソフトを前面に呼び出し、音楽専門

のダウンロードサイトを開く。

トップページをナナメ読みするが、目新しい更新はなかった。興味をなくして、また椅子に身を預ける佐天。

「やっぱりウワサはウワサなのかな？…ありっ？」

ぶらぶらと遊ばせていた足がいけなかったのか。

「ちょ……だあっ」

彼女はあっさりとバランスを崩してひっくり返ってしまった。巻き添えを受けて、資料の山が雪崩を起こす。

そして偶然、落ちた資料のひとつがマウスのボタンをクリックした。

「イタタタ…タ。…？」

のろのろと起き上がった佐天。

そして彼女は、気付いてしまった。

「何だこりゃ？隠しページ？」

彼女は、ひとり思う。

やっと見つけた…これさえあれば…あたしも…！！



とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサー

Phase .

12

夕暮れ時、バイト帰り、帰路の途上で。  
桐は、珍しいものを見ることになった。

「や、こんにちは。最近良く会うね？」

夕日のまぶしいオレンジを切り取ったように広がる、街路樹の影。  
声をかけられた少女は、のろのろと顔を上げる。  
どこか色のあせた表情で桐を認め、ややあつてポツリとつぶやいた。

「ああ、アンタか……」

その、精彩を欠いた、らしくない仕草に。  
原作のとあるシーンを思い出して、桐は一人納得する。

(そういえば、一巻で上条に軽くすこまれて子犬みたいにビビッて  
たよね……)

原作では上条はそのまま美琴を放ったらかしにして、次の章に進ん

でいったはずなのだが。

(シーンが変わって原作から見えなくなっても、きっちりへこんじやってるってことか…)

あらためて、桐は原作が進行しているという事実と、自分が存在している世界とを実感する。

今は目の前で落ち込んでいる美琴だが、放っておいてもそのうち自分の中で決着をつけて復活するのだろう。

(うーん、我ながら、お人よしもいいトコだと思うけど…)

それがわかっていても、なんとなく、彼は彼女の隣に並んだ。

(…さて、しらじらしく、どうかしたのかな？なんて訊けないよな……)

話題を探し、とりあえず思いついた言葉は、

「…あれから、『幻想御手』(レベルアップ)のことについて何かわかったのかな？」

ひどく、気の利かない代物だった。

内心、焦る桐。

「…なによ、気になるなら来ればよかったじゃない。黒子からメール、届いたんでしょ？」

それでも、何かの話題を振ったのは正しかったのだろう。言葉が返ってきたことに安心しながら、彼はうなずく。

「…ああ、うん。着信ももらってみたいんだけど、用事入ってたから出れなかったんだよ」

もちろん、その用事とはアルバイトのことだったが。

普段なら食いついただろうそこには触れようともせず、美琴は訊かれるままに話した。

「…アンタが止めた爆弾魔だけど、あれから急に意識不明になったのよ」

桐にとって爆弾魔は関わるハメになった厄介事ではあったが、その後の処遇に関しては正直なところ、全くの他人事、という認識だった。

それでも、突飛な内容に驚く。

「意識不明って…ああ、そいつも『幻想御手』（レベルアップ）を使ってたんだ？じゃあ副作用ってことか…。身体になにか異変でも？」

「いいえ、身体には異常はないそうよ。だけど、同じような症状の人間が最近増えてるって。専門の先生も呼ばれて、今日は黒子と一緒に話も聞いてきたわ。途中で初春さんや佐天さんも来てたわよ？」

「…ふうん、そうだったんだ。じゃあ今度はその意識不明者の共通点探すと、『幻想御手』（レベルアップ）の使用者とのすり合わせ、ぐらいが落としどころになるのかな？」

こたえる桐に、美琴は気のないセリフを吐き出す。

「まあ、そうなるでしょうね……」

そして、会話が止まった。

居心地の悪い沈黙がおりる。

(うわぁ…何でもいからしゃべらせれば少しは気分も上向くかな  
って思ったけど…これはマジで落ち込んでるよ…)

多少迷いつつも、桐が他の話題を探して視線を巡らせたその時、彼女が口を開いた。

「…ねえ、ちょっと訊いてもいい？」

切り出したまま、青年の返答を待たずに、少女は続けてつぶやく。

「…アンタは…勝てそうもない相手と、ケンカしたこと…ある？」

美琴の意図はつかめなかったが、何とか答えようとして、桐は自分を振り返る。

(……………)

そして、なぜか両手で頭を抱えた。

「……………ど、どうしたのよ？」

「いや、なんかよくわかんないしパツと実例も出てこないけど…僕の人生、なんかそんなことばかりだったような気がして……………」

なぜかトラウマを掘り出してしまったような心持ちで、突然隣に負けないほど落ち込んでうめく青年。

「…そ、そう」

若干引きながらも、美琴は質問を続ける。

「じゃあ、勝てそうにない相手から逃げちゃった自分が許せなかったり、情けなかったことって、ない……？」

(……)。ああ。そういうことか)

ようやくそこで、桐にも彼女の言いたいことが判った。

いくら落ち込んでいるからとはいえ、そうやってまっすぐに尋ねることができる素直さに驚きながらも、言葉を探して空を見上げる。少しだけ時間を空けてから、桐はゆっくりと答を返した。

「…そうだね、あるよ。まあ、それもよしあしなんだろうけどね」

「……よしあしって……？」

どんな言葉が最適だろうか？

オウム返しにされて、桐は頭の中で丁寧に言葉をまとめた。

「…その許せないとか、情けないって感情は逃げちゃった自分に対して、なんだよね？それは自分を強くしよう、強く在ろうって意思につながるから、それはそれでいいんだと思うよ？」

一度区切って、話した言葉が相手に届いたのを確認してから、青年は続けた。

「逆に、さ。勝てないって察知したから戦わなかったっていうのは、そこだけを抜き出せば、別に臆病じゃないって話になるんだ。むしろ勝てない戦いを選ばなかった判断は誇るべきだし、それを許せないとか思ったり、情けなさを感じる必要なんかない…」

そこまでゆっくりと話して、軽く息をつく。

「もちろん、最後のチャンス、みたいな、負けちゃいけない状況で逃げるのは論外だけど。でも、そうでなければ次の機会がある以上、そこまで気にすることじゃない……これで、少しは訊きたかったことになってるかな？」

最後にそう付け加えて、桐は気楽に笑って見せた。

どこか、驚いたような表情を見せながらも、美琴は言葉を返す。

「…うん、だいたいは」

そうしてもう一度、会話が途切れる。

それでも今度の沈黙は二人にとって、そう居心地の悪いものではなかった。

数秒の、ゆったりとした時間。

そして、またしても口を開いたのは、美琴だった。

幾分すっきりした表情で、

「…でもアンタ、いきなりこんなことを相談されたのに、驚かないのね」

と、不思議そうにつぶやいた。

(…状況を知ってるから、この子の側に立った言葉を選んだだけな  
んだけどな……)

短い間にずいぶんと買いかぶられてしまった感じに、桐が笑みを苦笑にかえる。

「いや、十分に驚いてるよ。多分、君にそう見えていないだけなんじゃないかな？」

そうして、桐はわけもなく本心を明かした。

それでも、納得のいかない様子的美琴に、とりあえず元気は出たかな、と内心でうなずく。

「さてと、ずいぶん話し込んだね。それじゃ僕は帰るよ、またね？」

まだ何か言いたげな美琴には気付かない振りをして軽く手を振ると、桐はその場を後にしたのだった。

本筋にあんまり関係ないどうでもいい話。

美琴と別れ、ちょっといい事をした気分になった桐が寮に帰ると、

そこは戦場跡だった。

大量の野次馬と消防車。砕けたコンクリートがむき出しになった壁に、特定の部分が隅々まで焼け焦げた痕、ビショビショの廊下。足の踏み場なく散乱する文字の滲んだコピー用紙。

蒼白になりながら自室に踏み込んだ桐が見たのは、スプリンクラーの水…というか学園都市謹製の消火剤を溶かした水溶液をたっぷりと含んだ、真新しい夏用布団一式（昨日買ったばかり。お値段セツトで税込み6980円）だった。

…絶叫が、響いたらしい。

…くすくすくす。

思った以上にデキがよかったわね？

EXT

TON



インジケーターのバーが、100%を示す。

「ダウンロードできたみたいですね」

「これを聴くだけでレベルアップって、そんな事あるんですかね」

『風紀委員活動第177支部』のオフィス。

初春の私物のノートをのぞきこみながら、黒子は答えた。

「情報提供者の話ではそういう事らしいですよ。そう思うのなら試してごらんさないな。使ってみればすぐに答が出ますわよ?」

「えー、でも副作用があるとか言われてるんですよ…:そんな危ないもの…」

嫌そうにつぶやく初春。

その直後、彼女ははっと何かに気付いた。

「…これを使って白井さん以上の能力者になっちゃったら…:今までの仕返しにあんな事やこんな事を…:えへへ」

「思考が駄々もれになってますわよ」

ほんわかした顔で口走る初春に、黒子は冷たい目でつつこんだ。同時に、『幻想御手』（レベルアップ）をダウンロード済みのミュ

ージックプレイヤーにつながっているイヤフォンを左右それぞれつまんで、満面の笑みで初春の耳へとあてがおうとする。

「わたくしに恨みを晴らしたいのでしたら是非」

「わー！嘘です嘘ですよー！！」

……。

……。

そうして、ひとしきりじゃれあつた後に、また、真面目な会話にもどるふたり。

実は本当に怖かったらしい初春が、涙目の余韻を残しながらも黒子に報告する。

「はうう…ちなみに、業者に連絡してここを閉鎖するまでに、5000件ほどダウンロードされていますね…全員が使用したわけではないと思いますが」

「げ」

思った以上の件数に、露骨にうんざりした表情を見せる黒子。

それにはあえて触れないまま、軽やかなキータッチで初春は次の情報を探り出した。

「ダウンロードできなくなってからは金銭で売買する人が増えてるみたいですよ…」

「広がるのを完全に止める事は無理、か…その取り引き場所はわかりますの？」

「ちょっと待ってください…はい、時間と場所です」

抽出したデータをすばやく印刷をかけ、取り出したA4用紙の束を渡す初春。

その量に、黒子は驚きながらも気を取り直して、資料をあらためる。

「仕方ない、一つ一つ回っていきますか…メンドウですけど」

「え、白井さん一人ですか？」

「実害があると実証されなければ、上は重い腰をあげませんもの…それに一人じゃありませんわよ。そろそろ時間ですもの」

傍らにおいておいた薄いカバンを手に取りながら、笑みを浮かべる黒子。

ちょうど、それに答えるかのように、ドアが滑らかに開く。

「こんにちは。白井さんはいる？…というか、なんで僕のデータで認証通るのかな？」

タイミングのいい登場に、初春は思う。

(うわー…これは須臣さん、タイヘンですね…)

午後の早い、もっとも暑さが厳しくなる時間帯、学園都市の一角でぬるい風に髪をなぶられ、桐は、どこか遠くを見ながらつぶやいた。

「…僕はこの間の洋服屋の一件の後始末があるからって呼ばれたはずなんだけど…なんでそれが今、『風紀委員』の手伝いになってるんだろう…?」

「あら、お望みなら今からでも調書作成のほうにいたします? 実績のある、『風紀委員』の協力者ならともかく、一般生徒が能力を使つて場を収めたというケースは、その気になればA4で50枚クラスの大長編にも出来るんですよ?」

舗装がまばらな道を、人の少ない、繁華街とは逆の方向へと連れ立って桐と黒子は歩いていく。

「それ、明らかに脅迫じゃ…。…はあ、権力つて腐敗するもんなんだね……」

「人聞きの悪いことをおっしゃらないでいただけます? ちょっと手間を省いてあげただけですの。薄謝も『風紀委員』のほうから出さ

せませすし、これはこれで対等な取り引きでしょう？」「

「だからこれはこれでって…。まあ、今日はバイト休み…というか見つからなかったから実害はないし、君が本気でそう思ってるみたいなのは突っ込んだじゃいけない所なんだろうなとは思っけど…」

「強要はしていませんわ。そして選択権もさしあげていきますのよ？」

むしろ、相手を困らせるのを楽しむような瞳で、黒子は桐の前にまわりこんだ。

「…もちろん、最初からわたくしたちを手伝っていただけるとおっしゃるのなら、こんな回りくどいことをしなくても済むのですけれど？」

本人も意図していない、どこか期待を含んだ口調。

黒子の中での桐の評価は、彼自身が思っている以上に高いものとなっていた。

最初の銀行強盗への対処。加えて、御坂をいなしてみせた一件に、洋服屋での被害を最小限に抑えた的確な行動。

そして今さっき黒子たちの前で見せた、詰め所での理解の速さ。

彼は全く気乗りしない表情ながら、初春と黒子の最低限の説明だけで迅速に事態を把握してみせたのだ。

（頭の回転が速い方というのは貴重ですもの、逃す手はありませんですの）

そんな理由から、黒子は今まで以上に桐を仲間に取り入れようと思っていた。

だが、ひどく気の進まない表情で、青年はそれに答える。

「だから『風紀委員』に入れって？初春さんにも答えたはずだけど、遠慮しておくよ。僕は正義の味方には向いていないし…何より、ただ生きていくので忙しいんだから」

まるで、言葉の接ぎ穂をかすめるように。

すつと、桐は道を塞いでいる黒子を避けて彼女の前に出る。

(い、今、わたくしをすり抜け…?!)

その、ひどく滑らかな体捌きに青年の動きを見失って、少女は息を呑んだ。

そして振り返る事なく前を向いたまま、黒子を見ずに、桐は続ける。

「それに、『風紀委員』の在り方に文句はないけど、共感は出来な  
いからさ。僕も目にとまったら手を出しちゃうほうだからあんまり  
人のこと言えない気はするけど、関係のないことに自分からアンテ  
ナ張り巡らしてまで、揉め事に飛び込んでいく気にはなれないんだ」  
話をしながらも足を緩めずに、ただ歩いていく青年。

「それは、治安維持のためには！」

なぜだろうか。

そのまま置いてかれるような気がして、黒子は声を荒げる。

しかし肩越しに振りかえった桐は、むしろ優しく微笑んだ。そして

「…言ったよね。『風紀委員』に文句はないって。君がそれに誇りを持っていてるってこともなんとなくわかるよ。それ自体は賞賛するし尊重するし、何なら尊敬だってしていいよ？…ただ、僕には全く『共感できない』ってだけなんだからさ」

告げられたのは、明確な断絶の言葉だった。

「…っ！」

視界が狭まったような気がして、黒子は立ち止まる。

頭の中がぐるぐるして、反論の言葉がひとつも思い浮かばなかった。いつもならよくまわる舌が、言葉をひとつも紡ぎ出せない、初めての感覚。

余人なら、この状態をこういうだろう。

『言い負かされた』と。

(…なんで…こんな…)

自分がショックを受けているということにも気付けずに、黒子は立ち尽くす。

早く何かを言わなければ。変だと思われてしまう。でも何を言えば判らない。

(彼は…?)

彼の足音はもう聞こえない。こんな自分に呆れて立ち去ってしまったのだらうか？

(…見限られた…?こんなに簡単に?そんな!…)

ほとんど接点もない関係で、見限るも何も無いはずなのに、黒子は  
そう思い込んで眼を見開いた。  
そして、そこでようやく。

とても心配そうに自分を覗き込んでいる、青年に気付く。

「……えっと、ごめん、ちょっと言い過ぎちゃった…みたいだね？」

彼は、そこにいた。

バツの悪そうな表情で、桐は黒子に弁解する。

「そんなにひどいことを言うつもりはなかったんだよ。ただ一回、  
ちゃんと断っておかないと、そのままずるずる続ける続いちゃうかなって  
思ってた。今日みたいにタイミングよく付き合える日はっかりでも  
ないだろうし…」

足音が聞こえなかったのは立ち去ったからではなかった。  
ずっと、立ちつくす黒子のすぐそばにいたからだ。

「ホントにごめん、言い過ぎた。謝るよ。昨日ちょっとあって、疲  
れちゃってたせいだと思う。いや、言い訳にもなってないね。でも、  
そんなにシヨック受けるなんて思わなくて…」

それがなぜだか嬉しくて、黒子は声を張り上げた。

「ああもうっ！殿方がグチグチとうるさいですわっ！！一度言った  
ことには責任をお持ちになったらどうですか！！」

「いや、だから、言ったことに責任感じて謝ってるんだけど」



遮られた謝罪の言葉をとめ、不満そうに自分を見つめる桐を見て、黒子は安心する。

居住まいを正して、彼女は桐に向き直った。

「先のお誘いと今の勧誘は強引過ぎでしたのです。謝罪いたしますわ」

青年はその言葉に戸惑ったように瞳を揺らしながらも、最後には黒子をしっかりと見据えた。

「…わかったよ、じゃあ、お互いさまってください。この話はこれでおしまい、でいいかな？」

「ええ、そのようにお願いしますわ。そして、もう時間が迫っていますの」

黒子は薄いカバンから資料を取り出して桐に示した。  
打てば響く、そんなふうに逡巡もなく、青年は答える。

「『幻想御手』（レベルアップ）の取引現場を押さえるんだよね？取引が行われそうなたまり場になっている場所はこの区画に二箇所…」

「ええ、ここからならどちらも大体同じくらいの距離ですの」

「じゃあ手分けして、だね？だけど僕は…」

「むろん、必要以上に介入なさらなくても結構ですわ。見つけたらわたくしと『警備員』に連絡さえしてくだされば」

「了解、そうさせてもらうよ。…それと悪いけど『警備員』から先に連絡入れるね？それは判っておいてほしいんだけど」

当たり前のように青年から滑り出た、黒子の身の安全を視野に置いた言葉に、彼女は自然に頬を緩める。

判りやすい気遣い。

それをイヤではないと感じている自分を自覚し、可笑しく思いながら、黒子は意味深に笑って見せた。

「ご随意に。ただ、覚えて置かれるとよろしいですね。本気になつたわたくしは、『速い』んですのよ…！」

そうして二人はうなずくと、二手に分かれて行動を始めたのだった。

こうなるのね…。  
まったく、カタチがとりづらいこと…。

EXT

TON

人気がない、工事現場の一角。

口論の音が、聞きたくもないのに聞こえてくる。

「そんなっ！話が違うじゃないかっ！10万で『幻想御手』（レベルアップ）を譲渡するって…!!」

どこか気弱そうな青年の声。

「悪いがついさつき値上げてね。コイツが欲しけりゃもう10万持ってきた」

答えて、斜に構えた声が心底面白そうに遮った。

「なっ…！ふざけるなっ！だったらその金を返し…」

鈍い音が響く。

「うげえ〜」

「ガタガタうつせーな。10万ぼっちで誰がやるかっての。金ねーんならさっさと帰れデブ！」

そして、先ほど以上の殴打の音と、やけに甲高い悲鳴のようなものが断続的に続けて路地裏に響いた。

耳をふさぎたくなるようなその音がひとしきり続いた後、リーダー

格の男の野太い声がそれを遮る。

「オウ、ソイツ立たせる。お前らのレベルがどれくらい上がったか、そいつで試してみる」

「…マジかよ」

「うわキツッー。オマエ今日死んじまうかもなー？」

応じて、下品な笑い声上がり、佐天は思わず首をすくめた。冷や汗が、つつつと頬を伝う。

(何だってこんなトコロに出くわすのよ)

とっさに飛び込んだ曲がり角の陰に隠れつつ、やんならあたしの見てない所でやってよ、と彼女はうめいた。

(とりあえず『風紀委員』か『警備員』に連絡を)

携帯を取り出す。

しかし、液晶には折り悪く、バッテリー切れの表示がうかぶ。

(そんな)

焦る佐天に、

「オイ、そこに誰かいんぞ」

野太い声が響いた。

(見つかった?!)

びくりと首をすくめる佐天。

「あ？何見てんだコラ」

(うあー何か言ってきてるー)

あわてた佐天はろくに話も聞かず、ぱたぱたと手を振って。

「いえ、別に。あ、あたしはただの通りすがりでして…こ、これにて失礼……」

それだけ言うと、くるりと回れ右してたたつと走り出した。

背中側から、またあの甲高い悲鳴が流れてくる。

(しょ、しょうがないよね。あたしになにかできるわけじゃないし)

名前も知らない誰かが蹴られる音が耳にこびりつく。

(あっちはいかにもな連中が三人。こっちは数ヶ月前まで小学生やっってたんだし)

「わあああ！やめ…やめてぐぎゃ…」

甲高い悲鳴が、暴力的な何かに潰されて濁る。

それで、佐天の足は止まってしまった。

(からまれてるのはまったく面識のない赤の他人…何の義理もないんだから…ここは見なかったことに……)

そう、思ったのに。

「もっ、もうやめなさいよ！」

気がつくのと、彼女は、不良たちにそう叫んでしまっていた。  
思考と行動が、かみ合わない。

（って、何もどってきてんのあたし）

「その人、ケガしてるし……」

（バカ言ってるんでさっさとこの場から）

「す…すぐに『警備員』が来るんだから」

そこまで言ったところで、

「ひっ」

リーダー格の男が、佐天ごしに、彼女の後ろの仕切りを蹴りつけていた。

分厚い鋼板がガァンツ、と音を立て、鉄製の柱までもがギシギシと揺れる。

それは、佐天のココロを折るには十分な暴力で。

「…今、なんだった？」

「あ、あ……」

佐天の思考が、ぐちゃぐちゃになる。

突きつけられた質問にあえぐような音しか出せない少女の髪を無造作に掴んで、男はひどく、愉しそうに笑った。

「ガキが生意気言うじゃねーか。何の力もねえ非力なヤツにゴチャゴチャ指図する権利はねーんだよ」

佐天を見下しながら、男はなぶるように言葉を投げた、その時。

「でも、明らかに君もたいしたことないよね？なんならゴチャゴチャ指図してあげようか？」

ダレカの声が、路地裏に響いた。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase .

「でも、明らかに君もたいした事ないよね？なんならゴチャゴチャ指図してあげようか？」

このセリフを発する、その瞬間までは。

正直なところ、桐にあまりやる気は無かった。

もちろん、おざなりにする気もなかったが、通報だけで済ませる気だったのは確かだ。

だが、

（さすがにこの状況で通報だけってわけにはいかないよね。状況的にも 心情的にも）

ジャケットのポケットに手をつ込んで携帯を操作する。

『警備員』向けにあらかじめ作っておいたメールを送信。

（悠長に通話する気分でもないし）

続けて黒子にも同じ文面を送りつけ、ポケットから手を出す。

「テメエ、何をゴソゴソと…」

（なにより、あっさり逃げてもらってもつまらないしね？）

自然と浮かんでくる苛立ちを理性で抑え、三人の位置関係を把握しながら、青年はあくまでのんびりと言葉をかけた。

「ああ、ごめん、ヤボ用だよ。それで、たいした事ないのは君『ら』」



だつたつけ？ほら、指図してあげるから、とつとと解散してくれないかな？」

「す、須臣さん…」

青年の姿を認めて、地面にへたり込んだ佐天がつぶやく。

その無事な姿に安心して、桐は彼女に向けて軽くうなずいて見せた。

「なんだテメエは！」

「ジャツジメントのお手伝い、というかその子の知り合いだよ。…ところで勘違いしないで欲しいんだけど、初手でまとめて終わらせずに、わざわざ声をかけてあげたのはただの慈悲なんだ」

本当は、単に佐天を巻き込むから無理だったのだが。

その事実をおくびにも出さずに、桐はおおげさに肩をすくめて見せた。

「…まあ、その慈悲のおかげで今君らに選択する余地が生まれてるんだけど…黙って消えるか、向かってくるか、とつとと選んでくれると嬉しいな？」

不良たちの注意を集めるべく、できるだけわかりやすい言葉を選んで青年は挑発を続ける。

そして効果は、すぐに現れた。

「ハッ、何かと思えば。たった一匹でかつこいいセンパイ気取りかあ？あんまいキってつと、痛い目見んぞ？なんならアレと同じ目にあわせてやっても…」

そう言つて不用意に近づいてきた一人目に、桐は心中でため息をつきながら構成を編む。

(そう言いながら一匹で向かってくるのは、どうなのかな…)

重心を沈めて、小さく飛び込んだ。

「が、ごぼ…」

半瞬後。

尖った拳の先端が、チンピラの腹部に突き刺さる感触。

それだけで悶絶しているのが判りながらも、桐はささやくようにつぶやいた。

「 我は撫でる獅子の鬣」

衝撃に特化して編み上げた、風撃のチカラ。

零距离で地面に対して垂直に打ち出された『それ』に吹き飛ばされて、不良は二メートルほど垂直に浮かび上がった。

そのまま、明らかに受身を取れていない姿勢で、背中から

「おゴツ…」

地面に叩きつけられる。

一撃で終わらされたあげく、さらにそれ以上の止めを重ねられて、一人目の不良は口から泡を吹いて目を回した。

それを確認してから、桐はのんびりと見えるように、笑う。

「まあ、どうも君らは遊びたくて仕方なさそうだし、僕としてもあ

んまり許してあげる気分じゃないからさ 仕掛けてもいいよね？」

「優等生が言ってくれるな？」

つぶやいた二人目の手が、何かを吊り上げるようにくいつと動く。

それと呼応して、佐天の傍に立てかけてあった鋼材や鉄パイプが複数、ふわりと浮いた。

息を呑む少女。

(すごい、鉄柱があんなに…)

「どうやら能力者のようだが…ム力つくな？その高慢ちきな態度…」

そうして二人目が、何かを投擲するようなモーションに入る。

「ヘシ折ってやるぜっ…!!」

そして鋼材が、当たったらとても無事ではすまない速度で、青年に向かつて殺到した。

「危な…!!」

思わず佐天が叫ぶ。

だがその時には、桐はもう次の構成を編み上げていた。

「我が指先に琥珀の盾」

青年の体の正面から斜めになるように、圧縮された空気の壁が出現する。

意図的に付けられた角度のせいで正面からぶつかることができず、彼の左に寄せられるように受け流されていく鋼材。

「はあ？」

投げつけた鋼材の束にかすりもせず、すれ違うように自分に駆け込んだ相手を認めて、二人目はあっけなくうろたえた。

「投げっぱなしで勝てると思われてもね？」

そしてチンピラの耳に残ったのは、どこか、つまらなげにつぶやかれた言葉だった。

急速に縮められた距離。

そのまま勢いを殺さずに突き込まれた肘に、コメカミを挟られる感触を存分に味わって、二人目の不良の意識はブラックアウトする。もんどりうってリーダーの後ろに吹き飛ばされたそれを見やって、リーダー格の男は笑った。

「カカカカツ、風使いつてヤツか。珍しくもねえ能力だが、それでそこまで喧嘩慣れしてんのは初めて見たぜ」

おそらくは『幻想御手』（レベルアップ）でレベルを底上げした不良を2人。

それを歯牙にもかけず、あっさりと倒しておきながらも、桐に動揺はなかった。

（身体の使い方なら『知ってる』）

当然のこととして、それを疑問にすら思うことなく、青年は男に返した。

「それはどうも。ちなみに順番では次、君なんだけど…」

「オレ達はよ」

桐の言葉を遮り、男が前に出る。

「盗みや暴行、恐喝にクスリ。他にもいろいろあくどい事して楽しんできたけどよ。最後はいつも正義ヅラした『風紀委員』や『警備員』に追われてな。ウザってー目に遭わされてきたんだ。だからでけえ力があればよ」

キラキラと敵意にまみれた視線が、桐をねめつけた。

「そういう正義ヅラ、一遍ギタギタにしてやりてーって思ってたんだけー！」

そうして、男は桐に飛び掛った。

それを冷静に見据えながら、桐はつぶやく。

「…悪行自慢するのは結構だけど、その自慢は躊躇う理由を僕から削っていっただけだっ…気付いてるかな!？」

拳を握る。

十分にカウンターを取れると判断して、桐は身体の重心を意識した。

(顔面の中心 ねじ込んで、致命打にする!!!)

完璧なタイミング、角度、速度で桐は巨体に向かって拳を突き出す。  
だが。

それは手ごたえなく、あっさりと相手をすり抜けた。

「…?!」

崩れるバランス。

絶句して、それでも動きを止めずに桐は泳いだ身体を立て直そうとする。

それをせせら笑う声が、真後ろから聞こえた気がした。

「ハッ、がら空きだぜえ!!!!」

振り向くより先に、桐は移動を選択する。

全力で飛びのくが、大振りのナイフがありえない位置から桐に向かって振り下ろされていた。

ぎりぎりで身体ごと首をねじるも、頬に薄い裂き傷が走る。

そのままなら、脳天に突き刺さっていた軌跡。

(驚くのは…後だ…!確かめる…!!)

ひねった勢いを利用して、桐は今度こそ男から離脱した。

そのままバックステップを加えて、十分に上に距離をとる。

間髪いれずに構成を編み上げると、右腕を振り上げて、桐は叫んだ。

「我は撫でる獅子の鬣!」

サイドスロー気味の姿勢から放たれる、地を這う烈風。

しかしそれも、男の直前でぐにやりと曲がり、その背後に着弾した。  
またも無駄に終わった攻撃。

だがその一部始終に、青年はある確信を抱く。

（なるほど、ね。そういうことか）

「どうした優等生、躊躇わないんじゃないかなかったのかよ？急にちょこまか逃げ出しやがって。表情から余裕が消えたぜ？」

ニヤニヤと笑いながらさうのたまう男に、頬の血を軽くぬぐいながら、桐は答える。

「そうだね。ちょっと見くびってたかな。正直、今は危なかったよ。だけど、今で決められなかったのがあんたの敗因だね」

美琴のときに使った、光を屈折させるための構成を編みかけ、ふと思いついてそれを霧散させる。

一瞬だけ背後を見やって、佐天が自分の後ろにいることを確認してから、桐はうなずいた。

新たな構成を加減なく編み上げながら、青年は言葉を続ける。

「高速機動能力及び斥力タイプの防御系力場」

（きつと、これは間違っているけど）

「ん？」

脈絡なく投げられた単語の羅列に訝しげな表情を見せる男。

だがそれは、続く言葉に驚愕に取って代わった。

「そうじゃなきゃ、光の屈折における視覚トリック、ってところかな？真面目に付き合おうかとも思ったけど、そうしてやる義理もな

いなんて気付いてさ。ようは」

雰囲気を感じ取ったのだろう。

脂汗をダラダラと流し始める男に、一片の優しさもなく、桐は両腕を振り上げた。

「速度や錯覚が問題にならない広範囲に、防御が役に立たない高威力を叩き込めば、非力なヤツがゴチャゴチャしようが関係ない！さて、ちよつど躊躇う理由もなくなったところだし、まさか、文句はないよね？」

そうして、ようやくその場から逃げ出そうとした男に。

「我は呼ぶ、破裂の姉妹！！」

桐はチカラを叩き込んだ。

空気がひしゃげ、無差別な衝撃波が桐の前面：チカラの効果範囲で荒れ狂い、まんべんなく破裂音をひびかせる。

突然発生した、空気の破裂で溢れた空間に投げ込まれた男は、さんざんバウンドしたあげく、効果が消えると共に、地面にくったりと倒れ伏したのだった。

ちゃんと手加減してるわね。

まあ、こちらは楽なのだけれど…。



E  
X  
T

T  
O  
N

荒れた息を整えて、相手が動かないことを確認してから、桐は右腕を下ろす。

振り返って、へたり込んでいる少女に手を差し伸べた。

「大丈夫だったかな？」

「…え…あ…??」

あまりのことに、認識が追いついていないのだろう。

どこか要領を得なくなってしまうている少女に同情しながら、桐は掴んだ手を引いてゆっくりと彼女を立たせた。と、そこに。

「遅くなりましたわ！向こうにも何人かたむろってやがりまして…  
つてあら?」

黒子が、テレポートで降り立った。

倒れてのびている三人と、路地裏の光景を認めて、目を丸くする。  
そんな彼女を、桐は気の抜けた言葉で迎えた。

「たむろってやがったって…あんまりひどいことしてないよね？」

「あら、どの口がおっしゃいますのかしら？そちらこそ、ずいぶん  
と派手に立ち回られたようですね?」

「…あー。まあ、必要に迫られてって感じかな…?」

立ってもらった佐天にケガがないことを確認し終え、どこか困ったように桐は黒子を振り返る。

「ご謙遜を。現場がこの様子では説得力ありませんわよ…ってその傷、どうなさいましたの?!」

面白そうに続けた黒子だったが、青年の頬の傷に驚き、声を荒げた。

「ああ、相手の一人がナイフ持ってたからね…」

ダラダラと流れる血にいまさら気付いたように、桐はハンカチを取り出して押し当てる。

(たった2枚しかないのもったいない…。でも、今すぐここで治すわけにもいかないしね)

脳裏に浮かんだ癒しのための構成を確認だけして、そつと霧散させた。

「早く詰め所に戻りましょう。あいにく、応急キットはもちあわせていませんの」

「いや、後でいいよ、たいした事ないしね、このくらいなら傷も残らない。それより、こいつらを引き渡さないといけないから…って、あれ、佐天さん？」

黒子にそう返したところで、桐は自分を見つめる少女の視線に気付いた。

目をあわそうとしたところで、少女はびくっと首をすくめる。

「あ、あのっ！ありがとうございます！！失礼します！」

「あ、ちよつと…」

そして、早口でそれだけ言うと、桐の声も聞こえないような様子で走って行ってしまった。

入れ替わるように、黒いボディスーツを装備した『警備員』が、反対側の角から姿を現す。

「大丈夫か？通報をくれたのは君かね？」

「ええ、僕です。彼らがちよつと、もめていたところに居合わせまして…」

どう説明しようか？

そんな目で黒子を見る桐。

心得たように、彼女が口を開く。

「わたくしたちは『風紀委員』ですわ。警邏中に暴行傷害の現場に彼が遭遇したため、やむなく鎮圧したそうです。彼らの拘束をお願いいたします」

「そうか…こういった事は本来『風紀委員』の仕事ではないのだが、ここ数日能力者の犯罪が激増していてね。本音を言うと助かったよ」

（能力者の犯罪が増えている、か…やっぱり例の『幻想御手』（レベルアップ）の所為なのかな？レベルが上がるだけじゃなく、正常な判断も出来なくなってる…？いや、もともと何かやらかしそうなのが刃物を持ちちゃっただけって可能性もあるか…）

黒子の滑らかな説明に感心しながら、桐は思考を走らせる。  
それを断ち切ったのは、桐に倒された男だった。

「大丈夫、だ、俺達は負けない、絶対に」

「っ！？」

説明を終えた黒子と桐が同時に反応する。

「オレ、夕子は、行ける、るんだ、実際にイけば、わかる、ん、だ」

男は涎をたらしながら、

「オマエにはワからない、オマエにはイけない、から、アハハ大丈夫、大丈夫、なんだ」

意味のつながらない言葉をつめき続けた。  
それを見て、二人はそれぞれの感想を抱く。

(なんていうか…ろくなものじゃないってことだけは良く判るね)

(表情が固定されている…感情の波が一定値のままなんですわ)

「ヤレヤレ、こいつもか。…犯罪を犯した能力者の中に、こういったことを口走る者が多数出ているんだが…やはり少年犯罪も凶悪化しているのかねえ」

男の様子を見て取った『警備員』が、そんな言葉を黒子にかける。  
それを聞きながら、黒子は思った。

違う、この反応は、雑な洗脳、そのもの…。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

15

Phase .

人通りの多い通りを選んで、佐天涙子はとぼとぼと歩いていた。

「須臣さん…すごかったなあ」

浮かない表情でぼんやりと、先ほど自分を救ってくれた青年を思い浮かべる。

（これ以上ないってタイミングで現れて、ばったばったと怖い人たちをやっつけちゃって…）

嬉しいことを思い返しているはずなのに、心は少しも浮かれてくれなかった。

（でも、最後は私じゃなくて、黒子さんと気安く…あのふたり、いつの間にあんなに仲良くなったんだろ…）

浮かんできたコトバを胸の中でおさえつけて、少女はため息をついた。

（…イヤだな…この気持ち）

唇をかんで、学園都市に越してきてから何度も繰り返してきた思考をまた、佐天はなぞっていく。

（生まれ持った才能の差…努力してもどうにもならない壁…）

お気に入りのサンダルが地面を踏む感触すら、どこかそらぞらしく響く。

（あたしと同じ学生で…同じ街に住んでいるのに…あたしとは違う世界に住んでいる人がいる…能力者と無能力者（レベル0）とでは、何もかも違う…）

考えたくないことばかりが頭に浮かんで、佐天はぎゅっと、『幻想御手』（レベルアップ）の入ったミュージックプレイヤーを握り締めた。と、そこに。

「ルイコー、おひさ！終業式以来ー」

聞き覚えのある声に名前を呼ばれて、彼女は顔を上げた。見知った

顔に、驚きながらも返事を返す。

「アケミ、むーちゃん、マコチンも」

「一人で何してんの、買い物？」

問いに佐天は、あいまいな笑みでごまかした。触れられたくない話題だったので、友人の荷物を見て、逆に質問する。

「う…うん、そんなとこ。アケミたちはプール？」

「それがスンゲー混んでてさあ。全然泳げんかったんよ…。できれば海とか行きたいけど、私ら全員補習あるしねー」

どこへも行けない、と不満そうにアケミは続けた。

「あれさー。勉強の補習はわかるけど、能力の補習って納得いかないよねー。あんなん才能じゃん？」

「あ、でも聞いた？『幻想御手』（レベルアップ）っての。使うだけで能力が上がるんだってさ」

友人の一人、マコチンが何の気なしに言った言葉に、佐天はピク、と反応した。

わいわいと『幻想御手』（レベルアップ）の話題に盛り上がる友人たちに思わず声をかける。

「あつ、あのさ！あたし…それ、持ってるんだけど……」

その後のことは、佐天にとってひどくスムーズに進んだ。



誰も危険性を指摘することがないまま、近くの公園に移動する。  
順番に『幻想御手』（レベルアップ）を試し、友人たちの能力が  
底上げされていった。  
そして、佐天も。

（わ、わ、どうしよう、能力…だあ…）

初めて手にした『能力』の実感に酔いながら、佐天はただ、無邪気  
に喜ぶ。

夏らしく、暑くて健康的な、公園の午後だった。

…。  
……。

EXT

TON

たゆたっていた。

ただ、ゆらゆらと。

(自分の…輪郭がつかめない…?)

もどかしい感じ。

彼女にとって、時間の流れは一定ではなかった。

それが感覚のせいなのか、本当に一定でないのかは知る気も起きなかつたが。

(ダメよ。疑問に思わなければ)

思わなければ。

…どうなるというのだろう。

躁鬱がおかしい。

フルカラーとモノクロが交差する。

全知全能と無知無能、あるいはその中間がめぐるしく切り替わる。くだらないことに一喜一憂して悪態や喝采を吐いていなければ、認識など簡単に吹き飛ばされてしまいそうだった。

(目的を、)

目的を？

齟齬が起きる。

そんなもの、持つ必要があるのだろうか？

(忘れては…ん…)

忘れては？

思考が自分のものなのに、価値を見出せない。

(しがみつかないと…)

何に？

こんなに、全能なのに？

意味が通じない。

意識に浮かぶ言葉から意味が拾えない。

それでも、たゆたいながら、『ナニカ』は思う。

この、くだらないイレギュラーの発端となった、『言葉遊び』を、  
ただひたすらに。

とあるナニカの音声魔術士<sup>ヴォイス・ソーサラー</sup>

16

Phase .

桐にとって、この二日間はどこらかといえは平穩に進んだ。

いろいろと諦めて、スプリンクラーによる被害を受けた部屋の掃除を街を回ってるロボに任せたら、思った以上にピカピカになって逆に落ち込んだり（外用なのに…）、無理やり『風紀委員』に誘うのは諦めてくれたらしい黒子や同じく風紀委員の初春から、メールを受け取ってそれに返信したり（あれから一度だけ、不良退治に付き合った）。

また、お決まりの日雇いアルバイトも特にトラブルもなく、順調にこなしていた。

何度か同じ現場に行くうちに顔も覚えてもらい、その流れから、

「電子レンジと冷蔵庫…。これで憧れの文化的な生活が手に入るね！」

という感じで、バイトで知り合った年長者より、中古のそれらを格安で譲ってもらう約束さえ取り付けていた。

桐は、わくわくしながらバイト先への道を歩いていく。

科学の進んだ都市。

そのイメージどおり、冷凍食品を初めとした加工済み食品が学園都市には溢れていた。

とても安いそれらを横目に見ながら量の少ない弁当を買う日々にもおさらばだと、桐は浮かれた気持ちで思う。

ただ、その気分はあまり長くは続かなかった。

「す、須臣さん…」

顔見知りの少女が、蒼白な顔で青年の前に現れたからだ。

（なんで、そんなカオしてるんだ…？）

ただ事ではない様子に、冷水をかけられたような気分を、桐は味わう。

それでも驚きは表情に出さないように気をつけながら、青年は気楽に聞こえるように作った声を彼女にかけて。

「…佐天さん、こんにちは。なにかお困りかな？」

明るい、普段どおりの声色。

ただ、それだけだった。

それだけで、少女の目からボロボロと涙がこぼれだす。

「…え、えう…：す、須臣さぁん…、ア、アケ…アケミが倒れちゃって…」

つつかえながら、よろよろとこちらに向かってくる佐天を、桐は無言のまま支えた。

華奢な身体を抱きとめるカタチになってしまい、内心で焦りながらも、

（パニックになってる…！？とにかく、何が起きたのか、聞かないと）

それだけを優先して、桐は落ち着かせるためにゆっくりと、彼女の背中をぽんぽん、とたたいた。

泣き声が、ひときわその大きさを増す。

「いつしよに…ほ、補習の帰りで…歩いてたら…急に…フラって倒れちゃって…すぐに救急車呼んだんだけど、あたし、こわ…怖くなつて…『幻想御手』（レベルアップ）、元に戻らないなんて…あ、あたし知らなくて…！」

感情のままに話しているのだろう。

それでも、文脈の乱れたセリフから拾い出した言葉に、桐は戦慄する。

（『幻想御手』（レベルアップ）?! そんな…）

知り合いで、年下の女の子。

そのつぶれるような声が、胸に痛かった。

痛みをねじ伏せて、確認するべきことだけを脳裏で選び出す。

「その、倒れてしまった子の為に、救急車は呼んだんだね？」

ぶんぶんと、縦に首を振る少女。

（よかった…。その友達が倒れた状態で放置されてるわけじゃないのなら、この子が後で気を病むこともないか…）

「うん、わかった。わかったよ。ちゃんと呼べたのは偉かったね」

再度、背中をさする。

折れそうな、華奢な骨格。

応えるかのように、必死でにぎりしめられた袖がしわになる感覚。内心歯噛みしながら、青年はそれらを受け入れた。

「で、でも…あたしがみんなを…ね、ねえ、あたしももう眠っちゃ  
うんですか？そしたらもう、二度と起きれないんですか」

うわごとのように、少女はちいさなくちびるから言葉を吐き出した。

「あたし…何の力もない自分がいやで、でも憧れは捨てられなくて  
…」

佐天の手が、すがりつくようにまた、桐の袖口をぎゅっとにぎりし  
める。

「無能力者（レベル0）って…欠陥品なのかな…？」

（……っ！！）

耳元でつぶやかれた言葉に、桐は頭が沸騰しそうな苛立ちを感じ  
た。

佐天ではなく、その序列を是としてそう思わせる、この『学園都  
市』の思想と、それにつけこんだ、顔も知らない『幻想御手』（レ  
ベルアッパー）の、作者に。

「それがズルして力を手にいれようとしたから罰が当たったんです  
かあ…？危ないものに手を出して、周りを巻き込んで、あたしなん  
か…！！」

少しだけ考えてから、桐は口を開いた。

「…そうだね」

(怒りも限度を過ぎると、逆に冷静になるんだな…)

「手は、出すべきじゃなかったよ。そんなものに」

冷たいコトバに、佐天が絶望に顔をゆがめる。

それ以上、一秒でもそんな顔をさせたくなくて、桐はすばやく続けた。

「これは後でお説教だね？それでも僕は、君の先輩なんだし」

「……え？」

言われたことがわからないという表情で答える少女に、桐は笑みさえ浮かべて答えて見せた。

ついでに、ぱたぱたとくったくなく手も振ってやる。

「だから、この後君は寝ちゃうんだろうけど、起こした後にガミガミお説教してあげようかなって」

「で、でも、二度と起きれないって…」

「いや、だから起こすんだよ。ちなみに、お説教がイヤだからって寝た振りしても無理やり叩き起こすから、覚悟しておいてくれると嬉しいな？それと…」

振っていた方の手でそのままぺしっと、力が入ってない感じで少女の頭をはたくと、桐は携帯を取り出した。

初春の番号を呼び出し、コールをかける。

「せっかくの親友に相談しなかったのも減点かな。初春さんが最近



連絡つかないって嘆いてたよ？寝ちゃう前になにか弁解しておかないと、僕のより長い説教聞くハメになると思うけどね」

電話が繋がったことを確認して、携帯を耳に当てる。

「…須臣さん？つと、今車内なんで後でおり返し…」

「ごめん、すぐ替わるから」

それだけを言っつて、桐は佐天に携帯を押し付けた。

そうして、親友同士が話し出す。

(この会話は、僕の記憶に残すべきじゃないよね…)

佐天を抱きとめてしまっているから、この場から離れるわけにはいかなかったが。

そうして桐は、話される内容を掴んでしまわないように、できるだけぼんやりと空を見上げて会話を聞き流した。

「…うん…うん…あと…よろしくね」

終わったところで彼女から携帯を受け取り、初春に近くの公園の場所を伝えて、桐は佐天をつれてそこへと移動する。

ベンチに寝かせて、しばらく待つ。そして

「須臣さんっ！佐天さんは…!!」

息を切らして公園に飛び込んできた初春を認めて、ベンチの上で桐は軽く手を上げた。

努めて事務的に、言葉を選ぶ。

「電話が終わってすぐ、だったよ。安心して……って言うのは変だけど、それなりに落ち着いて眠りに入ることは出来たと思う……。彼女のためにも救急車は呼びたくないから、タクシーを使って病院に行こうと思っただけど、構わないかな？」

「はい……わかりました」

打ちひしがれた様子で、初春がうなずく。

「それで、ひとつお願いがあるんだけどさ。白井さんがいたなら白井さんに頼むのが筋だったんだろうけど……」

「……はい、なんですか？」

「僕を、今この場で、正式な『風紀委員』の協力者にしてくれ。今までにわかっている全ての情報の開示を。……御坂さんの例があるんだから、君たちが協力者を使うのは問題ないんだろ？」

手持ちのノートパソコンを初春に示して、桐は決然と言い放った。

……はじまるわね。

……さあ、はじめないと。

E  
X  
T

T  
O  
N

「黒子っ！佐天さんが倒れたっつて…」

全力疾走で、美琴は病院のロビーへと駆け込んだ。  
沈痛な顔で出迎えた黒子に、息を整えながら尋ねる。

「やっぱり、『幻想御手』（レベルアップ）がらみ？」

「ええ、どうやらその線のようですの」

「初春さんは？」

「須臣さんと、木山先生のところへ」

「須臣…！？何でアイツが…？」

「…たまたま、佐天さんが倒れるところに居合わせたそうですの。  
初春に連絡を付けて、病院に搬送してくださいだったのも彼です。その  
場で初春に協力を買って出てくださいだったそうです…」

期待していた青年の協力を得られたのは喜ばしいことのはずだった。  
それなのに、どこか気まずい表情で黒子は報告する。  
そして、美琴もついこの間、夕暮れ時に見た青年の大人びた、優しい  
表情を思い出して、

（たしかに、アイツなら怒るでしょうね…）

と、不思議に納得していた。  
同時に、くだんの青年がそんな場所に居合わせるようになったことに、小さくないいらだちを感じる。  
その感情の動きを押しつぶして、彼女は続けた。

「そう…でも、初春さんは少し休ませたほうがいいんじゃない？」

「わたくしもそう言ったのですが…自分が風邪で休んでいたせいで『幻想御手』（レベルアップ）への対処が遅れたんだと言って聞かないんですの…」

「…そうなの……。あまり、無理しなきゃいいけど…」

美琴は玄関の方を眺めながら、つぶやいた。  
そうしている二人に、声が掛かる。

「あー、ちよつといいかい？」

そうして二人は、カエル顔の医者と呼ばれて、彼の自室で説明を受けることになった。

照明を落とした部屋の中、ディスプレイの灯りにぼんやりと照らされて、カエル顔の医者は口を開く。

「『幻想御手』（レベルアップ）の患者たちの脳波に共通するパターンが見つかったんだよ？人間の脳波は活動によって波が揺らぐんだね？それを無理に正せば…まあ、人体の活動に大きな影響が出るだろうね？」

「被害者は、『幻想御手』（レベルアップ）に無理やり脳波をいじられて植物状態になった…って事？」

医師の言葉を噛み砕いて、美琴が確認する。それを無言で肯定して、カエル顔の医師はさらに言葉を続けた。

「僕は職業柄、いろいろなセキュリティを構築していてね？その中のひとつに登録されているある人物の脳波が、植物患者のものと同じなんだね？」

話しながら、医師はあるウィンドウをひらいて見せた。

そこに表示されたプロフィールを見て、ふたりは息を飲む。

「登録者名：木山：春生！」

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

17

Phase .

今回『風紀委員』が『幻想御手』（レベルアップ）事件に際して協力を仰いでいるのは、木山という脳科学者らしい。

（『共感覚』が『幻想御手』（レベルアップ）の肝つてことか…。全く、学園都市はトンデモ科学の宝庫だね…）

移動の道すがら、初春に認証キーを発行してもらい、手持ちのノートパソコンをほぼ彼女の私物と化している、177支部のサーバにつながられるようにした桐は、最低限の前提知識を頭に入れてから木山の家を訪ねた。  
特に警戒されることもなく、客室へと通される。

「それで、君は？」

「『風紀委員』の協力者で、須臣といいます。…まあ、彼女のおまけだとも思ってもらえれば」

そんな一幕を経て、初春はつつかえながらもこれまでの状況を木山に報告する。

もともと部外者の桐は、ひたすら聞き役に徹していた。

「そうか、この間の彼女まで…」

思い出してしまったのだろう。

初春は目を潤ませながら、つぶやく。

「私のせいなんです」

それは違う、そう言いかけた桐を制して、木山は初春に声をかけた。

「あまり自分を責めるもんじゃない。少し休みなさい。コーヒーでも淹れてこよう」

「そんな悠長な事をしてる場合じゃ…！」

「お友達が目覚めた時に君が倒れていては元も子もないだろう？…大丈夫、最後はきつと上手くいくさ」

激昂しかける初春をなだめると、木山はコツコツと足音を響かせて、奥の部屋へと消えていった。

ぐしつと手の甲で涙を拭く初春に、桐がハンカチをぼん、と差し出す。

受け取りながらも恨めしそくに青年を見つめて、初春はこぼした。

「なんでそんな落ちついてられるんですか？須臣さんだって、気持ちと同じでしょう…？」

問われた言葉に、桐の感情が揺らぐ。

それを表に出さないようにしながらキーボードを操りつつ、桐は努めてゆっくりと答えた。

「…もちろん。でも、慌ててもどうしようもないときはあるから。逆に落ち着いてないと、必要な情報が必要だって気づけない場合もあるからね」

「それはそうでしょうけど…私にはとてもじつとしてなんか…」

そうつい募りながら部屋を見回した初春の視線が、引き出しからはみ出した一枚の書類にとまった。



( synesthesia (共感覚) : : ? ! )

今まさに追っている言葉に惹かれて引き出しを開けた彼女は、

「……………っ!」

あまりのことに一瞬言葉を失った。

「す、須臣さん!」

「何かな…って、勝手にあけるのはよくな…いや、どうしたのかな?」

液晶から顔をあげてたしなめかけた青年が、初春の様子に気付くと、表情を変えて彼女の隣へと歩み寄る。

少女はその中のひとつひとつを取り出して、桐に示していった。

「『音楽を使用した脳への干渉』?他にも共感性に関する論文がこんなにたくさん…さっきの今でなんでこんな…」

混乱しながらも、初春はとある論文のバインダーをひらいた。

「『An Involuntary Movement』?これは…」

つぶやきに、桐は後を引き受ける。

それは、原作でさんざん目にした、馴染み深い言葉だった。

「…『AIM』」

絶句するふたりに、

「いけないな。他人の研究結果を勝手に盗み見しては」

不意に声がかげられた。

硬直する初春をかばって、桐が前に出つつ、声の主と正対する。

「ああ、すみません。とでもあやまらせてもらいますね？勝手ついでに、これに関して納得のいく説明ももらえると嬉しいんですけど？」

振り返って見た木山は、拳銃を構えていた。

その危なげない照準に、桐は飛び掛るかどうかを思案する。

（難しそうだね…なにか異常を感じたら引き金引く気満々って感じだ…）

「まいったよ。私の部屋は普段誰も立ち入れないようにしているし、来客もほとんどなかったからね。少々無用心だったな」

淡々としたセリフに、青年は目を細めた。

無言のまま、構成を編み上げ、周囲の空間に展開する。

桐が扱うチカラ、『音声魔術』にはその名の通り、行使者本人の声が必要となる。逆に言えば、世界に声を響かせればいいのであって、その内容に意味はなかった。

自身の集中に最適だったので、桐は元ネタの原作の主人公と、同じ呪文を好んで使っていたが。

「少々事情があって、今日の僕はいつもより気が短くなってるんで

すよ。 そんなわけでその言葉、 自白と取るけど 構わないよね  
?!?!」

敬語を捨てた、その言葉を鍵に、桐は小規模な空気の破裂を木山に  
たたきつけた。

多少狙いが甘くなるが、人を昏倒させるのに十分な威力のチカラ。  
だがそれを、木山は拳銃を落としながらも、数歩下がっただけで平  
然と受け流して見せた。

(いや、キャビネットが横から飛び出して、彼女を守った…?)

「…ふむ、やはり能力者だったか。備えは無駄ではなかったようだ  
ね。しかし落としてしまったか。あまり使い慣れないものを持つも  
のではないな…」

「我は撫でる獅子の鬣っ ！！」

耳を貸さず、続けざまにチカラを発動させる。  
衝撃に特化した風撃。

しかしそれも、横合いから飛び出してきたソファーに遮られる。

(サイコキネシス?!…それなら!)

左手で初春を押さえ、右手を木山に向けて振り出して、桐は新たな  
構成を完成させた。

(この部屋を傷付けたくない…効果範囲を出来るだけ限定させる…  
!?!)

「我は流す天使の息吹!」

無風のはずの室内に、突如として突風が巻き起こる。  
丁寧の効果範囲を絞り込まれた空気の奔流が、木山を巻き込んで吹き流した。

そのまま科学者は、部屋の入り口近くまで押し流される。

(ドアか壁に叩きつけるくらいのもりで撃つたのに、これだけやってもバランスも崩せないのか…タチが悪いね…)

「…ふむ、素晴らしい汎用性だな。効果を限定したものならともかく、これほどの風力使い(エアロシューター)はそうはいないだろう」

目を白黒させている初春から手をはなし、改めて後ろにかばいながら、桐は携帯を操作しつつ取り出して見せた。

「それはどうも。ところで今、『警備員』(アンチスキル)への通報が滞りなく完了したんだけど、アンタは逃げなくていいのかな？ 通報されたら困るから、僕らを拳銃で抑えようとしたんじゃないかなって思っただけど。…ほら、ばやばやしていると踏み込んでくるよ？」

「判断も正しく、速いな。ふむ、そして確かにそれは困る。それでは逃げさせてもらおうとしようか」

特にこたえた様子も見せず、明日の天気を語るような口調でつぶやき、木山はすぐ後ろのドアを引きあげた。

あまりにもあっさりとした引き際に、桐は逡巡する。

(それはそれで好都合だけど…って?!)

たいした事のない、行きがけの駄賃のように。  
どうということもない仕草で空き缶を投げこみ、木山はドアを閉める。

そして投げ入れられた空き缶が、メキメキと音を立てて収束し始めた。

(これ、あの爆弾…!! だけど、この間見たのより収束が弱い…?)

驚きながらも右手を掲げ、桐は条件反射で構成を編み上げた。

初春をかばうように左手を回したまま、あえて一步、後ろに下がって、

「え、須臣さ…むぎゅ」

少女の身体と顔を背中中で塞いで視線を遮り、同時に盾になって彼女の安全を確保する。

構成が完成したところで、桐は叫んだ。

「我は紡ぐ、光輪の鎧!!」

使うのは、光で編まれた輪が連なった、力場の防壁のチカラ。

桐はそれを、自分たちを覆うのではなく、爆弾自体に巻きつけるようにして発動させた。

(頼むから、もってくれよ…!)

数瞬の間を置いて、桐のチカラの中で、弾ける爆弾。

祈るような思いで、青年は構成を維持する。

閃光が、溢れて

爆発が静まったところで、桐は集中を解いた。解除するまでもなく、限界に達した防御力場もほどけて消える。

「むぐぐ……ぷはあ！す、須臣さん、早く追いかけないと！」

我に返った初春を押しとどめて、桐は自分のノートを押し付けた。

「それは僕がやるから。初春さんには初春さんが出来ることがあるよね？この部屋を調べて欲しいんだ」

はっとした表情になる初春に、桐はうなずいて見せた。

「さっきあの人が自分で認めたんだけ。部屋に入れたのは迂闊だったって。そしてここには彼女の研究結果がこうやって無造作に置かれている。もちろん、コンピュータの方にセキュリティがないとは思わないけど、そういうのは得意だよな？」

手に持ったままだった携帯を、ジャケットの左肩前面についているポケットに押し込んで、桐は少女の瞳を見つめる。

初春の目に決意が宿るのを見届けて、桐は言葉を続けた。

「治療手段がこの場で特定できなくてもいい。データを全部抜いたら、第七学区の病院にいるカエル面の医師に送ってくれ。それで片がつくはずだから」

言い切ると、桐は部屋から飛び出したのだった。

ここでは無理なのね…。  
それでも、試金石にはなるのかしら。

E  
X  
T

T  
O  
N

桐が廊下にでたとところで、少し離れたエレベーターホールの付近から、続けざまに爆音が響いた。

「やっぱりか…イヤな予感はしてたけど、なんともごていねいな話だね…」

一階へと降りていくエレベーターと、破壊された非常階段に駆け寄りながら桐はつぶやき、足を止めずに非常階段側から階下へと身を躍らせた。

覚悟を決めて声を響かせる。

「我が指先に琥珀の盾！」

使うのは、大気を凝縮させるチカラ。

普段は盾として使う、凝り固まった大気をクッションにして落下速度を弱めながら、階段の無事な部分へと、爆弾で破壊された部分を飛び降りて着地する。

(つつつ…丸ごと一階分はやっぱりキツイ…)

着地の衝撃に顔をゆがめながら、左肩のポケットに入れたままの携帯を操作した。

高指向性マイクと、同じく高指向性スピーカーを組み合わせたハンズフリーモードを起動させ、先ほどから繰り返し着信の入っていた番号へとコールする。



すぐにつながる電話。

「須臣さん!!ご無事ですの?!初春にも先ほどから電話がつながらなくて…」

(この高性能…あらためて、技術が30年進んでるってのはダメじゃないね…)

場違いに、そのクリアな音に感心しながら、桐は口を開いた。

「大丈夫、僕らは二人とも無事だよ」

階段を駆け下りながら、桐は状況を伝えて、情報を交換する。

「…それで、今初春さんにはデータの吸出しをやってもらってるんだ。ハッキング関係でバックアップに使える人がいたらまわしてあげて欲しい。それと、その脳波のデータは役に立ちそうだから…」

「ええ、今すぐに初春に送りますわ。須臣さんは?」

「木山を追うよ。通話はこのままにしておくから、GPSか何かで位置を追って『警備員』にでも先回りしてもらえば…って、あれか!」

エントランスに飛び出したところで、マンションの駐車場からゆうゆうと出て行くスポーツカーを見つけ、桐は道路に出る。

都合よく目の前に走ってきてくれたタクシーを強引に止めて乗り込むと、言葉をつきつけた。

「『風紀委員』です、事件解決に協力を。この車を徴発します。今

すぐに前の車を追ってください！」

『風紀委員』に捜査権、徴発権がないことは先刻承知していた。それでも、『学園都市』内での『風紀委員』の名前は強い。

一時代前の刑事モノかと心の何処かで自虐しながらも、桐は強い言葉でタクシーの運転手に要請する。

その勢いに押されて車を発進させる運転手。

そうして、誰かと電話で話を続ける青年をバックミラーでこっそりと見ながら、タクシーの運転手は思う。

……あの兄ちゃん……こないだ乗せた奴、だよな……？あん時とは別人みたいだが……。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase .

15分後。

正面に『警備員』（アンチスキル）の検問と、それに差し止められた木山のスポーツカーを認めて、桐はタクシーの運転手に声をかけた。

「ここまででいいです、路肩に寄せてください。料金はこれで」

お財布ケータイを読取装置に押し付けて決済してもらうと、桐は道路へと降り立った。

木山と検問まで、100mほどの距離。

「なにか文句を言われたら『風紀委員』まで。それと、騒ぎが収まるまでここから動かないのをおすすめます」

出来るだけ事務的につぶやいて、桐は電話に意識を集中させる。

「『警備員』（アンチスキル）の手配は間に合ったんだね。今検問の前にいるよ。さすが展開が早いね？」

少しだけ安心しながら、桐は言葉を送り込んだ。

（無事につて…言うのはおかしいか。それでも何事もなく捕まってくれるなら、それにこしたこともないし…）

依然として、許せない、という気持ちはある。

佐天のような犠牲者を早く回復させたい、という想いも色あせてはいない。

それでも桐はなぜか、木山が純粋な悪人だとは感じていなかった。

（あの時初春さんにした気遣いは、嘘には見えなかったんだよね…。それにあの爆弾の威力も、今思えばずいぶんと抑え目だったし…。いや、不良がたまにいい事したからいい人に見えちゃってるだけ、みたいなものなのかもしれないけど…）

解決を半ば確信して、事後に思いをはせる桐。

そんな桐の思考を、切羽詰った声が引き裂いた。

「ちがいますわ！その検問はわたくしたちが要請したものと別口ですのー！！」

それが意味することに思い当たって、桐は『警備員』（アンチスキル）の検問と、拘束されようとしている木山を見据えた。

木山の手に、風の奔流が球状に巻き起こるのが遠目に見える。

「その方々は、対能力者装備を持ち出していないません！下手をしますと木山が『能力者』だということすら知らないかもしれないませんわー！！」

「な……！つたくー！！」

直前に思い当たったことをそのままつきつけられて、桐は歯噛みをしながら駆け出した。

電話越しに、青年が走り出した気配を感じたのだろう。

切羽詰った黒子の声が響く。

「須臣さん、何をなされようとしてるんですの？！」

「わかるだろ？！木山を抑えるのを手伝う！なんか嫌な予感が……」

その時、アスファルトを蹴りつける桐の正面、50mほど先で、木の『能力』が荒れ狂った。

『念動力』（サイコキネシス）

『火炎放射』（ファイアスロアー）

『水流操作』（ハイドロオペレート）

『風力使い』（エアロシューター）

自動車が吹き飛び、炎が荒れ狂い、水流が叩いて、風が薙ぎ払う。

（何だよこの規格外は…）

なすすべもなく蹂躪されていく『警備員』（アンチスキル）たちを視界に納めながら、桐は信じられない思いで、それでも構成を編み上げていた。

「どうしましたの?! お待ちください、すぐにわたくしたちも…!」

「いや、来ないほうがいいかもね…というか来ちゃダメだよ」

それだけをささやくと、集中するために桐は肩口に手をやって通話を終わらせた。

同時に、編みあがった構成に、水をこぼすようにチカラをしみこませていく。

対人としてはぎりぎりの強さで、桐は切り札にしていたチカラを撃った。

「我導くは死呼ぶ掠鳥！」

桐が指差した方向に向かって、周囲の空気がやかましく振動し、木山に押し寄せる。

一種の超音波による、破壊力を伴った振動。

それを木山は、一瞥しただけで水と風で出来た防壁を作り出して防いだ。

お返しのつもりか、オマケのようにとんできた火柱を、青年はとっさに横に転がって避ける。

(今ので終わらせるつもりだったのに反応が早い…！なんてインチキだよ?!)

自分の事を棚に上げて思いながら、桐は勢いを殺さないまま立ち上がった。

「ふむ、追ってきたのかね。あまり生徒にケガはさせたくないのだがな？」

(…会話する気が、ある？それなら…)

脳裏に防御のための構成を編みながら、桐は大げさに首をかしげて

みせた。

ブルブルと肩口で着信を知らせる携帯を黙らせながら、何食わぬ顔で口を開く。

「じゃあ僕にケガさせないで、とっとと矛を収めてもらえないかな？ すみやかに被害者の回復さえしてくれば、僕も苦勞してあんたを追っかける必要なくなるんだし……って、我が指先に琥珀の盾！」

叩きつけられた水流を斜めに張った空気の壁で受け流しながら、桐はまたもアスファルトを転がった。

（なのに攻撃はして来るんだね?!）

条件反射でいくつか浮かぶ、文字通り、致命的な威力を秘めた構成を振り捨てて、再度、防御のための構成を選ぶ。

（…殺すのは論外だね…。気絶させることが出来ればベストだけど、ここは時間を稼ぐのもいい……）

「それは出来ない相談だな。私は私の道を阻む者に容赦をする気はない。今まさに向かいあっている君も感じているだろう？ 複数の能力を操り、一萬の脳を統べる私にはかなわないと。『風紀委員』の手伝い…優秀な『風力使い』（エアロシューター）くん?!」

（黒子が言っていた部隊。対能力者装備の『警備員』が来るまで持ちこたえられれば…!）

言葉の終わりと共に飛んできた自動車に、桐は構成を切り替える。両手を天空に差し伸べて、桐は叫んだ。

「我は呼ぶ、破裂の姉妹!」

空気がひしゃげる感觸。

桐の眼前に生まれた手加減無しの破裂の集合 衝撃波の束が、自動車を押しそらし、威力を弱めながらも木山に襲い掛かった。

しかしそれも、木山を軸に巻き起こった竜巻のような壁に阻まれて消える。

「ふむ、やはり驚嘆すべき汎用性だな。ところで、発動時に叫ぶその言葉は何なんだい？君の能力に関係がありそうだが」

(さすが研究者さんだね、要らないところに気が回る…)

「答える義理なんかない、といたい所だけど、こんな状態で隠しても仕方ないね。…その通りだよ。具体的な意味はないけど、集中するのに重宝してるんだ…」

本当のことは言わない。それでも嘘ではない。

半分だけの事実を、長めの言葉を選んでゆつくりと話す桐。

消耗しはじめていることを自覚しながら、滴る汗をぐいっとぬぐう。

( ……!?!? )

そこで、ナニカが聞こえたような気がして、青年は虚空を振り仰いだ。

その視界の外に、

「『風紀委員』(ジャッジメント)ですのっ！木山春生！おとなしくなさいませ!」



少女が二人、テレポートアウトする。

「いくわよっ！」

遅れて電撃が、木山に向かって走った。

「…む」

薄い膜のようなものでそれを弾く木山。

自分の能力の結果を見て、美琴は感心したように目を細める。

「周囲に避雷針のような物を作り出してる…？驚いたわ、本当に能力を使えるのね」

同時に現場の惨状に、美琴と黒子は目を見張っていた。

(『警備員』が…全滅?)

(予想以上ですわね…こんなものを相手にしてらしたなんて…)

「何を呆けていらっしやいますの？須臣さん、早くこちらへ…」

立ち尽くしているように見える桐に、黒子が声をかけながら近寄っていく。

我に返り、油断なく下がる桐に少女が並んだところで、桐はうめいた。

「来るなって言ったのに。というかなんでもう来てるんだよ。通報済みの『警備員』(アンチスキル)より早いつて…」

「あら、ついこの間のことなのに、もうお忘れになりましたの？本気になったわたくしは、『速い』んですのよ」

黒子が軽口を叩いたところで、木山とレベル5の戦闘が始まる。ヴン、と木山の足元に光の円が描かれた直後、広範囲にわたってフリーウェイが陥落した。

空中に木山を含めた四人が投げ出される。

「黒子…！それにアンタも…！！」

危なげなく能力を使って壁面に足場を取りかけながら、美琴は黒子と桐に届くはずもない手を差し伸べた。

「僕らは気にしなくていい、それより前を！次が来る…！」

叫び返して桐は強引に黒子を抱きとめると、

「な、なにするんですのよっ…！」

細心の注意を払って構成を編み上げた。

（失敗したら内臓破裂は固いか…それでもここからなら地面まで声は届く！）

リスクを胸に刻んで、桐は構成を展開、叫びと共にそれにチカラを流しこんだ。

「我は跳ぶ天の銀嶺！」

ふたりにかかる重力が一時、中和され、落下速度が軽減される。

効果が解けると同時に、地面に降り立つふたり。

「…今のも…風ですの…？」

落下のシヨックか、どこか呆然とつぶやく黒子に、青年はあいまいに微笑んでみせた。

「…他にないならそうじゃないかな？そんなことより、ひとつ頼みたいことがあるんだ。僕を、木山の死角まで飛ばして欲しい」

飛び交う木山と美琴の様々な攻撃を少し離れたところで見ながら、桐は言葉を続ける。

「僕の時もそうだったんだけど、あの先生の対応能力はなんていうか…ずるいところまでいつちゃってるんだ。まともな一対一じゃ膠着状態にしかない。あんなの相手に消耗戦なんかやってられないし、やらせるべきじゃないと思う。僕達に出来ることがあるならしないと…」

幾本もの砂鉄の剣を、木山が地面を隆起させて防ぎきるのを目にして、桐はあらためて両者の規格外っぷりを実感する。

(…僕の時にあんなの仕掛けられてたら、終わってたよような気がするな……)

「あなたが囷になるって言うんですの？」

「囷か本命かは、終わった時に判る感じになるかな。比較的派手に仕掛けるけど、こちらとしても意識は狩る気でいくつもりだし。仕掛けた時に、御坂さんから手が放せなければ僕が終わらせるし、逆

に僕に対応してくるのなら、御坂さんがその隙を見逃すなんて思えないしね。君がどれだけ上手く、僕を投げ込んでくれるかが鍵になるけど。…頼めるかな？」

(50m以内ならミリ単位の精度だっけ？ちょうどいい状況だし、頼まない手はないよね)

原作知識から黒子なら出来ると確信して桐は少女に依頼する。その言葉を受けた黒子は、

(わたくしに、命を預ける、と…?)

青年の言葉に、頼られている実感を得て、震えるような感覚に包まれた。

『風紀委員』(ジャッジメント)として、『戦友』に向ける親愛の情を感じながら、少女は自信を持ってうなずく。そして、少しだけいたずらげに黒子は言った。

「お任せくださいな。…ああ、わたくしも一緒に飛びますけれど、文句はございませんわよね？」

「え、でもそれじゃ君まで…」

こちらの予想通りに顔を歪めた青年に、こらえきれず笑みを浮かべながらも、黒子は有無を言わずに桐の腕を掴んだ。

その手を、青年の胸へと回す。

「わたくしが一緒にいたほうが微調整が効くんですよ。任された以上、手落ちにする気はございませんの。準備はよろしいのですの？ タイミングは私に任せていただきますわよ」

桐はなにか言いたげな表情を見せながらも、うなずく。

「…わかった、君に任せるよ」

その言葉を受けて、黒子は桐の肩越しにじっと、木山と美琴の戦いを見つめる。

（木山の死角というべきはあちらと、こちら、そしてあのあたりですわね…）

桐は簡単に頼んだのだが、実のところ、それはひどく難易度の高い『空間移動』（テレポート）だった。

戦闘の余波で、弾丸のような勢いの瓦礫が常に舞っている戦場。もし、それらのひとつが向かう先に跳んでしまえば、テレポートアウトした瞬間に大ダメージを受けることになってしまう。

余人には知覚することすら出来ない、1次元の空間把握処理を並列でこなしながら、黒子は慎重にタイミングを計った。そして、

（今ですわ！）

会心のタイミングで、空間を渡る。

認識は過たず、木山の死角へと黒子たちを運んだ。しかし、それに黒子が快哉を叫ぶことはなかった。

「…っ！お姉様が！！」

木山が目立たないよう、空き缶を美琴の視界の外へ投げるところを目撃したからだ。

木山に向かっていた桐の右手が、その方向を変える。

「我は呼ぶ破裂の姉妹！」

生み出された衝撃波の束が、空き缶をどこか遠くへと吹き飛ばす。その時には。

桐の左手の指先が、木山の方を向いていた。

（もともと連続で撃ち込むつもりだったんだ…これで決めれば！）

あさつての方向へ吹き飛ばされた爆弾が弾けたと同時に、桐の構成も完成する。

威力を抑えながらも、最速の発動を自分に課して、桐は構成にチカラを通した。

「我導くは死呼ぶ掠鳥！！」

不可聴の音が響き、人間なら触れただけで昏倒するような破壊的な振動が叩き込まれる。

速度は、思ったとおりだった。

木山が振り返るのが、それより早かったというだけで。

（自分でも、驚くくらいの発動速度だったんだけどな…）

木山自身を護る様に隆起した地面が超音波に触れて、ぼろぼろと崩れ落ちていくのを興味深そうに見ながら、女科学者は淡々と語る。

「全く、その汎用性には恐れ入る。こんな時でなければ、興味深いことだが」

「アレだけやって無理だなんて、恐れ入ってるのは僕の方だよ。まあ、同時にほっとしてるけどさ?」

二人がかりの奇襲を破られながら、あくまで気楽に語る桐。

それに木山が訝しげな表情を見せる直前。

彼女の後ろからにゅっと突き出た腕が、ぎゅっと木山を抱きしめる。

「つかまーえたー」

「な、しまっ…」

「零距离からの電撃…いくわよ!」

美琴の言葉と共に、落雷のようにほとばしる電撃が、あたりをまぶしく照らしたのだった。

……届かないし、ブレないのね……。  
それでも……。

EXT

TON

後遺症を残さない範囲で、確実に行動できなくなる電圧、電流を調整して、抱きしめた身体に流し込む。

美琴にとっては、造作もないことだった。

「一応手加減はしといたけど、これでもう戦闘不能のはず」

事実を口に出して確認しながら、美琴は崩れ行く木山を眺める。

（センサー）

「!?!」

（木山センサー）

（何？頭の中に直接…）

いぶかしむ美琴の脳裏に、鮮明にヴィジョンが浮かび上がった。

私が教師に？

彼らは、『置き去り』（チャイルドエラー）。今回の実験の被験者であり、君が担当する生徒だ。



厄介なことになった。だが、とにかくこの実験を成功させるまでの辛抱だ。

次々に浮かんでいく認識に、美琴は心中でつぶやいた。

（これは木山春生の記憶？私と木山の間には、電気を介した回線がつながっている？）

子供は嫌いだ、騒がしいし、デリカシーがないし、失礼だし、悪戯するし、論理的じゃないし、

平穏な学園生活が浮かんでは消えていく。

すぐに、懐いてくるし。

些細な厄介ごと。

雨の日に転んで汚れてしまった生徒に、木山は風呂を貸す。

センサー。私でもがんばったら、大能力者（レベル4）とか超能力者（レベル5）になれるかなあ？

何とも言えないな。高レベル能力者に憧れがあるのか？

んー。それもあるけど…この街の役に立てるようになりたいな  
って。

場面は変わっていく。

移り変わる季節。何気ないそれぞれ。

そして、唐突にあるひとつの場面へと切り替わった。

物々しい実験場。

A I M 拡散力場制御実験。長い時間をかけて準備してきた。何も  
問題はない。

センサーの事、信じてるもん。怖くないよ。

警報が鳴り響く。

研究員たちのやかましい、切羽詰った声が飛び交う。

その中心で。

蒼白になって、震える木山。

この実験については、所内に緘口令を敷く。木山君、よくやっ  
てくれた。科学の発展に、犠牲はつきものだ。

粘つくような声。

ほんと、皺だらけの手で肩を叩かれる感触を、美琴も感じた。  
嫌悪、後悔、自虐、絶望。

とても一言で形容しようのない感情が溢れ

君には今後も期待してるからね？

そうして、連続したヴィジョンは途切れた。

とあるナニカヴォイス・ソーサーの音声魔術士

19

Phase .

倒れこむ木山を、御坂は呆然と見送る。

「い…今のは…」

ずりずりと逃れ、息を荒らして咳き込みながらも、木山はじろりと美琴をにらみつけた。

「観られた…のか…!？」

「観られたって、何がですの…?」

黒子の言葉に応えて、美琴が口を開く。

「今、一瞬、コイツの過去が見えたのよ…。その中でコイツは研究員なのに学校の先生をやらされて、何かの実験を進めてた…。でも、あんな…何であんなこと…」

能力の発動に失敗しながら、木山は笑う。

「あの実験の正体は、『暴走能力の法則解析用誘爆実験』…。能力者のAIM拡散力場を刺戟して、暴走の条件を探るものだったんだ」  
ようやく起き上がった木山の瞳に、涙がにじむ。

「…あの子達を使い捨てのモルモットにしてね」

『学園都市』の表の部分で生き、それしか知らない二人にとっては、にわかには信じられないことだったのだろう。  
何処か信じられない様子でやり取りが続く。  
その会話に参加することなく、桐は状況を見守っていた。

(『原作』の予備知識があるから納得できちゃうけど…彼女も被害者だったってオチか…。はあ、こういうのを聞くのはキツイね…)

美琴の正しく、幼い言葉に、木山が激昂する。

「君に何がわかるっ！あんな悲劇、二度と繰り返させはしない。そのためなら私は何だってする。この街の全てを敵に回しても止まるわけにはいかないんだっ！！！」

(無力化できてない?!)

木山の激昂にあわせて、桐が防御のための構成を編みかけた時。木山の表情に、致命的なヒビが入った。

「あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ  
あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ  
あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ  
あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

耳を塞ぎたくなるような絶叫が響く。

そして、木山以外のその場にいた三人は『それ』が生まれるのを見た。

木山の頭部から、傷を付けることなくずりりと産まれた、『それ』。美琴から、ため息ともつかない音が漏れる。

「…は？」

(胎児…？こんな能力…聞いた事ないわよ…メタモルフォーゼ肉体変化？いやでもこれは)

答を出す前に、胎児のようなものの目が開き、光でできた触手のようなものが辺りを薙ぎ払った！

「我が指先に琥珀の盾！！」

叫んで前に出ながら、桐は戦慄と共に感じていた。

(ダメだ、これじゃ防ぎきれない！！)

発動した構成を維持するのに集中しながら、傍らの黒子を掴んで飛びすぎる。

一瞬だけ、触手を阻んだ空気の壁は、それ以上維持できずに引き裂かれて消えた。

「……くうっ」

壊れるものを無理やりに維持しようとした代償に、少なくとも消耗を感じながら、桐は黒子と共に後ろへと下がる。

「い、いったい何なんですの?!」

混乱した様子でつぶやく黒子。自前の防壁から顔を出した美琴も叫ぶ。

「~~~~~ッ。何なのよアレッ!?!」

( 僕が知るかよ! )

心中でうめきながら、桐はさらに少女を引っ張って後ろへと下がっ

た。

自分も慌てていることを自覚しながら、黒子に尋ねる。

「白井さん、『空間移動』（テレポート）は使える？」

「…え？あ…？ちょ、ちょっとお待ちいただきたいのですが、計算式が…」

（そりやこの状況で平常心は保ってられないよね…。ここは歩きで逃げるしかないか）

「うん、わかったよ、無理しないで。問題なく使えるようになったら教えてくれ、とにかく、今は下がろう」

そう言う青年の視界に、美琴が放った電撃に貫かれながらも、すぐに元に戻って反撃を加える胎児のようなものが映った。

（回復って言うかもう復元だねアレ…HPカウントストップしてるんじゃないかな…）

「~~~~~ツ！！」

胎児の反撃から辛くも逃げ切り、桐たちのそばまで来た美琴があることに気付いて足を止める。

「…追ってこない？闇雲に暴れてるだけなの？…あ」

つばやきながら足を進めようとしたところで、何かが足に触れるのを感じた。

「御坂さんも、とりあえず下がろつ…ってどうしたのかな？」

かけられた声に振り返ることなく、足元に倒れている女性の様子を見ながら、美琴は答を返した。

「木山よ。ここで放っておいてアレに踏み潰されるのは寝覚めが悪くなりそうだし、頼んでもいい？」

「頼んでも…って、君も下がった方が…」

「まだ付近に『警備員』がいるわ。そっちを放っておくほうがよっぽど寝覚めが悪いじゃない。黒子も任せたわよ！」

それだけ言い捨てて、美琴は遠ざかった『胎児』へと向かって駆け出していた。

(なんていうか…らしい話だけどさ)

置いていかれる形になった黒子と桐は、協力して木山を現場から離れたフリーウェイの下まで運んだ。

(ここまでこれば、安全だよな…)

彼女をその柱にもたれさせるように座らせたところで、自分もずらずると座り込みながら、桐は口を開く。

「そういえば、こちらが頼んだ対能力者装備の部隊はいつごろ着きそうなのかな？」

「…ああ、そのことですの…、正直、難しいでしょうね……」



「…難しいって…?」

木山になぎ払われながらも、しぶとく攻撃力を残した『警備員』(アンチスキル)がいたのだろう。

『胎児』の方から聞こえてきた散発的な銃撃音に耳を傾けながら、黒子は何処か疲れたように言葉を続ける。

「先の木山女史を止める為に敷かれた検問は、この管区ですぐに動ける者をすべて集めた…いわゆる、『総動員』でした。いくら武器庫に武器があっても、それを持ち出さなかった人間が叩き潰された今、応援はすいぶん遅れると思いますわ…」

「うわぁ…」

頭を抱える桐に応えるように、閃光が遠く、戦闘現場でひらめいた。その中から何事もなかったように復元する、『胎児』も遠目に見えしてしまう。

その現場で。

「こういうパターンって大抵…やれてな…え？」

『胎児』への攻撃に参加していた女性の『警備員』は吹き飛ばされた同僚たちを知覚できずに、ただ仲間が消えた、という事実を目をぱちくりとさせた。

そしてズズツ、と近づいてくる肥大化した『胎児』に血相を変えて手持ちの銃を撃ち込む。

「う、こないでえ！…何だつてのよもー！…！」

効果が見えないまま、弾切れになったところで、女性の気持ちが悪れた。

「ア、アハハハ。そつ…そつか立体映像よね。ぜんぶ幻……」

現実逃避して無防備なまま、攻撃を受ける瞬間。

跳ね飛んできた側溝の蓋が、彼女を吹き飛ばして助けた。

「がつ?!つた…」

(間に合った…!)

助けた女性に、美琴は安堵しながらも声をかける。

「何ボヤつとしてんのよ。死んでも知らないわよ」

「あ…あなた誰?民間人がこんな所で何してるの!？」

「まったく黒子といい人を民間人間人って…この状況じゃアンタよりは役立つわよ…つと!…」

「ひゃわ!？」

言葉の途中にむんずと『警備員』の女性の襟首を掴むと、追撃を避けて美琴は上へと跳んだ。

先ほどと同じように能力を使い、壁面に足場を取ったところで、美琴は『警備員』に言う。

「とにかく攻撃が効かないんじゃないわ。いったん退いて態勢を……」

「そもいかないのよ、あの建物なにかわかる？…原子力実験炉なの」

「…マジ？」

その頃、フリーウェイの下、桐たちの傍らで。

「う…ん…私は？」

「あら、起きられましたの？」

同じような姿勢でうずくまっていた青年の肩越しに木山は、暴れまわる『胎児』を見つける。

「クッ、ハハッアハハハハ！…すごいな。まさかあんなバケモノだったとは……。学会で発表すれば表彰ものだ」

「何を呑気なことを…！」

激昂する黒子に取り合うことなく、独り言のように木山は続けた。

「もはやネットワークは私の手を離れ、あの子達を取り戻す事も、恢復させる事もかなわなくなった………か」

腰に差ししていたはずの拳銃を意識し、すでにそれを落としてしまったことに思い当たって内心で苦笑する。

（苦しいのは好みではないのだがな…）

口をあけて舌を出し、躊躇いなく噛み切ろうとしたところで、

「ガッ…うぁ…??」

何かが口の中に突っ込まれて、木山はそれを思い切り噛むことになった。

ガリッ、という感触と共に口内に、鉄のような血の味が広がる。

「……………ふうう…。あー。本気で噛むんだもんなあ…というか、何噛んだか確かめるようにあらためて噛みなおすのやめてもらえるかな？痛いんだけど…」

（危なかった、今、軽く意識トんでた…。消耗は自覚してたんだけど…って、それにしても痛い…）

右手の中指と人指し指。

木山の口に突っ込んだ二本の指に唾液と舌の熱い感触、そしてそれ以上に熱い怪我の痛みを感じながら、桐は木山の目を覗き込んだ。

「落ち着いて、話が出来たらうなずいてもらえるかな？」

そうして二人は、木山の話聞く。

「虚数学区？あれって都市伝説ではありませんの？」

舌の上に残る血の味に辟易しながら、木山は語った。

「巷に流れる噂と実態は全く違ったわけだがね。虚数学区とは、AIM拡散力場の集合体だったんだ。アレもおそらく原理は同じ…。AIM拡散力場でできた『幻想猛獣』とでも呼んでおこうか」

木山の説明を聞き役に徹しながら、桐は考える。

（つまりあれは、『ドラゴン』…じゃ根本からずれてるか。原作の風斬氷華…彼女と比べるのもいろんな意味で大概な気はするけど、存在の性質、という点においては同質のものかな。ようは学園都市…『科学の天使』のできそこない…そんなのを止められる手段があるとしたら…）

「そんなモノに自我があるとは考えにくいが、ネットワークの核であった私の感情に影響されて暴走しているのかもしれない」

「ちょっと待っていただきたいです。それでは虚数学区というのは…」

混乱した様子の黒子を押しとどめて、桐は言葉をかぶせた。

「それを突き詰めるのは今じゃないよ。むしろ、『それ』は理解するべき事じゃない気がする。だから具体的な質問はひとつだけ。そもそも、アレの発生の原因になった『幻想御手』（レベルアップ）…。どうやったら解けるのかな？」

迷いなく投げられた質問に、木山は目を見張った。同時に自嘲に頬をゆがめる。

「君は本当に優秀だな……。だが、今の私が言うことを、君は信用できるのかい？たとえ私が何を言っても……」

言いかけたところで、木山は自分を正面から見つめる青年に気付いた。

戸惑う木山。

「信用しようと思ってるから、質問したんだよ。わかってもらえると嬉しいんだけど」

沈黙が流れる。

そうして、

「……本当に、根拠もなく人を信用する人間が多くて困る」

根負けしてつぶやきながら、木山は自らの身をさぐる。

取り出したデータチップがぶすぶすと煙をあげているのを見て、木山は舌打ちした。

「やはり、電撃で使い物にならなくなっているか……これでは……」

「あなたの部屋に、それに入っていたのと同じデータがあるんだよね？」

「ああ、そうだが、セキュリティが……」

みなまで言わずに、桐は肩口のポケットに入れたままの携帯を操作する。

発信履歴を呼び出して、すぐにコール。

「須臣さん?! そちらは?」

間髪いれずに電話に出てくれた初春に笑みを浮かべながら、桐は質問を送り込んだ。

「とりあえず無事だよ。そちらの進捗状況はどうかかな?」

「データの吸出しは終わっただんですけど、解除プログラムの特定がまだ...! 言われたとおり、第七学区のお医者さんにも送っただんですけど、同じフォルダにバージョン違いが多くなって...」

予想以上の仕事振りに、桐は感心しながらつぶやく。

「最高だよ。ちょっと待っててもらえるかな?... 木山さん?」

「...あのセキュリティを抜けるとは...。その解除プログラムフォルダはダメーだ。完成品の素材ぐらいしか入っていない。その下の階層に...」

受けた説明をそのまま伝え、引き上げた解除プログラムを学園都市全域に放送するよう頼んでから通話を切ると、青年は黒子に振り返った。

「初春さんひとりで、学園都市全体に音楽を流すのは難しいかもしれない。もう落ち着けたよね? 白井さんに彼女の手伝いを頼みたいんだけど、かまわないかな?」

「それはもちろん...でも、あなたはどうなさいますの?」

言われて、桐は自分の身体を意識する。

(少しは休めた気がするし、大丈夫かな)

軽く構成を編んで、その感触を確かめた後、

「あんまりやりたくないんだけど…あんなのを御坂さん一人に任せたままつていいことじゃないね。アレをたたいても意味はなさそうだし、『警備員』の救助を手伝いつつ、下がるよう伝えに行くよ」

曖昧な笑みと共に言い置いて、青年は走り出した。

そして、場面は変わり

吹き上がる粉塵に咳き込みながら、美琴は考えていた。

(コイツ…自分で勝手に苦しんでるような…それにしてもマツズイわね…何だつてまた原子力施設に向かつてくんよ。怪獣映画かつーの)

『胎児』『幻想猛獣』が、『水流操作』(ハイドロオペレート)を使う。

飛来してくる水弾を後ろへ飛んでかわしたが、

「やばっ速い!」

着地したところに触手が伸びてきて、彼女の足を絡め取った。迫ってくる触手の先端に向け、電撃の槍をぶつける美琴。だが、



(ミスった…すぐ復元するんじゃないじゃない…！)

その通りに復元しようとしたところに

「我は撫でる獅子の鬣っ！！」

後方から巻き起こった風の刃が、迫る触手と掴んでいる触手の両方を叩き斬った。

(本来の特性で編むとこんな威力なんだ…人に向けなくてよかったね…)

場違いな感想を浮かべながら走りこんだ桐は再度構成を展開する。倒れたままの美琴の前に飛び出して、『幻想猛獣』に向かってチカラを放った。

「我は呼ぶ、破裂の姉妹！」

空気がひしゃげる。

桐の前方に発生した衝撃波の束がまんべんなく、『幻想猛獣』を叩いた。

その隙に立ち上がる美琴に、桐が伝える。

「あと少し時間を稼げばこの事態は収束できる。だから下がろう」

「ダメなのよ、コイツはあの原子力施設に向かっているの！ここで足を止めないと…」

「…！？…ああ、そうなんだ…：…はあ、だから粘ってたんだね…：…わかった。足止めを手伝うよ」

砂鉄の剣が幾本も美琴の足元から立ち上がる。  
それにタイミングを合わせて、桐も新たな構成を編んだ。

「いつけえ〜!!」

「 我は裂く、大空の壁!」

無数に出現する真空波と、そこに流入することで新たな刃となる大  
気。

それは砂鉄の剣とあいまって、対象をずたずたに切り裂いた。  
そのダメージすらも迅速に復元していく『幻想猛獣』。

(それでも、復元しきるまでは余裕があるわね…)

背中合わせになるカタチで、美琴は桐にたずねる。

「…アンタ、レベル3って真っ赤な嘘でしょ?」

(まあ、ここまでやればそれは突っ込んでくるか…)

唐突な質問に、それでも納得しながら、桐はいつもの調子で口を開  
いた。

「いやほら、僕ってテスト苦手だからさ…」

「はあ?何それ。もしかして、チカラ隠して僕ってカツコイって  
タイプ?」

内心、地味に落ちこみながら、その質問に桐はうめく。

「あー。まあ、いろいろ事情があるんだよ……」

（ 、 、 ……！！ ）

そこでまたナニカが聞こえた気がして、青年は空を振り仰いだ。

（え、またって…？僕はこれを聞いたこと、あつたっけ…）

唐突に溢れる思考に頭が塗り潰される。

衝撃を感じて、桐は我に返った。

「な…にやってんのよ！！コイツの前でポケっとするって死にたいわけ！？」

押し倒された格好で、背中越しに蠢く触手を視界に収めて、桐は空いている左手を掲げた。

条件反射的に編まれた構成を

（ 、 、 ……！！ ）

（思考に、ノイズが…！くうっ！！）

何故か歪んでしまった構成を振り捨てて、無理やりに新たな構成を展開する。

「我導くは死呼ぶ掠鳥！！」

超音波による、共鳴破壊。

手加減無しの破壊振動が、近づく触手を砂のように壊し落としてい

く。  
稼いだ時間に美琴ごと起き上がりながら、桐はひとつのことに気がついていた。

（再生が、始まらない…？…そうか、ワクチンソフトが頒布されたんだ…！）

「い、いつまで搦んでんのよ！」

「っと、ごめん。今離すよ」

立ち上がり、美琴は状況を確認した。

「これは…効いてる…？」

「ああ、初春さんたちが大本の原因の、『幻想御手』（レベルアップ）を解除したんだと思う。解除と同時にコイツが消えなかったのは残念だけど、これでさっきまでのようにはいかないはず…」

「…そういうことね。それなら…！！」

「…そうだね、行こうか！」

初手は、桐のチカラだった。

「我は裂く、大空の壁！！！！」

手加減皆無の全力行使。

『幻想猛獣』の全方位を覆うように無数のカマイタチが発生し、遅れて流れ込む空気と共に対象をくまなく、ずたずたに切り裂いた。

それだけで、すでに完遂しているように見える破壊に、

「あああつ！！！」

美琴が続く。

雷撃の槍が貫き、砂鉄の剣が切り刻んだ。

伸びてきた触手を逆に掴んで、

「これっ…でも！食らいなさい！！！」

直接電撃を流し込む。

そこにタイミングを合わせて、桐の追撃が開放された。

「我は呼ぶ、破裂の姉妹！！！」

美琴から流れ込む電撃を空中に逃がさないかのように、衝撃波の束が『幻想猛獣』の全面を覆い、まんべんなく破壊的な衝撃を叩き込んでいく。

トドメの上にトドメを重ねるようなコンビネーション。

その、流れるような連撃に『幻想猛獣』の巨体は大地に沈んだ。

（現状、出来るだけの破壊力はねじ込んだけど…。これでもまだ、浅いかな…？）

「何とかギリギリで止めたって事になんのかしらね」

「気を抜くな！まだ終わってないっ！！！」

次撃への構成を編む桐と、気を抜きかける美琴に、木山の声が響く。驚く美琴を意に介さず、木山は続けた。

「アレはA I M拡散力場の塊だ。体表にいくらダメージを与えても本質には影響しない。力場を自律させている『核』を破壊しなければ…」

話を聞く美琴。

何処か憐れむように『幻想猛獣』をみやりながら、彼女は言葉を吐き出した。

「…わかったわ。アンタ達は退がって。巻き込まれるわよ」

「構わない。アレを生み出した責任がある。私はどうなっても…」

「アンタはよくても教え子たちはどうすんのよ。仮に回復してもその時にアンタがいなきゃ、あの子達が本当に救われた事にはならないわ。…あんなやり方をしないなら私も協力する。それとももう諦めるつもり？」

真摯な美琴の言葉に、息を呑む木山。

それを何処か居心地悪く聞きながら、桐は『幻想猛獣』に注意を払っていた。

浅くない消耗と共に、罪悪感のようなものを感じながら一人こちる。

(あー、僕としてはその子達、あの『冥土返し』(ヘヴンズキャンセラー)さんに押し付ける気満々なんだけどな…。それをこの場で言うのはなんていうか、空気読めてない感じがするし…)

そこで、桐は美琴に向かって伸ばされる触手に気付いた。

「…っ！我が指先に」

「あとね」

防御のためのチカラを放ちかけたところに、美琴は見もせず背後のそれを電撃で撃ち落とす。

「アイツに巻き込まれるんじゃないで、私が巻き込んだじゃうって言うてんのよ」

そのまま、『幻想猛獣』に向けて電撃の槍を撃ちはなった。だが、それは薄い膜のようなものに遮られる。

(私が使用したものと同じ誘電力場…やはり彼女では相手に)

それを意に介した風もなく、美琴はチカラを練り上げた。

「でも、だったら…コレならどうよ!!」

言葉と共に美琴は、大規模な雷撃を放った。

純白の奔流が、桐と木山の視界を覆う。

「なっっ」

(電撃は直撃していない!なのに、擦り込まれた電気抵抗の熱で体表が消し飛んでいく…)

(…コレは明らかに任せちゃって大丈夫な感じだね…)

木山をかばうように立ち位置を取って、桐はその光景を眺めた。体表が消し飛び、コアが露出する。

『幻想猛獣』の最後の抵抗だろうか、束ねた触手と叩きつけられた氷塊を砂鉄の幕で容易く切り払って、美琴はひどく優しげにつぶやいた。

同時に、スカートのポケットからゆっくりと、ゲーセンのコインを取り出す。

「こんなところで苦しんでないで、とつとと帰んなさい」

そうして放たれた超電磁砲<sup>レールガン</sup>は、あやまたず、『幻想猛獣』のコアを貫いたのだった。

どうやら、全く届かないわけではないけど…。

これでは伝わらないわね…他に方法を探さないと…。

EXT

TON



『幻想猛獣』を撃ち抜いた美琴。

余波に髪をなぶられながら、正面を見据える少女からふっと、力が抜ける。

そのまま重力に従って倒れゆく身体を、駆け寄った桐は危なげなく支えた。

「…とと。お疲れさま。大丈夫？」

「…じゃないわよ。かんつぺきに電池切れ…。今日はもう動ける気しないわ……」

(まあ、さすがにアレだけやれば、って感じなのかな?)

「…それは、なんていうか…うん、ほんとお疲れ」

苦笑と共にねぎらいながら、瓦礫の少ないところを桐は見つけ出す。汚れと破れの目立つ上着をおざなりに敷いてから、青年はそっと、少女をそこに座らせた。

(…あーあ、一週間、持たなかったなあ、あのジャケット。結構気に入ってたんだけど)

新品だった上着に思いをはせながら、桐は木山を振り返った。

「さてと、大方解決した以上、僕にとってはもうあなたを捕まえる

意味は薄いんだけど…。まだ逃げるのかな？」

計ったようなタイミングで、『警備員』（アンチスキル）たちの応援が現場になだれ込んでくる。

「…いや。ネットワークを失った今、私に『警備員』（アンチスキル）から逃れる術はないからな。もう一度最初からやり直ささ。…刑務所の中だろうと、世界の果てだろうと、私の頭脳は常にここに  
あるのだから」

むしろ晴れ晴れとした表情で、木山は話す。

そんな脳科学者に、桐は若干申し訳なさそうに言葉をかけた。

「…あー、うん。そのたゆまぬ努力が実を結ぶことを心から祈ってるよ…それで、唐突なんだけど、その『子供たち』の居場所、教えてくれないかな？」

「…何故かね？あの子たちにはもう何の利用価値もない。…言いたくはないが今のところ、最低限の延命処置だけを施された、生ける屍だ」

「あー、絶対じゃないから断言はしづらいな…。それに説得する時間もないか…」

木山を確保しようと向かってくる『警備員』（アンチスキル）を横目に見ながら、桐は早口でささやいた。

「うん、悪いようにはしない、としか言えないね…。でも、そのつもりなんだ。出来れば信じてくれると嬉しい」

そう言つて、青年は正面から木山を見据えた。  
「やあ、木山が口を開く。」

「…第十三学区の病院だ。私の名前でベッドを取っているから、すぐにわかるだろう。」

「…私の名前でベッドを取ってるって…？…それは1クラス全員つて事…だよな？」

「…そうだが？」

「…尊敬するよ。だから今からは本当にあなたのための忠告。これだけのことをやらかしたあなたを引き抜こうって連中は絶対に出てくると思う。司法取引の類には応じちゃダメだよ…その子らと、『明るい世界』を歩きたいんならね。」

『表』しか知らないものにとっては荒唐無稽な、その実、ひどく現実的な言葉に木山は目を見張った。  
渡された言葉を吟味するように沈黙した後、ゆっくりとうなずく。

「…肝に銘じておこう。…しかしその気遣いといい…君は本当に何者なんだ？」

「…さあ？ちよつと、それを僕も探してるところなのかも、ね。」

それだけで話を切り上げて、桐は携帯を手に取りながら、その場を離れた。  
見送る木山は思つ。

モラトリアムを気取るには、ずいぶん自分が確かなようだが？

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

20

Phase .

数分後。

通話を終えて美琴のもとに戻ると、彼女はなぜか、黒子にまさぐられていた。

(うわぁ…どんな流れでそうなったか知らないけど、なんか目の毒だね…)

状況はわからなかったが、とりあえず止めに入る。

「はいはい、そこまでにしておこうか？」

「まだっ！まだお姉様のお肌の確認が3割ほど終わっておりません

のよー」

(7割は確認済みなのか…!?)

「須臣っ！どこに行ってたのよ！いやそんなことよりこの色魔をなんとか…って、うひゃあ、そ、そこ触るな〜!」

「ホントにそこまで。僕や『警備員』の皆様に見られたくないだろ？」

「この千載一遇のチャンスを隅々までむしゃぶりつくせるなら、衆人環視なんて単なるいちスパイスに過ぎませんわ、さあお姉さま、めくるめく甘美な世界へええ…!」

「ぎゃわあああ〜!」

(あー、クチで言ってもラチがあかない感じだね…)

そう判断した桐は黒子を掴んでひっぺがしにかかった。  
意外な力の強さに驚きながらも、なんとか彼女を引き離すのに成功する。

「ハアハアハア…。………………。…あら、須臣さんではないのです？  
どうなさいましたの？」

「…えっと、明らかに僕に気付いたの今だよね…？」

何事もなかったかのように応対する黒子に肩を落としながら、桐は平坦な声を絞り出した。

「ま、まあいいや。ところで第七学区の病院のほうに用事が出来ちゃったから、僕はもうお暇してもいいかな？」

「そうですわね、この場での事後処理は須臣さんがいらっしやっても出来ることは限られますし、構いませんわよ。報告書作成の折には協力をお願いすると思いますけど」

「ああ、それはもちろん。…50枚の大長編は避けてもらえるとありがたいけどな？」

「これだけの案件でございますし…お約束できないのが怖いところですわね」

そう言つて黒子は桐に微笑んだ。

向けられた親しげな笑みに戸惑いながらも、桐も応えて笑みを作る。

「まあ、どうかお手柔らかにつてとこかな。御坂さんはどうする？一応、病院で検査くらい受けてもいいような気がするけど」

「体内電流で自分をスキャンできる私に、どんな検査を受けさせようつてのよ。気持ちだけで遠慮しとくわ。それと…」

美琴は少しだけくちごもる。

黒子が歩いてきた『警備員』（アンチスキル）と話し出すのを確認してから、少女は言葉を続けた。

「私にも説明できないのかしら。アンタが『何者』かって。事情とやらもまだ、聞いてないんだけど？」

予想できた質問ではあった。

それでも一拍の間を置いて、青年は答を返す。

「あれだけやっておいて、まだごまかすっていうのも何か違う気がするね…うん、認めるよ。レベル3って言うのは全力を出して得た評価じゃないし、僕はある意味で、『普通』じゃない。…ただ、その事情までは説明できないかな」

「なんでよ。私が信用できない？」

傷ついたような表情が、美琴の瞳に浮かぶ。

それに少しだけあわてて、桐は言葉を加えた。

「間違いなく、僕は君を信用してるよ。だから自分が『普通』じゃないことを君に対して認めただ。だけど、だからといってそれだけじゃ、僕の全てを明かす理由にはならないと思うんだけど、違うかな？」

（どんなに控えても、真実を話す限り彼女にとっては無茶苦茶な話になるだろうしね…。そしてそれは、間違いなく余計な火種にしかならない…）

どこか、孤独感によく似たものを強く意識しながら、桐は言葉を結んだ。

視線を、まっすぐに美琴のそれに合わせる。

「…いつか、君に話してもいいかなって思えるときがくるかもしれない。だけど、今はこれだけで許してもらえ…かな？」

「…え…あ…そ、それって…うっ…」

そうして、なぜか急にしどろもどろになった美琴をおいて、「……お、お姉様？何ポーツとなつてやがりますの？！メディック、メディックウウウ……！」という切羽詰まった誰かの声が背後から聞こえたらしい）桐は足早に病院へと向かった。

……  
……  
……  
長い話を終えて、カエル顔の医師の部屋を辞する。

「まああれでも、こちらのムシのいい話を最大限通してもらったと思わなきゃ、かな……」

交渉の内容を反復しながら病院のエントランスを抜ける。  
入り口の自動ドアが開いたところで、駆け込んできた初春に出会った。

「ああ！須臣さん！！須臣さんも話を聞いてきたんですね？！」

「……え、話つて？」

「佐天さんですよ！目を覚ましたって連絡があつて、飛んできたんです……！」

『幻想御手』（レベルアップ）の患者が次々と目を覚ましている、という話自体は、桐も行きがけに一緒だった『警備員』（アンチスキル）に聞いて知っていた。

それでも、知り合いの子が回復した事実にはっとする。



「そっか、目、覚ましたんだ…。よかったね、初春さん」

「はい！これも須臣さんのおかげです！！」

「いや、僕は何もしてないよ。むしろ最大の功劳者は君と御坂さんだろう？」

（というかある意味、ホントに何もしてないもんなあ…重要なトコは明らかにこの子と御坂さんのものだったし…）

いささか以上に自嘲してつぶやく桐の腕を、初春は掴んだ。

「そんな、謙遜なんて。とにかく、行きましよう！」

「え、行きましようって？」

「やだなあ、佐天さんの所に決まってるじゃないですか！早く早く！」

そうして問答無用で引きずられて、桐は佐天の病室まで付き合っことになった。

もぬけのからのベッドを見た後、看護師のお姉さんに

「佐天さんなら、風に当たるって言ってましたよ、屋上じゃないですか？」

と話を聞いて駆け出そうとする少女を今度こそ押しとどめる。

「ちょうどいいから、僕はここで待ってるよ。最初の挨拶は2人でしてくるべきじゃないかなって思うし。初春さんたちは親友なんだ

よね？」

「そ、そうですね…」

「じゃあなおさらだね、いってらっしゃい。あ、一個だけ伝言してもらえると嬉しいな？」

「伝言ですか？そんなの、いっしょに行けばいいじゃないですか」

「いや、これは伝言だから気楽に伝えられるんだよ。こつ伝えてね、『ガミガミ』って」

「は、はあ、が、『ガミガミ』ですか？」

「うん、気分で何回か繰り返してもらってもいいよ。それで最後に、『お説教おしまい』って言うってもらえれば」

不思議そうな顔をする初春を強引に送り出すと、桐は病室の椅子をひいてそこに座った。

窓の外の夜をカーテン越しにぼんやりと見ながらひとりごちる。

「まだまだ後始末が残ってるけど、とりあえずこれはこれで、決着つてことでいいかな…」

そうやってあじけない外の景色を見ながら、青年は約束どおり待つことにした。

やがてもどってくる少女の片割れに、「おはよう」を伝えるために。

性質というより、習性なのかしら……。  
総じて見れば、決して悪くはないのだけれど。

E X T

T O N

「まずは初対面でぶしつけな訪問をわびさせてください。そして本題ですが、あなたにとってたまらない患者を用意できると思っていますよ。…まあ、単に好意にすぎりに来ただけって話でもあるんですけど」

確かに自分はそう言った。

桐は無機質なりノリウムの廊下を歩きながら、回想にふける。

「それは確かに魅力的な話だね？身勝手な実験の犠牲になった『置き去り』（チャイルドエラー）の回復とは。実に僕好みだね？」

「…じゃあ！」

「任せろ、と普通の医師では言えることではないが、あえて僕はこう言おう。『任せろ』とね？」

扉を開き、ベッドの数を確認する。

小さめのベッドが整然と並べられたその部屋は、学校の教室にも見えた。

その皮肉に顔を歪めながら、仕事への真剣さがあまり感じられない、

おざりな担当医が投げてよこした書類にサインを入れる。

「患者をここに連れてきさえすれば、面倒を見てもらえるんですね？」

転院手続きが滞りなく終わったことを伝えられ、青年は搬送されていく児童たちを見やった。

カエル顔の医者が用意してくれた車に乗せられていく児童たち。

「しかし、君にとっても他人事だろうにね？なぜそこまで骨を折るんだい？お人よしもそこまで来ると病気なんじゃないかなと思うよ？」

同じ車の助手席に乗り込みながら、青年は思う。

ただ、関わってしまったことを投げ捨てる気になれないだけ、なんだけどな…。

2週間近くを費やした、いろいろな下準備の末。

早朝から神経を使う野暮用を済ませた桐は、『風紀委員』の177支部に来ていた。

用件はもちろん、先の件の報告書だった。

「…あれ、報告書はこれで全部なんだ？」

だが、書類の作成に付き合ったのは15分だけだった。

どこか拍子抜けした感じで、桐はつぶやく。

「ええ、どうも詳細な報告書をあげる必要はないと上からお達しがあつたようです。緘口令、というほどではありませんけどあの事件は『学園都市』の記録に残さない方向で話がまとまったようですわね」

「…それで補償用の人的被害と物的被害だけの報告なんだね？」

「そういうことですわ。口止め料みたいで気分はよろしくないのですが…ああ、口止め料といえば」

そう言うと黒子は立ち上がり、なにやら紙の束を取って戻ってきた。

意外と量のあるそれをどさり、とテーブルに広げる黒子。

「…これは？」

「『風紀委員』の薄謝ですの。好きなものをお選びになっていただけます？」

「好きなものって…えっと、カラオケ無料券、ボーリング無料券に、レンタバイクの割引券…？」

自分の仕事にキリがついたのだろう、初春も2人の座るテーブルへと近づいてきた。

「お礼やら付き合いやら広告やらで、こういう類のチケットはいっぱいまわってくるんですよ。お、このハンバーガーチケット、まだこんなに残ってたんですか」

「食べ物はそれなりにありがたいけど…って、これ期限今月中じゃ…」

「半年前、不良を鎮圧したお礼でしたっけ？みんなで頑張って食べたんですけど飽きるのも早かったんですよね…」

「まずこれは決定ですわね。あとはこんなものもありますわよ？」

「おお、学校の創立記念で発注した千円のマナーカードですか！」

「それも常盤台のですの。大量に作ったはいいものの額面千円というありがちな微妙さに全く捌けなかった不遇の記念品ですわね…。まあ、出すところに出せばプレミア物でしょうけど」

トランプに匹敵する枚数のマネーカードを、手の中でもてあそぶ黒子を見ながら青年はつぶやいた。

「それはそれでなまなましいね…。記念品といいつつ、もろに現金だし…」

ある意味のどから手が出るほど欲しい代物ではあったが、あえて桐はそれを避けて何種類かの無料チケットを選んだ。

最後に、押し付けられたジャンクフードのクーポンもポケットに入れる。

「じゃあこれで、確かに報酬は頂きました…。って感じかな？こつちの都合で首突っ込んだことに報酬って、なんか悪い気もするけど」

「構いませんわよ。実際のところ、余らせているようなものですし。そして私たちにとってはこれからが本題ですよ」

「本題って？…イヤな予感がするけど」

「確かに須臣さんに取っては厄介事かもしれませんが。だからこそ、今日は概要の説明に終始させて頂くかと思えますのよ」

「実は私も説得役です。さあ、はりきってプレゼンしますよ！」

どこに用意していたのか、桐に見えない場所から分厚い資料を取り出す黒子。

それを見て、心得たように初春がプロジェクターに灯を入れるのを見て、青年はこっそりと嘆息したのだった。



「『公募荒らし』（エグザルイン）かあ……。なんていうか、『学園都市』は要らないトラブルでいっぱいだね……」

午前中に教え込まれたとあるトラブルの種を思い出しながら、桐は昼時の学園都市を歩いていた。

「それはそうと、そろそろ眠いな……」

深夜といっても差し支えない早朝？から動いていた身体を意識して、青年はしばしばする目をこする。

「ご飯も食べたいトコだけど……っと、ごめん！」

そのせいだったのだろう。

曲がり角から走ってきた誰かを桐は避け切れなかった。

青年の胸に飛び込むように、誰かがぶつかる。

「……いたい」

つぶやくような口調で、そうもらしたのは巫女さんだった。美人と言っていていい整った顔。

スタンダードな巫女装束に腰まである黒髪。

それを見て、原作の一文が、桐の脳裏をよぎった。

いわく、『なんか型にはめて作ったみたいな巫女さん』。

理解するのを拒絶しようとする桐の脳裏が、イヤな感じにくすぶる。

(うわ、この子、姫神っ…!!)

巫女さんが表情を変えることなく、自分のおでこを指差した。

「いたい。ぶつけた」

盛大にあせる桐。

(いやいやいや、何でこんなトコに姫神さんいるかな?!基本的に事情が込み入りまくってる原作の事件は主人公やつてるカミジヨーさんに全部任せておけばこれ以上ないくらい理想的なカタチで解決してくれるんだから、僕は触れたくないんだけど、っていうか今からでも関わらない方向でなんとかならないかな本音のところ!?)

さらに巫女さんは再度ちよいちよい、と自分のおでこを指差す。

「とつても。いたかった。謝罪と賠償を。請求しようと思う」

桐はあわてて言葉を選んだ。

「とつと、本当にごめん!つて謝罪はともかく賠償つて…?」

「賠償。損害の埋め合わせ。あなたが私にこれからすること」

「ああ、そうだねそんな子だったね?!」

「…?…あなたと私。初対面」

「ああ気にしなくていいよこっちの話なんだから…つと」

そこまで言い切ったところで、桐はふつとあることに思い当たった。ポケットの中のハンバーガーの無料券を意識する。

(もしかしてこれで、原作に誘導できる…?)

少しだけ余裕を取り戻し、青年はするりとクーポンを取り出して見せた。

「それ。なに？」

「たいしたものじゃないけど、ハンバーガーの無料券だよ。もしかして、もう持ってる？」

桐の質問に、巫女服の少女はふるふる、と首を振って答えて見せた。

「じゃあ、これをぶつかつたお詫びに。…いや、賠償かな？そしてあらためてぶつかつてごめん」

(ハンバーガーを出すファーストフードってこの界隈にそんなに種類ないし、58円のバーガーなんてここだけだしね…)

ちよつと惜しいけど。

とこの都市に来て真っ先に『学園都市』のB〜C級グルメに精通した青年は考える。

手早く少女に押し付けると、軽く手を振って、

「それじゃ、僕は急ぐから。会えたらまたね？」

それだけを言つて、桐は足早にその場を立ち去った。妙な感慨を覚えながら、駆け足で繁華街を目指す。

(とりあえず、あれで原作に行ってくれかな…?)

何度か角を曲がってから歩きに切り替えると、『とある魔術の禁書目録』の原作を思い出しながら、方向感覚のみで目の前に現れた路地裏を選ぶ。

(どの道上条とステイルは救出に向かうんだし、仮にバーガーショップでの出会いがなくても、あの上条なら間違いなく命がけで『ヒロイン』を助けに行くんだろうしね)

そこだけは自信を持って、桐はうなずいた。

(そういう意味じゃ、僕の出る幕なんかない)

見えてきた路地の終わりに向かって、桐は歩く速度を上げた。

(…それでも、いちおう様子は見に行こうかな。ニアミス程度とはいえ、関わっちゃったのは事実なんだし。インなんとかさんに会うのは気が進まないけど、何なら下手な演技してみせてでも彼等を引き合わせよう。入った店の位置も、この街を知ってる今なら見当つくしね…)

そして本人に自覚のないまま、お人よしの結論を引き出した青年は、薄暗い路地裏から明るい大通りへと出た。

「……………え？」

だが、出たところで、足を止める。

耳に届く自分の声を間が抜けている、ところのどこかで評価しながら、桐は呆然と辺りを見回した。

八月八日、夏休みの真っ只中、昼前の繁華街を貫くメインストリート。

軒先にはショップがワゴンを並べ、洋服かけに吊るされた夏物のセール品がひらめく。

転じてオープンカフェには、汗をかくグラスに湯気を上げるパスタとコーヒー、明らかに出されたばかりのパフェとケーキの皿。

そしていつものようなら、にぎやかな若者たちで溢れているはずの、その場所です。

見渡した桐の視界には、ただのひとりも人影が映る事はなかった。

静寂が満ちる、青年以外誰もいない街の中。

テーブルの上のグラスがカラン、と、涼しげな音を上げたのだった。

…そんな、消えた……？  
…いったい、何が起きたっていつの……。

E  
X  
T

T  
O  
N

「それにしても、不思議な人ですよね？」

177支部のオフィス、座りなれた自分の椅子で。

初春が思い出したように声をあげるのを、黒子は自分の席に座ったまま、視線だけで見やった。

「…それは誰のことですか？」

「やだなあ、須臣さんに決まってるじゃないですか。私を含めて皆さん、結構気になってるみたいで。佐天さんもあれからなんだかメロメロって感じなんですよ。アレは間違いなく、恋する乙女モードと見ました！」

やけに力を入れて力説する同僚に、黒子はつまらなそうに返した。

「人様の恋路が気になる気持ちはわからないでもありませんけど、あまり構いすぎると謎の多いかと思えますわよ？」

「それでも気になるものは気になるんですよ！そうでなくても須臣さん、いろいろと謎の多い人です。白井さんは気付いてました？」

少しだけ興味を惹かれて、黒子は手元の資料から顔を上げた。初春のほづを振り返りながら、おしるこの缶を口元へと運ぶ。

「…何にですか？」

問われて、何処か得意気に初春はぴん、と指を立てて応じた。

「須臣さんって、貧乏アピールってどうか、明日のご飯にも困ってる、みたいな言い方をよくしてるじゃないですか。私がスーパーでたまたま会った時も、280円のチキンカツ弁当をぽつんと一個だけカゴに入れてましたし」

「…それはアピールといいますが、真実日々の食事に困っていらっしやるだけでは…？というか初春、たまたまスーパーで彼に会ったことは聞いてましたけど、あなたそこまでチェックしていましたの…？」

同僚の言葉に若干引き気味になりながら、黒子はこたえた。  
それに気にした風もなく、初春は話を続ける。

「おかしいですよね？『学園都市』（このまち）で普通の学生をしてるなら、よっぽどのがなければそんな事態にはならないのにそれに、もっとおかしいことがあるんです。先の事件で私、須臣さんのノートパソコンをお借りしたんですけど…」

「何が言いたいんですの？もったい付けるのはおよしなさい。たしかに彼はコンパクトノートを持っていましたが、そんなものはそれ程珍しいものでは…」

続けようとした言葉を、

「コストを度外視して、スペックと信頼性を極限まで追及した、今年の夏の最上級モデルでも？」

同僚の言葉が遮る。



絶句する黒子に、初春は真剣な表情を見せた。

「この間の事件でお借りする機会があったんですけど、触ってみて驚きました。少なくとも私のような庶民が手を出せるシロモノじゃないんです。あのパソコンも、携帯も。携帯の方はフォルムと使ってるGPS追尾アプリから割り出してみたんですが、スペックと通話信頼性だけならこの先三年はトップを走り続けるモデルですよあれ。コストに至っては宝石でもごてごて張らなきゃ10年たってもあれより高い機種なんか出てこないと思います。…以上のことから考えてみたんですよ、須臣さんの『正体』を。いいですか、須臣さんは…」

初春の表情に圧され、黒子も知らず、真剣に聞く姿勢を作る。

それにこたえるためだろうか。

十分以上にタメを作った初春は、ガバアッ！！と身を起こし、こぶしをガッツポーズよろしく握り締めて、

「須臣さんは、勉強のために実家から離れ、市井に暮らすことを余儀なくされた、どこぞの大企業の御曹司さんに間違いありませんっ  
！！」

と、自信満々に言い切った。

「……………」

沈黙のまま、くるりと、自分の机の資料に視線を戻す黒子。

「あー白井さん！なんでそんなにやれやれ時間をがつつり無駄にしましたわ的な動きですみやかに自分の仕事に向かっちゃってるんですかー！！」

「そんなことより初春、あなたの仕事は終わっていますの？」

「うわ、ものすごい勢いでなかったことにしようとしています！そして、痛いところを…。というかこんな量、徹夜したって終わりませんよう！」

「やくたいもない無駄話をしていても終わらないのではないのですか？」

「それはそうですけど、夢のある話だって思いませんか？別に御曹司さんじゃなかったって構わないんですけど。須臣さんって優しくていい人ですし。だけどせっかくですから」

続いていく初春の話聞き流しながら、黒子は思う。

そもそも、あの殿方がわたくし達を『そういう目』で見るといふのは想像つきませんわね…。

彼がわたくし達を見る目はなんとというか、もっと

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phrase .

自分以外のすべての人間が消えた世界。

熱気さえも色あせたように感じる、繁華街の大通りの入り口で、桐は周りを見回していた。

オープンカフェには出されたばかりと思われる食事が湯気を上げ、隣の靴屋では、フィッティングのために床に下ろされたスニーカーが、靴紐をほどかれたままになっている。

「悪い冗談だね、人払いの魔術にしては明らかに状況がおかしいし。『学園都市』でマリー・セレスト号を体験できるなんて思ってたよ。これも原作外のトラブルか…ああもう、要らないって言うてるのに」

つぶやきながら大通りの中央まで桐は歩いた。

あらためて見回して一人ごちる。

「……………。つい今さっきまでこの場所に人がいたって痕跡は残ってるね。その上で人間だけが消えてるけど、身に着けていた服や靴、装飾品を含めて消滅させられたってことなのかな？ いや、それだと僕一人が無事だったってことに説明がつかない…。…そうだ、携帯は？」

ポケットから取り出した携帯の液晶に表示される、圏外の文字。

「…やっぱりダメか。これはこれでお約束だね…。でも、攻撃され

てる感じじゃないんだよな…身体に特に変調もないし…」

ストレッチのように手足の動きを確認してから、青年はぴたりと動きを止めた。

自然体のまま顔をあげて、周囲の音に耳を澄ませる。

（風の音以外、何も聴こえない…。これだけ静かなら他の学区の工場の稼働音すら聴こえて来そうなものだけど。生活、工業ともに雑音も聞こえないって言うのは、あらためて異常だね…）

同じ姿勢で、さらに目をつぶり、心を静める。

自らの心臓の音すら聞き分けるほどの集中で、桐は深淵に潜るかのように、自身を研ぎ澄ませていく。

（これだけ集中してるのに、人の気配がしない…。本格的に隔絶された感じだ…。そしてこの違和感…もしかして、僕は既に何らかの能力の影響下にある…？）

ためにチカラの構成を編んでみることにして、桐は両手で顔を覆った。

息を吸い、一瞬で吐き出す。

引き絞られた集中の下に、認識に従い、緻密な構成が編みあがっていく。

世界を騙し、ひと時それを思うがままに塗り替えるチカラの設計図。

『音声魔術』（ヴォイス・ソーサリー）。

声の届く範囲においてのみ、直接的な奇跡を起こすそのチカラ。

使えることに疑問すら感じさせることなく、青年の身にはじめから宿っていたそれは、物足りないほどの確に構築されていた。

後は声を通して編み上げた構成にチカラを流し込めば、それは容易に発動する。

(チカラに異常はないか…ますますもって何が起こってるんだか…  
って!?)

「あー。パフェだあ!」

唐突に。

事態を把握しようとしていた青年の目前で、明るい声が響いた。驚きに崩れた構成を捨てながら、桐は両目を見開く。

「なんかヘンな情報が入ってきてるからここまでできてみたけど、パフェなんてひさしぶり」

拓けた視界に映っていたのは、オープンカフェに放置されていたパフェにかぶりつく、女の子だった。

「あつまー! やっぱり『学園都市』みたいな都会にきてるんだから、これくらいはたべたいよねー!」

まさにご満悦、といった感じで柄の長いスプーンを器用に操って瞬間にガラスの器をカラにしていく女の子。

驚愕しながら、桐は一步、パフェに向かい続ける彼女に近づいた。

(け、気配どころか、足音さえひとつかけらもしなかったよ?! せいぜい風が流れたかな、くらいで。なんなんだよこの子は?!)

年齢は桐と同じくらいだろうか。

赤みがかかった栗色の髪に、大きな黒い瞳。

エンパイアラインを描く純白のローブには、各部に細かな意匠が編みこまれている。また、おざなりにカフェのテーブルに立てかけられた杖にも、凝った意匠が刻まれていた。

(…このいかにもな格好からすると、この子、魔術側の人間…?! じゃあこれは魔術系の何か? うわ、魔術ってパツとわかりにくい分、超能力に輪をかけて厄介なのに…)

そこまで見て取ったところで、女の子は桐にふつと視線をやった。どこか、小動物のような警戒をにじませて、確かめるようにささやく。

「…あげないよ?」

それだけですぐに抜けかけていた毒気を完全に抜かれて、桐は反射的に返した。

「いらないから!」

「おいしいのにとってもあまいよ?」

「ああそうだろうね?」

「じゃあこのパスタを」

「それ明らかに食べ掛けだから!」

「…わがままさん?」

「わがままの定義から今じっくり話し合おうか!」

疲れてないのに肩で息をしたい気持ちになりながら、桐は続けて口を開いた。

「いや、今はそんな場合じゃなくて、どうしてこんなことになって…」

いるのか、と続けようとした桐に、魔術師らしい女の子はぴっと、自分が座る椅子の向かいを指差して見せた。

（座れって？…まずは話をしないと、文字通りにハナシにならないし…）

しびしびと、テーブルにつく桐。

口の中のものを飲み込んだ女の子が、桐の前におかれたケーキを指差した。

「…たべないの？」

「……」

はつきりと疲れた表情で、桐はケーキの皿を女の子へと押しやる。

「わあ、ありがと！」

「…どういたしまして。それはいいから後にして、とにかく話を聞いてもらえないかな？」

幸せそうな顔をしてフルーツタルトを口に運ぼうとした女の子の手が止まる。

「それはダメ。だってもう時間になっちゃうもん……あー！」

その言葉が引き鉄になったかのように、テーブルから料理と食器が跡形もなく消えた。

文字通り、前触れもなく。

「ざんねん、もうおしまいなあ。きつと観測があいまいだったんだね。でもひさびさにあまいのがたべれたんだし、よしとしないと……さて、あらためましてこんにちは、この街のおにいさん！」

整った顔に、親しみやすさを感じる、明るい笑顔。

気楽に投げられた挨拶に、桐はひどく慎重に応えた。

「ああ、こんにちは。……ところで、聞きたいことがちょうど今一個、目の前で増えたりしたんだけど、それにも答えてもらえるのかな？ それと僕は須臣 桐だよ。この街で学生をしてる。同年代の子にお兄さんって呼ばれて喜ぶ趣味はないんだ。覚えてもらえると嬉しいな？」

微妙に毒を混ぜたその言葉に、女の子はあっけらかんとこたえた。

「そつか。おにいさん、年上にみえるのになあ。じゃあキリくん、だね？ わたしはノーネ。旅人だよ。それで、ききたいことってやっぱり『領域』からのかえりかた？」

（明らかに東洋人に見えるのに『ノーネ』かあ。それに『領域』？ あげくに『旅人』って……）

心中で皮肉げにつぶやきながら、桐はゆっくりと口を開く。



「そうだね。他に聞きたいことがいっぱいあるけど、一番はそれかな。むしろ、それさえ教えてくれれば他に何も聞かなくなっただけいいかなって思うんだけど？」

「キリくんにはかわいそうだけど、いまずぐはちょっと、むずかしいかな。さっきまですごいのがあばれててタイヘンだったから、あちこちがやぶれちゃってるの。キリくんもそのせいではいつてきちゃったんだとおもっただけど…」

何処か舌足らずなノーネの言葉を脳裏で分析しながら、桐は視線を空へと向けた。

（あちこちが破れてる？魔術的な、結界の一種ってことなのかな？それならそれでやりようが…）

感じた違和感を確かめるようにある構成を編みかけた、その時、

「……っ！！キリくん、こっち！！！」

突然大きな声と共に、テーブルの上においていた手を強く引っ張られた。

「何が…って?!」

体勢を整える間もなく、抱きついてきたノーネに押し倒されて、桐は地面に転がる。

青年が座っていた、その空間を。

巨大な蛇が、噛み抜いていた。

∴。∴。

E  
X  
T

T  
O  
N

「お徳すぎだ馬鹿」

目の前に座る、ツンツン頭の高校生にヒトコトで切り捨てられて、  
姫神秋沙はとても傷ついていた。

(次に。いつ出られるかわからないから。記念に頼んだだけなのに)  
あるいは、もう出る必要もなくなるかもしれないから。

三沢塾。

あの『結界』の中にいれば、自身の『吸血殺し』(ディープブラッ  
ド)は発動しない。

『吸血鬼を引き寄せることなく、同時にこの血によって殺すことも  
ない』

「あー、いや違うんだ。言葉が足りなかった、馬鹿だ、しかし何  
故そんな事を？」という一連の会話を円滑に進めるものであり乱暴  
な言葉遣いは親愛の証で決して悪意ある台詞ではないそれと業務連  
絡そのこのシスターと青髪は後で顔貸せそんな目でこっち見るなーっ  
！！」

連れの二人に冷たい眼で見られながら錯乱気味に絶叫するその高校  
生を、見るともなく見ながら、姫神は先ほど会った青年を思い出し  
ていた。

（彼も。何故か。私にあわてていた）

同じくらいの年頃だった。

童顔だが、整っているといえないこともない顔立ち。

ぶつかつた賠償だと、ハンバーガーのクーポンを押し付けた時の表情が印象に残っていた。

（それでも。巻き込まなくてよかった）

しかし、今度は目の前の人たちが巻き込まれないようにしなければいけない。

考えた末、姫神は口を開いた。

「帰りの電車賃。四百円」

これから、自分が救われる物語が始まる少女は思う。

私の。救いはひとつだけ。だから

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

23

Phrase .

桐たちのいた空間を噛み抜いた、一匹の蛇。

『それ』は大きすぎて、その瞬間の桐には全容を把握することが出来なかった。

恐慌しかけている自分を自覚しながらも、構成を編んで解き放つ。

自分を助けた女の子の肩越しに展開する構成を信じて、彼は声を振り絞った。

「我は…っと、ああもう、弾ける!!!」

『それ』に向かって衝撃波が弾ける。

「きゃあああ!」

反発するような音になぶられながら、桐は半ば無意識に女の子を抱えて地面を蹴っていた。

無理な体勢から飛びのいた代償に、足首にひきつれるような痛みを感じながらも、同じ構成を編み上げながら距離をとる。

そうして体勢を整えたところで、右腕を振り上げ、桐はあらためて、口早に叫んだ。

「続けて喰らえ!!!」

もう少し余裕があったら、『我は呼ぶ破裂の姉妹』と叫んでいただろう。しかし、それが呪文でなくても、桐のチカラは正確に発動した。

空気がひしゃげ、風が荒れ狂う。

それらの原因となった衝撃波の束が、『それ』に襲い掛かった。距離を離すために一撃、ダメージを与えるためにもう一撃。

「ふああ、すごいねキリくん…」

そこでようやく、自分達を襲ったものが何かを、青年は認識する。

（蛇…？それにしてもサイズがおかしい…やっぱり魔術側も無茶苦茶だね…）

荒れ狂う、自分のチカラの結果を前に立ち上がり、桐は傍らの女の子を見やった。

新たな構成を脳裏で編みながら、尋ねる。

「ノーネ、これがさっき言ってた『すごい』なのかな？」

「ううん、ちがうよ。それよりきをつけて。『狡猾の蛇』は二匹でひとつだから…」

そう言うと、魔術師の少女はのろのろと立ち上がった。

（『狡猾の蛇』？この子はあれを知ってる…？）

彼女の言葉を考察しながら、桐はゆっくりと起き上がっていく大蛇を見据えた。

「あんなのと悠長に戦ってられないから終わらせちゃうけど、構わないよね？」

「うん、それはいいけどキリくん一人じゃ…あ、でも、わたしのつえ！」

そう叫ぶと、ノーネは半壊したオープンカフェへと駆け寄ろうとした。

あわてて腕を掴んで止めながら、桐は言い聞かせる。

「終わってからにしてくれないかな？あんなの前で不用意に動くのは自殺行為だよ。あれは僕がやるから　っ！！！」

言葉が終わる前にそれに反応することが出来たのは間違いなく、まぐれだった。

ただ、少女を抱きしめ、自分から転ぶようにその身を地面に投げ出す。

生臭い、独特の匂いを感じながら、コンクリートの地面をノーネと共に転がりつつ、桐は襲ってきた2匹目に注意を向けた。

同時に意外なほどすばやく、衝撃波の連撃を受けた方の一匹目が、身体をくねらせて襲い掛かってくる。

(ゆっくり起き上がったのは、こちらの注意を引くためのフェイクか…『狡猾の蛇』とはよく言ったもんだね！)

向かってくる二匹共を視界に納めて、桐は叫んだ。

「我は呼ぶ、破裂の姉妹！」

無差別な衝撃波が2匹の大蛇を巻き込んで破裂音をあげた。

発動し、荒れ狂うチカラの影響下でそれでも、じわじわと近づいてくる大蛇たち。

(だめだ、威力が足りてない…。それなら！)

構成を編む。

ノーネを後ろにかばいながら、桐は慎重に狙いをさだめた。

手加減は皆無。

完全に壊すつもりで、2本の指で作った指刀を大蛇の一匹へと向ける。

狙いは頭部に。

「我導くは死呼ぶ掠鳥！！」

不可聴の音が撒き散らされる。

桐のチカラによって巻き起こった超音波の一種は、破壊振動波として収束し、過たず大蛇の頭部に突き刺さった。

最後に響いたのは悲鳴か、威嚇音か。

ともあれそれで絶命した大蛇は、もんどりうってもう一匹に絡みついた。

死後の反射だけで動く巨体は、近くにあった同じ巨体の動きを阻む。たん、たん、とバックステップを重ねて安全な場所に辿り着くと、桐はあらためて同じ構成を編み上げた。

(この術、手加減無しで撃つので意外と疲れるね…)

脳裏を正直な思いで満たしながら、指刀を2匹目の頭部に向ける。構成が完成すると同時、再び桐はそれを行使した。

「我導くは、死呼ぶ掠鳥！！」

同種の蛇を屠った破壊振動波が、2匹目に向けて殺到する。



だが

「…え？」

それは、一匹目の胴体に吸い込まれ、それを破壊していた。

（狙いを、外した…？違う、『蛇』が仲間の死体を盾にしたんだ…！）

驚愕しながらステップを踏む。

そこで嫌な予感がして、桐は魔術師の少女を振り返った。

「ノーネ?!何を…」

振り返ったところに女の子の姿を見つけられなくてあせる桐。視線をさらに動かしたその先で、白いローブを纏った少女が、意匠を凝らした杖を構えていた。その杖に刻まれているのは

（2匹の蛇と、あれは翼…？）

感情を排した、少女の希薄な声がセカイに響く。

「われはヘルメスをあらわすものなり。そは一对のへび」

杖の周りに何かが見えた気がして、桐は目をしばたたかせた。

「かみころせ、『狡猾の蛇』」

唐突に。

2匹の大蛇が、少女の傍らに現れる。

「うあつ…！」

思わず掌を向けようとする桐に、ノーネの声が響いた。

「それはわたしのだから大丈夫！キリくんははやく、こっちに…！」

桐たちを襲ったものより一回り小さな、それでも充分に人を吞めるサイズの大蛇が、桐を無視して残った一匹に襲い掛かる。

決着は、瞬く間についた。

「これは…」

目の前で繰り広げられる出来事を、どこか信じられない思いで眺めながら、魔術師の傍らに立った桐はつぶやく。

肉が引きちぎられる、ぶちぶちという、断裂音。

左右から少女の出した2匹の蛇に噛み裂かれていく、その場でもっとも大きな大蛇。

それが終端に至り、明らかに絶命した死体を地面に打ち捨てると、ノーネの出した蛇はそれぞれ螺旋を組むように絡まりあって消えた。消えた後に残る光の粒子が、彼女の掲げる杖に吸い込まれていく。

それが終わった時には、破壊痕以外、その場に蛇がいたことをあらわすものはなくなっていた。

桐たちを襲った蛇の死体さえ、こつぜんと消えている。

（『魔術』、か…。『超能力』でもたいがいだと思っただけど、やっぱり、まともな底が見えない分、こつちのほうが確実に夕チが悪そうだね…）

神話の世界をのぞくような戦闘の余韻に、桐は呆然としながら感想を浮かべた。

そんな青年に、明るい声がかげられる。

「これでおしまいっ…と。キリくん、たすけてくれてありがとね！」

くるん、と杖をまわして後ろ手に持ちながら、ノーネは屈託なく青年に笑いかけた。

年相応、あるいはそれより少しだけ幼い、どこか舌足らずな口調。

純白のローブを纏った少女に返す言葉を探して、桐は一步彼女に歩み寄ったのだった。

…。  
…。

E X T

T O N

変わらずに何処かをたゆたいながらも、『ナニカ』は激しい焦燥に駆られていた。

(そんな…観測できないなんて…)

正確にはそうではなかったが。

混乱にただでさえ希薄になりがちな認識を揺らされながら、彼女はそれを認める。

(今のわたしに、出来ないことなんてない…)

ただ、やり方を知らず、それを見つけられないだけで。

出来ない事はないはずなのに、厳然として、出来ない事が存在する。致命的なその矛盾を忌々しく受け入れながら、『ナニカ』は思考を走らせた。

(大丈夫…あの子は間違いなく…現実として在る…)

何千回、あるいは何万回と繰り返した『言葉遊び』をもう一度意識に上らせて(自分に言い聞かせて)、その願望を補強する。

(だから、観ることが出来ないのはそれほど大きな問題じゃない…)

おそらく、『彼』は何かに巻き込まれている。

だが、例えそれが何であっても、『彼』なら切り抜けることが出来

るはず。

そう信じ込まなければ、どうにかなってしまいそうだった。

(だって、あの子は…)

もしかしたら彼女にとっての、唯一で最後の希望となるのかもしれないのだから。

また、彼女には同じくらいに不可解なことがあった。

(『こちら』も、いったいどうなっているのよ…)

それは、観えなくなる直前と、今、観えるところで進んでいる事態のことだった。

(あの子が『流れ』に干渉したはずなのに、『流れ』が全く滞りなく進んでいる…?…?)

『彼自身』がそう思っているように、『彼』がそうやって『流れ』を誘導したのならば問題はない。  
だが

(もし…そうではなかったとしたら…『みまれ』…)

最悪の可能性に行き当たって、『ナニカ』は身を擦じらせた。  
しかし、何も、出来ない。

彼女にとっての『全知全能』は、『無知無能』に限りなく近かった。  
とくに味わいなれた無力感をかみしめる。

周期的にやってくる自己の希薄はとどまることなく、その時間もどんどん長くなってきていた。

それでも、見失いそうになる自分をかき集めて、彼女は願った。

(その可能性を考えては、いけない…！)

たゆたいながら、『ナニカ』は思う。

きつと…『組み込まれた』わけではないと、ただひたすらに。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

24

P h a s e .

237

「これでおしまいっ…と。キリくん、たすけてくれてありがとね！」  
くるん、と杖をまわして後ろ手に持ちながら、魔術師の少女は屈託なく桐に笑いかけた。  
その少女、ノーネに返す言葉を探して、青年は彼女に歩み寄る。

(助けた、と言われても…。実質この子がいなかったら、僕、あの

蛇に食われてたよね…)

複雑な心境で口を開こうとした桐の言葉を、

「いや、僕はなにも」

「でもでもすごいねっ！『狡猾の蛇』を一人で相手できるひとがそこにいるなんておもわなかった！」

ノーネは青年にとびつくようにして遮った。

「ねえ、能力者のひとつってみんなそんなにつよいの？」

「あー、みんなじゃないけど、強い能力者はいっぱいいるかな…」

女の子の柔らかな身体をおしつけられ、どこか気まずい気分になりながらも、桐は彼女が倒れないように軽く腕をやって支えた。

「ふーん、そうなんだあ…」

そんな青年の葛藤に気付くそぶりも見せず、彼の上着の裾をぎゅっと掴んだノーネは、何が珍しいのか、確かめるように何度も青年の服をほそい指でなぞる。

戸惑う桐。

「えーっと、何やってるのかな…？」

「…ツルツルだあ。それにテカテカしてる。ねえ、これってなにで出来てるの？」

唐突に話題が飛んだ質問に、桐は困惑しながらも答えた。

「いや、ありふれた化学繊維だけど……」

「すごいね、みずとかはじきそう！」

(そんなこと言ったらこの子のローブもずいぶん高価な素材のよう  
な……って違う！)

また彼女に会話のペースを握られかけて、桐はこれではいけない、  
と考える。

(この子に遠まわしに言ってもダメそうだし……。悪い子ではなさそ  
うだから、直接尋ねてみようか。…魔術師って、突然豹変しそうで  
怖いけど)

自身のチカラが『音声魔術』(ヴォイス・ソーサリー)なのは棚に  
上げて青年はそう思う。

やんわりと彼女の身体を離すと、言い聞かせるような口調で桐は尋  
ねた。

「そんなことより、さっきの蛇…『狡猾の蛇』だっけ、あれは何な  
のかな？それに君は自分を『旅人』って言ってたけど、…魔術師だ  
よね？」

さして迷う様子も見せずに、ノーネはこたえて口を開いた。

「『狡猾の蛇』は、『狡猾の蛇』だよ？それとわたしたちは『魔術  
師』であるまえに、『旅人』なの。『領域』をまとってさすらう、  
ゆくところもかえるところもない、まっとうな『旅人』なんだよ？」



明るい、だがいたずらげな表情で返された言葉を、桐は脳裏で整理していく。

（魔術については語る気がないか、この子にとってあまりにも当たり前のことから説明する必要自体を感じてないか、なのかな。そして『わたしたち』と、『魔術師である前に旅人』、か……。そういう在り方を選んだ魔術結社、とか……。話してる言葉も教え込まれた知識をそのまま口に行っているだけって感じがするし……）

少女に応えるような笑みを浮かべながら、桐は続けて尋ねる。

「……そうなんだ。君たちは旅をするのにこの『領域』を使ってるんだね。君はどれくらい、ここにいるのかな？」

「うん、わかんない。気がついたらココにいたから」

こたわりなく返された言葉を計りかねて、青年は安易な言葉で先を促した。

「……それは、ずっと？」

「うん、ずっとだよ。師匠とわたしの二人だけで旅してきたんだ。だからキリくんがきてくれて、とってもうれしいの！」

そうしてノーネは、今日、何度もしたように桐に楽しげに笑いかけ

る。それはひどくまっすぐで、無防備な笑顔と信頼だった。

とりあえず、誘導するような話し方を選んでいる青年の胸が、小さく痛むくらいには。

桐は自分に言い聞かせる。

(…構わない。別に彼女を傷つけているわけじゃないんだし。それに、余裕がないんだから、余計な罪悪感を感じてる場合でもない。彼女に都合はあるんだろうけど、僕にも僕の都合があるんだから…)

「…そっか、ありがとう。さっきから訊いてばかりで悪いんだけど、蛇に襲われる前、僕をすぐに帰すのは難しいって言ってたよね？」

問われて、ノーネの顔が曇った。

「…うん。くわしいことはわかんないけど、一緒にここまで来たひとがいつぱいあばれたみたい。もう、師匠がやつつけちゃったみたいなんだけど…さっきの『狡猾の蛇』も、そのひとをやっつけるためにつかって、片付けなかったぶんだとおもうの。『狡猾の蛇』は、『領域』のなかでつかったらそとにでられないから…」

どこか力なく並べられた言葉の内容に、桐は衝撃を受けていた。

(彼女にだって彼女の事情がある。僕がどうこう思うことじゃない…)

「あ、ああ、そうなんだ…」

生返事をかえしながら、桐は思考に沈む。

(そうだよ、僕が何かを思うことじゃない。『この子がいるのに、あんなヤバい蛇を野放しにした』からってどうだっていうんだよ。彼女だって同じ魔術が使えるんだし、修行の一環かも知れないじゃないか。ヒトの家の教育方針に口を出すなんて、大抵ろくなことに

なんかならないんだし…)

つらつらと、自分に向かっての言い訳を脳裏に書き込んでいく桐。そうして黙り込んだ青年を見つめて、ノーネがしょんぼりとうつぶむいた。

「ご、ごめんね？ いますぐは無理だけど、きつとかえしてあげられるから。大丈夫だよ、だからもうちょっとだけガマンして、わたしと一緒にいてくれる…？」

かすかにうるんだ目でおそろおそろ、ささやかれる言葉。

勘違いさせてしまったことに気付いて、桐はあわててそれを訂正した。

「いや、別にいやなわけじゃないよ。確かに少し困ってはいるけど、別に我慢しなきゃいけないことなんてないしね」

ぱたぱたと手を振って、本気であることをアピールしてみせる。

(現状、試せる手がないわけじゃないけど、しばらくはこの子に付き合ってみようかな。…やっぱり、気になることもあるし、ね)

内心で結論を出しながら、桐は口を開いた。

「君がここから出してくれるのなら、断る理由はないよ……って！」

少女の顔が、明るくなる。

青年にとびつく際、陽光を反射した彼女の杖が、きらりと輝いた。

E  
X  
T

∴ ∴  
◦ ◦

T  
O  
N

壮年の魔術師は、それらをただ、見つめていた。

最先端の人間工学によってデザインされた、革張りのロッキングチェアに身を沈めながら、情景を把握する。

（思ったよりはよい見世物だった、ということにしておこうか）

コーカソイド特有の薄い唇を舐めて、魔術師はそう評価した。  
くすんだ金髪に、すらりとした鼻梁。

スーツを着ていれば、どこかのエグゼクティブにも見えただろう。  
だが壮年の男は、ゆったりとした純白のローブを纏ってそこに在った。

細かな意匠を施された白銀の杖を手に、思索に沈む。

（紛れ込んだ者も興味深い…。まったく、近頃は退屈しないものだな）

『狡猾の蛇』が砕かれた感触に、杖が鳴動する。

（なるほど、『導入』は順調なようだ…弟子を取るようになった際には辟易したものだ）

完成されたものは後世に伝えねばならない。

自らの存在意義を確認し、魔術師はくつくつと晒った。

（まあ、仕方あるまい。自身の『習い始め』も思い出せないようで

は、な。さて…)

魔術師は考える。

ここまで来た目的を果たすか、客人を歓待するか。その二つは矛盾しないが、同時に煩わしくもあった。

長い、長い沈黙が流れる。

たつぷりと時間をかけて、『選択』を楽しんだのち、壮年の魔術師は顔を上げた。

「従者が役目を果たさぬ以上、主が歓待するのが筋というものだろうな」

気乗りしなげな声とともに、魔術師は立ち上がる。だがその顔には、確かに笑みが浮かんでいた…。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

P h a s e .

満面の笑みで魔術師の少女が案内してくれたのは、例のファーストフードだった。

原作どおりなら、姫神と上条たちが出会う、その場所です。

(そういえば、姫神さんは無事に上条たちに会えたのかな？会えてればいいんだけど…)

抱えている懸案事項を思い受けながら、安っぽい合成樹脂の椅子に腰をおろす桐を、ノーネはにこにこ見つめていた。

「やっぱり都会にきたらハンバーガーだね！シェイクも美味しいし」

「いや、ハンバーガーなんかどこだって食べられるんじゃないかな…？」

何の気なしに、青年はそうつぶやいた。

だが、心外そうな顔で、ノーネは彼に反論する。

「そんなことないよ？みつからないときは意外とみつからないんだから！」

「そ、そうなんだ…？でも、そんなこと言ったら、ここにだってハンバーガーなんかはないんじゃないかな？」

そう言って、桐は自分達以外に人影のない、ガランとした店内を見回した。

「それは、『領域』のほうで情報をとじちゃってるからだよ。でも、わたしにはこれがあるから！」

そういつて魔術師の少女は、誇らしげに自分の杖を掲げて見せた。絡み合った2匹の蛇と、翼の意匠が彫り込まれた、白銀の杖。

「…ああ、気になっていたけど、それは？」

「キリくんは、ケーリュケイオン、ってしってる？」

問われて、桐は記憶を探った。

だが、思い当たるものを見つけられずに、青年はノーネを見やる。

「…ごめん、神話でありそうな名前だなんてくらいしかわからないよ。その、『ケーリュケイオン』ってというのがその杖の名前なのかな？」

「うん。かんがえられるかぎり、もつとも精密にギリシャのかみさまのつえを再現したもの、なんだって。世界に三本しかないんだよ。いまからつかってみせるから、ちゃんとみててね？」

得意気に、白銀の杖をくるん、とまわすノーネ。

そして、唐突にその瞳から感情が抜ける。

杖を、ぼうつとした燐光が包んだ。

(これは…あの時と同じ…?!)

栗色の髪、黒い瞳、純白のローブ、白銀の杖。

そのすべてからリアリティが剥がれたように感じて、桐は目を見開



いた。

「われはヘルメスをあらわすものなり。そは伝令のかみ」

個性を感じさせない、希薄な声がセカイに響く。

（なんだろう？ひどく、嫌な感じがする…）

神秘的なはずのその光景に、なぜか青年は薄ら寒いものを覚えていた。

「しらせを紐解け、『使者の奏上』」

杖からの燐光が辺りを満たす。

光が収まったその時には、雑然とした光景が目の前にあつた。

シンプルなテーブルには安っぽいトレーがあふれ、ハンバーガーやポテト、シエイクやドリンクなどのジャンクフードが、それぞれのトレーに載っていた。

ほぼすべての包みが開けられていたが、中にはまだ封の切られていないものもある。

（ダメだ、最初から最後まで目を放さずに見てたのに、何が起きているのか把握できなかった…。何かが起こっているっていうのは嫌というほどわかるのに。…魔術って、ホントに底が見えないものなんだね…）

やはり信じられない気分だ、桐はその光景を見渡した。

（強いて言うなら、新品が現れたんじゃないやなくて、食べかけがここに現れたって感じなのかな？トレーの並びもそれっぽいし。ここに

た人間を『領域』に連れてこずに、食べ物とその付随品だけを選択的に持ってきた、とか…？どれだけトンデモなんだかって話だけど、それじゃあここは…）

核心に触れかける桐。

だがそれを遮るように、魔術師の少女の無邪気な声が響いた。

「うわぁ！キリくん、みてみて！シェイクがみつっもー！」

思考を中断して、ノーネが指差す先に青年は視線を向けた。

窓際の一角、四人掛けのテーブル。

そのテーブルの上にあるのは、一枚のトレイのみ。

そこには、ストローが刺さったシェイクが3つ、並んでいた。

味はバニラとチョコとイチゴの三種類。

（そうか、なるほどね…）

桐はそれを見て、自分の携帯で時間を確かめると、安堵の笑みを浮かべた。

超満員のファーストフード。

所狭しとトレイが机の人数分並べられている中でこのテーブルだけ、シェイクが3つのったトレイが一枚だけ置かれている。

もちろん、他の可能性も考えられるが、場所、時間帯に加え、シェイクの種類さえ一致しているこの状況は、

『原作どおり、巫女さんがバーガー30個で食い倒れ、スタッフが気を回して包み紙を片付けた後、怒り心頭の銀髪シスターさんを筆頭とした3人組が相席をお願いされた現場』

と取るのが一番無理がないように、青年には思えた。

(僕が気をもむまでもなく、合流はしてくれてたって事だね。これならあつちは後で様子を見に行くだけでも…)

隣のテーブルから、まだそれほど手がつけられていないトレーを選んで自分の前に置くと、そこからポテトを取り出して口にする。それを待ちかねたように、ノーネが口を開いた。

「ねえキリくん、学生さんなんだよね？どんな学校通ってるの？」

「ああ、それは」

そこからは質問攻めだった。

学園都市の広さから始まって、各学区の特徴や、学校自体の特徴、果ては給食の内容など。『学園都市』の表の部分、とりわけ、さまざまな学園生活の内容に、魔術師の少女は興味を示した。

桐も体験したことや、原作で知っていることをつなぎ合わせてノーネに伝えていく。

アミューズメント施設の話に目を輝かせ、授業で行われるスポーツや、大覇星祭の話に息をのみ、美味しいケーキの店の話にのめりこむ少女。

(こうやって話してる分には、普通の子なんだけどな…)

「バスケットってわかるかな？3メートルちょっと…そうだね、僕が君を肩車して届くか届かないか、くらいの高さにちいさなリングと網でできたかごがあって、そこにボールを入れるゲームなんだけど」

会話を回しながら、青年はあらためて、楽しげに話に聞き入る彼女を見て取る。

（年齢は同じくらい、だよな…。反応が幼いのは個性ってことにしておこうか。…これでホントは背が高いだけの小学生とか言われたら、自分の目が真剣に信じられなくなるけど）

「それで大覇星祭の時には、学校どころか、この街全体がお祭り騒ぎになるんだよ、それで」

（名前はノーネ、かあ…。どう見ても東洋人…本音でいえば日本人に見えるんだけどな…）

「わあ、それって面白いね！！キリくんはやったことあるんだ？」

（さてと、そろそろ、試してみようかな…）

彼女との会話が弾んできたところで、桐は気になることに話題を変えてみた。

「…そういえばノーネ、君の名前はさっき話に出てきた、師匠さんがつけてくれたのかな？」

やはりというべきだろうか。

その質問に、魔術師の少女の顔が曇った。

（明らかに何かありそうな感じだね…。どうやら、この『領域』の主導権を握っているのは彼女の師匠のようだし）

言いつらそうに、ノーネは口を開く。

「…うん、そう。師匠が、『ノーネ』と『ナナ』。どちらかからえらべつつけてくれたの」

（そうなんだ…でも、明らかに日本人なんだから、何で『ナナ』に  
しなかったのかな…って、それは…?!）

そこで桐はあることに気付いた。

（ちょっと待てよ、ということとは…）

それを言葉にするために、脳裏で言い方を探す。

そして、それを声にするために顔を上げると、目前に男が立っていた。

「やあ、邪魔をするよ。客人」

それは壮年の男だった。

くすんだ印象があるものの、ノーネのものと似た特徴をもつ、白い  
ローブを纏い、白銀の杖を携えて、男はそこに在った。

「し、師匠っ…!!」

ノーネのどこかかばそい声が、耳朶をうつ。

総身に寒気を感じながら、桐はがたりと立ち上がった。

（また、気配を欠片も感じなかった…!!）

「ああ、楽にしてくれて構わない。が、ここはいかにも歓待には不向きだな」

抑揚なくつぶやくと、つい、と男はノーネに視線を向けた。  
それだけでかわいそうなくらい、びくり、と身をすくめる少女。

「私のところにお連れするように。…できるな？」

「は、はいっ！」

ふるえる声でノーネがそう答えると、男はコツコツと靴音を響かせて店から出て行った。

桐はかける言葉を探して、ノーネに視線を向ける。  
しかしそれだけで、少女はびくりと身を縮めてしまった。

「うう…」

「…えっと、ノーネ？」

（怖がっている…？師弟関係がうまくいってないってレベルの話じゃないような…）

すっかりおびえてしまっているように見える彼女をなだめるための言葉を探して、桐はノーネを見つめる。

そして青年が言葉を見つけ出す前に、少女が口を開いた。

「すみません。これから師匠のもとにおつねします…。わたしにふれていてください…」

消え入りそうな口調でそれだけをつぶやくと、彼女は呪文らしきものを口にし始める。

ひどく釈然としないものを感じながらも、桐は彼女に付き合うのだ

E  
X  
T

∴ ∴

つ  
た。

T  
O  
N

「ノーネ?!何を…」

「そういえばノーネ…」

「えっと、ノーネ？」

初めて、わたしの名前を呼んでくれたひとだった。

(でも、まだ三回だけなんだ…もっとよんでほしかったのに)

背中に青年の手を感じながら、魔術師の少女は移動用術式『翼の靴』を操る。

(あのひとも、一緒にいたらわたしの名前、よんでくれたのかな…?)

ずっと師匠と一緒にいたために遠目から見ただけで、結局近づくこともできなかつた長身の人物を脳裏に描いて、ノーネはかぶりを振った。

(でも、あのひとは師匠に…もつずいぶん時間がたっちゃってるから…)



その先を考えるのを拒絶して、彼女は目をぎゅっと閉じる。  
その心の動きに対応して制動をかけられた『翼の靴』が揺らいだ。

「っと、ノーネ!？」

かけられた声に我に返って、ノーネははっと身をすくめた。

「ごめんなさい。飛行に支障はありませんから……」

振り返ることなく、つとめて事務的にこたえる。

「いや、そうじゃなくて。どうしてそんなふうに……」

聞きたくなかった。

でも、その声を、もっと聞いていたかった。

(そんな資格、わたしにはないのに……)

後ろの青年には計れない、無力感と罪悪感に苛まれながら、彼女は  
思う。

いっそ、このままにげだせたら、よかったのに……。

少女の魔術で連れてこられたのは第十七学区、三沢塾にほど近い建物の屋上だった。

（なんでもありもここまで来るとコメントが浮かばないね…空まで飛べるって、どんな汎用性だよ…）

「…こちらです」

もう呆れるしかないかな、などと思いつつ、ノーネの案内を受けて内部へと入り込む。

無機質な廊下を歩きながら、桐は探るような気分で口を開いた。

「…ノーネ？」

声に立ち止まり、こちらを振り返る少女。

（ああもう、何で声かけただけでそんな哀しそうな顔するかな。よっぽどあの『師匠』の待遇がよくないとか？）

その表情に、話題を振るのを諦めて、青年は引き下がるための言葉

を選んだ。

「…いや、何でもないよ。気にしないで仕事を果たしてくれていいから」

「…そうですね、ありがとうございます」

変わらない、どこか舌足らずな、こえ。

だがそこにあつた明るさや微笑ましさは、根こそぎ消え去っていた。それを痛ましく思いながらも、青年は無言で彼女に案内されつつける。

(明らかにこの子に訊いて何とかなる話じゃなさそうだしね…。簡単に口を出せる話だとは思わないけど、ある意味じゃ『師匠』と話せるのはちょっといいか…)

しばらく歩き、彼女が立ち止まったのはある木製の扉の前だった。ドアを開けてもらい、中へと入る。

それまでの廊下とは違う、インテリアに凝った部屋が視界に映る。

(このビルの経営者の部屋、なのかな…?)

彼女の師匠は正面の机、革張りのロッキングチェアに座っていた。

「ようこそ、我が『領域』へ、というべきかな？かけたまえ」

言われるまま、示された応接用のソファへと座る桐。

ノーネは無言のまま、扉の付近に控える。

「…ふむ」

桐の対面には座ろうとせず、金髪の魔術師はロッキングチェアの上で傲然と青年を睥睨した。

「さて、不肖の弟子が迷惑をかけたようだね？」

「…っ」

後ろで少女が身をすくめる気配。

軽い苛立ちを感じて、桐は静かに答を返す。

「いいえ、彼女はよくしてくれましたよ」

それに動じた様子もなく、魔術師は問いを発した。

「それは重畳だ。さて、ぶしつけに尋ねるが、君は何をしに入ってきたのかね？」

「…率直に言えば、ただの偶然です。僕も戸惑っているんですよ」

(「さっきまですごいのがあばれててタイヘンだったから、あちこちがやぶれちゃってるの。キリくんもそのせいではいつてきちやっただんだとおもっただけど…」)

脳裏に浮かんだノーネの台詞を無視して、桐は当たり障りのない返答をかえした。

(この場では、彼女の言葉を引き合いに出さないほうがよさそうだしね…)

そんなことを考えながら、目の前の男が興味を引きそうな話題を提示する。

「まあ、僕はここから出してもらえれば文句はないんですが、何故あなたはこの街に？あまり魔術師には向いてない街だと思うんですけど」

男の視線がノーネに向くのを感じて、桐は言葉を滑り込ませた。

「ああ、別に彼女から聞いたわけじゃないです。というか、気づかないほうがおかしいと思いますよ。『魔術は喧伝するものではないが、協力者に対しては特別に秘匿されるものでもない』。イギリス清教辺りのスタンスはそんなものだったと思いますか？」

『原作知識』からの、無責任な発言。

ブラフを多分に含んだその言葉に、壮年の魔術師はくつくつと晒った。

「面白いことを言うな、青年。よりもよってイギリス清教とは、…くく、実に面白い」

「…まあ、イギリス清教に限った話でもないと思いますけどね」

（これで、まぎれこんだ異物、から、話す相手、くらいにはなれたかな…）

核心には触れない、それを包むような言葉で、『科学』と『魔術』の権力とのつながり、もしくはそれらに対する知識を匂わせる。使った言葉の効果を確かめながら、桐はさらに続けた。

「とにかく、楽しんでいただけでいるようで何よりです。こんな異界を自分のために構築できる魔術師と話せる機会が来るなんて、僕も思っていますでした。差し支えなければこれはどうやって…?」

「こんなものは小技にすぎんよ。情報の位相をずらすことで、擬似的な異界を作っているに過ぎない。…そういえば、この街に来た理由を尋ねてくれたな。私からも尋ねよう。…この街に拠点を構えた錬金術師がいるな?」

「…それは…!」

唐突に投げられた言葉に寒気を覚えて、桐は目を見開いた。

(な…アウレオルス…イザードを知っている!?でもこんなヤツ、『原作』には出てこなかったのに…!)

『とある魔術の禁書目録』原作2巻において、全てをかけて『失敗した主人公』を演じた、錬金術師。

この場に出てくると思っていなかったその名前に、青年は絶句した。そして魔術師は、青年のその反応から答を拾う。

「ふむ、どうやら知っているようだな。この街の人間だから知っているのか、君だから知っているのか…。それはまあ、些細なことか」

一人で納得しながら、目前の魔術師は愉しそうに続けた。

「なに、たいした用ではない。だがそれが、この街を訪ねた故だ。似通った特性で、面白い術を仕上げた者がいるという話を聞いたのでな。ひとつ、私が手に入れようと思ってるね」

「手に、入れるって…?」

「そうだ。盗むといつても差支えがないが。そして、それならば我々の在り方とも矛盾しない。…そうだな、君は本当によいところに来た…。」

相手が何を言っているのか把握できない。

それでも、それとはまったく別のところで嫌なものを感じて、桐は立ち上がった。

同時に、防御のための構成を編みはじめる。

(突拍子がなさ過ぎて内容と意味がともに取れないけど、この話題がまずいものだっていうのだけはわかる。じゃあそれを部外者の僕にぺらぺら話してみせてるっていう事は…!)

「話が見えませんか。あんたは、一体何を言ってるんだ…?」

「理解できないか、まあいい。手に入れた後で愉しませてもらうとしよう…。やれ」

言葉がつぶやかれる。

直後に桐の背後から、詠唱が響いた。

「われはヘルメスをあらわすものなり。そはねむりのかみ」

「っ!?!」

予想しておくべきだったのかもしれない。

それなのに、驚きに構成が歪む。

内心、歯噛みしながら使い物にならなくなった構成を振り払い、青

年は聞こえてきた声に振り返った。

「…ノーネっ!?!」

少女のもつ杖が燐光に包まれ、逃げ場なく伸びたそれが桐を覆う。同時に総身に及んだ違和感に全身を震わせながら、青年は悟っていた。

(ダメだ、今からじゃ構成が間に合わない…!!)

「安穩にしずめ、『夢の拘束』」

「く…ああ…!」

結句とともに。

青年は、急速に自身の脳髓を冒す睡魔を自覚する。だがその時には。

桐の意識は、闇に沈んでいた。

…。  
…。



E  
X  
T

「安穩にしずめ、『夢の拘束』」

燐光に包まれ、桐がソファに倒れこむのを、ノーネはぼんやりと見つめていた。

倒れこんだ姿勢のまま、呼吸以外の動きを止める青年。

ややあつて、部屋に乾いた音が響く。

おぎなりな拍手を送りながら、壮年の魔術師は満足げにつぶやいた。

「悪くないな。十分に扱えている。これならば先の女の始末を任せてもよかつただろう」

自らの『師匠』に目を向け、魔術師の少女はぼそぼそと返した。

「ありがとうございます…」

「ところで、伝令の神としての特性は引き出せるようになったようだな。『使者の奏上』は問題なく扱えたようだか？」

「はい…」

「『独立』も近いようだ。それでは褒賞代わりに面白いものを見せてやろう」

壮年の魔術師が杖を構える。

朗々とした声が、広い応接室に響いた。

「彼の杖は此の手に在り」

魔術師の杖に、くすんだ輝きが宿る。

「我はヘルメスを躡す者なり。其は伝令の神」

第2句とともに、濁った光が辺りを満たした。  
息をのむノーネ。

「報せを閉じよ、『辿り着かない使者』」

詠唱の完成とともに、濁った光が幾重にも桐の身体を覆い尽くした。

「き、キリく…っ！」

悲鳴のような少女の声がもれる。

だが、その言葉はどこにも何かを及ぼすことなく、濁った光は漆黒の繭へと姿を変えた。

その様子を見て、魔術師はひどく満足げな表情を浮かべる。

「これが我らの秘奥がひとつ、情報封鎖用術式『辿り着かない使者』だ。『領域』も、この術式の簡易な類型に過ぎない。最も、完全に封鎖してしまつては消滅と同義だからな。今回は牢獄を作るために内より外への物理情報だけを封鎖したのだが」

「そ、それなら…」

「ああ、問題なく元に戻せるぞ？なにしろ、お前は眠らせただけだ」

ノーネの顔に希望に似たものがのぞく。  
壮年の魔術師はそれを確認してから、ゆっくりとその言葉を口に  
した。

「戻らねば困るよ。なによりこの者には、かの錬金術師の秘術を  
試す実験体になってもらわねばならぬからな?…さて、『届け』」

言葉の終わりに、彼は軽く杖を振った。

あとかたもなくその場から繭が消え去る。

あらためて、表情から色を失った『弟子』を見下しながら、魔術師  
は思っていた。

まったく、面白い見世物になったものだ…。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase .

どれくらいの時間がたったのだろうか。

それは、どす黒いコールドールに煮込まれているような感触だった。それでもどこかで、桐の意識はかすかにその灯をともす。

(な…んだ…？あたまが…回らな…い…？)

沈み続ける舟に乗っているような、独特の浮遊感。

断続的に認識が途切れていることにも気付けないまま、青年は苦勞して瞳を開いた。

(目をあ…けた…のに…くらい…)

しかし眼に映るのは、真正の暗闇。

存在を把握できないほど暴力的な睡魔が、桐の脳髓に絡み付いていた。

なぜそうしているのかもわからないまま、青年は失いかける意識にしがみつく。

(ダメ…だ…わか…らない…けど…これは…まず…い…)

何も見えない暗闇のなか、桐は必死に目を凝らした。

見えない眼に、『あるもの』を感じて、それに焦点をあてる。

(いわ…かん…？なにか、ちがうもの…が)

違和感。

言葉にすると、イメージが少しだけカタチを取り始めた。

それは桐が『領域』に来てから、ずっと感じていた違和感。強制されたまどろみの中で、桐はようやく、それに気付く。

(これ…は…？…どう…せ…い…？)

違和感の正体は、それだった。  
構成。

桐が自らのチカラを行使するためにまず編み上げる、チカラの設計図。

それによく似た材質のものが自分に絡みついているのを、桐は暗闇の中、視<sup>み</sup>つけた。

(じゃま…だ…な…)

それを視ながら。

条件反射で、青年は脳裏に自身の構成を編み上げる。意識が半分落ちたような状態でも、精密な構成は問題なく編みあげた。

中和による、現状の沈静化を引き起こすための構成。意思を実現させるためのそれを展開し、言葉によって発現へと持っていく。

「…ほど…ける…！」

効果は、劇的だった。

自らにまとわりついてきた構成のようなものが、あっさりと霧散する。

「……………」

唐突にクリアになった認識を持って余しながら、桐は明瞭な言葉で一人ごちた。

「…ふう。なんかなくなったかな。というか、なんて無様な…」

言葉の終わりに頭を抱えて、青年は力なくうめいた。

「情けないっていうか、自分の事なのになにをやってるんだこの人はって感じだね…。こういうのも慢心って言うんだろ…」

狭苦しい暗闇は、存分に落ち込むのに最適な環境だった。

もうしばらく沈んでいたい誘惑をねじ伏せて、次のことを考える。

（それでも、殺されなかっただけ運がいいってことにしておこうかな…そして生きてる以上、出来る事はさせてもらおう。まずは現状を確認しないと…）

携帯を取り出し、フリップを開いてみる。

だが、バックライトは灯らなかった。

「電源が終わっちゃってるか…このところ忙しかったから3日くらい充電してなかったし…。『ハンディアンテナサービス』つけた状態で圏外放置は、さすがに酷だったみたいだね」

早々に諦めて携帯をポケットに落とし込むと、青年は先のものより

遙かに簡易な構成を編んだ。  
手のひらを上に向けて、囁くように唱える。

「我は生む小さき精霊」

弾けるようにその手のひらの上に、白い鬼火が浮かび上がった。  
光の玉は周囲を白く浮かび上がらせながら、風に流されるようにふわふわと頭の上の高さまで登っていく。  
その光に浮かび上がった様子に、桐は率直な感想を抱いた。

(円柱…？いや、岩の中、なのかな…？)

ごつごつとした質感の、ラグビーボールのような空間に青年はいた。  
ピレネーの城の岩塊をくり抜いた様子を連想しながら、その壁面に手を滑らせる。

(熱くも、冷たくもない…。というか、触ってる感触自体がしない…？)

未知の感覚にぞつとしながら手をひく。  
同時に苛立ちを感じて、桐は正面の壁をにらみつけた。

(…大体話が見えないんだよ。わけのわからない『領域』とやらに招待されて大蛇に食べられかけたあげくに女の子に懐かれたかと思ったら、その師匠の下に連れて行かれて二人がかりで眠らされて監禁って?!)

ここまでの現状を一息で再確認すると、あらためて苛立ちがわいてくる。

それは抑留されたものありがちな反応だったが、怒りに任せて、



桐は口を開いた。

「考えてみれば、僕の意思って欠片も尊重されてないよね？向こうは向こうの理屈で好き勝手言ったあげくにやってくれただけなんだし。僕もそろそろ怒っちゃっていいかなって思うんだ！」

反射的に大威力を求めて、桐は強靱な構成を編み上げる。完成と同時に、彼はチカラを発動させた。

「我掲げるは降魔の剣！」

ふっ と右手の中に、実際に剣を持っているような重みがかかる。超力場でできた、見えない剣。

感情のままに、桐はその力場の剣を、眼前の壁に叩き付けた。

「…って、あれ？」

だが、叩きつけたはずのその剣は、何の反動も感じさせないまま、ごっそりと消え去っていた。

「え…無効化された…？」

同時に、手にかかっていた剣の重みが消滅し、チカラの効果が途切れる。

少しだけ冷えた頭で、桐はその壁を見つめた。

「あー、これもお約束というか、普通の物質じゃないんだね…。『降魔の剣』でダメってことは、破壊力じゃ歯が立たない…？というか、これは」

ふと思いついて、もう一度じっくりと、壁を視<sup>み</sup>てみる。

( やっぱり…。ぼんやりとだけど『構成』が見える… )

その構成は、桐の扱うものとは根幹から違っていた。

普段、日本語でノートを書いているのに、ヘブライ語で書かれたノートを突きつけられたような気分を味わいながら、桐はそれをなぞっていく。

( 書式が根本から違う所為で、この構成が何を意味してるのかわからないけど、構成自体の状態ならわかる…。ようは結界なんだね。それなら、アプローチを変えれば… )

編み上げる構成に、迷うことはなかった。

胸の辺りで両手のひらを打ち合わせ、一息に叫ぶ。

「 我は消す魔神の足跡! 」

結界を壊すために、純粹な力を放射する構成が発動する。

ほどなくして窓ガラスが砕け散るように、魔術の結界は崩れ去った。

「 ……と 」

投げ出された身体を地面に着地させて、桐は頭上の鬼火を見上げた。  
一度解除してから再び、

「 我は生む小さき精霊… 」

先程より少しだけ光量を上げて、灯り取りの光球を呼び出す。

その、白っぽい灯りに浮かび上がった光景を見渡して、青年はつぶ

やいた。

「ここも封鎖された場所か…倉庫みたいなもののかな？」

そこは、出口のない、立方体のような部屋だった。

隅には、雑多な品物が積み上げられ、山となっている。

もう一方に視線を向けると、黒い繭のようなものがひとつだけ、浮かんでいた。

どうやら桐のいた場所の隣にあったものようだ。

「これは…？」

『視て』とると、やはり魔術の術式 構成が浮かんだ。

先ほど破った結界と、同質のもの。

(これも何かを閉じ込めているもの、なんだろうね…)

繭に手をやる。

中から触った時とは違う、つるつるとした、硬質な手触り。

それに触れながら、青年は考える。

(ノーネが言っていたよな…『一緒にここまで来たひとがいっぱいあばれて、師匠にやつつけられた』って。同じくその師匠さんに『やつつけられた』僕がここにいるんだから、この中にいるのは、ほぼ間違いなく、『一緒にここまで来たひと』か…)

逡巡は、ひと時のことだった。

(ちょうど、あの師匠とやらの得にならないことなら、進んでやりたくなって気分だしね…)

結界破りの構成を編み上げて、桐はそれを展開する。

「我は消す魔神の足跡　！」

発動は速やかに。

先と同じく、ガラスが砕け散るような気安さで、結界は崩れた。そうして、『繭』から出てきたのは。

「…………え…？」

『彼女』をその目に映して、桐はひどく、間の抜けた声を漏らしていた。

繭の底に溜まっていたのだろう。

赤黒い鮮血が、びちゃりと床にこぼされて、小さくない血だまりを作った。

ほぼ同時に、長身の身体が固い床に投げ出される。

遅れて、2メートルを超す抜き身の太刀が、床に突き立つ。

長いポニーテールに、元は白かったであろうTシャツ、片方の裾を根元までぶった切ったジーンズ。

「そんな…まさか…？」

あらためて、眼に映っているものを信じられず、桐は一步、彼女に近づく。

それでも、見えているものは変わってくれなかった。

他にどうしようもなく、青年はそれを認める。

神裂火織が、そこに倒れていた。

∴。 ∴。

E  
X  
T

T  
O  
N

呆然としていられた時間は、それほど長くはなかった。

「く…く…く…」

目の前の女性のくぐもったうめき声に、桐は現実を引き戻される。とりあえず駆け寄ろうとした青年に向かって、轟、と太刀筋が走った。

自分でも良く判らない、文字通りの反射で、桐はそれを避ける。それでも、こすられたような感触の後に、鮮烈な熱さが左頬を焼いた。

（痛い…。ってやばい、これ…七閃！？）

血が零れ出す、口腔に届きそうなほど、深い傷。

同時に叩きつけられた殺気に、青年の脳裏に焦燥が溢れかえる。飛びのきながら構成を編み上げて、桐はそれを見た。起き上がれないほど消耗しているのだろうか。

自らの血に汚れ、横になったままの姿勢で、自分をにらみつける神裂の視線にあらためて戦慄しながら、桐は口早に唱えた。

「 我は紡ぐ光輪の鎧！」

しゃん、とガラスのような音が響いて、光の輪が連なってできた力場の防壁が青年を包む。

間をおかずに到達した鋼線が、その力場と衝突して次々と火花を生

んだ。

(つうう、今の一撃…いや、一瞬だけで半分くらい持っていかれた…！)

切羽詰った感想を脳裏に滑らせながら、同じ構成を編む。それ程広くもない部屋。

限られた空間を、鋼糸の煌めきが覆い尽くしていた。

(あれ、床や天井までお構い無しで削ってる…？これじゃ逃げ場が…！)

「待った、話を……って!？」

声をかけようとしたところで展開していた『光輪の鎧』を抜かれた。差し出していた右掌を、浅く裂かれる。

(くうっ…！防ぎきれない?!…それでもっ)

浅く後ろにステップを踏んで距離をとりながら、桐は再びチカラを発動させた。

「 我は紡ぐ光輪の鎧!! 」

『七閃』を受け止め、再び火花を散らす力場。

どうにかその二撃目をしのいだ所で、防御力場がまた、限界に近づく。

そうして稼いだ一瞬に体勢を低くしながら、桐は精一杯の音量で叫んだ。

「だからやめてくれ！僕はあなたの敵じゃない！！」

「……っ?!」

その声が届いたのか、三撃目の七閃が勢いを緩める。

荒れ狂っていた攻撃がいったん止まったことを確認してから、青年は防御力場をほどいた。

光輪の連なりがうっすらと薄くなって、やがて霧散する。

「…それでは、あなたは誰だというのです…!」

苦しそうだが、はつきりとした声。

うつぶせになったままの神裂からもれたそれに安心しながら、桐は彼女のほうを見て、

彼女にかかっている、魔術の術式を視<sub>み</sub>つけた。

率直な感想が、脳裏をよぎる。

(…なんだ、あの、『構成』…?!)

それは、ひどく禍々しい代物だった。

隙間なく幾重にも同じパターンが執拗に組み込まれ、のしかかり、押し潰すように神裂の身体を侵している。

青年がそれを視て取っているのに気付かないまま、彼女は再び、誰何の声をあげた。

「答えなさい、あなたは何者だというのです…?!」



その苦しげな声が、桐の理性を叩く。  
苛立って、青年は答えた。

「だから君の敵じゃない。敵ならわざわざ封鎖を解く意味がないだろう？ 大体君はそれどころじゃないじゃないか！ いいからそこを動かないで」

彼女に声をかけながら、桐は無防備に踏み込んだ。

（こんなヤバいもの、放置してたら！）

思考を埋めるのは、神裂にかけられた魔術のことのみ。

彼に視えたその『構成』は、それほどまでに良くないと感じるものだった。

七閃が飛んできたら瞬殺確定の体勢で、ただ、右腕を差し出す。そして桐は、鋭くささやいた。

「我退ける」

構成が神裂に向かって解き放たれ、世界を書き換える。

「じゃじゃ馬の舞」

声とともに、あたりを打つ、ぱしっという衝撃音が響きわたった。同時に、長身の女性に絡み付いていた魔術の術式が、あとかたもなく消え去る。

強制的にかけられていたそれを解かれて、神裂は眼を見開いた。

「え…？こ、これは…！！」

その反応を一顧だにすることなく、青年は彼女の傍らにひざまずいて、脚の傷を確認する。

それは、ひどく鋭いもので等間隔に傷つけられていた。

(…出血がひどかったけど、傷自体は思ったより浅いかな。神経や骨には異常なさそうだね、これなら…)

傷の状態を見て取り、癒しのための構成を脳裏に編み始める桐を見ながら、神裂はどこか事態を信じられないまま、こう思っていた。

致死性の呪いをあつさりと…。一体、何者です…？

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

28

Phase .

「我は癒す斜陽の傷痕」

チカラによって作られた白っぽい灯りの下で、桐は癒しのための構成を発動させた。

すっと、音もなく、彼女の怪我が消え失せる。

「これは…?!」

驚いた様子で、神裂は傷のあった場所をぺたぺたと触った。

「とりあえず、傷を塞いだけだよ。失った血液や体力までもどつたわけじゃないから、気をつけて。…ところでその傷は、自分でつけたものだったのかな？」

施した治癒を説明してから、桐は質問を投げた。

ついでのように、

「我は癒す斜陽の傷痕」

自分の頬と右掌についた切り傷も塞いでおく。

それを見て神裂は何かを言いたげに口を開きかけるが、結局言葉にはせずに青年の質問に答えた。

「…ええ。不覚をとりました。この『領域』を統べる魔術師に『アルゴス殺し』という術式をかけられました。あれは伝説どおりなら対象を眠らせてその者の首を落とす術式でした。それで、眠りに落ちるのを防ぐために…」

「自分を切り刻んでたって…?」

(…確かにあの睡魔に対抗するにはそれぐらいやらないと追いつかない気がするけど…凄い根性だね…)

淡々と答えられた内容に畏怖すら覚えながら、青年はうなずいた。

「とにかく、無事みたいでよかったよ」

「ありがとうございます。それで、あなたは一体どちらの結社オダの所属なのですか？そして何を目的にここへ…？」

慎重に神裂から投げられた質問に、桐は思う。

(ああ、そうか。こつちを魔術師だっと思ってるんだ…。まあ、この状況じゃ無理もないけど。正直、本当のところは説明の仕方にも困るしね…)

「ああ、申し遅れました、私はイギリス清教、ネセ…」

そして、彼女の名乗りに滑り込ませるように、桐は自分の名前を明かした。

「スオミ、須臣桐だよ。そして僕がここにいるのはただの偶然で、どこかから指令を受けているわけじゃない。だから所属を明かしてもらっても何もできないかな」

名前以上の情報は知らない、とわかりやすく青年に言われて、神裂も納得の表情を浮かべてそれに答える。

「わかりました。私は神裂火織、と申します。重ねてお尋ねしま

すが、あなたはこれからどうされるおつもりなのか、教えていただけませんか？」

彼女の質問の意図が取れずに、青年は同じ言葉で問い返した。

「僕がこれからどうするか…って？」

「ええ、助けていただいたことには感謝していますが、私にはここでやるべきことがあります。そのためなら」

眼を細め、いつの間にか鞘に収まっている太刀に手を滑らせる神裂。否応なく剣呑な気配をかぎとって、桐はあわててばたばたと手を振って見せた。

「いや、だから僕がここにいるのは本当に偶発的な出来事であって、特に何かをしようと思って入ってきたわけじゃないんだ。むしろ事態が全く把握できなくて困ってるぐらいで」

全てではないが、正直なところを伝えながら、考えをめぐらせる。

（でも、これからどうするか、か。不幸中の幸いで、術式の『構成』が視えるようになったから、ここから抜け出すだけなら出来なくはないだろうけど。それじゃ文字通りの『途中下車』になっちゃうしな…。なんにしても判断するための情報が足りてない…）

と、そこで、青年はあることに気付いた。

（…まあ、その辺りは知ってそうな人に聞くのが一番か。ちょうど目の前にいるしね）

そうして出した安易な結論に沿って、直接的な要求を会話の上に乗せる。

「出来れば、状況を教えてくれないかな？繰り返しになるけど、今の僕には彼らが魔術師の師弟で、ここがその『領域』って事しかわかってないんだ」

この言葉に、神裂は意外そうな顔を見せた。

「状況がわからない、とは…彼らが扱う魔術のことも知らない、というのですか？」

その言葉にうなずいて肯定しながら、桐は話を続ける。

「僕は迷い込んだだけの人間だからね。彼らに出会ってすぐ、問答無用でここに放り込まれたようなものなんだ。少しでも恩を感じてくれているのなら、現況を教えてくれると嬉しい。そうじゃなければ、僕も態度を決めようがないんだ。もちろん、話の内容によつては、なにか協力できることがあるかもしれない」

その言葉を聴くと、神裂は目をつぶったまま黙り込んでしまった。

そして、青年にとって長い沈黙が流れる。

態度に出さないまま、心中で盛大にあせる桐。

(…あれ、何かしゃべりすぎたかな？恩がどうこうって言い回しが彼女には効果ありそうだったからあえて使ってみたけど、もしかしなくても図々しかった…?!)

と、桐が沈黙に音を上げようとしたその時。

神裂はすっと目を開くと、ふうつと息を吐き出して、ゆっくりと壁

際に座りこんだ。  
背を壁に預けて、長い脚を揃える。

「…少し長い話になるかもしれませんが、それでも構いませんか？」

「それはもちろん。何処からも説明がないままこんな場所に押し込まれて、途方にくれてたところだったんだ。今ならそれなりにいい生徒（聞き役）になれると思うよ？」

ほっとしながら冗談まじりに答えると、桐は新たな灯りのための構成を編み始めるのだった。

…。  
…。

E X T

T O N

わたしは、うすかすみ薄霞 まじか円。

高校一年生で、ラクロス部に所属しています。

趣味はショッピング、かな。あと、あまいものをたべるのがすきかも。

成績は…そんなによくないけど、すつごくがんばれば平均点にはとどくとおもいます。

身体をうごかすのはすきだけど、こっちもそんなに上手じゃなくて、やっぱりすごいひとにはかなわないくらい。

でもこのあいだの練習で、ボールタッチがやわらかいってレギュラーの先輩にほめられました。

えへへ、ちょっとジマンです。

中学生になるとき、『学園都市』にいきたいっていったんだけど、おかあさんに反対されてしまいました。

それですつと、地元の学校にかよっています。

後悔したことはないけれど、もし『学園都市』にいったらどうなっていたのかなって、友達とよくはなします。



そらとかとべたら、たのしいですよ。

え…すきなひと、ですか？

残念ながら、恋人はいません。

すきなひとは…ヒミツです。

でも、出来たらいいなっておもってます。

…え？

それをいつちゃったら、ヒミツにならない…？

ああ！いまのなしです、なし。

…ゆめ、ですか？

はずかしいですけど、あります。

それは

いつかの、どこかで。

生まれてからずっと同じ街に住んでいた、とある少女が受けたインタビューの情景が、脳裏をさらさらと滑っていく。

あの時少女が語った夢は、何だっただろう？

何度考えても出てきてくれないそれに、苛立ちを覚える。

生を受けてから16年間生きて、その先も続いていくと思っていた

時間に、見ていた夢。  
それを見つけるのを諦めて、彼女は思う。

べつに、いいよね。

もう、全部まっしろになっちゃったことだもん。

とある十二力の音声魔術士  
ヴォイス・ソーサラー

P h a s e .

29

289

『魔術』によって封鎖された、立方体のような部屋の中で。  
その話は、ゆっくりとはじまった。

「と言っても、私にも彼らのことはそれ程わかっているとは言えな  
いかも知れませんね。これは『必要悪の…』（ネセサリ…）…いえ、  
私の所属している教派の資料室からの情報を繰り返す形になります

が…。端的に言つて、彼らは『完成された魔術』を扱う一派です」  
話の前提から矛盾する言葉に、桐はつぶやく。

「『完成された魔術』…?」

その反応に、神裂はうなずいて見せた。

「…そうですね。あなたが今思われた通り、あくまで手段に過ぎない『魔術』には通常、『完成』という概念はありません。しかし、だんの魔術体系は、あまりに高次での『安定』を見てしまったため、研究をそれ以上進めることができなくなつたと聞いています。そして、その『安定』…いえ、『完成』の直後にその一派は所属していた結社より離脱したと。以後、彼らはそれを隠匿し、後世に遺すことのみを存在意義として、『旅人』を名乗っているそうです」

神裂の言葉を脳裏で反復しながら、青年は魔術師の少女の言葉を思い出してつきあわせる。

(それで、『旅人』…。魔術側の中でも異色の存在ってわけか…)

「彼らの扱う魔術は、『ヘルメスを顕す者』、と呼ばれています。細密に再現された杖をもつてオリュンポス十二神が一柱、ヘルメスの特性を自らに『顕す』魔術です」

言われたことの内容を理解して、青年は驚いた。

「それは、まさか…」

思わずもれてしまった言葉を引き受けて、神裂は説明を続ける。

「ええ、それは文字通りの、『神の再現』となります。ヘルメスは多くの場合、第一義に『伝令の神』として扱われる神ですから、やはり『情報』の扱いが得意なようですね。もつとも、それ以外の特性：『眠りの神』や、『巨人殺し』としての特性なども問題なく引き出せるようですが…」

先ほどまで、自分にかけていた術式を思い出したのだろう。どこか苦々しげな表情で、彼女はそうつぶやく。

把握した内容が間違いでないことを確信して、桐は頭を抱えなくなる衝動に襲われていた。

（規格外も規格外だったってことか…。ギリシャ神話の神様の力をフル活用できる魔術師…？それならあの汎用性も納得できるけど、つくづく冗談が過ぎるね…）

今回の件に巻き込まれてから、一方的に投げつけられてきた断片的な情報と、今教えられた、系統だった情報をそれぞれ思い起こして整理する。

それは、パズルのピースをひとつひとつ、つなぎ合わせる作業にも似ていた。

そうやって思考を走らせる青年を見据えたまま、

「さて、続けてもかまいませんか？」

神裂はそう確認を取った。

桐も視線を向けてから、うなずいてみせる。

「…もちろん」

「そして、自身の術式を遺すことを至上命題とする彼らの魔術には、ある特殊な継承法が取られています。それが私のここに来た理由につながるのですが…。彼らの扱う白銀の杖。『ヘルメスを顕す者』という魔術体系の『核』とも言うべきそれが何本あるか、ご存知ですか？」

問われて、桐はノーネが楽しそうに言っていた言葉を思い出した。

（「世界に三本しかないんだよ」）

同時に感じてしまった、ちくりとした痛みを無視して、答える。

「…ああ、世界に三本、だっけ？」

「ご存知だったようです。通常、その三本は一本ずつ異なる術者に振り分けられ、そうして同じ『ヘルメスを顕す者』を扱う魔術師は、それぞれが全く別個に『旅』をしています」

「世界に、『ヘルメスを顕す者』を扱う魔術師が3人、常に存在しているってことだね。間違いない後世に遺すために『正』、『副』、『予備』とわけている…？」

理解の速い生徒に笑みを浮かべて、神裂はうなずいた。

「ええ、優先順位はないのですが、真実そのような役割なのでしょう。そして、『ヘルメスを顕す者』を扱う魔術師が命を落とすか、その価値をなくすと、杖に込められた術式。これも『伝令の神』の特性を利用したものでしょう。が、一番近い存命の同種の魔術師へとその杖自身を届けるそうです」

「…つまり、一時的にひとりの『ヘルメスを顕す者』を扱う魔術師が『杖』を2本持つことになる、と。そして、それが…?」

「はい、その魔術師が『師匠』となります。『師匠』となった者は市井から『弟子』を選んで『杖』を与え、『ヘルメスを顕す者』の術式を仕込む…。もともと、『弟子』となる者の意思は全く反映されない、適当な人間を、自らの『領域』に引き込むだけの、言うなれば『神隠し』のような形での『弟子取り』ですが」

最後に怒りをあらわにして、神裂はそう言いきる。

( やっぱり、か…。彼女はこの『領域』に『気がついたらいた』って言うていたけど、ここで生まれたわけじゃなかったんだね。だいたい、生まれたときから『領域』にいたのなら、『名前を選べ』って言われる事自体がおかしな話だったし… )

ある意味、予想通りだった事実には立ちながら、桐は確認のために口を開いた。

「それで、あなたは彼女の救出と、『ヘルメスを顕す者』という術式自体の調査、可能なら接收、もしくは破壊を指令として受けてきた…って感じなのかな?」

自身の目的を言い当てられて、神裂は感心したように桐を見つめる。

「…驚きました。確かにその通りです。3ヶ月ほど前、教会に彼女の両親より救出の依頼がありました。さまざまな部署をたらいまわしにされたあげく、ようやくこちらにまわってきた案件でした。お察しの通り、指令の内容の方は術式の調査が主眼になってはいました。が」

まあ、と神裂はふつと青年に視線をあわせてこう続けた。

「指令はどうあれ、私にとってはまず『救出』ありきの話です。…ところで、彼女、ということとは、あなたはもう、マドカさんに会っているんですね？どうやら私は避けられてしまっていたようで、彼女と話すことが出来なかったのですが」

唐突に出てきた、耳慣れない名前。

だが、桐は正確にその意味を掴んでいた。

（マドカ…？ああ、ノーネの本当の名前か。やっぱり日本人だったんだね）

「魔術師の『弟子』の女の子なら会ったよ。今はノーネって名乗ってるみたいだったけど…」

その言葉は、彼女の琴線に触れてしまったようだった。

「それは…。強制的な拉致に加え、名前までもを奪ったということですか。ますます許しがたい所業です…!!」

神裂の語尾が怒りに震える。

それでも、その迫力に動じることなく、青年は最悪の想像を浮かべていた。

（どうしてだろう。多分、そんな簡単なことじゃすまない気がする…）

「…とにかく、教えてくれてありがとう。状況がだいぶんかめた気

がするよ。おかげで、自分の方針も固められたと思う」

(3ヶ月…。彼女が捕まってからの時間が思った以上に短い…。ということは…)

この短時間で与えられた情報を系統立て、咀嚼し、桐は今回の事態を構築していく。

「それではあらためてお尋ねします。あなたはこれからどうされるおつもりですか？」

その言葉に、桐ははっきりとした口調で答えた。

「協力するよ。事態の收拾を手伝わせてほしい。あの魔術師は、明らかに放っておいていいものじゃないしね」

(だとしたら最悪だね。特に、この想像だけは外れて欲しいけど…一応、覚悟だけはしておこうか。たとえ『手遅れ』だったとしても、意趣返しも含めて、出来ることは全部やらせてもらわないと…！)

口に出した言葉と、心の中で想った言葉。

それぞれの結論を胸に、桐は神裂をまっすぐに見据えたのだった。

…。  
…。



E  
X  
T

T  
O  
N

「こんなところで一通り、かな？あ、そうだ。今さらだけど…」

『魔術』によって封鎖された、立方体のような部屋の中。

お互いの情報の交換と、この場所を出た後の行動に関する打ち合わせの大部分を終わらせて、桐は神裂を見た。

「どうしたのです？」

訝しげな神裂の声に応えて、桐は尋ねた。

「あなたは戦えるのかな？傷はふさいだけど、あれだけ血を失っちゃってたら…」

ちらりと血の染み というには量の多い血痕に視線をやる桐。

(直径1mに広がったら500ml…だったかな？微妙にそれすら越えちゃってるようにも見えるんだけど…)

なぜか知っていた知識で出血量を目測する青年に、神裂は無然とした表情で答えた。

「それは私を侮っているのですか？確かに不覚を取り、そうせねばしのげない状況に追い込まれましたが、だからといって敵地で自らを無力化するような真似をするはずがないでしょう」

拳をにぎって、開いてみせる。

ガンベルトにさした太刀に手を滑らせてから、神裂は続けた。

「…確かに、万全には程遠いですが。しかしこの程度の苦境での戦いなど、ままあったことです。心配には及びません」

「そ、そうなんだ、それは余計なことを」

言ったね、と続けようとする桐。  
だがそれは、

くう。

という何かの音に遮られた。

(くう…?)

とっさにその音が何かわからずに、桐は答えを求めて神裂の顔を見る。

そこには、なぜかまっかな顔でおなかを押さえた長身の『ねーちゃん』がいた。

「なっ、なんですかその目は?! 私はあなたがこの『領域』に足を踏み入れるずっと前から補給無しで行動を続けていたのですよ!」

その言葉に状況を把握してしまって、桐はできるだけおざなりな返答を投げる。

「あー、いや別に僕には何にも思うことはないよ。うんうん」

「その気のない返事はなんですか! だいたい、思うところがないと

「いづのならなぜ顔を背けるのです?! いいからこちらを」

「触れてはいけない乙女の琴線に触れてしまったのだろうか。がー!」と言ひ募る神裂。

(何かなかったかな…。あ、そういえば…)

歩いてもいないのになぜか特大の地雷を踏み抜いたような気分を味わいながら、桐は上着のポケットを探った。

今朝、ジャッジメントの支部に顔を出した際に初春におすそ分けされた飴玉を取り出して、神裂に差し出す。

「…えっと、良かったら。ほ、ほら、少しでも体調を整えておくのは戦いに臨むものの義務だしね」

「そ、それは確かに。お心遣いに感謝します…」

適当な言葉と共に差し出されたそれを受け取って、神裂は飴玉を口に含んだ。

生まれた沈黙の中、桐は『部屋』の壁面に手を滑らせる。

やはり、触れているのにそこには感触がなかった。

その事実寒気を覚えながら、桐は考えをめぐらせる。

(やっぱり封鎖されてる、か…おかげで邪魔されずに話が出来たんだから良かったんだけど。でも、そういうことならこれから先、神裂さん自身の消耗も頭に入れておいたほうがよさそうだね…)

そのまま、いくつかの方策を練る青年。

その背中に、声がかけられた。

「ああ、そうです。ひとつだけ伺いたいことがあるのですが、よろしいですか?」

「…何かな?」

「やはり、今さらの質問ではあるのですが、なぜあなたは私に協力してくださるのです?」

「なぜって…?」

根本的な質問に、桐は戸惑う。

「いえ、これはあなたの協力が疎ましい、というわけではないのです。こちらとしてもあなたほどの魔術師に助力をいただけるのは非常に助かるのですが」

なおも言い続ける神裂。

だが、桐はその中のある言葉に衝撃を受けていた。

『マジユツシ』

そう呼ばれることに、ひどくしっくり来ている自分に驚く。

(たしかに、マジユツシと呼ばれるのは初めてだけど…。それがな  
んでこんなに…)

馴染んでいるのか。

不思議な感覚が、心の中で飽和するのを感じて、桐は強く頭を振った。

「…どうしたのです？」

同時に聞こえてきた言葉に、我を取り戻す。神裂が、こちらを心配げに見つめていた。

「…ああ、ごめん、何の話だったかな？」

「…ですから、なぜ私に協力してくださるのですか？あの『繭』から出してくださったこともそうですし、あまつさえ、攻撃を仕掛けた私に対して解呪と治癒まで施したのは一体…？」

それは堅物な神裂らしい疑問だった。

（まあ、確かに気にするよね…）

納得しながらも、桐は考えをめぐらせる。

（それでも、『禁書原作』の神裂火織だったから、とは言えないしな…）

上手い結論を見つけ出せずに、青年はあいまいな笑みを浮かべながら言葉を選んだ。

「同じ境遇だったから…ってというのが一番最初かな。次に悪者には見えなかったからって言うのも大きいんじゃないかなって思うよ。まあ最後にはなんとなく、としか言えないけど…とりあえず今、こうやって協力できてるよね？」

だから間違っではないなかった、と言外に言いながら、桐は神裂を正面から見据えた。

直後、先ほど打ち合わせした内容の再確認と、今練り上げた腹案とを彼女に伝える。

「…わかりました。その通りに事態が推移することがあれば、提案には従いましょう」

あっさりとな納得してくれた神裂に感謝しながら、青年は構成を編み上げる。

「助かるよ。…さて、それじゃ、始めようか…！」

「ええ、互いの武運を」

その言葉を耳に、桐は構成を展開した

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

30

Phrase .

「我は消す魔神の足跡」

砕いた結界の外は、高さ10mほどの中空だった。建物で言えば、三階分ほどの高さ。

(やっぱりか…『繭』の時にも投げだされたしね…)

慌てることなく、桐は新たな構成を空間に解き放つ。必要最小限の音量で、彼はそれを発動させた。

「我は跳ぶ、天の銀嶺」

「……………」

重力中和のチカラにより、落下速度を軽減させて着地する桐と、それすら必要とすることなく、身のこなしのみで大地に柔らかく、音もなく降り立つ神裂。

そこは桐が『領域』に迷い込んだ、学園都市の繁華街の一角だった。広く取られたメインストリートの中央に並ぶ二人に、どこか舌足らずな声がかけられる。

「…やっぱりキリくん、すごいね。そんなこともできたんだ?」

変わらない、幼げな口調。

今はそれに少しだけ皮肉を混ぜて、魔術師の少女はつぶやいた。既に顕現している一対の大蛇、『狡猾の蛇』をはべらせて、青年と女魔術師を冷たい表情で見つめる。

(まずは彼の予想通り、というわけですか…)



威嚇音を発する『狡猾の蛇』と対峙しながら、神裂は打ち合わせた桐の言葉を思い出していた。

外れてくれることを願っているし、根拠になっている予想が当たっちゃっていたとしても、僕の自意識過剰って理由の方で外れるかもしれないけど…

そう前置きをしてから、青年はこう言った。

おそらくノーネ…いや、魔術師の少女は僕達が飛び出した先にいるはずだよ。そしてその場合、説得はほぼ無意味だと思う。それでもあなたは彼女と一緒に帰るよう話しかけるのかな？

(当然です。私は彼女をこの『領域』から救うために、ここに来たのですから)

彼に返した言葉をもう一度心中で反復してから、神裂は声を張り上げた。

「私はイギリス清教、『必要悪の教会』(ネセサリウス)所属、神裂火織と申します。薄霞うすかすみ円まどかさんですね。あなたのご両親からの捜索願いによってここに来ました。あなたを保護し、ご家族のもとへとお返しします。術式を解いて、私達と同行してくれませんか？」

その声が聞こえなかったかのように、魔術師の少女は桐に向かって

言葉を発する。

「となりにいるおねえさんもしってるよ。師匠といっしょにいたひとだよな？『アルゴス殺し』をかけて封鎖したってきいてたけど、それがとけちゃってるのは、やっぱりキリくんがやったの？」

「……………」

問われた言葉に、桐は沈黙で応えた。

（この反応、やっぱりか…。あげく神裂さんが説得してるのに姿を現さないってことは『想像通り』だったんだね…）

内心の憤りを努めて表に出さないようにしながら、神裂の説得を静観する。

「今は私が話しているのです、<sup>まどか</sup>円さん。この領域を統べる者に関しては、私達が適切に対処しますのであなたが心配するようなことは

」

（本当なら、拉致被害者とその救出者である、彼女と神裂さんとの接触は何をおいても防がなきゃいけないはずなのに…）

それなのに、『師匠』がそれを許している理由。とつくに思い当たっていたそれを、少女が口に出す。

「おねえさん、マドカって誰のこと？」

その言葉に、神裂だけが驚きに顔を歪めた。

「何を言っているのです…？あなたは薄霞 円さんのはず。身体的特徴も一致している…」

血で汚れた資料でも取り出そうとしたのだろうか。

ポケットを探ろうとする神裂に、白銀のロープを纏った少女はつまらなさそうに言う。

「わたしはね、師匠に『洗淨』してもらったの。いまのわたしはマドカなんかじゃない、ノーネなの。ゆくところもかえるところもない、まっとうな『旅人』なんだよ？」

想像通りの言葉に、桐は僅かに顔をしかめた。事実、その通りだった。

救出される対象が十分な脅威を持った上で救出されることを拒むなら、救出対象と救出者が顔を合わせたところで何の問題もない。絶句する神裂など知らなげに、それより、と『ノーネ』が青年へと向き直る。

「…そんなことより、キリくんはなんにもいつてくれないんだね？」

そこで初めて、桐は口を開いた。

「そうだね。だって、言ってもムダなんだからわかつちやってるからさ」

わかりたくはなかったけど、と付け加えて、青年はノーネを見据えた。

向けられた明確な抗いの意思に反応して、両脇に控える『狡猾の蛇』が威嚇音を上げる。

「…そつかあ。それでもわたしはもうちょっとおはなししたかったよ?。」

編み上げた構成を展開しながら、桐はゆっくりとかえした。

「奇遇だね、僕も終わったらもう少し君の話に付き合おうかなって思ってるんだ。ハンバーガー食べながらの話は、あれはあれで楽しかったしね」

「…そういつてくれるのはうれしいな。でもキリくんはもうここからにげて。『宝物庫』からだってでられたんだから、おなじことをすればきつと『領域』からもにげられるよ。師匠が実験体をほしがってるから、おねえさんはにがしてあげられないけど…」

向けられた幼い敵意を感じて、神裂は七天七刀に右手をすべらせる。同時に、桐の言葉を思い出していた。

あなたの説得は邪魔しないよ。でも、僕が彼女の言葉に応えたら、説得が失敗したと判断して戦闘を選んだ合図だと思つて欲しい。戦闘になつたら、ほぼ間違いなく彼女はあの『蛇』を使ってくる。刃物が『七閃』があつた蛇の鱗に徹らなくて不覚を取つたつて言つただけど、左側の一匹くらいなら牽制をお願いしてもいいよね?

「あれ、彼女が言わなかつたかな?…僕達は、『君を助けに来たんだよ!』?。」

最後の言葉を呪文にして、高威力の空気の破裂が右側の蛇一匹に集中して叩きつけられる。

同時に

「七閃！」

空中を引き裂くワイヤーが七筋、残像しか見えない鋭さで左側の蛇に襲い掛かった。

「キリくん…なんで…『狡猾の蛇』い！」

『それらの攻撃範囲から外れた』ノーネの絶叫よりも早く、空気の破裂とワイヤーの斬撃に抑え込まれた大蛇は鎌首をもたげて、それぞれ、自らを襲撃した者を正確ににらみつけた。

（威力を集中したのに大して効いてない…！）

（やはり刃が徹りませんか…。しかし…）

2者2様の感想を無言のまま浮かべながら、両者は次の一手を出すべく動いた。

桐が構成を編み上げ、展開する。

（ここが『領域』の中というなら、制約はない…！必要なもの、全部使って終わらせる！）

「我は築く、太陽の尖塔…！」

刹那、なんの前触れもなく大蛇が火柱に包まれた。

渦を巻いて轟々と燃え盛る中、苦しげに大蛇が身を擦じらせる。

ノーネを挟んで左側の大蛇も、なぜか神裂を見失ってデタラメに首をふり始めた。

(ピット器官、だっけ？蛇の大部分は熱で相手を見る…要らない知識が役に立ったね…)

心中でつぶやきながら、桐は炎に紛れてノーネへと走り込んだ。構成を編み上げ、滑り込むように彼女の背後に回ると、首筋に手をやる。

「キリく…！？安穩にしず」

驚きながら杖を振り出そうとするノーネ。だが、

(ごめんね、遅いよ)

砂を噛むような感触を飲み込んで、桐は構成にチカラを通した。

「我導くは死呼ぶ掠鳥…」

触れるような距離で、昏倒させるためだけに威力を削り込んだ振動波が放たれる。

「…あつ」

びくん、と撥ね、次いで力の抜けた少女の身体を、桐は丁寧に引き取った。

ほぼ同時に、

「唯閃…！」

斬！と。

神裂の抜刀術が2匹の大蛇の首を一刀のもとに斬り落とす。  
そうして、急速に光の粒子へと還っていく大蛇の屍の下で。

少女から手放された白銀の杖が転がって、アスファルトに乾いた  
音をたてたのだった。

∴。 ∴。

E X T

T O N

大蛇が自らを見失ったことを確認した直後に跳躍。

半瞬の浮遊を経て最適な位置に移動、指の一本に至るまで計算された体勢を整え、真説の『唯閃』にて一対の大蛇の頭を、諸共斬り捨てる。

明らかに人間業ではないその工程を当然のようにこなしながら、神裂は桐の言葉を思い出していた。

彼女は、僕が眠らせるから。

本人はきつと、それを意識してはいなかっただろう。あつさりと吐き出されたように見えながら、その言葉には苦渋が痛々しいほどに纏わりついていた。

（ただ、解呪能力に秀でた魔術師だとばかり思っていました。私の七閃を凌いだことといい、先のあの判断といい、認識を改める必要がありそうですね…）

少女を抱きとめる青年を眼下に置いたのち、神裂は地面に降り立った。

衝撃を殺す過程で、くらり、と見当識がぶれるのを感じる。フラつく身体。



(めまいが…?!)

「……っ！」

息を吸い、反射的に姿勢の保持に全神経を傾ける神裂。

細い糸を歩くような拮抗の後に、なんとか身体は、意思に従ってく  
れた。

素知らぬふりをしながらちらりと、少女を抱きとめている青年を見  
やる。

(どうやら、気づかれてはいないようですね。しかし、血を失いすぎ  
ましたか。確かに力がいりづらいつとは感じていましたが、これ  
ほどまでに消耗しているとは予想外でした。『唯閃』の使用に影響  
がでなければ良いのですが…)

体調の把握と、願望にもなっていない思考を走らせる。

影響は、あるに決まっていた。

『唯閃』

神裂に許されたチカラのすべてを細密に、繊細に組み上げた、一種  
の到達点。

『聖人』という、生身の人間の限界を超えた性質を、余すところな  
く発揮すべく昇華された術式構造。

それは当然のように、前提レベルで万全のコンディションを要求す  
る。

それに逆らうのは、自らを削るのと同義だった。

にもかかわらず、露ほどもそれを温存しようとは思わないまま、彼  
女は歳の近い魔術師にふりかえった。

そして、そのまま歩み寄る。

「どつやら、無事に出ることは出来たようですね」

彼らの足元には、倒された『狡猾の蛇』が還元された、光の粒子を吸収しつづける杖。

神裂がそれに手を伸ばそうとするのを、青年は遮った。

「多分、これは触らないほうがいいよ。回収するにしても後にしておいたほうがいい」

言葉の終わりにそれを無造作に蹴り飛ばすと、少女をゆっくりと抱きなおす。

線の細いそのちいさな身体は、彼にとってひどく軽かった。

「……」

(今は何かを思うときじゃない…)

浮かんだ苛立ちと自責を噛み殺し、辺りに注意を払いながら、桐は口を開いた。

「彼女を隠すのはここじゃ無理だろうけど。できればどこかに寝かせてあげたいね。だけど…」

言いかけた言葉を引き取って、神裂は答える。

「ええ、もう気を抜く暇はありません。すでにここは彼らの『領域』なので…!」

その言葉に応えるかのように。

彼らの死角にある店先を突き破って現れた、『ノーネ』の扱うそれより一回り以上大きな一対の大蛇が、桐達に向かって襲い掛かった。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

3  
1

P h a s e .

「我は呼ぶ…」

当然、それは予想していた。

『蛇』に半瞬、視線を走らせ、それだけで攻撃態勢を整える。

ノーネを支える腕を一本に減らし、空けた腕を掲げて、桐は叫んだ。

「破裂の姉妹！」

最速で編み上げた構成は、しかし破綻することなく発動した。空気がひしゃげ、無差別な衝撃波がそこら中で破裂音をあげる。

(これでダメージが与えられるとは思えない…だけど！)

衝撃波の束は狙い通り、大蛇たちの軌道を僅かにそらすことに成功する。

抱えた少女ごと後退しながら、桐は大蛇に向かって走りこむ神裂をその視界に映した。

流れてきた涼しげな声が、彼の耳朶を叩く。

「とりあえず潰します。下がって行ってください…」

短い気合とともに、様々な角度で縦横無尽に奔る、七つの斬撃。

ワイヤーを使った『七閃』は、いつせいに大蛇達へと襲い掛かった。神裂の言葉に従って下がり続けながら、桐は思う。

(『七閃』(それ)じゃ、足止めにしかないんじゃない…)

事実、放たれた斬撃はただのひとつも『蛇』の鱗を徹すことなく、その表面に浅い傷のみを刻んでいた。

だが突如、大蛇の一匹を紅蓮の炎が埋め尽くす。

「炎が有効なのは、先程見せていただきました…！」

気がつく。

空中を引き裂くワイヤーの軌跡が、三次元的な魔方陣を描いていた。

糸状の術具により立体的な魔方陣を編む、禁系結界。

炎は一撃で終わることなく二発、三発と爆発が続く。

燃え盛る業火に、大蛇が悶える。

(そして、口の中まで刃が徹らないというわけではないのでしょうか！)

引き伸ばされた瞬間の中。

七つの斬撃のうち、一際鋭く双筋の斬撃がひらめいて、敵を見失った大蛇のそれぞれの口へと飛び込む。

吹き飛ばす一対の、蛇の上あご。

速やかに死体へと変えられて、大蛇は濁った光へと姿を変えていった。

そのままその光は、まるでなにかに呼ばれたかのようにある方向へと一斉に流れていく。

少女を丁寧にあすファルトに寝かせながら、桐は自らの予想に確信を深めていた。

(この雑な使い方…。思った通り、『狡猾の蛇』は相当燃費のいい、『軽い』術式だったみたいだね…)

もちろん、確信に近いものはあった。

この『領域』に迷い込んですぐ桐達を襲った、『狡猾の蛇』。

ノーネは師匠が、『片付けなかった』と言っていた。

それは裏を返せば、『片付ける必要がないほど、取るに足りないもの』と示しているのと同じことだ。

(スタンドアロンで使役できる、戦闘にはかなり勝手の良い使い魔だと思っただけだな…。でも、ノーネが使った時も大して疲れた様子はない…)

そして本当に『軽い』術式なら、行使を躊躇う理由はない。休ませない、という意味でもすぐに次が来てもおかしくなかった。

「神裂さん……」

すでに彼女には、その考えを説明していた。併せて対策として、示し合わせたことも含めて。

「わかっています。『仕掛けるのは、次に』。あなたも警戒は怠らないでください」

こうなつては、ノーネを離れた場所に移動させるリスクは取れなかった。

こちらは示し合わせるまでもなく、魔術師の少女を挟んで、桐と神裂はメイנסトリートの中央に背中合わせで立つ。

（師匠の狙いは僕達だ……。他に遠隔の術式を仕掛けてこない限り、奴の取りうる手は二つ……）

なにか『構成』を仕掛けられてはいないか、桐は意識を切らずに監視を続けた。

高められた集中に、自らの心臓の音が聞こえる。

痛いくらいに張り詰めた、束の間の静寂。

最初に『領域』に來た時のように青年は辺りを探りながら、思考を走らせる。

（直接襲撃するか、『軽い』術式でじわじわと削っていくかだ……）

ゆっくりと、細密に。

ひとつの構成を編み上げていく。

(こちらには『聖人』がいる…。軽はずみに正面から襲撃はしてこないはず…。それなら…。！)

「ッ…来ましたっ!」

戦闘態勢に移ろうとする刀使いを、桐は片手で制した。

「…今度は僕がやるよ」

つぶやいて、大蛇に向かって駆け出す。

編み上げた、初めて使う構成を展開し、桐は一对の大蛇のうち、近いほうへと目をやった。

「我は見る、混沌の姫!」

あたかも、黒いドレスをまとった貴婦人が抱きつくかのように。

影のような超重力の渦が大蛇の身体を取り巻き、その体躯を問答無用でアスファルトへとたたきつぶす。

沈没する船のような格好で倒れる大蛇をもう一方の足止めに使いなから、自らも足を止めた桐は、あらためて破壊的な構成を編み上げていた。

総毛立つような寒気と、沸き立つような熱を全身に感じながら、切り札の一枚を解き放つ。

「我は砕く原始の静寂!!」

桐の前方、大蛇を巻き込んだすべての空間が、歪んで跳ねた。

それに伴い、狂った空間で力場が爆砕する。

起きた爆砕は波紋となって連鎖し、対象となった空間を破壊しつく

して、やがて霧散していった。

粉々の肉塊が迅速に濁った光の粒子へと還っていく。

その変化の始まりを見届けてから桐は振り返って、告げた。

「それじゃあ、頼めるかな？僕もすぐに追いかけるから」

おそらく加勢をするタイミングを伺うつもりだったのだろう。

刀に手をやったままの神裂は、どこか呆然とした表情だったが、顔を引き締めて応えた。

「…わかりました、手はずどおりに」

長身の体躯が地面を蹴り、人間ばなれした速度で隣を駆け抜けていく。

その余波の風を浴びながら、桐は彼女を見送った。

軽くない消耗を感じながらも、あえて第二波を一人で片付けた理由と、神裂への感嘆を脳裏に滑らせる。

(失血で顔真っ青だったつていうのに、あれだけ早く動けるんだね…)

『封鎖』の外、日光のもとで見た神裂の顔は、素人が見てわかるほど蒼白になっていた。

(やっぱり、時間はかけられないか…)

時間的な制約を意識しながら、神裂と打ち合わせた自らの言葉を、桐はあらためて反復する。



あの『狡猾の蛇』は、倒されると光の粒になって術者の杖に戻るみたいなんだ。『狡猾の蛇』で奴が姿を見せずにこちらを削りに来た場合、倒した上でその粒子を追いかければ奴にたどり着ける。…僕に追いつける速度じゃないけど、神裂さんなら多分いけると思うんだ。接敵したら狼煙のつもりで派手に暴れてほしい。それを目印にして駆けつけるよ。もちろん一人で終わるのなら、そうしてくれるといいしね。

濁った光が戻っていった先 神裂が走っていった方向を見据えて、桐はそれを追いかけようと走り出した。

(ノーネを置いていくのは気が進まないけど…)

ちらりとよぎった思考に従って、視線を足元に横たわる少女へと向ける。

そんな青年を、

何かが、撥ね飛ばした。

「…っ!？」

刹那の瞬間に、思考と行動が空転する。

遅れて桐は、自分が吹き飛んでいることに気付いた。

対処のための構成を編むこともままならないまま、撥ねられた慣性に従って、固いアスファルトをバウンドする青年。

「がっ…あっ…!!」

衝撃に、肺の中の空気が無意味なうめきとなって喉からこぼれる。そしてその身体は、どこかの店先にあった衣料品のワゴンに突っ込むことで、ようやく止まった。

無理矢理に押し固められたような痛みにも、桐はのたうつことも出来ずに全身を震わせる。

口腔に広がっていく、鉄錆のような血の味。

(……な、何が…何が起こったんだ?!)

状況が把握できない。

衝撃から立ち直ることが出来ないまま、みっともなく、身体を起こそうとする青年。

そうしてもがく桐に、平然とした声がかげられた。

「ふむ。『翼の靴』の力場で撫でただけでその様かね。随分と脆いのだな、君は」

かろうじて視線だけをあげることに成功して、桐は自分の予想を裏切る姿をそこに捉えた。

くすんだ白いローブに、同じくどこかにじんだ印象をつける金髪。

杖こそその手にはないが、それはまごうことなく、『ヘルメスを顕す者』たる、壮年の魔術師だった。

(後ろでふんぞり返ってくれてれば追い込めたのに、わざわざこのタイミングでこっちに出て来たのか…!)

力の入らない身体に、埒もない感想が浮かぶ。

初めて自分を見る視線に気付いたかのように、魔術師は手を広げて見せた。

「杖と共に私がいなかったのはそんなに不思議かね？『届け』」  
たった一音節。

その言葉だけで、彼の手に白銀の杖が顕れる。

『杖』を手に、魔術師は愉しげに言葉を響かせた。

「おや。『狡猾の蛇』は回収しきれなかったようだが…構うまい。  
彼の杖は此の手に在り」

朗々とした声が響き、魔術師の杖に、くすんだ輝きが宿る。

「我はヘルメスを顕す者なり。其は伝令の神」

第2句とともに、濁った光が辺りを満たした。

「報せを閉じよ、『辿り着かない使者』」

詠唱の完成とともに、濁った光が桐と魔術師、そしてノーネがいる  
この場を『切り取る』。

封鎖の術式。

「さて、各個撃破は戦術の基本だったな」

隔離された世界で、杖持つ魔術師は確かに、愉しげに嗤った。

E  
X  
T

∴ ∴

T  
O  
N

自身のスピードによって起こる空気抵抗に、常に強い風が吹きつけているような錯覚を覚えていた。

路地を駆ける。

屋根を跳ぶ。

壁を足場にする。

『聖痕』（ステイグマ）を開放し、文字通り人間離れた機動をもつて濁った光を追う『聖人』神裂。

だがその本人は、その速度にもかかわらず、もどかしさを感じていた。

（遅い…！）

思い通りに動いてくれない身体に、憤る。

捕まっている間に失った血の代償は、性能の低下という形ではつきりと現れてしまっていた。

『聖人』としての能力を開放している現状、全力を出せば確かに、平時と同じ速度で踏み込むことは出来るだろう。

だが、それはその先の一步が保証されない、『捨て身』での速度になってしまう。

身体は、すでに悲鳴を上げていた。

それを斟酌することなく、現状でのぎりぎりのスペックを引き出し

ながら、神裂は駆ける。

（一度潰した後、『大蛇』が再起動してこちらへと襲ってくるまでの『間』は、けして長くはなかったはずですよ…おそらく、あと少しで…）

柄を保持したままの愛刀を握る力を強めて、神裂は急制動を駆けながら方向転換した。  
角を曲がった先。

建物の中に吸い込まれていく濁った光を見つけ、

（そこですか！）

魔術師ごと狩りとする勢いで『七閃』を発動させる。

太陽光の乱反射がなければ決して見えないほど細い鋼線が、明確な意思を乗せて建物へと襲い掛かった。

ドツバアアアツ！と扉ごとその面の壁を全て細切れにして、『七閃』は建物の内部を外気に触れさせる。  
そして神裂の視界に映ったのは、

濁った光を吸収し続ける、『ケーリュケイオン』という名を持つ、  
白銀の杖『だけ』だった。

（そんな、杖だけ…?!）

内心驚愕しながらも、身体の挙動にはそれを一筋もあらわすことなく、神裂は飛び込んだ勢いのままに『唯閃』のプロセスへと移った。  
彼女が扱う技術の中、『真説』の名が冠された斬撃は白銀の杖に迫って

なんの手ごたえもなく、すり抜ける。

(幻術…？いえ、『転移』?!)

もはや全壊した建物を背に、神裂は刀を支えに振り返った。

「たばかられましたか…。早く戻らなければ…。これでは『逆』になっってしまう」

めまいをこらえてそうつぶやくと、神裂は大地を蹴った。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

32

Phase .

(しまった…。これは完全に僕のミスだ…)

魔術によって、『切り取られ』た空間の中。

自分の失策を認めながらの数回の挑戦の後、桐は衝撃からかろうじ

て立ち直っていく自分の神経を確認する。

(なんとか…まだ身体は動く…)

這い出すように半壊したワゴンから抜け出したところで、朗々とした声が耳に響いた。

「さて、あの『封鎖』より抜け出せるとは。なかなか興味深いものだ。是非ともその術式を開陳して欲しいところだが…」

(好きなことを…！)

内心で毒づきながら、身体を起こすと、ひどい痛みがはしった。

吹き飛ばされた際、左腕をやすりのようにアスファルトで削ったのだろう。

ぼろぼろになったジャケットの感触と、擦過傷というには深い傷から来る痛み能耐えながら、青年は構成を編む。

「我は癒す斜陽の傷痕…」

すっと、傷が消えるのを感じて、桐はあらためて顔をあげた。

『切り取られ』た空間に、魔術師と青年、そして寝かされた少女が一人。

(ここから『あの手』に持っていくのは…無理だね、ノーネがいる)

対峙を続けながら、桐はノーネが倒れているほうへと、ゆっくりと歩み寄った。

当然、それに気付いたのだろう。

壮年の男の声が、『封鎖』された場に響く。



「ふむ、それほどまでにその『ナナシ』が気になるかね？」

「『名無し』…?」

「ああ、それは『ノーネーム』、という呼び名の方を気に入っていたか」

なんのことはない、とでもいうように興味なくつぶやかれた言葉。脳裏に、言いづらそうに口を開いた少女の姿がよみがえる。

(「…うん、そう。師匠が、『ノーネ』と『ナナ』。どちらからえらべってつけてくれたの」)

唐突に彼女の名前の意味を突きつけられて、桐は激昂しようとする自分を抑えた。

(安い言葉だ、苛立つな…。それに、なんとなく予想していたことだ、冷静でいないと。まずは…)

無言のまま構成を編み上げ、展開する。

魔術師に言葉を返すことなく、最初に叫んだのは、『封鎖』を破るための呪文だった。

「我は消す、魔神の足跡!!」

ガラスが破れるような感触と共に、桐は空中に投げ出される。

(な…!地面ごと、『切り取って』移動していた…?!)

なすすべは、なかった。

それでも、無防備に落ちようとする傍らのノーネを抱きしめながら、3メートルほどの距離を一緒に落下する。

半瞬にも満たない、ぞっとするような浮遊感の後に、

「あ…ぐうつ…！」

息の詰まるような、衝撃と激痛が桐を苛む。

少女をかばい、あらためてアスファルトに叩きつけられる青年を見下ろしながら、魔術師は楽しげに呟いた。

「そう、それだ。その術式、盗ませてもらおう」

杖を掲げる魔術師。

(…とめ…ないとっ！)

認識できる自分を、振り絞る。

濁った光がこぼれるのを見て、桐はあわせて構成を編んだ。

「其は盗賊の神。得難き智恵を我が物とせん、『盗人の教示』」

「我退ける、じゃじゃ馬の舞い！」

展開した魔術師の術式。その『構成』が、桐の紡いだチカラによってかき乱されて消える。

「これは…?!」

瞠目する魔術師に、青年はどこかで聞いた言葉で皮肉を投げた。

苛立ちを毒にして、隠す事なくそれを混ぜ込む。

「…ただの小技だよ。でも、箱入り息子さんには驚きだったかな」

「なんだと…？」

「あんたのタネは割れてるって言っているんだよ。箱の中で『杖』に使われる人生は楽しかったかな!？」

言葉と共に、魔術師に向かって桐は大きな火柱を発生させた。しかし、『翼の靴』の力場のせいなのか、苦もなく防がれる。

(それでも…!)

「目くらましか、小賢しい!」

同時に身を起こし、走り込む桐に、魔術師は杖を振り向ける。

だが、その時には桐は同じ構成を編み上げていた。

「其は雷神の命。眠りの淵にて斬刑に処す、『アルゴス殺し』!」

「ムダだ!」

叫びを呪文に、あらためて無効化の構成を撃つ。

再び、かき乱され、霧散する構成。

踏み込んだ零距离で、桐は拳を握る。

(この距離なら…!)

だが、杖が眼前に迫った。

魔術の行使ではなく、純粹に打突を狙った動き。咄嗟に打点をはずすも、重い衝撃が桐を襲う。

「つ…つう…！」

「『翼の靴』よ！」

唐突に正面の魔術師が消える。

ほぼ同時に、巻き込むような打撃が桐の側面を叩いた。

(…！力場を使って高速移動してきた…！？)

自分で反対方向へと転がって衝撃を逃がしながら、さらに後ろへと跳ぶ。

「くうつ…！」

打たれた箇所から今さらのように広がっていく痛みと、距離をとらざるを得なかった自分の両方に齒噛みしながら、桐はまた、無効化のための構成を編みながら顔をあげる。

そこには、移動用術式で浮かび上がる魔術師が在った。

余裕に満ちた表情で、男はつぶやく。

「よく私に近づいた、というところか。…だが、私はこれでも研究熱心でね。杖術、といったか。君のようなものを払うのにちょうどいい術だったな。そういえば、この国のものだっただろう？」

「得意げに語らないで欲しいな。それにしたって情報を『読み込んでる』だけだろ…？」

変わらず毒を吐く口調で、揶揄する桐。  
その言葉に、魔術師は見下した表情を隠そうともせず、ゆっくりと首をかしげた。

「そういえば、先ほど何かを口走っていたな。タネは割れている、だったか？面白い、言ってみるがいい」

（奇襲をかけるにも、この状況じゃ厳しい…ここは『揺らして』、少しでもチャンスを作らないと…）

これまでの知識から、『ヘルメスを顕す者』にとって出来るだけ致命的な言葉を選んで組み立てる。

苦しげに、桐はその言葉を投げつけた。

「あなたたちの魔術。…要はフォーマツトと、インストールなんだ。その杖は人格を『初期化』して、術式を『導入』しているだけ…。そうでもしなきゃ、押し付けられた生き方に沿って従順に『術式』を後世に遺す人間なんかいないし、弟子の名前も覚える気がない師匠の下で、三ヶ月やそこらで神話レベルの魔術を扱える魔術師が生まれるわけがない！！」

初めて壮年の男から、薄笑いが消える。

青年の言葉に、魔術師はゆっくりとうなずいて見せた。

その杖に、何処かから流れてきた濁った光の粒子が吸収される。

「なるほど、その洞察、見事だな。自らそこに至れたというのなら、先の大言もあながち的外れでもなかったか。だがそれがわかったところでどうにもなるまい。そして…」

桐の直上に、一際巨大な一対の大蛇が現れる。

それに光が遮られ、辺りがさっと暗くなった。

「潰れる。不愉快だ」

重力に従って あるいはそれ以外の力を加えられて 落下を始める  
巨大な『狡猾の蛇』。

青年と少女を押し潰すには十分にすぎる質量が、隙間なく迫って、

青年の思考が加速する。

（範囲が広すぎる、ノーネを連れて脱出は出来ない… 『太陽の尖塔』  
で『蛇』にこちらを見失わせても事態は変わらない… なにか、指向  
性を持つて大威力で撃ち抜ける構成を…！！）

結論が出る前に、桐は右掌を自らへと落ちくる蛇に向かって掲げて  
いた。

意識せず、文字通りの反射で、瞬時に、だが緻密に編み上げられて  
いく構成。

「我は」

喉から、声が滑り出る。

それはひどく慣れ親しんだ行動の行使に似ていた。そして

「我は放つ光の白刃！」

渾身の威力、出せるすべてのチカラを制御することなく注ぎ込まれ  
た、純白の熱衝撃波が解き放たれた。

桐の掌より、天空へと撃ち出される白光の奔流。

意識のたがが飛ぶほどの、衝撃が身体を貫く。

それは物理的なものではなく、自らがチカラを紡ぎだす、その意思の奔流だった。

視界がまばゆい光に包まれ、発生した熱はすべてを溶かし、衝撃の波がその残骸を押し流していく。

その余波で 真実、小さな余波だったのだが 桐のジャケットの袖口が沸騰し、燃え上がって爆ぜた。

光が治まったところで、強引に両袖が使い物にならなくなったジャケットを脱ぎ、そのまま適当に放り捨てる。

続けて握り締めるのは、最後の一片のような意識。

(…これで…狼煙には充分だよね…)

残ったことが奇跡だったようなそれを振り絞って、桐は魔術師に殴りかかった。

「『翼の靴』よ…」

「させない！」

移動のため、もしくは攻撃のためだったのだろうか。

発動しようとした術式を、編み上げた構成によって一言で斬り捨てて、バランスを崩した魔術師に向かっていく。

「貴様…！」

青年に向かって、鋭い打突が繰り出された。

杖術、といったか。

人を叩き、制し、潰す為に編み上げられた武術。

躊躇なく向けられたそれに対して、彼は動いていた。

踏み込みを半歩、深く。

向けられた攻撃の間合いをはずして、致死性のそれをいなす。

風切り音が耳元を掠める。

踏み込んだ足裏がアスファルトを掴む。

近接戦に特化した、体術。

それが扱えることに一筋の疑問を感じることもなく、桐はその『技術』を行使した。

左腕、円を描くように向けられた杖をどけて、体をかわす相手に倒れ込むように間合いを詰める。

死角からの打突が、桐の急所に迫った。

(距離を開けちゃダメだ…！)

身体を捻り、起こした体重移動を次の動きにつなぐ。

何処かから汲み上げた知識が命ずるままに身体を動かし、杖を振るう魔術師に彼は追隨する。

(いや、違う…！)

魔術師に仕掛け続けながら、浮かんだイメージを桐は否定した。

(何処かから汲み上げてるんじゃない、自分に染み付いているんだ…！…！)

いつかの、どこかで。



反復を続けた記憶が、確かにこの身に宿っていることを感じる。

左腕を前に、右肩を後ろに。

数瞬後には忘れていたような感慨を意識の底に滑らせながら、桐は右足に体重を乗せた。

変わらず、距離は零のまま。

振り出された杖が、見当違いの軌跡を描くのを視界の端に収めながら、

魔術師の胴体に右拳を添える。

「安穩に沈め……」

それが杖を振った目的だったのだろう。

魔術の濁った光が、視界の隅に輝く。

それに頓着しないまま、桐は声もなく、短い息吹を発した。

そうして放たれる

寸打。

ズダンッ！という音と共に。

零距离の打撃が、魔術師の身体をくの字にへし折った。

同時にほどけた魔術の残滓が、桐に触れてその意識を塞ごうとする。抗いようのない睡魔に侵されながらも、倒れ込みながら、青年は魔術師の『杖』を思い切り空へと蹴り上げた。

その反動で、地面に身体を投げ出した姿勢のまま、どこかに向かつてぼつりとつぶやく。

「…あとは、頼むよ……！」

応えたのは、涼やかな声だった。

「承知しました！」

長身の人影が場に飛び出す。

ひらめく黒髪。

優雅に過ぎるその影は、一足飛びに虚空にある杖へと向かい、しなやかに跳ねた。そして

「salver000（救われぬものに救いの手を）！！」

唯閃。

音もなく。

『杖』を叩き斬って、神裂が着地する。

虚空には、真つ二つになった状態からさらに細かく碎け散る、白銀の『杖』。

それは透明な光の粒子へと変化して、辺りを白く染め上げたのだっ

E  
X  
T

∴ ∴

た。

T  
O  
N

斬られて形を失った杖の燐光に囲まれ、白く照らし上げられた空間。一向に消えることなく、この場に漂い続けるそれを訝しげに思いながら、神裂はぴくりとも動かない桐へと駆け寄る。

（まさか、今の戦闘で深手を…?!）

致命傷を負いながらも、平時と同じ、いや、それ以上の力をもって戦いを続ける者は稀にいる。

終盤のみではあるが、青年の魔術師との近接戦をその眼で見ることになった神裂にとって、それは決してありえないことではないように思えた。

彼の首の下に手を差し入れてその身体を抱き起こす。

そして神裂は、それが無駄な心配だったことを知った。

「すう…すう…」

思った以上に幼げな表情で、のんきささえ感じるほど平和な顔で眠っている青年に、神裂はそこはかとなない怒りを感じて彼をしつかりと抱き起こした。

（一瞬でも心配した私が馬鹿みたいではありませんか…!）

沸いてきた感情のまま、『聖人』の握力で、彼の肩をがしつと握り締める。

「…すう…す…ん…あ、ああ…??」

穏やかな彼の表情が途端に苦悶に満ちたものになり、

「…ってあいたたたたつ！！痛い痛い、なんか痛い…！」

そうして、彼は覚醒した。

ふるふるとかぶりを振る、視界の端ににじむのは涙だろうか。

「お目覚めですか？」

しれっとした顔をして立ち上がる神裂に桐は半泣きで振り返る。

「なんか今肩が掴まれてたって言うか、むしろ今さっきまで凄い力で絞られてた感じがしてとっても痛いんだけど心当たりとかないな？」

「…さあ、存じませんが。それよりも戦場で眠りこけるといのは頂けませんね。危機感が足りないのではないですか」

ちくりと刺さった小言に、桐は不満げに言い返した。

「発動前に潰したとはいえ、相手の魔術をもらっちゃったんだから仕方ないじゃないか…。というか、彼らの魔術と僕って、なにか致命的に相性が悪い気がするんだよね…」

「そんなことより、これはどういうことだと思いますか？」

つぶやく青年の言葉を取るに足りないものだど認識した神裂は、取り合うことなく目前で起こっている事象に注意を促した。

「『唯閃』で叩き斬ったら、このように変化したのですが」  
ぼんやりとした燐光が立ち込め、辺りを白く染め上げている。  
なぜかまぶしくは感じないそれに意識をふりわけて、桐は気がついたことを心中にあげた。

(濁っていた、あの感じが消えてるね。それにひどく弱々しくなっているように見えるけど…)

次に眼を凝らして、『構成』を視<sup>み</sup>る。

(『構成』自体もときれとぎれというか…薄くなってる感じがする…)

あれほど禍々しかった『構成』が、見る影もなく弱体化しているのを確認して、桐は神裂に言った。

「どういづことかはわからないけど、さしあたっての危険はなさそう…だね」

「…確かに。あれほど溢れていた『天使の力』(テレズマ)が今はほとんど感じられません。無力化したのは間違いなさそうですが…」

検分した情報を交換する二人。  
だが、

「…危険はない…?…無力化しただと…この私を…!?!」

二人の会話に、言葉が挟まれる。

「「…?!」」

神裂たちが、その言葉の主へと視線を投げると。  
それほど離れていない場所で地面に伏していた魔術師が、身体を起  
こしてその手を掲げていた。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

33

Phase .

342

苦しげに身を起こし、掌を虚空へと掲げる壮年の魔術師。  
それを神裂は冷ややかに、桐はひどく平静に見つめていた。

（最後の一瞬、確かに手加減はしたけど、並の人間なら悶絶ものの  
内臓打ちだったはずなんだけど…。研究熱心だっつて自分で言っ  
ていたけど、意外と身体を鍛えていたのかもしれないね…）

埒のない感想を脳裏に浮かべながら、あらためて戦闘が終わったことを桐は実感する。

「…か、彼の…杖、はこの手…に、在り…」

途切れ途切れの詠唱に反応したのか、その場に漂う燐光がゆったりと魔術師の掌へと集まっていった。

表情を変えないままそれを視ながら、桐は確認の意味を込めて口を開く。

「…神裂さん？」

怜悯な表情のまま。

神裂は青年の意図を理解して、ことさら無感動に言った。

「…ええ、あなたが察しているとおりです。弱体化したなりに、『天使の力』（テレズマ）は集まっているようですが、制御のほとんどを『杖』に頼っていたのでしょうか。あれでは術式の体を為していません」

冷たく聞こえるその言葉に、憐憫に似たものが混ざっているのを感じて、桐は視線だけで神裂の横顔を見つめた。

どこかいたたまれないものを感じながら、自らを癒すための構成を編み上げる。

「我は癒す斜陽の傷痕」

つぶやいて、桐はチカラを発動させた。

先に放った光熱衝撃波の余波に焼かれ、火傷だらけになっていた右手が、すっと癒される。



そうして生まれたつやつやとした、真新しい皮膚を握って、開く。

(こんなもの、かな…)

皮膚の下に残った微妙な痛みは無視して、桐は重い身体を無理やりに立ち上がらせた。

ノーネの様子を見るために、彼女の方へと足を向ける。

それに続く神裂。

(『封鎖』を解いた後、クッションになってからそのままだったしね。大きな怪我はしてないと思うんだけど…)

「私を…私を無視するか…！」

かえりみられる事なく、打ち捨てられたのがひどく業腹だったのだろうか。

魔術師は立ち上がると、意外なほどのすばやさで桐達とは反対側の地面に向かって跳んだ。

そうして男が拾い上げた『何か』を見て、桐は声には出さずに納得する。

(なるほど…。それである時、地面ごと辺りを『切り取った』んだね…。僕の相手をしながら、『杖』の回収も念頭に置いていたってコトか。でも…)

「はっ、はは！これさえ、これさえあれば…！」

魔術師が拾い上げたのは、翼と蛇の意匠が掘りこまれた、『白銀の杖』だった。

青年が取り上げ、その辺りに蹴って転がした、ノーネの杖。

思わず臨戦態勢を取る神裂を、伸ばした片手で制して、桐は温度の低い目で騒ぐ魔術師を見つめる。

「彼の杖はこの手に…」

「やめたほうがいいよ」

詠唱を始めた魔術師に、青年はひどく鋭く言葉を差し込んだ。身体にわだかまる痛みも、消耗によるひどい疲れも飲み込んで、意識して平然とした表情を作る。

(これも関わったものの責任、だよな…)

気圧されるように詠唱を止めた魔術師に、桐は物憂げに口を開いた。

「その『杖』があんたを認めるとは思えないし、乗り換えるような真似をするなら、今ここにある『杖だったもの』すらも、さすがにそこであんたを見限るだろうしね。早い話が」

構成を編む事なく、すうつと指をあげて壮年の男を、桐は指し示し

「あんたは、『ヘルメスを顕す者』に、向いてないんだ」

致命的な言葉を投げかけた。

「…なに…?」

魔術師が杖を取り落とす事なく、力なく下ろしたのを見ながら、桐

は内心で舌打ちする。

（まだ足りないか…。落としてくれれば、チェックメイトだったんだけどな…）

それをカケラも表に出す事なく、桐は神裂に言葉を振った。

「神裂さん、『ヘルメスを顕す者』を扱う魔術師が杖を失う理由は、命を落とすか、その価値をなくすこと、でよかったよね」

「え、ええ。私はそう聞いていますが…」

「じゃあ話は簡単だね。あんたはもう…いや、僕と会ったときにはすでに、『ヘルメスを顕す者』としての価値を失いかけていたんだ」

「何を、何を言っている…!?!」

激昂する魔術師に、桐はあくまで静かに告げる。

「ノーネが扱っていた術は綺麗なものだったのに、あんたの術式はひどく濁っていたね。別に意図してそうしていたわけじゃないんだろっ?」

「馬鹿な、そのような理由で私が『ヘルメスを顕す者』として相応しくないだ…」

「そうは言っていないよ。むしろ色に影響が出たのは結果でしかないんじゃないかなって僕は思ってるんだ。僕が聞いた『ヘルメスを顕す者』の存在意義は、偶発的に出来てしまった『完成された魔術』を『隠匿し、後世に遺す』こと…」

一時、言葉を切つて桐は魔術師へと歩み寄る。  
冷やかな視線を向けたまま、

「なのに何故、『ヘルメスを顕す者』以外の術式にあんたは興味を  
持ったのかな？」

彼にとって、本当に取り返しのつかない言葉を押し付けた。  
流れるように、青年は続ける。

「なぜ『錬金術師の術式』を欲しがった？なぜ、『杖術』なんて余  
技を身につけた？なぜ、あんたたちの『術式』を知った僕を隠匿の  
ためにその場で完全に排除しなかったんだ？初めから矛盾してるん  
だよ。本来在るべき立ち位置である、情報の扱いに特化していれば  
そう、あんたが真実、『ヘルメスを顕す者』だったのなら」

呆然とした魔術師から杖を取り上げ、突きつける。

「僕たちは、絶対に勝てなかったんだ」

その言葉に、魔術師はひざを追って座り込んだ。

(…くう……?!)

同時に、握った手に『杖』からの圧力を感じて桐はその杖を手放す。  
アスファルトに、乾いた音をたてる白銀の杖。

『洗淨』されかけたそぶりも見せずに、青年は話を続けた。

「…フォーマットが上手くいかなかったのか、あんた自身の特性が向いていなかったのかはわからないけどね。あんたは杖を持っていた時点ですら、『ヘルメスを顕す者』に向いてなかったんだ。杖をほぼ失った今では、正味な話、かける言葉も浮かばない」

（あれはきついね、あんなものは素手で触れるものじゃないな。さて、それはそれとして、そろそろまとめよう…）

打算に似た思考を走らせながら、話の落としどころへの道筋を探る。さも今思いついたかのように、桐は結論を一方的に投げつけた。

「さて、納得してもらえたとところで、提案するね。あんたには消えて欲しいと思うんだけど、どうかな？」

「…っ」

「それは…！どういうことですか?!」

さすがに聞き咎めたのだろう。

印象付けるために強めの言葉を放った桐に、神裂は気色ばむ。

その迫力に内心冷や汗を流しながらも、青年は淡々と説明した。

「ああ、勘違いしないで欲しいな。僕が殺すって言っているわけじゃないんだ。もちろん神裂さんにどうこうしてもらおうって思っているわけでもないよ。ノーネは…彼女には復讐の権利くらいあると思うけど、それもさせるつもりはないしね」

ぱたぱたと手を振って話された言葉の真意を掴めずに、神裂は軽く

混乱する。

いつの間にか、すべてを見通しているように振舞っている青年。平凡なその容姿に、どれほどの能力を秘めているのか。

全体を見通せない歯がゆさに、神裂はひねりのない、直接的な質問を選んだ。

「それでは、彼をどうするといのです？」

「決まってるよ、逃がしてあげるんだ」

これ以上ないほど簡潔な言葉をもって桐は神裂に応える。

それだけでは足りないかと、青年は補足を加えた。

「砕けた『杖』はもうほとんどチカラを残していない。せいぜいが小規模な『領域』を維持するのが関の山つてところのはずだ。詠唱に反応してその程度じゃ、それを解けば再び『領域』を展開するとすら不可能だろうね。違うかな？」

悔しげに歪む魔術師の表情を答えにして、桐は結んだ。

「僕は、あんたを逃がすよ。『旅人』として、生きることまでは奪わない。ただ、理解してくれると嬉しいな？」

また、指先をすうつとあげて、桐は魔術師を指差した。

「僕はあるが、誰かに迷惑をかけることを許さない。これだけを理解していてくれ。もし、似たような揉め事を起こしたなら、僕は必ず『現れる』。そうなった時、そんな姿になってまであんたに従う『杖』は、どうなるのかな……」

構成を編むことのないまま、くちびるに、言葉をのせる。

「『我退ける…』！」

「……っ?!」

その詠唱におびえる魔術師を確認してから、桐は腕を下ろして軽く首をかしげて見せた。

「けっケーリユケイオン」よ、報せを閉ざせ…！」

白い光の粒子が、見る影もなく弱々しく成り果てた魔術師の身体を包む。

その白で男が塗りつぶされ…。

そして、次の瞬間には、跡形もなく男は消えていた。

白い輝きの残滓も残る事なく消え去り、割れたアスファルトと土ばかりが残る。

そこまでを見届けて、ようやく。

桐はずるずると、その場に座り込んだのだった。

…。  
…。

E  
X  
T

T  
O  
N



静寂に満ちた、学園都市の虚像、『領域』の中で。

「あいつのほうはこれでおしまい…かな。ああ、とりあえずお疲れさま…」

歩み寄る神裂に、座り込んだ青年は振り返って声をかけた。

「それで事後承諾になって申し訳ないんだけど、ああいう風に逃げてもらったよ。『術式』の成り立ちから言って、あの師匠だってとは被害者だったんだろ…引き渡して廃人になるまで弄り回されるのは、さすがに後味が悪いかなって」

教会の未知の術式への執念ってタチ悪そうだしね、と青年は苦笑した。

(そこまで考えての『説得』だったということですか…)

内心で感嘆しながら、神裂は答える。

「構いませんよ。調査自体は既に充分ですし、この結果ならば破壊したと報告しても嘘ではありません。顛末を説明するのは骨が折れそうですが、彼女をあの師匠より解放できた以上、これ以上を望むのは贅沢というものでしょう」

(『解放』、かあ…)

神裂の言葉に、桐はなんともいえない感想を抱いた。

沈んでいく気分。

それに気付く事なく、愛刀を背中に回して、神裂は彼が立ち上がるのに手を貸す。

ぐっと、青年を引き上げながら、思いついたことを口にした。

「ところで、いつ頃彼らの魔術の成り立ち、ひいてはあの魔術師の矛盾に気付いたのです？あの男がマドカさんの『杖』を扱えないことまで、よく見抜きましたね」

「ああ、あれは嘘だよ。半分くらいはただのでまかせだし」

「はあっ?!」

こだわりなく返された言葉に、神裂は耳を疑う。

驚きに手を離れたせいで、青年はしたたかに腰を打ち付けることになった。

「痛ったあ……」

「な、なんですって?! どういうことです!」

「あなた…いや、そのままの意味だよ。あんなもの、押し付けられた状況と、提示された情報から矛盾しない答を引っ張り出して、堂々と話してみせただけのことなんだ。ついでに言うと、『杖』が彼を拒絶するかどうかなんてわからなかったから、試してくれなくてよかったなって思ってるけど」

(とというか、あいつに使う気があれば普通に使えたような気がするんだよね…なんか言ったら怖そうだから言わないけど)

今度は一人で立ち上がると、桐はひどく汚れたチノパンツの埃を申し訳程度に払う。

どうということもないその仕草に、神裂はなぜか、とある同僚の顔を思い出していた。

彼女の頭の中で、想像上のグラサンが、キラリと齒を光らせる。

「そ、それではなんですか、あの魔術師はあなたの口車に踊らされて最後の逆転の機を逃したと…？」

「えっと…そういう言い方は僕がすごいワルモノかペテン師って感じになるからどうかなくて思うんだけど…。でまかせと言っても自分で組んだ推論だし、僕としてはそれで間違っていないと思っただけから、正確には嘘でもないと思うんだけどね」

あっけらかんと返された信じられない返事に、神裂は思わず叫んでしまう。

「正誤を確認せずにただの推論をさも真実をついた言葉として扱い、その振舞いで敵を打ちのめして撤退させた時点で、それは立派なペテンではないですか！」

だがそれに動じる事なく、青年は軽く笑ってみせた。

「あ、あはは…。それは持ち上げすぎだよ。事態がたまたま上手く転がってくれたってだけでさ」

（『転がってくれた』？『転がした』の間違いでしょう。まったく、底が知れませんか…）

賞賛を通り越し、もはやあきれを感じる神裂に、青年は提案する。

「さてと、この場に『杖』があるせいなのか、『領域』は残っているみたいだね。その辺りの話は彼女が起きてからするしかないだろうし、とりあえずはこの子を連れて、どこか休めるところまで行こうか」

両袖口がボロボロになったジャケットの、残った布地越しに桐は白銀の『杖』を掴む。

なぜか顔をしかめて歩き出した青年に続いて、神裂も無人のストーリーに足を踏み出したのだった。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

34

Phase .

大通りへと出て、壊されていないカフェを見つける。  
オープンカフェのため、それほど広くはない建物内へと入り、壁際

のソファに少女を寝かせてから、桐は自分達のための飲み物を準備した。

（電気が来てないのにきつちり温度が保たれてるのはさすがだね…  
どんな断熱材使ってるんだろう…）

妙なところに感心しながら、手際よくそれを済ませて、桐は冷蔵庫にあったレモンスカッシュ、神裂は熱い緑茶をそれぞれ選ぶ。

そうして会話のない、少しの時間が流れた後、

ソファで眠っていた少女は、ゆっくりと眼を開いた。

何か思うところがあつたのだろう。

戸惑う事なく、同じテーブルについている人間を見回す。

「キリくん、おねえさんも…。無事なんだね…なら、師匠は…」

幼げなイントネーション。

この数時間で聞き慣れてしまったその声に、桐はうなずいてみせる。

「そうだね、退場してもらったよ。君が彼に会うことは、きっとも  
うない…」

そう言った桐の後を引き継いで、神裂は続けた。

「その通りです。脅威は私たちが取り除きました。あなたはこれで、  
無事に故郷に帰れます。元の暮らしに戻るのです」

正しいことをする者の、正しい言葉。

それに応える者の声が、小さくわななき、

「余計な…」

「…どうしました？」

「余計なことをしないでよ！わたしはそんなつ…そんなこと、たのんでないの！！」

叫びが、桐たちの周りの空気を震わせる。

予想通りの反応に、青年は苦い思いと共に飲み物に口をつけた。

( やっぱり、そうなるよね… )

「わたしはもう、『洗淨』されちゃったんだよ?! もうわたしは『マドカ』じゃない、『薄霞 円』じゃないの!!」

( 『もう』マドカじゃない、か。ここまで想像通りだと、イヤになるな… )

「もうわたしには、いくところも、かえるところもない…。ひとりなんだよ、ひとりきりなの! もとの生活ってなに?! わたしはそんな生活、したことなんかないのに!!」

( 要は、僕らにとって始まった時には、すでに事態は全部終わってしまっていた。それだけのことだったんだ… )

理解してしまっている青年とは対照的に、女魔術師は戸惑いながら一葉の写真を取り出した。

涙に濡れて叫ぶ少女と寸分たがわぬ顔で、どこかの学校の制服をま

とってこちらに微笑む少女の写真。

「な、何を言っているのです。あなたは間違いなく、薄霞 円さん  
の。詳細な調査をするまでもなく、この写真はあなた本人でし  
ょう?」

「知らない、わかんない!だからいつてるでしょう?!そのこと  
なんか、いまのわたしにはなんにもわかんないの!!わたしはもう、  
『ヘルメスを顕す者』なんだから!!」

その言葉に反応したのだろうか。

店内に持ち込んでいた『杖』から白い輝きが溢れ、ふっと消える。

そしてその時にはもう、その杖は少女の手にあった。  
立ち上がるノーネ。

「かのつえはこのてにあり…!」

そして、少女はそれを身構えようと

(そう…話はもう、終わってしまっている…。それなのに、その先  
にも時間は流れていく…)

不用意な動きで、こちらに『杖』を向けようとする彼女からそれを  
引き取る。

それ自体は、どうということもない作業ではあった。

神裂はともかく、ノーネには何が起こったか、わからなかったよう  
だったが。

勢いをくじかれて、どこか気まずい沈黙が場に満ちる。

『杖』によるフォーマット、彼女が言うには『洗浄』だったか。

掴んだと同時に始まるそれに耐えながら、桐はゆっくりと口を開い

た。

「神裂さん、これを…」

ノーネから引き取った杖を、神裂に握らせる。

「いったいどういう…くうっ…これは?!」

杖の効果が出ると同時に、神裂はそれをあわてて手放した。乾いた音をたてて、フローリングの床に転がる白銀の杖。

「それが、彼女の言っている『洗淨』だと思うよ」

「今のは精神への強制的な干渉…?では、マドカさんとしての人格、記憶は…!」

何かに思い当たる神裂に、ノーネが言い捨てる。

「もうそんなもの、とつくにまっしろになってるの。わたしはもう、そとのことなんか、なんにもわからないんだから…」

整った顔に浮かぶ、痛切で、必死な表情。

(僕がそうなったわけじゃないから、間違っても彼女の気持ちかわかる、とは言えない。だけど…)

その顔に痛みを覚えながら、桐は少女に向かって告げた。

「現状を整理しようか。そしてそのために、まずは今ついた嘘を捨ててくれると嬉しいな?」



「き、キリくん…?」

声の調子を変えないまま、なんでもないことのように尋ねる。

「記憶がないっていうのは、本当のことじゃないよね」

「……………」

口をつぐむ少女。

「服の素材や、バスケットボールすら知らない振りをしてくれたのに悪いんだけど、君は初めて会った時、僕を『学園都市』の『能力者』だって言ったんだよ。外の記憶を失くしたはずの君が、なんでそう思ったのかな?」

「…そ、それは」

「それに『杖』のフォーマット…『洗淨』が、外の記憶や人格を全て失わせるっていうのもおかしい話なんだ。外の記憶をすべて奪った人間に、『領域』と、『その外』の区別はつけられない。仮に人格を零に戻していたとしても、他者とのコミュニケーション自体が皆無な『領域』で構成される人格なんて、たかが知れている。そんな魔術師が、後継として相応しいかな?」

「……………」

少女の沈黙は、なによりも雄弁にそれが真実だと告げてしまっていた。

なにもかも推論のままの状況に、桐は苛立ちを噛み締める。

「それなら記憶も、人格も奪わずに、ただ、自由意志を奪えばいい。君は……」

その言葉を、できるなら言いたくなかった。それなのに、少女はよどみなく、桐の言葉を引き受ける。

「そうだよ。わたしはあの『杖』に、わたしがわたしだっていう『実感』をうばわれたの」

「なん……ですって……！」

神裂の、驚愕の声が響く。

「しんじられる？記憶をうしなつたわけじゃないのに、いまのわたしはもう、自分がマド力だっておもえないんだよ……。学校のこと、部活のこと、いえのこと、家族のおも、全部、全部おもしろいのに、どうしても、それが自分のことだっておもえないの。よくできた映画でしつてるみたいなかんじなの、おかしいよね？」

それが、矛盾のない、唯一の答えだった。

『情報』をあやつる魔術。

『後継者』として、一定の年齢に達してからさらわれた人間。

『ノーネ』という『ノーネーム』から取られた、どう考えても価値のない名前に固執する少女。

自らを捕えているものと同じ『魔術』を与えられながら、それを

自らの脱出のために使わない理由。

アイデンティティ  
(自己同一性を引き剥がして、『杖』を中心としたお仕着せの自己  
同一性を刷り込む。それが、この魔術の『洗淨』なんだ…)

「おかしいよね？ねえ、なんでそんなかおしてるの？おかしいんだからわらってよキリくん。そうだ、ウソついちゃってごめんなさい…でも、ホントに全部わすれちゃいたかったの。だって、おかしいの。おとうさんのかおも、おかあさんのかおも、いもうとのかおだつておもいだせるのに、それがわたしの家族だつておもえないんだもん！」

感情が、飽和してしまったのだろう。

幼げな口調が悲痛に、まとまりのない言葉を並べていくのを、それを言わせた青年はただ、じっと聞いていた。  
握り締めた拳が震える。

ひとつひとつの言葉が自分に刺さってくるように感じて、くちびるを噛み締めた。

口の中にジワリと広がっていく鉄錆の味を舌で確かめながら、桐はあらためて、自分のこころを確かめる。

結論は、変わらなかった。

い (これは、僕のがままだ…間違つても彼女への救いなんかじゃない)

浮かんだ言葉と感情を飲み下す。

そうしてから、なおも言葉を続ける少女を、青年は強引に抱きしめた。

「キ、キリく…?」

すっばりと、華奢な体躯が桐の腕の中におさまる。抱きしめた腕から感じる、ちいさな熱と、視界にひろがる、やわらかそうな髪。

ノーネの顔を自分の胸元に押し付けて、桐は立ち上がりかけた神裂を目配せして制した。

それが出来る自分と、彼女に降りかかった災難の両方に、焦がれるほどの苛立ちを感じながら、口を開く。

「ごめんね。辛いことを言わせて、ごめん…!」

「あ…ああ…あああああああああああああああああ!」

胸元が涙のしずくに熱く濡れる。

自虐と自嘲に顔をゆがめながら、青年はただ、少女をしっかりと抱きしめた。

……

……

……

そうして、幾許かの時間が流れる。

真っ赤にした瞳で桐を見上げた女の子は、それでも、どこかすつきりとした表情で青年から身を離れた。

逆らわず、緩く解かれた彼の腕に視線を振りながら、自分の席へと座る。

それを見届けてから、青年はどうということもない仕草で、テーブルから離れた。

「そうだ、君の分の飲み物もいるね。ちょっと待ってて…」

キッチンへと姿を消す青年を見送った後、神裂は少女に視線を移した。

「落ち着きましたか？」

「は、はい。だいぶ、らくになりました…」

(この反応…彼はよほど信頼されているんですね…)

青年に向けたものとは違う、どこか固い口調で紡がれる彼女の言葉に内心で苦笑しながら、神裂は尋ねたいことに触れる。

「あなたの置かれている状況はわかりました。その上でお尋ねします。これからあなたは、どうするつもりなのですか？」

「……………」

しばし、彼女は沈黙し、そして、口を開く。

「…もうわたしは、ゆくところもかえるところもない『旅人』だから……………」

「…やはり、そうして生きていこうと？」

こくりとうなづくことで、少女は答えた。

「わたしは、もう、『ノーネ』なの。…あの場所に…………『マドカ』の故郷にもどっても、わたしはどうやったって、『マドカ』ってい

う他人としてしかみてもらえない。あの場所はもう、わたしがかえられる場所じゃないの。結局ひとりになるのなら……」

（『ヘルメスを顕す者』として生きていく、ということですか……仮に杖を破壊しても完全に取り上げることが出来ない以上、彼女の意思が変わらない限り、故郷に帰してもすぐに姿を消してしまいそうですね……）

沈黙が落ちたところで、青年がテーブルへと戻ってくる。

二人の会話は聞こえていたのだろう。

「まあ、そういう話になるよね……はい、お待ちせ」

コトン、と湯気の立つマグカップを少女の前において、青年はわざと彼女の対面に座った。

「ココアでよかったかな。甘いものの方がいいかなって思ったんだけど」

「……うん、ありがとう……」

口をつけ、こくりとココアを飲み込む少女を見据えて、桐は両手を机の上においた。

「さてと、状況の整理をしようって話だったよね。君は記憶を失ってはいないけど、もうここに来る前の自分を、『自分』だと思うことが出来ない。そして、さらわれる前の自分……『薄霞』うすかすみ『円』まどかとして誰かから見られることに耐えられない。だからこそ、君は自分を結局ひとりだっと思って、往く処も帰る処もない『旅人』でいようとしている……」

「……」

マグカップを両手で持つ少女は、沈黙をもって肯定する。

「…まあ、わからなくはない話だよね。第一、僕も君を今でも『ノーネ』だって思っているし。いまさら『まじか円』さんです…って言われても、僕にとって、君は出会った瞬間から『ノーネ』だったからさ。やっぱり、しっくり来ない感じがするんだ」

「あなたは何を」

声をあげる神裂を無視して、桐は『ノーネ』をまっすぐに見つめた。

「繰り返すね。僕は君を、『ノーネ』として見ているんだ。そんな僕は…。君を『ノーネ』として見て、『ノーネ』として扱う僕は、君の帰る処になれると思うんだけど、どうかな？」

（わかってるよ、そうだ、これは救いなんかじゃない…）

何を言われているのかわからなかったのだろう。

それでも少女は、息をのんで青年の顔を見つめていた。

その視線から眼を逸らす事なく、桐は揺らぐ事なく彼女を見すえる。

（それでも、僕がこうしたいから）

「家族になろうよ。ノーネ。それなら、旅に出る必要なんかないよね？」

ささやいた言葉は、ゆっくりと、少女の耳に届いたのだった。

∴。 ∴。

E  
X  
T

T  
O  
N



「家族になろうよ。ノーネ。それなら、旅に出る必要なんかないよね？」

言葉の意味を把握できずに、少女はまばたきをした。

「か、家族に…？」

「そつだよ。僕が君の家族になるんだ。ノーネはいま、何歳なのかな？」

目の前の青年が軽く尋ねる内容に、目の前がぐるぐるするような感じを味わいながら、ノーネは慌てて答える。

「じゅ、十六歳で高校一年生…だけど…ええ?!」

(そついえばわたし、もう結婚できるとしなんだ…って、ええ?!  
じゃ、じゃあわたし、キリくんと…?)

「そつか、同い年なんだね…」

わたわたと。

頬が熱くなる感触にパニックになりながら、平然と何かを考え込む青年から目を離せずに、少女はひどく狼狽した。

そして次の言葉を聴いて、さらに混乱に陥る。

「誕生日までさかのぼるのも面倒だし、それじゃあどちらでもいいかな。ノーネは姉か妹、どちらになりたい？僕を兄か弟のどちらかに見てもらってもいいんだけど」

「…え？」

「はい…？」

ノーネと神裂から、同時にもれる声。

青年はさも不思議そうにしながらも、言葉を続けた。

「あれ、どうかしたのかな？…まあいいや、それで家族になった後の話なんだけど、残念ながら僕は孤児であんまりお金もないんだよね…。ノーネには悪いけど『マドカ』のフリしてあつちで生活してもらっていいかな。せつかく出来た『家族』が『旅人』で音信不通って、なんかイヤだし」

「え、ええ？」

「ああ、ごめん。それ以前の話だったよね、まずはこれを訊かないと。『ノーネ』、僕の『家族』になるのは嫌、かな？」

「え…あ…そ、そんなイヤなんてことないけど、わたし、その…ええ？」

ぼんぼんと投げ込まれる言葉にひたすらあわてるしかないノーネの手を、しっかりと握ってぶんぶん振る。

そうして青年に微笑みかけられて、ただでさえどうしようもなくなくなった少女の混乱はさらに深まった。

だが桐は、全くその辺りを考慮するそぶりを見せる事なく、

「イヤじゃないんだね、ありがとう、じゃあノーネは僕の『家族』  
ということだ。これで話はお終いだね、文句はいつでも受け付ける  
よ。携帯とメールアドレスも…っと、そういえば電源落ちちゃって  
たか」

すらすらと話すと、卓上のペーパーナプキンを取り、この席に着く  
ときにはすでに準備していたのだろう、どこから取り出したボー  
ルペンで携帯の番号を書き付ける。

「はい。出れないときは出れないだろうけど、着信に気がついたら  
こちらが話せる時にすぐかけなおすから、いつかけてきてくれても  
いいよ。『家族』なんだから、遠慮しないでね。あと、メールのほ  
うは…ノーネが携帯かメールアドレス手に入れてからでも遅くない  
かな。ちゃんと控えておくから、それは電話で話したときにでも」

「な、な、なな…?」

勢いに押されて携帯番号を受け取ってしまうノーネと、顔を真っ赤  
にしてわなわなと震える神裂。

それを完全にわかつている表情で、桐はのんびりと言葉をかける。

「あれ、神裂さんはどうかしたのかな。さっきから口をパクパクさ  
せてるけど、なにか楽しい事でも?」

その言葉に、さらに顔を赤らめる神裂。

少女に負けないほど赤面した女魔術師は無言のまま、目の前の青年  
をぶん殴ったのだった。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

P h a s e .

35

「あいたたた…冗談抜きで、顔の形が変わるかと思っただけど…」

『領域』の中、繁華街のメインストリートの一角にある、若者向けの洋服店の中で。

桐と神裂は、ボロボロになったそれぞれの服の代わりを選んでいた。青年のグチのようなものを歯牙にもかけず、神裂はすげなく返す。

「先程からそうではないかと思っただけでしたが、先刻の件で確信しました。あなたは立派なペテン師です」

「…まあ、さっきのは返す言葉もないかな。うん、自覚はしてるよ」

Tシャツの色を比べながら、桐はゆっくりと答える。

「自覚しているというならなぜ、あのようなことを軽々に決めたのです」

その中から一枚のＴシャツを選び出すと、青年はそれを適当なところに引っ掛け、顔をあげる。

「…まあ、軽々しく決めたって見えても仕方ない部分はあるかな。それでも、そんなつもりはないんだけどね」

変わらない、その態度に苛立ちを覚えて、神裂は声を荒らげた。

「そんなつもりはない？あれは彼女とあなた自身の人生に関わるような話なのですよ、その辺りは」

言い募ろうとする神裂に、それでも桐は平然とした言葉で、

「わかってるよ。あれが安いペテンだっていうのは認めるし、傍目には軽く決めたように見えたかもしれない。それでも僕は、間違はなく自分の人生を懸けて、ああしようって思ったんだ」

そう、言い切った。

「同情がないなんて言わないよ。自己満足だっっていうのも否定できないし、これで絶対に彼女が幸せになるだなんて口が裂けても言えない。それでも、ノーネには一度、普通に暮らして欲しいんだ」

まっすぐに、神裂を見つめる。

「普通の学校、普通の友達、普通の家族。それがノーネにとって、

今は『マドカ』のものに見えて仕方がないとしても、その場所で時間を重ねれば、いつかそれを自分のものとして受け入れることが出来る日が来るかもしれない。もちろん、馴染めずに結局はこっち側に来たり、もしかしたら『旅人』であることを選ぶ可能性もあるけど、それはそれで彼女の選択だと思うしね。ただ、そこに『選択肢』が生まれるだけでも、僕が手を出す意味は在ると思うんだ」

よどみのない語り口に、どこか信じられない気持ちで、神裂は口を開いた。

「そのために…いえ、それだけのために、あなたは自分の人生を懸けると…？」

「そうだね。でも、言うほどの負担じゃないよ。せいぜいが『ノーネ』を知っている人間として彼女の『家族』でい続けるだけのことなんだから。まあ、間違いなく長丁場になるだろうし、『家族』って言葉を嘘にする気はないから、もしかしたら一生ものの付き合いになるかもしれないけど、ね」

(彼は、いったい…)

全く迷いの見えないその姿に、今度はなぜかツンツン頭の青年を幻視しながら、女魔術師は問いを発する。

「どうしてそこまで…。あなたはいつたい、何を求めているのです。あなたにとって彼女はたった1日や2日一緒に…いえ、それだけの時間すら共に過ごしたわけではないはずでしょう？それなのになぜ…？」

「この場合、過ごした時間はあんまり関係ないんじゃないかな。大

事なのは関わったっていう事実の方だと思うよ。そんな感じだから、どうしてって問いには、ただ、そうしたいと思って、そうしようと思っただから。としか言えないね。あと、何を求めているのかって…？」

感情を揺らす事なく、青年は天井をしばし見つめて黙考した。

そのときに目に付いたのだろう。

少し高いところにかけてあった、黒のカーゴパンツを軽く跳んで取り上げる。

「…つと。やっぱり、そんな大層なものは求めてないよ。これは結局、ただの自己満足なんだから。強いて言うなら、ノーネにはせいぜい僕を便利な抛り所として活用した後、必要がなくなったら変に迷ったりしないで使い捨ててもらえればいいかなって思っただけだよ」

口調も、その表情も。

気負いが無いからこそ、神裂にはわかってしまう。

青年が真実、そう考えているということに。

（お人よしの上に自己犠牲を躊躇わない性質タチですか。しかもそれを自覚して平然としているとは。つくづく重症ですね…）

白旗を揚げるような気分で、彼女は息を吐き出した。

「はあ…わかりました、そこまで言うのなら、もはや何も言いません」

そうもらした彼女に、思いがけず鋭い言葉が投げ込まれる。

「そう言ってもらえるのはありがたいけど、それは、『教会に対しても』って思っているのかな？」

真剣なその声に顔をあげると、そこには着替えを済ませた桐が立っていた。

ゆったりとした黒のカーゴパンツに、オリーブ色のＴシャツを合わせ、その上に涼しげな麻のベストを纏う青年。

そんな、平和ボケした国の若者が好んで選ぶ服装に似合わない、ひどく伶俐な気配に圧されて、神裂は問われた言葉を内心で反復する。

（確かに、これまでのことはそもそも、私が教会に口をつぐんでいなければ成り立たない話ですが…）

そこまで考えて、彼女は青年の真意に気付いた。

（なるほど、延々と自身の考えを披露して見せたのはこのためですか）

得心して、神裂は青年の姿を確認する。

その目に揺らぎがないのをあらためて見て取ってから、素知らぬ表情で神裂は返した。

「…なんのことなのかわかりませんね。ところで、私にとっての仕事はすでにほぼ終わっています。後は彼女を親元へと無事に送るぐらいのものです。報告にしても、特筆するような件はひとつもありませんでしたし、これでは随分と退屈な報告書になりそうですが、それが何か？」

その言葉に、桐はほっとしながら笑みを浮かべる。



(この台詞を眉ひとつ動かさずに言いつて…。この『ねーちゃん』は、本当にかっこいいね…)

と、内心で感嘆しながら、

「いや、なんでもないよ。そして、それは僕には関係のない話だよ  
ね」

それをおくびにも出さずに、そう言ったのだった。

……

……

……

その後、ノーネの服を見繕い、学園都市の出口まで見送りに出る。

「それじゃあ、僕はここまで、だね。君たちがいなくなってから結  
界破りをかければいいのかな？」

尋ねる桐に、ノーネはかぶりをふりながら近づく。

「うっん。わたしがこれからあたらしく、キリくんを『領域』をは  
るから。わたしからはなれたら『領域』は自然にとけるから、キリ  
くんはなにもしなくても大丈夫だよ」

「そうなんだ。じゃあ頼むよ」

その声に、神裂が一步進んで手を差し出す。

「それでは。いろいろと助かりました」

その手を握り返して、桐は微笑んだ。

「こちらこそ。もし神裂さんがこの場にいなかったらと思うとぞつとするよ。それじゃあ、縁があつたらまた何処かで」

神裂が手を離すのを待ちかねたように、今度はノーネが桐の手を握る。

もう一方の手に持った杖を片手だけで器用にくるん、とまわすと、少女はつぶやくように言葉を唱えた。

「かのつえはこのてにあり」

白の燐光が、白銀の杖から溢れる。

「われはヘルメスをあらわすものなり。そは旅人のまもりて」

瞬間に白銀の杖がその燐光に覆われ、それは広がって桐たちを包んだ。

「いこいをゆるせ。『叡智の領域』」

形成された半球状のドームが一瞬だけまたたき、完全な透明へと移る。

そして上げた視界にはもう、神裂は映っていないかった。

「できたよ、キリくんのための『領域』。じゃあ、わたしはおねえさんのほうにいかなきゃ……」

そう言いながらも、青年の手を離さない少女。

（まあ、不安になるのも当然だよな…）

それを不思議に思うこともなく、桐はゆっくりと視線をあわせようとす。

「どうかしたのかな。電話なら、別に今夜でも」

「絶対に」

本当に、それは一瞬のことだった。

背伸びした少女が目的を果たして、青年から飛びのくまでの刹那。

頬に触れたちいさなくちびるの熱と、耳元でささやかれた言葉が、桐に鮮烈な印象を残す。

真っ赤になった顔を隠そうともしないまま、『ノーネ』は青年に微笑みかけて、『領域』からすつと消えた。  
そうして残された青年は、勝手に熱くなっていく頬に触れながらひとりごちる。

「うわ、神裂さんとの話は全部聴かれてたってことか…。でも、なんかやられちゃった感じだね…」

「絶対に、つかいすててなんかあげないんだから」

まだ耳に残っている、その言葉を反復して。  
桐はゆっくりと、足を踏み出したのだった。

∴。∴。

E  
X  
T

T  
O  
N

輪郭のつかめない、海のようにも、空のようにも感じられる、その場所です。

たゆたいながら、彼女は必死に自分を繋いでいた。

(こんな…こんなこと…)

希薄になっていく自分を、認識できない。

それなのに、自分が決定的な何かを失い続けているのだけは、なぜだか確信できてしまっていた。

(…もう、時間がないのかしらね……)

諦めに抗うことにふと疲れて、彼女は気弱な思考をもらす。

このところ、『ナニカ』にとって、想定外の状況が続いていた。

(いえ…そうでなくてもすべてがイレギュラーだったわね…)

最初の頃には感じられなかった、自分が大海に溶けていくような感じ。

掌からこぼれる水のように、『自身』を失っていく感触に怖気を感じることも、今はもう、ほとんどなくなっていた。

(自分の事なのに、最初の余裕が嘘のようね…『変えられない』のなら、そして『取り込まれる』のなら、希望は希望になりえない…)

誰とも共有することのない思考を浮かべて、彼女はそれでも、自らを奮い立たせる。

(それでも、在り得ないはずのあの子は今も現実として、在る…)

擦り切れた『言葉遊び』を抱きしめるような心地で、彼女はまた、『それ』を繰り返した。

そんな『ナニカ』にある考えが、ふとよぎる。

(…もう、一度……?)

できないかもしれない。

でも、それはできるかもしれない考えだった。

(私に宿った、『……])

『言葉遊び』そのもの、この状況の、すべての原因となったものを意識に上らせる。

(あ、ああ……)

それだけで、致命的なナニカをもうひとつ、失った気がした。

それでも、『ナニカ』は思う。

…できることは、すべてやってみせる…わたしが、ほどけてしまう前に…。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

Phrase .

36

あくまで、氷は少なめに。

安っぽい、プラスチック製のグラスをセットして、ドリンクのボタンを押す。

コポコポと注がれていく、薄めのレモンスカッシュ。

その程度の動作にすら悶絶していた昨日を思い出して、桐は改めて学園都市の科学力に感銘を受けていた。

（カエル顔の先生におざなりにシップ押し付けられたときには、真剣に呪ってやるうかと思っただけど…）

脳裏に鮮明にあの医者 of 言い草が浮かぶ。

患者が来ることは喜ばしいことなんだけどね？この程度の症状では腕の振るいがいも正直少ないよね？どうせなら彼のように派手に右腕ぶつ飛ばすくらいの気合は見せてほしいもんだね？まあ、趣味で作った消炎鎮痛剤を湿布に仕立ててみたからこれでも張ってればいいよ、ああ、体験レポートは忘れずにね？

あまりの言い草に、思わず破壊的な構成を編んでしまった一昨日の夜を思い返しながらも、青年は肩をまわして身体の具合を確かめた。

（あれだけの打ち身がホントに一日で回復するんだもんな…。まあ、今ドーピング検査でもされたら一発で引っかかりそうだけど…）

そして、やはりというべきだろうか。

表側：『領域』の外では滞りなく、原作通りにアウレオルスは駆逐されていたようだった。

（堂々と当事者に確かめられるわけもないし、どうしても推測で計るしかないけどね）

一昨日のこと。

『領域』が解除されてすぐ、グロッキー寸前の身体で這うように病院に辿り着いた桐は、そこでステイルとすれ違い、診察の帰りがけにうきつきと病室から出てくるインデックスを見かけた。

（加えて、あの医者 of 台詞…。状況証拠は揃っているし、あちらは特に問題なく片付いたと見ていいかな）

そんなことを思いながらも、なみなみと満たされたグラスを持って青年は自分の席へと戻っていく。

第七学区、学校が集まっている区画の片隅にある、ファミリーレストラン。

夏休みに入り、学生が少なくなっているためだろう。

昼過ぎにも関わらず、そこはお世辞にも客の入りがいいとは言えなかった。

席につき、口に含んだ飲み物の炭酸の弱さに、桐は顔をしかめる。



続けて携帯を開き、着信を確認。

昨日から急激に取得メール数の増えたその携帯には、まだ目当ての相手からの連絡は入っていないかった。

(もうしばらくは時間がかかるみたいだね…)

ふと思いついて、電源を入れたままのノートパソコンのLANスイッチをオフにする。

パソコンがネットから遮断されたことを確認してから、桐はメモ帳ソフトを起動させた。

このせかい  
禁書世界の『超能力』について

(一度、考えをまとめておくのも悪くないか…)

『禁書原作』を思い返しながら、桐はつらつらと文字を打ち込んでいく。

『記録術』(かいはつ)によって作られた『自分だけの現実』(パーソナルリアリティ)を観測することによって世界から可能性を取り出し、行使する能力。

(ようは、『テレポートが出来るという現実』、『電気を操ることが出来るという現実』を観測するほど信じ込むことによってそれを引き出している…って感じだね)

グラスを取り上げて、喉を湿らせる。  
そして、行を変えて打ち込みを再会した。

このせかい  
禁書世界の『魔術』について

才能の無い人間がそれでも才能ある人間と対等になる為に最後に纏る技術。

しかるべき手順を踏むことで神話や逸話、伝説の法則を現在の世界に適用する術。

(神話や逸話、伝説をなぞることとその効果を引き出す…いわば、『公共性のある現実』(パブリックリアリティ)をなぞる事でその効果を再現しているってことかな)

そこまで書き上げたところで、桐は携帯を確認する。  
変わらず着信がないことを確かめてからフリップを閉じると、少し考えた後、桐はその文字をデスクトップに表示させた。

(これは、少し長くなりそうだけど…)

この身に宿る、『音声魔術』について

それを定義する言葉を模索…するまでもなかった。

すみやかに脳裏に滑り出る知識を、そのままキーボードで打ち込ん

でいく。

過去にあったライトノベル、『魔術士オーフェン』の世界において、人間種族の魔術士が扱う魔術の名称。音声を媒体として、魔力 ESPにより、限定された空間に自らの理想の事象を起こす技術。

（僕の、使っているチカラ…いや、『魔術』）

『魔術』。

自らのチカラをそう呼ぶほうがしっくり来るといふ事実にいまさら気付いて、桐は軽く頭を振った。  
気を取り直して、続ける。

### 『音声魔術』の概要

音声魔術士の魔力 ESPとは『世界を作り変える感覚』のこと。それをもって、限定的にはあるが自らの望む世界を、イメージによつて『構成』として編み上げる。すると、本来の世界と、自らが造り出した構成とで、世界は二層となる。そして二層となつた世界は、どちらかの層が不要となる。音声魔術士はその隙に乗じて、重複した本来の世界を排斥し、『構成』として編み上げた世界を採用させる。

その『構成』、すなわち『限定された術者の理想の世界』が、『魔術』の効果として顕れる。

そこまでを一気に書き連ねて、青年は思考に沈んだ。

（こうしてみると『魔術』、と言いつつ、『本来ありえない状況を世界に顕す』という意味では、その性格は禁書世界の『超能力』に近いものがあるんだよね。ただ、禁書世界の『超能力』が『自分だけの現実』に沿ったひとつの事象しか世界に引き起こせないのと違って、音声魔術は構成さえ編めれば大体のことは出来る…。まあ、媒介の縛りのせいで、声の届く範囲でしか術の効果が発生しないとか、そもそも声が出せなきゃ撃てない、みたいな制約があるんだけど…）

と、そこまで考えたところで、桐の携帯が震える。

それがメールではなく、電話の着信であることを不思議に思いながら、彼は通話ボタンを押した。

通話開始を告げる電子音の直後に、

「須臣さん、遅れちゃってすみません！もしかしなくてももう着いちやっていますよね？やっぱり先に入っちゃっていますか？」

幼さを残した、飴玉を転がすような甘ったるい声がひびく。

電話越しのその声に耳を傾けながら、桐はメモ帳ソフトを保存せずに終わらせた。

続けて再起動をかける。

「いや、のんびりしてたから気にしないで。そうだね、窓際のテーブルに居るよ」

「窓際のテーブルですね、ちょっと待っててください…ほら急いでくださいよ！ただでさえ遅れちゃってるんですから…」

電話の向こうで初春が誰かに向かってそう話しているのが聞こえて、青年は軽く首をかしげた。

(呼び出されたのは『風紀委員』(ジャツジメント)関係の話だつて聞いてたけど…)

ほどなくして、

「お待たせしましたあ！」

電話で聞いていたものと同じ声を耳にして、桐は控えめに手を上げてみせる。

それを見つけたのだろう。

セーラーの夏服に腕章をつけた少女がぱたと走ってくる。

短めの黒い髪に、薔薇やハイビスカスなど、花を模した飾りをたくさん付けた、いつもの髪型。

彼女は嬉しそうに桐の前まで来ると、いそいそと向かい側に席をとる。

同行して来た少女もそれに習って初春のとなりに並んで座った。

(並ぶと、やっぱり初春さんは幼く見えるんだよね…)

と、本人が知ったら頬を膨らませて怒りそうなことを考えながら、桐は初春の連れに視線を向ける。

「や、こんにちは、初春さんと佐天さん。佐天さんのほうはこないだ街で会ったきりだから…一週間ぶりくらいかな？」

「は、はい、こんにちはです、すお…じゃない、き、桐さん」



昼過ぎの第七学区。

学校にほど近いファミレスの一角に、三人の男女は席を取っていた。そんな、どこかきこちない空気の中で。

(まあ、ある意味、仕方のない話だよね…)

桐は納得しながらも、佐天へと視線を走らせた。

「とりあえず、飲み物を取りに行こうか。初春さんは…何か邪魔しちゃまずそうだし」

言葉の終わりに、初春を見やる。

この状況を作り出した張本人は今、携帯ゲーム機をひたすらガチャガチャとやっていた。

席に着き、挨拶を済ますなり、

「お呼び立てした須臣さんや佐天さんには申し訳ないのですが、私はこれから少々やる必要がありますので、お二人で談笑でもしてください!」

そう言いおくと、その携帯ゲーム機を取り出し、初春はわき目もふらずに『やること』に没頭してしまっていた。

時折、

「ふぬう!」

「ダメですダメです、アプローチを変えないと…」

「ってうわわ、これじゃ大変なことに!?!」

と謎な独り言を発する初春を遠目に見て、桐と共に席を立った佐天は気まずそうに桐に謝った。

「なんだかすいません…ウチの親友がこんなので…」

ジューズサーバーの前でふたつめのグラスを取り上げながら、青年は応える。

「いや、佐天さんが謝るようなことじゃないよ。初春さんにも事情があるんだろうしね」

(確か、携帯ゲームが『仕掛け』用のツールだったよね…。実際に自分の目で見ても微妙に信じられないけど)

『原作』の知識を思い返ししながら、桐たちはテーブルに戻っていく。

(そういえば、『あの日』から佐天さんとはまともに話せていないんだよね…タイミングが合わないというか、微妙に避けられちゃってるというか…)

降りた沈黙に適当な言葉を探して、桐は口を開いた。

「あ、そうだ、もうご飯は食べたのかな、何か頼もつか?」

だが、彼女にとっては、予想外の言葉だったらしい。



「…っ！？ケホツケホツ…あ、す、すいません。えっとその…なんですか？」

(…と、驚かせちゃったかな…。本当、女の子って難しいね)

「いや、こっちこそいきなりごめん…って、これじゃお互い謝ってばかりだね」

意識して、おどけた口調を選ぶ。

その意図を汲んでくれたのか、初めて佐天は笑みを浮かべた。

「あ、あはは、そ、そうですね」

そうして笑ってくれたことにほっとしながら、桐はあわせて笑みを浮かべる。

(…っというのも、ずるい気がするけど…)

そう思いながらも、『あの日』の事に自分からは触れない事にして、桐は二人分の飲み物を手にテーブルへと戻った。

初春の前、邪魔にならない場所を選んで彼女の分のグラスを置き、自分のものに口をつける。

「…こうなると、何も無いのも寂しい気がするね。とりあえず、ポテトでも頼もうか」

話題を探して見つからなかった青年の言葉に、佐天はこくりとうなずいたのだった。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

37

Phase .

30分ほどしたところで、

「よし、これで任務完了です」

初春は携帯ゲームから手を離すと、ゆっくりと顔をあげた。

「終わりました！お待たせしました！…って何で佐天さんの前にだけ美味しそうなおパフェが置いてあるんですか！」

なにやらショックを受けている様子の初春に、桐は薄い苦笑を浮かべながら答える。

「いや、いつ終わるかわからなかったし、ね。アイス、溶けちゃってももったいないかなって」

すると、間髪いれずに、佐天がニヤリ、と笑い、

「いいでしょ、アンズと梨のパフェよ。ちなみに今週出たばっかの新作だつて！」

これ見よがしに果物のカケラを口に含む。

それを見て初春は何かの抗議のつもりか、両手を挙げてぶんぶんと振ってみせた。

「ああ〜！そんな美味しそうに食べられちゃうと私の中のパフェ指数がうなぎ上りに！」

だがその抗議も、特に効果はなかったらしい。

パフェ指数つてなによ、と突っ込む事もなく、佐天は悪役っぽく笑みを深める。

「ふっふっふ、あー、あつま〜い！このアンズの風味がたまんないわねー。桐さんも頼めばよかったのに」

突然振られた話題に、なぜか恨みがましい視線を初春に向けられて、桐は口を開いた。

「まあ、僕はもうポテトあるしね。やる事が終わったのなら初春さんはどうする？どのみちここに呼ばれた理由を説明してもらおう時間は必要だから、パフェを頼むくらい時間は構わないと思うけど」

（というか、何で僕は食べてないのに睨まれたんだろう…？）

納得がいかないながらも気を使った青年の台詞に、しかし初春は眉

間にしわをよせて考えながら答える。

「…うう…確かにそれは魅力的な提案なのですが…今は出来ればすぐここを出発した方がいいんですね。そんなわけで佐天さん、速攻で片付けるかすみやかに私に半分分けてください!」

「わ、わわ、初春…!？」

パフェスプーンではなく、ティスプーンを持って猛然と食べかけのパフェに襲い掛かる初春。

(こつという時にも遠慮がないのが親友つてもものなのかな…?)

蚊帳の外の桐は、未だ面と向かって話した事のない腹ペコシスターをその姿に幻視しながら、熱いコーヒーを口に運んだのだった。

……

……

「ドリンクバーチケット3枚で900円の割引ですね。お会計は1250円になります」

「あ、1500円からで」

つつましい財布にボディブローをねじ込むような金額を支払って、桐は昨今のお財布事情を振り返る。

(今日明日に飢えるわけじゃないけど、正直厳しいかな。やっぱり『幻想御手』事件の時のタクシー代が痛かった気がする…。あれ、高速代ついて5000円越えてたもんなあ…。それにバイト、一昨日

のあれで2回目と3回目の連絡抜きサボリになっちゃったし…。熱出して独り暮らしで倒れてたって嘘言ったら許してもらえたけど、代わりに今夜は一晩徹夜で書庫整理か…)

顔には出さずに微妙に落ち込む桐。

そんな青年に、二人から声がかけられる。

「あの…パフェ食べちゃったのあたしですし、やっぱり出しましょうか？」

「私も結局パフェもポテトももらっちゃいましたし…」

佐天と初春。

年下の二人の嬉しい申し出に、しかし桐は笑顔で返した。

「いや、構わないよ。ドリンクバーはこの間支部でもらったチケットで足りたんだし。…なにより一応、僕は年上だしね」

(要らないプライドだって自覚はしてるんだけど…。それでもこの子達に払わせるわけにはいかないよね。そう、彼女たちは年下、年下なんだから…)

自分に言い聞かせるような言葉を内心で繰り返しながら、桐は三人で連れ立ってファミレスから出る。

「少し行った所に、おいしいクレープのお店があるんですよ。やっ  
てればいいんですけど…」

そして、初春の先導に従って、人通りの少ない道をのんびりと歩いた。

「やっぱりどうしても人が少ないね。夏休みがあけたらだいぶ変わるのかな…って佐天さん、どうかしたのかな？」

話の途中で、妙にそわそわとしている佐天に気付いて、桐は声をかけた。

だが、

「いつ、いえ何でもないんです！何でも。気にしないで下さい」

と、返されてしまう。

(さつきは打ち解けてくれてたし、いまさら僕に緊張しているって感じでもないんだよね…。どうしたんだろう)

不思議に思いながらも、足を進めていると、

「やった、ちゃんと営業してました！ここのアップルカスタードが絶品なんですよー！」

初春が嬉しそうに、屋台のクレープショップを指差した。今さらながらに嫌な予感が、桐の背筋に走る。

そして数分後、無情な声が青年の耳朵に響いた。

「お会計、2340円になります」

(1個ななひゃくえんオーバーって…オーバーって…！)

「…3000円からで」

4時間弱働かないと手に入らない金額を支払った青年は、やはり落ち込みを顔に出さずに椅子に座る。

(この子達に悪気はないんだけどね…あ、でもこれやっぱ美味しい…)

それでもしみじみと今日の出費に落ち込みながら、屋台に隣接した飲食スペースで、桐は昼からの疑問を尋ねた。

「それで一体、今日は何の用事だったのかな？」

「ん〜ふあ？」

ちいさな口でクレープにかぶりつき、幸せそうな顔でそれを味わう初春。

それを飲み込んだところで気を取り直して、彼女は口を開いた。

「そうでした。手伝って欲しいことがあって今日はお呼びしたんです。このところ、ここ第七学区のあちこちで封筒に入れられたマネーカードを拾ったという報告がきてるんですよ。貨幣じゃありませんから、故意に遺棄されたところでルールには触れないんですが…」

(マネーカード…。ああ、あの時の金一封と同じものか…)

言われている内容を理解して、桐はうなずく。

「それでもあれは価値と使い勝手は現金と同じなんだし、トラブルの種になるよね…」

「はい。すでにカードを奪い合ったり、スキルアウトのなわばりに入り込んだ学生が絡まれたりしてます。こうなっては『風紀委員』（ジャツジメント）としても放っておくわけにもいきませんから…」

「調査、見回りをすると？」

「はい。昨日から黒子さんにも動いてもらってるんです」

（なるほどね、じゃあ佐天さんは僕と同じく手伝いつてことか。それにしても、これはこれで学生の領域は完全に越えちゃってる気がするんだけど…。あらためて、『風紀委員』って危なっかしい組織だよな）

微量のあきれを感じながらも、桐は話にうなずいた。

（ようは、宝探し兼見回りって解釈しておけばいいのかな。まあ、この間自分から手伝いに首突っ込んでおいて、逆に協力を請われた時には断るっていうのも変な話だし…）

お人よしな結論を胸に、桐は初春と佐天を見回して言う。

「それじゃ、これを食べたならカード搜索開始だね？」

「はいっ…！」

その言葉に、二人は嬉しそうに首を縦に振ったのだった。



…これは…滑稽さを笑ってられる場合じゃないわね…。  
…やはり、考えたくはないけれど…。

E X T

T O N

「今回は私も役に立てると思うんです！」

暑さを増す8月の午後、第七学区の路上で。

「そうなんだ？」

どこか得意気な佐天の声に、桐はあわせて応えた。

「はい！何かあたし、金目のものに対して鼻が利くみたいで……」

何かのアピールだろうか。

少女は青年の前で、スンスン、と可愛らしく鼻を鳴らしてみせる。

「例えば、ここに来るとき通り過ぎた路地がありましたよね。今日はあそこがびんびん来てるんです！」

そう、真面目な顔で続ける佐天に返す言葉を見つけられずに、桐はとりあえず同じ言葉で相槌を打った。

「び、びんびん来てるんだ……？」

「ええ！私の勘は信じてもらっていいですよ。昨日だって御坂さんといっぱい見つけたんですから！！ね、初春？」

もし彼女に尻尾があったら、きつとぶんぶんと干切れんばかりに振っていただろう。

目を輝かせて佐天は、昨日の戦果を明かす。  
台詞の終わりに同意を求められた初春も、にこやかにそれを補足した。

「ええ、ホントに凄かったみたいですよ。なにしろ、たった半日で10枚近くも見つけたそうですから」

「頭数も昨日の1.5倍だし、今日は夢の2桁越えを目指すよ初春！あ、桐さんも頑張りましょうね!？」

「あ、ああ、そうだね」

（よかった、さっきのヘンな感じは気のせいか何かだったみたいだね…）

やる気満々、といった様子の佐天を微笑ましく思って、桐は笑みを浮かべる。

その表情に、なぜか佐天は戸惑った。

「…え…あ、ど、どうしたんですか？」

問われて、青年は特に気持ち加工する事なく吐き出す。

「いや、君が元気で嬉しいなって。なんていうか、その方が佐天さんらしくていいと思うよ」

不用意な発言。

そして、その効果はすぐにはつきりと現れた。

「……………っ!？」

佐天は言葉に詰まって顔を真っ赤にし、初春はすごく面白そうに満面の笑みを浮かべ、ほうほう、と頷く。  
場に流れる、微妙な空気。

少女達のそれぞれの反応を見て、桐は思う。

…あれ、僕、なんか悪いこと言ったかな？

とある十二カヴォイス・ソーサリーの音声魔術士

38

P h a s e .

403

「これはこれでとっても面白いんですけど…それはそれとして！」  
なんともいえない空気と共に降りた沈黙を、初春は強引な話題転換で破った。

「須臣さん、ケータイお借りできますか？」

急な話題に驚きながらも、青年は携帯を取り出す。

「あ、ああ、どうぞ。…でも、何に使うのかな」

「本当はさっきのクレープ屋さんでやっておけばよかったですけどね…」

渡された白い携帯を手に、初春はスカートのポケットからあるチップを取り出し、それを持ったまま器用に青年の携帯から背面のパネルを取り外した。

「…それは？」

桐の不思議そうな視線に、初春はすらすらとこたえて見せた。

「追加拡張チップです。『風紀委員』（ジャッジメント）の携帯品として義務付けられているアプリケーションを中心に、いくつか私特製の便利機能が入ってます。ちよつと待っていてください、すぐに取り付けちゃいますね…ってうわ、拡張用スロットが5つもある…。なのにとノーマルなんですねこの携帯。いいやつなのにもったいな…って…」

「まあ、別にそれで困った事がなかったからね。それでなぜそんなものを？」

手早く拡張チップを差し込んで元のようにパネルを閉じると、初春は青年の携帯の動作を確認する。

新たに追加されたアプリケーションの中からひとつのソフトを起動させて、彼女はそれを桐へと返した。

そうして、表示された画面を覗きこむ青年。

「…これは？」

「簡単に言えば、GPS地図ソフトです。もともとは『風紀委員』用のものを私がいじった代物なので、精度と信頼性はかなり高いですよ。今回、これでカードを見つけた場所をマーキングして欲しいんです」

言われた内容を理解して、桐は頷いた。

「…ああ、上への報告用にカードの分布を調べるんだね？」

「はい、同じフォーマットで記録していった方がまとめる時に楽ですから。青色で点滅しているのが須臣さんの携帯です。私のほうもこうすれば…」

と、初春は微妙に角ばったピンク色の携帯を取り出して操作する。同時に、桐の方の画面に新しい光点が、もとの光点に寄り添うように表示された。

「こんなふうに、同種のソフトが起動している限り、常にリンクするように設定してあるんです。須臣さんの携帯がハンディアンテナ標準装備だったからできる芸当ですね」

（いや、なんでもないことみたいに言っているけど、もともとあるものを改造したとはいえ、こんなソフトを個人で作るって凄いことなんじゃないのかな…？）

感心しながら、桐は携帯の画面に見入る。

「それじゃ二手に分かれて搜索しましょう。私と佐天さんはこの路地を。須臣さんは隣の路地をお願いします」

そして、さらっと出された提案に見過ごせないものを感じて、青年は顔をあげた。

「…いや、それはよくないんじゃない？さっきの話じゃ、スキルアウト絡みのトラブルも起きてるんだよね。それなのに女の子だけで裏路地っていうのは…」

そんな桐の心配を、初春は笑い飛ばす。

「やだなあ須臣さん、それは心配しすぎですよ。ここらは裏路地といてもそれほど『表』から離れていない辺りですし、スキルアウトのガチガチの縄張りってわけでもありません。それにお互いの場所はこのソフトでわかりますし、なによりしばらくしたらこの路地は一本に合流しますから」

「…なるほどね。そういうことならそんなに危なくもないのかな」

少女の説明に青年が頷いたところで、もう一人が勢い込んで提案した。

「そつだ！せっかくだから競争しません？合流した時の枚数で勝負…って。負けたら勝った方の言う事を何でもひとつだけ聞くってことでどうでしょう！」

「な、何でもって…」

不穏な条件に、桐は反射的に反対の言葉を選ぼうとする。  
だが、

「いいですね、約束しましたよ？じゃあスタート!!」

「ひゃあ…!!」

戸惑う青年を置き去りにして、佐天は初春を引っ張って路地へと駆け込んでいってしまった。

「だから何でもっていつのはやっぱり…って、もう聞こえてないね…」

置いていかれた桐は首をかしげて、つぶやく。

「…この場合、真面目に探しているんだか悪いんだか」

気の抜けた調子で、どこかゆるくそうもらすと、青年は自らに割り振られた路地へと入っていったのだった。

……。  
……。

十分後、その向かい側の路地で。

「二枚目ゲッター！今日は幸先いいわねー!!」

無意味に初春のスカートを跳ね上げながら、佐天はふたたび快活な声をあげた。



「わひゃああ！だからめくらないで下さいってー！！」

涙目でスカートのスそを押さえる初春。

そんな親友に、佐天はちらりと視線を走らせる。

少しだけ迷ってから、少女はゆっくりと切り出した。

「だけど驚いたわよ。いきなり呼び出されたと思ったら、まさか桐さんがいるなんて。びっくりして心臓止まるかと思ったわ。…でも、ありがとね、初春」

「須臣さんは『風紀委員』ではいちおう私の協力者って扱いになってますから。そっち関係でお願いしたら結構ちゃんと手伝ってくれるんですよ。そんな事より佐天さん、須臣さんと何があっただんですか？だって驚いちゃいました。顔を合わせたらいきなり『桐さん…』だなんて！」

明らかに何かを含んだ笑顔で初春はそう問いかける。

「あ、えっと、それは…」

「もったいぶらないで下さいよ。今日はあわよくば…とは思ってましたけど、なんか速攻で言質が取れちゃったのでこうやって須臣さんと別行動にしたんですから。親友に正直になるってとってもいいことだと思います！さあ、遠慮しないで…！」

好奇心に溢れた親友の瞳に、佐天は肩をすくめてみせた。

「…はあ、まったくもつ。まあ、初春なら話してもいいかな」

そして、さらりとその言葉を口にする。

「なんていうか、説明が難しいんだけど…ようは告白したのよ」

「へえーそんなんですか、告白を…。って、こっ告白?!?!…いった…く、ごほつごほつ!」

想定外の言葉に呼吸を誤って、初春は盛大にむせ返った。

さっきとは別の意味で涙目になり、苦しそうに身をよじりながらも、少女はけなげに質問を続ける。

「い、一体いつですかそれ?!?!そしてどこで?!?!?」

そんな初春を支えてやりながら、佐天は口を開く。

「あの日…7月24日に、病院でね。ほら、あの後私ひとりで病室に戻ったじゃない?」

あっさりとそう答えながら、少女はそのときのことを思い返していた。

それは、思い出そうとするだけで、何か熱くなってしまうような記憶だった。

その言葉は、言おうとして言ったというよりは、思わず出てしまった、というのが本当のところだと、佐天は思う。

『幻想御手』(レベルアップ)と呼ばれる事件の収束後、夕暮れ

の病室で。

感謝や、嬉しさや、それだけではない何か。

そんなものを余さず込めた言葉をぶつけられて、青年はひどく、優しく笑った。

そっか、ありがとう。そういつてもらえて、とっても嬉しいよ。ただ…

(この言葉で、私、振られるんだ…って思ったのよね…)

そうして必死に取り繕おうとする少女の背をぼんぼんとあやしながら、記憶の中の青年は言葉を紡ぐ。

まだ、僕は君の事をよく知らないし、君は僕の事をよく知らないと思うんだ。我ながら意地悪な言葉だけれど、吊り橋効果って知ってる？

(あの時私、かっとなってずいぶんひどい事言ったよっな…)

うん、ごめんね、そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。でも僕は年上だから、そういうのはフェアじゃないって、どうしたって考えちゃうんだよ。

だからさ、まずは友達になろうよ。何なら親友でも。

10年…じゃいくらなんでも長いかな。とりあえず5年くらいにしておこうか。いろんなことを知るには十分な時間だろうしね。

もしも、それだけの時間がたつても君がまだ、そう思ってくれたのなら。その時は、本当にしっかりと考えて、君に答を返すよ。だから今言ってくれた言葉は、聞かなかったことにして、君と友達をやりたいんだけど…ダメかな？

その言葉に、佐天は頷いてしまったのだった。

一通り思い返して、何度か繰り返した思考をなぞる。

(といっても、ようははぐらかされたってことよね。でも桐さんはあの時、一瞬だって困った顔をしなかった…)

パイプの横に紙封筒の影を見つけて、佐天は指を滑らせた。

「あれあれ。佐天さんさつきから黙り込んでどうしたんですか？そこまで言っちゃったんですから、その告白の模様を微に入り細にわたって説明してくださいよ！このままじゃ気になって気になつて…!!」

(本当に真剣に向き合ってくれた上で、答を出さない事を選んでくれた。それだけ私が子供だったってことなんだろうけど…)

獲物の頼りない感触を指にひっかけて抜き出す。

「よ…つと。よっしゃあ、三枚目ゲッター！！ついでにパンツも三回目」

「わ、わひゃあああ！！」

そして茶封筒を掲げるついでに、初春のスカートも景気よく跳ね上げた。

三度涙目になった親友に楽しげに笑いかけて、佐天は歩を進める。

「もう佐天さん！今日は見つけるたびに跳ね上げるつもりですか！  
！そしてそんな事で私の追及を妨げられるとでも…」

「そんなことより初春、あんたはさっきファミレスで何してたのよ。  
『風紀委員』の仕事？」

わざとらしい話題の逸らし方だったが、素直な初春は見事にそれに引っかけた。

「え、ええ。あのファミレスの側に高校がひとつありましたよね？  
その先生の仕業なんですけど、その学校用のLANが無線であるファミレスまで『延びて』るんですよ。アングラな掲示板で、柄のよくない人たちが休み明けの学力テストの問題を『仕掛け』るって盛り上がってるとの情報が入りまして…」

「へー、そんなことが…。でも、テストの問題なんか何に使うのか

な。スキルアウトの人たちって、真面目に授業なんか出ないんじゃないの？」

「やっぱり一般の生徒に売ったりするみたいですね。それだけでもよくないんですけど、さらにそこから恐喝や詐欺みたいな2次被害が起きますから……」

話しながら、比較的ひらけた空き地へと出る。

区画整理の際、どうしても出来るスポットのような空間。

そこには、

「女のガキだけ……？おい。一緒にいた野郎はどうした？」

ナイフ。

金属バット。

木刀。

ホッケースティック。

その他いろいろの。

さまざまな得物を持ったスキルアウト達がずらりと待ち構えていた。

(……っ！？逃げないと！)

反射的に引き返そうとする初春。

「……ダメっ……！」

だが、気付いた佐天がそれを押しとどめた。

初春が踏み出そうとした地面を、ガン！と鉄パイプが叩く。

「ああ、こつちも通行止めだぜ？」

身をすくめながらも状況を把握して、初春がつぶやく。

「そんな、後ろからも…！」

二桁以上の不良に挟まれて、少女たちは身を寄せ合ったのだった。

…絡まれたのはあの二人なのに…。

…狙いはあの子なの？

E X T

T O N

路地の日かげに入っても、暑いものは暑い。

「直射日光の方はないんだけど、やっぱり蒸すよね…」

エアコンの室外機の並ぶ路地裏では、なおさらだった。

ちょうど首筋くらいの高さから流れてくる生暖かい空気に閉口しながら、桐は腰をかがめてパイプの裏に手を這わせる。

その指に、安っぽい紙の感触。

「あれ、また…？うーん、幸先いいんだか悪いんだか」

ぐっと手を伸ばして、それを引き出す。

取り出した茶封筒を、慣れた仕草で背中中のボディバッグに適当に突っ込むと、青年はポケットから携帯を取り出して地図ソフトを操作した。

地図上に、マーキングの光点が灯る。

「これで五枚目…。佐天さんの嗅覚はホントに信じていいのかもしれないね」

一人ごちたところでメールの着信に気付いて、桐は地図アプリを一時停止させた。

通常画面に復帰した携帯を操作して、新着メールを表示させる。発信者は



「やっぱり、ノーネからか」

昨日から急激に取得メール数の増えた携帯。

その理由となっていている少女からの新着を確認して、メールを開く。着信時刻はちょうど今しがたの午後2時32分。

本日3通目のメールだった。

内容は、今食べているケーキのことで、その写真。どうやら今日は母親と一緒に出かけられているらしい。

明るい文面を微笑ましく思いながら、当たり障りのない言葉を選んで返信を返す。

(まだ2日目だけど、どうやら上手くやれてるみたいだね。記憶を失ったわけじゃないから、馴染めなくはないだろうって思っただけ)

こちらからのメールの送信を確認したところで、フリップを閉じる。同時に、携帯が震えた。

通話着信のライトのパターンが一時点灯して、だが、すぐに光は途絶えてしまう。

「……………」

不思議に思いながら桐は携帯を開いて、着信を確認する。発信は佐天からだった。

(何でワン切りなんか…?)

すぐに折り返して電話をかけてみる。

一回半のコールの後、電話はつながった。が、

「もしも…つくう!?!」

話しかけた青年の耳に、鋭いノイズが走る。

続けて硬質な音が響いて、野太い男の声と、少女の声が遠く聞こえはじめた。

「…!!」

(考えるまでもなく、なんかくるな事になってない感じだね。別行動したのは失敗だった…!)

桐は表情を厳しくすると、通話を終わらせて地図ソフトを起動させる。

携帯の狭いディスプレイに表示される光点は、2つ。

ひとつは自分を表すもので、もうひとつは初春を表すもの。

(彼女たちは今、ちょうど向かいの広場にいる…)

間の悪いことに、光点は建物を挟んで、それぞれ路地の中腹に存在していた。

進んでも戻っても、同じだけの時間がかかってしまう状況。

「それなら…!」

(目の前の建物は、いいところ三階建てくらいか、いけなくはない高さだね)

逡巡する事なくルートを決定し、桐は魔術の構成を思い浮かべる。

(……?)

その手順に問題があったわけではない。  
それでも何かを感じて、青年は刹那、意識に疑問を浮かべる。

だが、その時には彼のチカラは発動していた。

「我は駆ける天の銀嶺！」

重力中和。

自分を地面に拘束していた重力がほんの一瞬だけ解ける。その間に彼は大地を蹴って、中空へと飛び出していた。

耳元に気流の流れる音を聞きながら、踏み台にする室外機に狙いをさだめる。

壊しても構わないくらいの気分でそれを蹴って、青年はさらに上へと跳び上がった。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

Phase .

パニックにならなかったのは、自分が『風紀委員』だったからだろうか。

なんて、とつくに上滑りを始めている思考を自覚しながらも、初春はスキルアウトの男に向かって口を開いていた。

「な、なんなんですかいったい。私達はたまたまここを歩いていただけで…」

「んなこた聞いてねえんだよ。一緒にいた野郎はどうしたかって聞いてんだ」

ガン！と地面に鉄パイプが振り下ろされる。その音に首をすくめる初春をかばうように、佐天が前に出た。

「や、やめなさいよ！」

「ああん？…いや、てめえ、何持ってやがる」

男の腕が乱暴に振られる。

「あつ…！？」

すぐに佐天の手から携帯が弾かれて、アスファルトを滑っていった。

「通報でもしてくれるところだったのかあ？ふざけた真似しやがって。これで優しく訊いて貰える可能性は消えたな、お前が悪いんだぜえ？」

顔を嫌らしく歪めながら、鉄パイプの男は佐天の肩を強く押した。

「きゃ…！」

押された佐天は初春にぶつかって、ふたりはよろめく。

それを楽しそうに見ながら、男と佐天たちを囲むスキルアウトはゲラゲラと笑った。

群れの中から、茶化した声があがる。

「おいおい、イジメちゃダメだろう？」

鉄パイプの男はにやにやと嗤いながら、

「ああ、そうだそうだ、女には優しくしてやらないとな、そう、やさしく、なああ？」

佐天へと近づいていこうとする。

身を硬くする佐天と、初春。

すぐるような心地で初春を抱き寄せながら、佐天は思わずある青年の名前をつぶやいていた。

(き、桐さん…！)

そして唐突に。

佐天の目前、鉄パイプの男にすつと、影が差す。

「え…？」

それを見つけた佐天が疑問を覚えるよりも早く、それは起こった。

迷いのない、佐天と初春が望んでいた『声』が頭上から響く。

「我が指先に琥珀の盾！」

「なん…ゲエツ！！」

鈍い衝撃音。

飛び降りてきた青年と圧縮された空気の塊が、スキルアウトの男を鉄パイプもろとも押し潰す。

遅れてふわりと、澄んだ風が辺りを撫でた。

降り立った青年が、口を開く。

「お待たせ。大丈夫かな？」

「き、桐さん！？」

「その様子なら問題なさそうだね。さてと、それじゃ、頭を低くしてもらえるかな」

佐天の肩に軽く触れながら言いおいて、桐は意識を正面と背後に振り向ける。

そして、ぼつりとつぶやいた。

「…すぐに、終わらせるから」

同時に思考を走らせる。

( やっぱり、完全に囲まれちゃってるね。さてと、どっしりよっか… )

スキルアウトに囲まれる佐天と初春。

そのうえ、男から小突かれる佐天。  
屋上から見下ろした光景は、とてもその場にじっとしてられるよ  
うなものではなかった。

（正面には8人、後ろには少なくとも同数以上……！）

それでも、この場に飛び込んだ事自体にはカケラも後悔を覚える事  
なく、桐はすばやく状況を把握していく。

「ああん、何だデメエはあ……！」

飛び込んだ以上、ほぼ出会い頭になるのは分かっていた事だし、予  
想もしていた。

着地の衝撃が残る中、桐は小さく息を吐きながら、足元に転がって  
いる鉄パイプをつまさきで跳ね上げて、振り下ろされてきたゴルフ  
クラブをそれで受けた。

カン、と短い音と共にそれが弾き返され、同時にこちらの鉄パイプ  
も、保持する事ができずに地面へと落ちる。

そして一瞬、視界がぶれるように振動する。

その次のことは、自分でも良く分からなくなっていた。

肺の中で、吐こうとしていた息と吸っていた息が衝突し、痛みが走  
る。

まるで、今までの呼吸と違うリズムの呼吸を、身体の方で勝手に始  
めたように。

ずだんっ……！！

音に驚いて　だがそれは彼自身のかかとかが地面を蹴った音だった

のだが　桐は、はっと我に帰った。

見下ろすと、いつの間にかゴルフクラブで殴りかかってきた男が、これ以上ないほど痛撃された足を抱えて、泣き声混じりで絶叫している。

先に感じたのと同じ違和感に、彼は脳裏に言葉を滑らせた。

（なんだろう…？）

訝しい心持ちで青年は、目だけで左右を見回した。

囲まれている中で一方に仕掛けたのだから、手を出さなかったもう一方からも来るし、当然、仕掛けたほうからも続けて攻撃は来る。

（これ以上密集されたら一気に押し潰される。やっぱり魔術の使用は大前提だね…）

結論して、構成を編む。

（！？）

想像以上に速やかに編み上がる、魔術の構成。

内心に驚きを感じながらも、身を伏せている初春と佐天たちの頭越しに右手を振り出し、桐は叫んだ。

「我は流す天使の息吹！！」

『空気制御』（ヌマーティックコントロール）。

学園都市で青年に与えられた能力名にふさわしく、桐の掌に、猛烈な空気圧が膨れ上がる。

無風状態から一気に巻き起こった突風が、片方のスキルアウトたちを襲い、広場の外、路地の向こうへと文字通り、押し流し、吹き飛



ばしていく。

「て、てめええー!!」

同時に。

最初に仕掛けた方からの攻撃が、左右から青年を襲う。

(……!?)

そして今度は、はつきりと自覚しながら、それが起こった。

時が止まるように、思考が止まる。

右から工業用の柄の長いハンマーが、左から護身用の警棒が、振り下ろされてきている。

桐は大きく飛びのこうとしたが、身体がそれを拒否したように動かなかった。

代わりにほんの少しだけ…、頭一個分だけ退いて、踏みとどまる。

鼻先を掠めてハンマーの頭が、空を裂いて地面へと落下した。

警棒はそもそも目測を誤っていたのか、こちらに届いてすらいない。

(……!)

落ちたハンマーが再度振り上げられるのを、桐は待つつもりはなかった。

呼吸を止めて、ハンマーの持ち主に半歩踏み込み、そこで再び、息吹を放つ。

すると、同時に拳も出ていた。

存分に目の前の『敵』へとねじ込まれる、硬く握った拳の感触。  
打ち込まれた胸元から折れ曲がるような格好で、男が悶絶して転倒  
するのが見えた。

ステップを踏む。

組みかえた足に追隨するように体を捻ると、今度は警棒を持った男  
のほうに、振り返りざまの裏拳を放つ。

鼻先にそれが掠り、うろたえる相手に、青年はかなり大きく踏み込  
んだ。

身体がすれ違うほどに深く、強く。

相手の体に肘を埋め込む。

その重く鋭い衝撃に、肘を突き込まれた身体は一瞬ビクリと震え、  
とさつ……と軽い音を立てて、その場に倒れた。

場に、静寂が満ちる。

(これは…)

桐は信じられないような気分で、自分の身体を見下ろした。

(いや、変化は身体じゃない…)

『それ』を自覚したせいだろうか。  
数瞬だけ、動悸が激しくなった……が、すぐに収まる。  
あとは静かに、体温までもが下がっていくような気がしていた。

(意識が…感覚が……ものすごくシャープになっている…)

ふと、顔をあげて桐はスキルアウトたちを見やった。  
何が起きているのか、理解するのに精一杯なのだろうか。  
あるいは、理解してしまうのを彼らの理性が拒んでいたのかもしれない。

ぽかんとこちらを見つめる彼らにほんの少しの哀れみを覚えながら、  
青年は黙って足元の鉄パイプを拾う。

そして、残りの十数人をひとりで叩き伏せたのだった。

…このくらい、出来ても不思議はないけれど……。  
…それでも、これは……。

E X T

T O N

「……なんていうか、むちゃくちゃですよー」

初春が、いまいち実感のこもらない声でそうつぶやくのを聞きながら、青年は自分に起こった変化を再確認していた。不思議な既視感が漂う心中で、なんとはなしに呟く。

(きっかけをあえて探すなら……)

思い出されるのは、つい先日、『領域』の中での戦いの記憶。

(いや、探すまでもなく、多分『あれ』なんだろうね……)

導き出した答えは、あの時使用したいくつかの『音声魔術』。その中でもとりわけ印象に残っている、あの一撃。

渾身の威力、出せるすべてのチカラを制御することなく注ぎ込んで撃ち放った、純白の光熱衝撃波だった。

構成を編む事なく、青年はその言葉をつぶやく。

「『私は放つ光の白刃』、かあ……」

桐の扱う『音声魔術』の『原典』。

過去に存在したライトノベル『魔術士オーフェン』の主人公、オーフェンが得意とした、まさに代名詞的な、魔術構成。

(確かにあれを撃った後、何かがひどくしっくりとはまったような気がしたんだよね……。もともと扱えているとは思っていたんだけど、構成自体の精度、身体の使い方、共にまだ、『先』があった。だと

したら…)

「…はくじん？なんですか、それ」

物思いに沈もうとする青年に、きよとん、とした表情で、佐天がのぞき込んで来る。

その顔に思索を打ち切って、桐はぱたぱたと手を振ってみせた。

「…いや、たいしたことじゃないよ」

「でも、すごいですよね！能力をほとんど使わずに終わらせちゃうなんて…。私も何か格闘技、習おうかなあ…」

しゅっ、しゅっと意外にさまになった格好で、拳を繰り出す少女。その姿にほろ苦い笑みを浮かべて、桐は何かを口にしようとした。

「あ、でも、女子の力じゃダメなのかな。どうしても私たちって、男の人に比べて弱いし」

だが、ぴくり、と反応し、言葉を止める。

「女の子が…弱い…？」

今度はなぜか様々な事を…本当に様々な事を思い返したような気分を味わいながら、青年は聞き返した。

「なにをわけのわからないことを言ってるのかな？」

「え、わけわからない、ですか？」

目をぱちくりさせ、佐天が聞いてくる。桐はそれに、重々しくうなずいた。

「当然。世界の常識だよ。女性はいとも容易く男をポッコポコに出来る生き物なんだ。精神的にも、肉体的にも」

「肉体的にぼこぼこって…そりゃ、幼稚園とかの小さい時なら出来るでしょうけど…」

「いや、そういう意味じゃなくて…」

わかってもらえない歯がゆさを感じながら、桐は言いなおす。

「確かに、一般的には男のほうが腕力で勝る事になってるよ」

軽く手振りなど加えながら、青年は説明を続けた。

「でも、別にそれは女性の身体は鍛えられないって意味じゃないんだ。ある程度以上鍛錬すれば男も女もなくなってくる。やっぱり得意分野は違うから、頭を使わないといけない部分はあるんだけどね。その辺りは工夫次第でどうにでも…って」

そこでようやく盛大に脱線している事に気付いて、桐は言葉を止めた。

（いきなり何を言ってるんだ、僕は…）

ふむふむ、と興味深そうに頷いてしまっている佐天を見て、あらためて自らの失敗を確認する。

「じゃああたしでも鍛えれば…もしかしたら桐さんみたいに強くなれるのかな……」

なにやら不穏な目標を掲げそうになっている少女に、桐はゆっくりとため息をついた。

「…いや、おすすめはしないよ。人の殴り方なんか、知らないなら知らないでいいって思うんだ。そんなものは、たまたま知ってる奴に任せておけばいい話なんだし。それにね…」

ふっと、佐天の目を覗き込んで、青年は続ける。

「せっかく手にしている『無敵』をそうやって自分から捨てることはないと思うんだ。だって、さ」

「君みたいな普通の子のほうが、単なる『最強』なんかより、よっぽど『無敵』に近いんだから…」

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phrase .

なぜか顔を赤くして黙り込んでしまった少女の肩をポンポン、と叩いて話を切り上げると、青年は初春へと振り返った。

「とりあえず、『警備員』（アンチスキル）を呼ぼうか。どのみち事後処理はしなきゃいけないし。そうだね、そちらへの説明は……うん、警邏中に遭遇、威力妨害を受けたため、やむなく鎮圧ってところでもいいかな」

すらすらと話を進める桐に、初春が感心したような声をあげる。

「なんだか白井さんがよく使う理由みたいですね。特にやむなく、のあたりが」

「……まあ、実際参考にさせてもらったしね？」

おざなりに言い置くと、携帯を取り出して『警備員』へと連絡を取り始める初春を背中に、桐は最初に倒したスキルアウトのひとりへと歩み寄った。

相手の目線にあわせてかがみ込むと、今度は明らかに温度の下がった声で、男に向かってつぶやく。

「さてと、尋問ってほど大げさにする気はないけど、報告の簡略化のために協力してもらおうかな。もう口はきけるよね」



先程まで悶絶していた鉄パイプの男は、ぎろりと青年をにらみつける。

それを意にも介さず、

「どうして人の大事な友達に絡むような真似をしてくれたのかな？」

ぐい、と男の肩を掴んで起き上がらせると、桐は静かに尋ねた。

同時に、携帯のボイスレコーダーを起動させる。

（今回はたまたま間に合えたからよかったようなものの…）

もし、間に合わなかったら。

全く面白くない想像に、掴んだ腕に力がこもる。

「この…痛っ…」

男がうめき声を上げるのもかまわず、青年は再び繰り返した。

「僕はどうしてかって訊いているんだ。色気のないうめきなんか聞いても楽しくないんだけどね」

連絡を済ませたのだろう。

桐は初春が自分へととっと歩みより、すぐ後ろで足を止めるのを感じる。

それを待っていたというわけではないのだろうが、ちょうどそこで男は辛そうに口を開いた。

「くそ、こんなんアリかよ…。『仕掛け』であんな真似ができる上に、喧嘩まで強いなんてどんなチートだ、クソが」

だが、意味の取れない言葉に、桐は心中で戸惑う。

(『仕掛け』…?)

「覚えがないって顔しやがって。てめえの残したワームのせいで俺のマシンがどうなったのか、イチから説明しないとわかんねえってのか。あんなエグイ真似しておいてよお…」

どうやら、ハッカーだったらしいその男は、憎々しげに青年をにらみつけた。

「簡単な仕事だと思ってたのによ…。予想外に底意地の悪いトラップ喰らって、それでもなんとかそれを抜けてようやくゲットできたと思ったら、目的のファイルが新種のバックドア満載ってどういうことだよ。あげく、こっちの感知には全くひっつかからねえし…」

「……」

なおもぶつぶつと恨み言を吐き続ける男を前に、桐は無言で思考を走らせていた。

(僕は、初春さんに呼び出されたファミレスで、待ち時間にノートパソコンを開いていた…)

「タチが悪いんだよ、どれだけ捻じ曲がった根性してやがる…」

(そして後から到着した初春さんは、『一見仕掛けるツールには見えない』携帯ゲーム機で、『風紀委員の仕事』に没頭していた…)

思索の最後。

桐の脳裏に鮮明に、先程のファミレスでの初春の台詞が再生されていく。

「…うう…確かにそれは魅力的な提案なのですが…今は出来ればすぐにここを出発した方がいいんですね…」

並べて考えてみれば、それはひどく単純な構図だった。

上に向けた左の手のひらに、右の拳の下の部分を軽く打ち付ける。ぽん、といういい音は出なかったものの、それを気にする事なく、桐はすごく穏やかな表情で肩越しに後ろの初春を振り返った。

彼女も今の話を聞いて、全体の状況を理解したのだろう。

青年の視線にふれて、後ろに立っていた人影がどこかコミカルに、びくつと震える。

「あ、あは、あはは…」

そこに頭に花をあしらった少女のぎこちない笑みを見つけて、青年もゆつくりと笑みを浮かべた。

なんともいえない空気の中、微笑み会う両者。

（なんだ、要は人違いだったんだね。それなのに襲った相手は間違ってたなかったって話か…。どうせ勘違いしたのなら、襲ってくるのもこっちにしてくれればよかったのに）

心中で大きいため息をつきながら、桐はなおも負け犬の繰言を続ける男へと向き直る。

（さてと…。こんな場合、どんな顔すればいいのかわからないけど…。まあ、適当にやってみようか）

そうやって方針を決めると、桐は意識して、出来るだけ相手を小馬鹿にした、生意気な表情をつくってみせた。合いそうな口調と台詞を選んで言葉を吐き出す。

「…はあ、聞くに堪えないね。遊び相手にしても物足りなかったし。もう一回、ゼロから勉強してきたらどうか。ああ、C言語とか、オススメだよ？」

「なっ…がっ……てめ…！」

効果は、抜群だったらしい。

初春が息をのむ気配を背中に感じながら、顔を真っ赤にする男を支えていた肩の手を離す。

支えを失ってみつともなく地面に転がる男に、明らかに興味をなくしたように視線をはずして立ち上がる青年。

「く…そお…があ…」

這いずる様にしながらにらみつけてきている男に、初春を見せないように自分の身体で隠しながら、桐は少女の背を押してその場を離れる。

(演出が過ぎた気はするけど…これではない恨みは、間違っても彼女には行かないはず…)

それからほどなくして『警備員』(アンチスキル)が駆けつけたのだった。

……………。

事情聴取を含めた揉め事の事後処理は、やはり時間がかかるものだった。

すべてが終わり、詰め所から開放されたのが午後六時半頃。

桐にとっては夕食にはまだ早い時間帯だったが、どうやら、住人に門限のつきまとう学園都市のファミレスでは、そうではなかったらしい。

質問疲れした三人で訪れたファミレスは、ちょうど夜のピークタイムを迎えていた。

混雑する店内で、佐天が手洗いに立ったタイミングを見計らって、初春は桐に頭を下げる。

「ホントにすいませんでした。須臣さんにはとんだご迷惑をおかけしちゃって…」

ひたすら恐縮する初春に、青年は軽い言葉で返した。

「いや、君が気にする事じゃないよ。今回はたまたま運が悪かっただけなんだし、それをあえて誰が悪いつて話にしても、ね」

「でも…」

（なんか落ち込んだじゃってるな…マジメなのは悪いことじゃないんだけど…）

なおもすまなそうに肩を落とす少女に、桐は軽く手を振ってみせる。

「とにかく、この話はこれでおしまい。さ、とつとつ次の話題を振ってくれないと佐天さんが戻ってきたときに気まずい雰囲気を見せることになっちゃっよ?」

「え…あ、そんな…！ちよ、ちよっと待ってください…！！」

茶化した口調に、初春が狙い通りあわて始めるのを見ながら、桐は薄いオレンジジュースを口に含む。

そして聞こえよがしに、こう言った。

「あー、新しい話題はまだかなー？佐天さんそろそろ戻ってくるよ  
うな気がするなー」

「そ、そんな風に言われると余計急には出てこないじゃないですか  
！えと、えーっと、あ、ああ！」

子供っぽくあわてながらも、何かを思いつく初春。

だが、そうして投げられた言葉は、青年にとって、かなり重めの地  
雷だった。

「そうです！じゃあ佐天さんの告白に須臣さんはどう答えたんです  
か！？」

続けて喉に流し込んでいた柑橘類の風味が、桐の入ってはいけない  
場所に流れ込む。

「な、ケ、ケホ、ケホッ…！」

（よ、よりもよってその話題を振るかな？！）

軽くむせながらも、桐はあのと時の情景と、自分の言った言葉を反  
復する。

「佐天さんは思わせぶりにするばかりで、肝心なところは全然教え  
てくれないんですよ」

（まあ、そうだろうね…）

ようやく呼吸を落ち着かせて、桐は息を吸い込んだ。

後ろめたいものを飲み込む時の苦さを心中に感じながら、感情を混  
ぜずに答える。

「…彼女がそうしているのなら、僕からもなにも言えないかな」

そうして、ひどく大人びた笑みを浮かべる青年に、初春は一瞬言葉を失って、今度は別の理由であわてながら青年に返した。

「そ、それはそれで通じ合っちゃってる感じがしますね。なんだか  
憧れちゃいます」

（いや、そんないいものじゃないんだけどね…）

なぜか顔を赤くしている初春をよそに、桐は無言のまま、あらため  
てそのときのことを思い返す。

そしてまた、心中で繰り返した。

（そう、そんなにいい対応だったなんて言えない…）

なぜなら、青年自身もその時、ひどくあわててしまっていたのだか  
ら。

（佐天さんが、『あの会話』をどう取ったのかわからないけど、  
結局あれは、適当な言葉で相手を煙にまいただけ、なんだよね…）

あの、出会い頭のような、幼くて必死な告白の後、飛び込んできた少女を抱きとめて。

内心で桐は、かつてないほど狼狽してしまっていた。だが、同時に。

(それでも、どう答えるかは決まっていたんだ…)

本当に、必死だったのだろう。

自分と同じくらい…いや、確実に自分よりもパニックになってしまっている年下の少女をなだめながら、それでも青年は思っていた。

(一番最初に、僕なんかは彼女にふさわしくないって思えてしまったから…)

それは、自分が本来は大学生という『自覚』のせいだったのだろうか。

あるいは、自分がこの世界にとっての異邦人…『現実』からのトリッパーだという『認識』からだったのかもしれない。

または、それ以外の『ナニカ』か。

(そのあたりは、自分でも良く分からないんだけどね…)

結論のでない思考を打ち切って、考えの焦点を『あのとき』へと移す。

彼女に何を言ったのかはもちろん、一言一句違う事なく覚えていた。だからこそ頭を抱えたい気分になりながら、青年は自虐する。

(とにかく、傷つけないようにして事ばかり思って、あのときの僕、『君をよく知らない』とか、『年上だ』とか、『フェアじゃない』



とか。恋愛に使うにはひどくズレた言葉ばかり並べたんだよな…)

目の前のグラスの氷が、カラン、と涼しげな音をたてる。それをストローでかき混ぜながら、桐は後ろ向きな思考を続けた。

(あんなもの、本気の恋愛だったら『そんなの関係ない』の一言で終わっちゃうような薄っぺらい言葉でしかなかったのに。まあ、そんな説得に頷いてしまうくらいには、佐天さんがコドモだったからある意味助かったんだけど…)

それでも、鈍い罪悪感にはつきりと残っていた。

(だからこそ、彼女には真摯に向き合わないと。そう、どうするにせよ、どうなるにせよ。できれば、僕なんかよりもマシなやつと付き合ってくれるところまで面倒が見られればいいんだけど…いや、それじゃ単なる傲慢か)

お人よしに過ぎる思考を転がしながら、彼はゆっくりと飲み物を口に含む。

その仕草になぜか、初春はさらに顔を赤らめたのだった。

…わたしは何を考えてるのよ……。

…こんなの…。

E  
X  
T

清潔感のある、どこかのオフィスのようなたたずまいの部屋で。

大型のスクリーンに映し出された資料を背に、黒子は桐へと問いかける。

「それで、これが概要ですの。…って須臣さん、聞いてらっしゃいます？」

脳裏にしつこくわだかまる睡魔に抗いながら、桐は緩い返事を返した。

「…聞いているよ。というか同じ説明、この夏休み入ってから10回は聞いたと思うんだ。こないだの寮祭の時に聞いたし…」

「それでも聞いていただきますの。なにしろ、今日は本番なのでから」

有無を言わさない口調に、青年は目線を起こして答えた。

「それもわかってるよ。だからこんな朝早く、ここまで来ているわけだしね」

夏休みも半ばを過ぎたある日の早朝。

勧められるままに座った初春の指定席：『風紀委員』（ジャツジメント）第177支部の備品の椅子に座って、桐は夏休みの始まりごろから今日に至るまで、黒子と初春に何度も繰り返された言葉をつぶやいた。

「『公募荒らし』（エグザルーン）か…」

「そうですね！毎年この時期に行われる『風紀委員』（ジャツジメント）の夏季公募に紛れ込んでくる、不心得な人を洗い出して殲滅するのが今回の須臣さんの任務なんです！！」

勢い込んでそう言う初春の言葉を、

「任務って…いや、それ以前に殲滅って物騒な…。僕は見つけてから君たちに報告、だけでよかったよね？」

桐はやんわりと訂正した。

（テンション高いなあ…。白井さんはもともと乗り気だったけど、この間の一件以来、なぜか初春さんまで妙に張り切っちゃってるんだよね…）

「まあ、そんなんですけど。でも、須臣さんならできちゃいますよね？」

そう言って、何かを期待する瞳でじつと青年を見つめる初春。

（いや、だからそれにどう応えて欲しいんだろう…）

とりあえず、あいまいな笑みを向けることで返答を避けて、桐は抱えていた疑問をふたりに投げた。

「ところで、その『公募荒らし』（エグザルーン）対策のために、参加者の中に僕みたいな一般生徒の協力者を入れるっていうのはわ

からなくもないんだけれど…」

言いながら、目の前に積み重ねられている書類を取り上げ、ぱさぱさと虚空を扇いでみせる。

「こんな仰々しい契約書にサインする必要はあったのかな…？しかも9枚も」

桐としては、軽い気持ちで放った疑問だったのだが。

その言葉に、なぜか初春は表情を固まらせる。

「え…つと…そ、それはですね…」

そして、どこかしどろもどろに言葉を継ぐとする少女を、黒子が強く引つ張って止めた。

そのまま代わって話しはじめる。

「ええ、もちろんでございますの。夏季公募は『警備員』（アンチスキル）の方々も監督に動員される公式行事ですもの、正式な手続きを踏まねば参加も出来ません。あなたのための枠をあけるだけでも一苦勞でしたのよ？」

そう、流暢に説明するツインテールの少女。

（まあ、学園都市の『公』（運営）側の組織なんだし、そんなものなのかな…）

青年が納得したその後ろで、電子錠の解除音と共に、シュツと扉が開く。

そして黒髪の女生徒が、慣れた様子でオフィスに顔を出した。

「あら、おはよう。あなたたち、今日は早いのね」

「おはようございますの」

「あ、固法先輩。おはようございます！」

やり取りされる挨拶に、雰囲気を感じて桐も立ち上がった。

とりあえず、といった感じで目礼を返す青年に、女生徒が目をとめる。

「ああ、彼がその……協力者ね？話は聞いているわ。固法です、よろしく。お会いするのは初めてじゃなかったわよね？」

「ええ、ここで何度か。僕は須臣です。そういえば、話すのは初めてでしたね」

「そうね。それじゃ、今日は頑張つて。無理はしないようにね」

(え、無理しないようにって……?)

固法の言葉になんとなく違和感を覚えて、桐は訝しげな表情を浮かべる。

だが、その違和感をカタチにする前に。

「さ、さあ！作戦会議はおしまいです。向こうで着替えなきゃいけませんし、早く会場に行きましょう?」

「その通りですの。それに、肝心の着替えをお忘れになられてはいけませんわね」

初春に背を押され、さらに黒子に持参したスポーツバッグを押し付けられて、考える間もなく青年は第177支部から連れ出されたのだった。

とあるナニカヴォイス・ソーサーの音声魔術士

41

Phase .

集まってそこそこに、座学の試験を続けて受けると、そのまま軽い昼食を挟んで次の項目に。  
今は比較的容赦のない感じで、公募という名の訓練が進んでいた。午後の早い時間、さんと太陽の光が照りつけるグラウンドで、早くも遅くもないペースで、間断なくホイッスルが吹かれ続ける。そのペースにあわせて腕立てを繰り返しながら、桐はぼんやりと考えを巡らせていた。

(こここのところ連続で深夜番のバイト入れすぎたせいか、どうも眠

気が取れないね…。まあ、夜のほうがバイト代、いいんだけどさ…）  
両隣で苦しそうに身体を起こしている候補生が聞いたら、一気に脱力してしまいそうな緩い思考。

そんなものを続けつつ、あえてゆっくりとひじを伸ばして、笛に合わせて身体を沈める。

（でも昼夜逆転に慣れきっちゃうと学校始まった時にキツイしね…。大学と違って高校は始業時間決まってるんだし…）

いや、大学だって始業時間は決まっているから、と突っ込む者のいない思考の中で、青年は文型学部の人間にありがちな常識をベースにして考慮を続けた。

高校でも通用しそうな代返の方法にまで考えが及んだところで…、

「よし、腕立て終了じゃんよ。ほら、休んでよし！」

笛を吹いていた、緑色のジャージを着た色っぽい女性の『警備員』

（アンチスキル）の声が桐たちの頭上で響いた。

ほとんどの生徒が力尽きるようにそのままうつぶせに寝転がる中で、桐は起き上がって腕を柔軟代わりに振ってから、軽くもみほぐし始める。

（そして、なぜだかこんなところで原作キャラに会うんだよね…。黄泉川先生、だっけ。まあ脇役の人だし、立場的にはここにいたっておかしくはないんだけど…）

そうして弛緩しようとした空気に対して、

「それじゃ2分間のインターバルを挟んで、次は腹筋。遅れた奴は



容赦なく減点するから、あんまその場を動くなよー？」

女性の『警備員』（アンチスキル）は無慈悲な言葉を吐いてから、なぜか桐の元へと歩いてくる。

（……？）

戸惑う青年。

だがそれを気にする事なく、黄泉川は桐へと言葉をかけた。

「ようよう青年。なんだか随分と余裕そうじゃんよ。やっぱ何かやってるの？」

何を言われているのか理解できずに、青年は無難な言葉を返した。

「いや、何かって言われても……」

「格闘技や、護身術の類じゃんよ。見たところ、随分骨がありそうだし。自分で気付いてた？このグループの中で、最後まで全く腕立てのペースが乱れなかったの、あんただけじゃん」

（しまった、なにも考えずにやってたから……）

「あー、やってるような、やってないような……」

どうやら変な意味で目立ってしまったていたらしい。

（退屈だからって考え事にふけるのも、良し悪しだね……）

次はそれなりにバテたふりをしよう、と心に決めながら、桐はあい

まいな笑みを浮かべた。

「いや、結構これでもいっぱいっばいだったんですけどね」

適当な言葉を選んで照れたように振舞う青年に、黄泉川はにんまりと微笑む。

「まあ、そういうことにしておくじゃん。…さあ、もう時間だよ！  
腹筋よーい！！」

そして、笛の音が響き始める。

（また回数を告げずに始めるんだね…。まったく、どこのレスキュー  
ー試験なんだか…）

桐は遅れないように、反復運動に参加したのだった。

二十分後。

「よし、そこまでじゃん」

脱落者が三割に差し掛かったところで、終了の合図が響く。

（ふう、ようやく終わりか。少なくとも今日の日課は必要なさそう  
だね…）

限界まで追い込まれる事はなかったが、それでも終わりが見えない  
まま続けさせられた反復運動に疲労を感じながら、桐は演技も混ぜ  
てゆっくりと身体を起こした。

同時に、自分がここにいる目的を果たすために、周りの人間にも視

線を走らせる。

(グロッキーっぽいのが4割、だいぶ疲れているのが5割、全然疲れてないって感じが1割つてところかな。今のところ、おかしな素振りはない。午前の試験でも、特に怪しい奴はいなかったし…)

考えをめぐらせながら、自分が疲れていることをアピールするために、ゆっくりとその場に大の字になる桐。

「くう…」

そうして、遠慮のない日差しに目を細める。

(でも、ここで寝転がってもきついただけかな…)

変わらず緩めの感想を浮かべる青年に向かって、再び声が響く。

「はいはい、そのまま十五分休憩。明けたら1500mだから、あんまり水分取りすぎちゃダメじゃんよ。ま、聞かなかったところで苦しむのは自分だから、これ以上止めないけどねー」

(言い草が微妙にひどいね…これも込みでジャッジメントの試験って事なのかな。まあ、なんでもいいか。それより日陰で水でも…)

タオルを準備しておいたのは正解だったらしい。

桐はそれを取るために、自分のスポーツバッグが置いてあるグラウンドの隅へと歩いた。

遠目に資材を運んでいる初春が、大きな荷物を抱えたまま、こちらへとぶんぶんと手をふっているのに気付いて、小さく振り返す。

それに気付いて、さらに大きく手を振ろうとする少女。

(いや、そんなに振ったら…って、やっぱり…)

勢い余って荷物をぶちまける初春を視界に納めて、桐はやれやれという感じで初春へと駆け寄っていく。

……。

……。

結局、片付けを手伝うだけで休憩時間は終わってしまった。

「さあ、位置につくじゃん。いくよー!」

汗でしっとりぬれてしまっている体操着の感触に閉口しながら、桐はスタートラインの後ろ、これから一緒に走る30人ほどの参加者の最後尾で、とんとんと足を踏み鳴らす。

(汗くらいは拭きたかったんだけどな…)

思っても仕方のないことを考えながら、ぼん、とふとももの辺りを叩いて慣らそうとした所で、視線に気付いた。

(見られてる…? 4人、いや、5人…)

頭の位置を変えずに目線だけで人数とその場所を把握してから、身体を起こす。

その動きに合わせたかのようにすっと、離れていく視線。

(なんだろう…?)

最後尾に立っていた自分を、わざわざ振り返ってまで見ていた相手をしっかりと記憶しながら、桐はスタートラインに立った。

直後、鳴り響く空砲。

たん、と一步目を踏みしめ、起こした体重移動を二歩目に繋ぐ。ぐん、と加速する感覚に、桐は軽い開放感を感じていた。だが、すぐに前を走る人間の背中にぶつかりそうになる。

(とと、加減しないと…)

力が入っていない踏み込みを制動代わりに使って、青年はゆっくりとポジショニングを考えた。

(これから走るのは1500m、このトラックにして7週半。『公募荒らし』がスキルアウトのまわしものだっていうなら、そんなに運動できない人間が来ることもないはず…)

目立たないよう気を使いながらペースを上げて、桐は全体の中ほどより、少し後ろへと移動することにする。

2周ほどの時間をかけて、望む場所へ辿り着いたところで、桐はペースをすぐ前で走る人間に合わせた。

(この辺りでいいかな。もう先頭には軽く半周差はついちゃってるけど、あれだけ飛ばしてる相手に追いつがって潰しにかかるっていうのも難しいだろうし)

前を走る背中が近づいてきている事に気づいて、またペースを落とす。

(でも、さすが『風紀委員』(ジャッジメント)候補って言うべきなのかな。全体的に随分ペースが速いね…。普通の学校の体力測定

と同じように考えてちゃ、ダメってことか…)

ちょうどトラックをまたぐように左を向いて、半周先の先頭グループを見やる

走者越しに、初春と黒子、そして黄泉川先生が見えた。だが、そこで視界をすつと塞がれる。

(誰かがインに入り込んできた…?!)

並ばれた左を向き続けるのを諦めて前を向くと、先程から見ていた背中が、ひどく近くにあった。

(もうちょっと離れていたのに…なら右に…?!)

だが、そう判断した時には、

(っつて、右にも…?!)

すでに、右側も並走されていた。

左右、そして前方。

ガタイのいい男子生徒が、青年の三方を塞ぐ。

(これ、囲まれてる…?!)

桐は状況を把握して、視線を彼らに走らせるのだった。

……っ。  
……なんなのよ、これ……。

E  
X  
T

T  
O  
N

『風紀委員』の夏季公募。

1500m走が始まった直後、参加者が走り去ったスタートラインのそばで。

冷たい麦茶を手に、『警備員』（アンチスキル）と『風紀委員』（ジャッジメント）は会話をかわす。

「なるほど、じゃあアイツが君らの隠し玉ってことじゃね？」

「まあ、そう取っていただいても否定はしませんの」

「そうなんですよ！須臣さんはウチの支部の有望株で即戦力な人なんです！！」

黄泉川の問いに、まんざらでもなさそうに黒子が答え、うれしそうに初春が肯定する。

手元の資料をめくりながら、長身のアンチスキルは記載されている文字を読み上げた。

「能力はレベル3、能力名は『空気制御』（ヌマーティックコントロール）、か…」

資料に示された情報を、心持ち得意気に黒子は補足する。

「恐らく本気で行使すれば、大能力（レベル4）は固いですわね。先の『幻想御手』（レベルアップ）事件の際も、あのお姉様と共



闘して足手まといにならなかつたようですし。それに何度か巡回に同行しましたが、能力に加えて判断力もそれなりですの」

「それに素手でも強いんですよ。こないだなんか、絡んできたスキルアウトの人たちを私と佐天さんを守りながら、ひとりでやつつけちゃったんですから！」

好意的なそれぞれの反応に、二人があの子を随分と買っているのを理解しながら、黄泉川は思考していた。

(確かにあの子ならそれくらいやりそうじゃん…)

立ち居振る舞い、物腰、態度、あるいはその他の『ナニカ』。

もちろん、後方支援であまり現場に出ない初春にはわからないだろう。

有事の際の行動を、学園都市の『時間割り』(カリキュラム)によって手に入れた能力に頼りがちな白井も、気付けていない可能性が高い。

だが黄泉川には、『それ』がはっきりと見えていた。

(鍛え上げられ、研ぎ澄まされたモノの片鱗…)

能力に触れる事なく、自らの身体を頼りにする黄泉川だからこそ気付けたこと。

ふと、着慣れている強化セラミック製のボディアーマーの感触を思い出して、長身の女性は首を振った。

(…そう、あんなものじゃないじゃん)

あえてその印象をたとえるなら、年経た理念によって愚直に鍛え上げられ、錬鉄された…、

(『鋼』(レザージェジ)のような…)

『能力』抜きで、これだけの評価をさせる存在。

間違いなく、彼は強いのだろう。

『風紀委員』に彼が加入するのであれば、あるいは抑止力的な意味でも期待できる戦力になるかもしれない。

だが同時に、彼女はちいさな疑念を感じていた。

(…力は多くの場合、『理由』がなければ存在しないものじゃん)

そして、黄泉川の経験上、『力』の大きさとそれに対応する『理由』の大きさは、多くの場合比例するものだった。

暑いグラウンドに埃っぽい風が舞うのを感じながら、黄泉川は思う。

457

それなら、あの青年にはどんな『理由』があるっていうんじゃない？

とある十二カの音声魔術士  
ヴォイス・ソーサラー

Phase .

42

訝しげな顔をした生徒が、桐たちを追い越していく。  
すでに順位は、最下位の方から見ていったほうが、明らかに早く確認できるような状態だった。

（困まれてから、そろそろ半周弱…）

その間は、桐自身の思考を含めて、同じことの繰り返しだった。  
また、前を塞ぐ参加者がじわりとペースを落とすのを感じて、桐は走る速度を調整する。

左右を囲む参加者も、同じようにスピードを緩めたのを視界の両端で確認して、

（それにしても、一体何がしたいんだろう…？）

青年は注意を捨てずに、思考していた。

（まず、こいつらが『公募荒らし』（エグザルイン）ってことでもいいのかな…）

否応なく、とろとろとしたスピードを強要されながら半信半疑で、その可能性を脳裏に浮かべる。

（いや、それもおかしな感じなんだけどね…）

改めて、その言葉に説得力がないことを思い知りながら、桐は考察を続けた。

(だってこいつら、まともに『公募』を『荒らせて』ない。走行を妨害したいだけならとつと足でも引つ掛けてこればいいのに、それもしてこないし…。だいたい、僕に3人も割り振ってる時点で効率が悪すぎるような…)

囲まれてから数回。

また同じ結論を出したところで、囲んでいるうち、左側の参加者が右側の参加者に目配せをする。

初めてのその動きを、桐が見逃す事はなかった。

(……?)

そして、十分に遅くなった速度の中、右側の参加者が桐の足を引つ掛けようと、その足を伸ばしてくる。

(って、今頃…?)

疑問と共に脳裏をよぎるのは、呆れにも似た感想だった。

そして、途切れさせる事なく囲まれていた3方に注意を払っていた桐は、

タン、と地面を縦に蹴る。

驚きもなく、桐は自分に向けて伸ばされた足が空を切っていくのを見つめていた。

半瞬に満たない時間の後。

ダンッ！と宙に回避していた足が、着地と同時に身体を右方向へと蹴りだす。

そして、

(…ついでに)

青年はからぶつた右側の参加者の身体を、勢いに合わせて優しく押すことで致命的にバランスを崩した。そうやって当然のように包囲から抜け出すと、気持ちを切り替え、

強めにその先へと踏み込む。

視界が、加速する。

身体が強く前方へと押し出されて、風が吹き付けているような錯覚を生んだ。

背後でひとたまりもなく転倒する音と、それに伴うあわてた気配を置き去りにして、桐は一気に囲んでいた三人を抜き去ると、そのまま速度を緩める事なくゴールへと駆け込んだのだった。

「ほい、5分14秒。あんだけ抑え込まれたわりにはたいしたもんじゃん。んじゃあつちで待機ね」

ゴールラインを駆け抜けたところで、軽いねぎらいと共に待機場所を指示される。

「……」

それよりも黄泉川の言葉に興味を覚えて、桐はどこか温度の低い視

線で彼女を見返した。  
だが、素知らぬ顔で黄泉川は応対する。

「…ん、どうかしたじゃん？次がつかえてるんだよね」

（当然、さっきのあれは見えてたんだよね。それなのにこの反応ってことは…）

ふと思いついて桐は、自分を囲んだ連中を振り返った。

抜き去られた後も、なんとか青年に追いつこうとはしていたらしい。先程からだいぶ進んだ場所に、彼らはいた。

未だトラックを走っている最中にも関わらず、どこかバツが悪そうに桐から目をそらす三人。

（…なるほど、ね）

それだけで知りたいことの確認を済ませる。

先程の走行妨害を見ていたのだろう。

他の参加者の気遣うような視線を浴びながら、桐は待機場所へと歩いたのだった。

……。

……

「よし、それじゃこれが今日ラストの種目じゃん！」

全員が走り終え、待機場所に集まったところで、黄泉川は声を張り上げた。

続けて、一人一人にダンボールから取り出したものを渡していく。

「ほい、あんたもじゃん。最後だからオマケしてやるう」

そう言われて、桐も黄泉川からそれを受け取る。

「って、これ…ゴミ袋と、腕章？」

渡された手の中のものを確認すると、それは、どこにでもあるような大型のゴミ袋の束と、ここ最近で見慣れた意匠が施された腕章だった。

グリーンの下地に染め抜かれた、白い盾のデザイン。

（腕章はともかく、ゴミ袋は明らかに残ったの全部押し付けられただけのような…）

事実、それらが入っていたダンボールを手早く折りたたみながら、黄泉川は促した。

「これで行き渡ったじゃんね。そう、まずは腕章の封を開けるじゃん」

言われて、ビニールのようなものでパックされた腕章の封を切る。

他の参加者もそれを済ませた事を確認してから、黄泉川は説明の続きを始めた。

「見てのとおりそれは風紀委員の腕章だけど、正確にはイミテーションじゃん。色やIC回路とかも本物と同じように印刷されているけど、空気に触れていれば半日で劣化するようになってる。いわばお試し版じゃんね」

（時間限定のお試し版、かあ。こういうのも技術の無駄遣いってい

うのかな?)

「さて、あなたたちにはこれからそいつをつけて、清掃活動として街に出てもらう。袋がいつぱいになったら戻ってきていいじゃん」

(清掃ロボが活躍する『学園都市』内でゴミ拾いつて。またイヤガラセみたいな話を…)

「ああ、そのビニール袋で入らないようなものを見つけたら、慌てず騒がず正規の『風紀委員』に通報するじゃん。あたしもこれから街に出るから、間違っても自分一人で片付けようなんてしないこと。万が一やらかしたら、問答無用で選考者リストから叩き落すから、覚悟するじゃん」

(ああ、そういうことか…)

『警備員』の言葉に得心して、桐はうなずいた。

(要は、見回りもどきをさせるってことだね。それにしたって時間になるか、ゴミ袋いっぱいにしなきゃ戻れないんだろうし、これ自体がどんな罰ゲームだよって話だけれど…)

「時間は今から下校時間まで。終わったら流れで解散するから出る前に私服に着替えるように。担当区域はくじ引きで決めるじゃん。他に質問は?」

……。  
……。

そして参加者は、更衣室で着替えを済ませる。



(やはり、とでも言うべきなのかな)

その中に例の三人を見つけれずに、桐は自分の推論に確信を深めていた。

視線を感じながら、薄手の黒いカーディガンに袖を通して、

(なんとなく大体は見えた感じだね。まあ、義理もあるし、後はせいぜい終了時間まで付き合ってからとっとと帰ろうかな。今夜もバイトあるし…)

軽く考えながら、携帯の着信をチェックする。

着信は、ノーネからのメールが一件のみだった。

それに特に何かを思う事もなく返信を済ませ、桐は携帯のフリップを閉じる。

そこで、入り口付近に置かれたミネラルウォーターのペットボトルを見つけた。

どうやら、『風紀委員』からの支給品らしい。

着替えを済ませた参加者が出がけに一本ずつ取っていくのを見て、桐は思う。

(ああ、これがあるのならさつき水道水で済ませることなかったね…。まあ、もらえるものならもらっておこうかな)

よく冷えたそれをクーラーボックスから一本だけ取り上げて、部屋の扉に手をかける。

「さてと、適当にやるつか…」

そうつぶやくと、青年は更衣室を出たのだった。

…時間が…飛んでしまっている……！

…わたしにはもう…意識を保ち続ける事もできないっていうの……。

T  
O  
N

E  
X  
T

それは、よくある夏休みの一日になるはずだった。

「意気揚々と雑誌の立ち読みに来て、先週が合併号だった時のがっかり感たらないわねえ……」

期待していた立ち読みが空振り、いつもはしつこいほど付きまとってくる後輩も、その日は『風紀委員』の夏季公募とやらでそばにいない。

「今日は午後マルマル空いちゃうなー」

暇をもてあましていたところに、先日知り合った子供達と偶然再会して、遊びにつき合わされる。

「うりゃー!!逃げるわよ、アンタ達っ!!」

充分に楽しんだところで、少女の持ち物に目をとめ、

「お嬢さん、そのバッジはどこで入手したのですか?」

コレクター魂に火がついて、後先考えず暴走し、見事に完遂したところ。

「……!?!」

( !何?さっきの感覚... )

御坂美琴は、『それ』に気付いた。

いや、気付いてしまった。

( 私によく似た力...いや )

8月15日。

( 私自身の力の放射を外から浴びせられたような... )

脳裏をかすめるのは、最悪の想像。

学園都市に七人しかいない『超能力者』(レベル5)の第三位たる  
自らのDNAマップを使用した...

超電磁砲量産計画 レベルガン 『妹達』(シスターズ)

( ありえない...でも、でも... )

それは、よくある夏休みの一日になるはずだった、とある日。

「ッ……あんた何者？」

御坂美琴は、『ミサカ』に出会う。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

43

Phase .

一言で言えば、炎天下だった。

「暑い……」

午後の少し遅い時間。

背中に回したボディバッグに、渡された束のまま広げてもないゴミ袋とペットボトルを突っ込み、『風紀委員』（ジャッジメント）の腕章を、申し訳程度にカーゴパンツのベルト穴に引っ掛けた青年は、ゆっくりと路地を歩いていた。

（昼夜逆転に慣れちゃった人間に、太陽の光って…。なんていうかもうこれは毒だね。そろそろ本気で生活習慣矯正しないと…）

ぼんやりと自省しながら視線を歩道に走らせる。

「……………」

比喩的な意味ではなく、言葉通りにチリ一つ落ちていないストリートが青年の視界に広がっていた。

順調に稼動している清掃ロボ（ここ30分で6台目）とすれ違いながら、桐はうんざりとした気分で肩を落とす。

（この道には街路樹もあるっていうのにここまでピカピカって…。明らかに僕は『学園都市』をなめてたみたいだね。というかこれじや時間までこの炎天下を散歩して来いって言われたのと何も変わらないんじゃない…）

内心でうめいても、ゴミは見つかってくれない。

顔をあげたところにアイスクリームの移動販売車を見つけて、桐は緩く思考を続けた。

（アイスか…これだけ暑いとやっぱり欲しくなるよね。ああいうところのはバカ高いつて相場が決まっているから、現実的にはスーパーかコンビニのアイスかな。まあ、それにしたって贅沢だけど。…あ、そうだ、アイスの販売車なら燃えるごみの類が余っているかも

…)

平和な思考を転がしながら、青年は回りこむように販売車に近づいた。

(常盤台の制服だね…白井さんでも休憩してるのかな)

車の影から見えてきた、半袖の白いブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカートにのんきな感想を浮かべながら、桐はまた一步を踏み出す。

そこで完全に現れたその姿を知り合いだと認めて、彼はのんびりと声をかけようとした。

「あ、御坂さんだよね、こんにちは…」

そして桐は、それを目の当たりにする。

青年の声に反応して振り返るのは、当然のように、ひとりではなかった。

「え…アンタ、なんでここに…!?!」

どこか慌てた感じで振り返る美琴と。

「お知り合いですか、とミサカは控えめに尋ねます」

背格好から服装や小物に至るまで、何もかも完璧な『御坂美琴』が。

そこに、立っていた。

それまでの平和で緩い倦怠感が、唐突で暴力的なナニカに、無慈悲に打ち碎かれる。

無防備なところを無骨なハンマーで力任せに殴りつければ、こうなるのだろうか。

脳裏にしびれるような衝撃を覚えて、桐はただ、呆然と内心でうめいた。

(なんだ、これ…?)

驚きに揺れる美琴の瞳と、感情の色が集中しない、焦点の曖昧な御坂妹の瞳とが青年を見据える。

「…あ、ああ、妹さんと一緒だったんだね。あらためてこんにちは」

気がつくのと、当たりさわりのない言葉を唇は紡いでいた。

思考は、変わらず上滑りを続ける。

(なんだっていうんだ…)

「…あ、うん！そーそー妹なの。いもーと。ふつーの、ありふれた、妹」

やはり慌てたまま、さらには青年からバツチリ目を逸らして、美琴



が説明を加える。

「…そうなんだ」

その穴だらけの説明に、まともな感想を浮かべることすらできずに、桐は芸のない相槌をうった。

自分のその行為をひどく遠くに感じながら、散逸した言葉が次々と頭に勝手に浮かんでいくのを、なす術もなく受け入れる。

(なんで、僕はこんなにショックを受けているんだ…?)

千々に乱れる心象風景とは裏腹に、あくまで軽く、桐は言葉を選んでいた。

「アイスか、いいね。おじさん、僕にも…」

「ああ、すまねえな兄ちゃん。今日はもう店じまいなんだ」

事情を知るよしもないアイス屋の親父が、すまなそうに断る。会話の糸口を失って、桐の顔にちからのない笑みが浮かぶ。

「そ、そうなんだ…それは残念…」

それじゃあな、とそそくさと立ち去るアイス屋の親父。

「……………」

降りた沈黙を、桐はどうする事もできずに受け入れる。その顔を、無表情な少女がのぞき込んだ。

「念のため、あなたにも符丁<sup>パス</sup>の確認を取ります、とミサカは発言の後、実行します。…… ZXC741ASD852QWE96、3とミサカは」

「僕にそれは必要ないよ。つくづくいまさらだ」

桐の知る『原作』 『とある魔術の禁書目録』という名の『ライトノベル』に出てきたものと同じような符丁<sup>パス</sup>。

それが少女の唇から流れるのを聞いたとき、自分でもよくわからない衝動に突き動かされて、青年はとっさに嘘を口走っていた。

明らかに自分が関係者ともいうような、上からの言葉。

同時に精密な『構成』を編み上げ、その嘘の『音声』を鍵にして、小規模なつむじ風を魔術によって桐は美琴の周りに起こす。

即席の目くらましならぬ耳くらましの中、ぐちゃぐちゃの思考からかるうじて質問を引きずり出し…。

自分でも驚くほど鋭く、その問を青年は問いかけていた。

「君の『検体番号』（シリアルナンバー）を」

「……」

無表情な顔が、桐の目を正面から見据える。

そこに浮かんでいたのは驚きだったのか、確認だったのか、それとも疑念だったのか。

必死に取り繕った外面だけで、心はすでに狼狽しきっていた青年には、判断が出来るはずもなかったが。

ややあつて、御坂妹は口を開いた。

「…ミサカはミサカ九九八二号ですが、とミサカは訝しげに答えま  
す。それよりもあなたはどちらの系統の…」

「ああもつつ！なんなのよこの風は！！」

バチバチイッ！！と視界の隅に紫電が走ったと同時に、桐はぱつと  
御坂妹から離れる。

「なんか耳がきーんとしたけどなんだったのよあれは…アンタ、な  
んかしてないでしょうね？」

「…さあ、ビル風が何かじゃないのかな？」

桐はぼやく美琴のアイスががつつりと御坂妹に強奪されるシーンを  
視界に納めながら、表面上はこともなげに応えたのだった。

……。  
……。

「……………」

二人と別れてから、桐はあてもなく街を歩く。

やはり頭を占めるのは、先程の異様な感覚だった。

もはや何回繰り返し返したのかもわからない疑問を、青年はまた繰り返  
す。

( ippitai、なんだっていうんだ…これは… )

人ごみを嫌って、繁華街とは逆のほうへと足を進める。

(『原作』3巻に出てきたミサカより、『検体番号』(シリアルナンバー)が若い御坂妹：ミサカと、御坂さん本人が一緒にいた…) 今居る『禁書世界』(このせかい)を『とある魔術の禁書目録』という名のライトノベルでしか知らない桐は、それを呆然と反復する。だが、彼の戸惑いはそんな事ではなかった。

(そう、原作3巻の時点で、美琴は自分のクローンがいることも、それを使った実験の内容も、とづくに知っていたんだ。むしろその実験を潰そうとして潰しきれないってところまで関わっていた…。だからそれ以前：具体的には今、このタイミングで彼女達が出会っていたって別におかしくなんかない。問題はそこじゃないんだ…) めまいを感じて、桐は壁に肩をぶつけた。それでも幽鬼のような歩みを止めずに、青年は思考を続ける。

(僕は『絶対能力進化』(レベル6シフト)実験を、『知っていた』…。少なくとも原作の知識としてそれを持っていたのは間違いない。そう、僕は確かに知っていた、それなのに…!!)

また、最初に感じた衝撃と同じモノが、脳裏を塗りつぶす。平衡感覚が崩れて、唐突で暴力的なナニカが青年の意識を埋め尽くした。

ぐらつく視界に、気持ちの悪い浮遊感。倒れかかった身体を、拳を手近な壁に叩きつけることで、強引に支える。

同時に手に入れた痛みを抛り所に意識を保ちながら、桐は血を吐くように『結論』を吐き出した。

「僕は、それを重要な事だつて『思えなかつたんだ』…！！！」

いつの間にか入り込んでいた、人気のない裏路地で、桐は立ち尽くす。

(『絶対能力進化』(レベル6シフト)実験が起こっている、行われているって『知っていた』のに、僕はさっきのさっき、彼女達に会おう瞬間まで、それに関して何も『思わなかつた』…本当に、何も)

無機質なコンクリート壁に背中を預けて、そこから見える狭い空を仰ぐ。

夕暮れの朱が、ひどく禍々しいものに見えて、桐は拳を握りしめた。

(どういふことなんだ…？僕の認識が、恣意的に誰かに阻害されている…？どこかで精神系能力でもかけられたのか…？わからない、わからないけどとにかく僕は、ダレカにナニかを気付けないうようにされてる…！！)

ずるずると路地裏に座り込みながら、桐は改めて、その言葉を口に出した。

「いったい、なんだっていうんだ…?!」

…あの子…こちらのフィルタリングを…  
…抜いたっていうの…?!?

EXT

TON

477

「いいわ、行きなさい。勝手にあとを尾けさせてもらっちゃうから。…  
アンタはどっかの施設なり研究所なりに帰るわけだから。そこでアンタの製造者をとっ捕まえて直接聞き出してやるわ」

そう啖呵を切ったのが、もう数時間前のことだった。

偶然出会った青年と別れ、不本意ながらミサカに紅茶とケーキをおごり、ハンバーガーさえはしごし、行く先々からいちいち双子と指をさされて…、

気がついたら、日はとっぷりと暮れていた。

「…で、アンタいつになったら帰るのよ…?」

歩き詰めに疲れを覚えて、美琴はそう自らのクローンに問いかける。

「言い忘れてましたが…」

その問いに、ミサカは涼しげな顔で振り返った。

「ミサカはこれから実験に向かうので、施設には戻りません」

「は?!」

予想外の答えに、思わず間抜けな声をあげる美琴。  
そんな美琴に、ミサカはあっさりと言葉を重ねた。

「お姉さまが後をつけるのは自由ですが、ミサカの製造者には会えません」

「なっ…何で今頃……」

「聞かれませんでしたので」

変わらぬトーンでしれっと答えたミサカに形容しがたい苛立ちを感じて、美琴は考える。

(どうする？さっきの符丁<sup>パス</sup>を解読<sup>デコード</sup>して情報を探したほうが手っ取り早いかな？…PDAは持ってきてるわね)

なんととはなしにスカートのポケットに入れたPDAの感触を確かめたところで、軽い音とともにポケットから昼間獲った景品のバッジがこぼれた。

(つと、ポケットに入れといたの忘れてた…)

「…？それはなんですか？」

身をかがめてそれを拾う美琴に尋ねるミサカに彼女は、

「いや、ガチャガチャで獲った景品だけど…」

と答えたところでふっとあることを思いつき、それを実行に移す。

「何でしょっ？」



「いいからジツとしてなさい」

カチャカチャ、パチン、と作業をする事数秒。

「……………」

ミサカのサマーセーターの裾に、デフォルメされたカエルの缶バッジが取り付けられる。

「うん！鏡で見るより分かりやすいし客観視できるわね。こうしてみると結構アリって気も……」

だが、満足げな感想をもらす美琴を

「いやいやねーだろ。とミサカはミサカの素体のお子様センスに愕然とします」

ミサカは最速で切って捨てた。

「なっ……何おう！！」

ガン、とショックを受ける美琴。

(じ、自分のクローンにまでセンスを否定されるとは……)

「じょっ……冗談よ冗談。ちょっと試しにつけてみただけ……」

軽く落ち込みながらも、バッジを外すために美琴は手を伸ばす、が。その手がぱぁん、と叩き落された。

「……」

ジンジンと痛む左手を保留して無言のまま、今度は右手を伸ばす。だがそれも、すぱぁん、という小気味良い音と共に、迎撃された。そこから攻防が始まる。

パパパパパン！

次々と手を繰り出す美琴と、それを正確にはたき落としていくミサカ。

数秒の攻防の後、美琴はついに耐え切れなくなって叫んだ。

「何すんのよっ！！」

真っ赤になった両手の甲を見せつけながら詰問する美琴に、あくまで淡々とミサカは答える。

「ミサカにつけた時点でこのバッジの所有権はミサカに移ったと主張します。よってお姉さまの行為は強奪であるとミサカは訴えます」

「何だその屁理屈っ！」

「屁理屈ではありません。それにコレは……」

そして、ミサカは表情を変えないまま、そっと左手を付けられた缶バッジへと伸ばして言った。

「お姉さまから頂いた初めてのプレゼントですから」

突然のセリフに、言葉を失う美琴。

だが、

「もうちょっとマシなものはないのかよ。という本音を胸にし  
まっつてミサカは嘆息します」

続けられた言葉に再沸騰する。

「やっば返せーっ!!」

心のままに叫んだところで我に返って、美琴は軽く額に手をやった。

(っつと、いつの間にかまたコレのペースに…このままじゃラチが空  
かないわね、やっばネットから…)

「もういいわ、今日のところは失礼させてもらっつから」

このままこの寸劇を続けていても仕方がないと判断し、彼女はきび  
すを返す。

だが、何かいいたげな視線を感じて、彼女は振り返った。

「…ん？まだ何かあるの？」

問われたミサカは、やはり無表情にこたえる。

「…いえ、さようなら、お姉さま」

「ああ、うん。じゃあね」

微妙なその間に気付く事なく、美琴は今度こそ駆け出した。

「~~~~~」

しばらく進んだところで、なんともいえない気持ちになって、美琴は独り言を胸中につかべる。

(まったく、何なのよアレ。本っ当、調子狂わされっぱなしだわ)

苛立っているつもりなのに、肝心の苛立ちがわいてこない、不思議な感覚。

(一緒に猫とじゃれて、一緒にアイス食べて、缶バッジ取り合って…。これじゃあまるで本当に…。)

はっと気付いて、美琴はその先に浮かびそうになった言葉を振り払った。

「…と、とにかくまずは製造者をとっちめる!…後のことはそれからよ、うん」

努めてそれを考えないようにしながら、彼女はさらに走るスピードを上げたのだった。

どれほど最悪な事実でも、悪夢のような現実でも。

脳裏で延々と繰り返し続けられれば、その衝撃自体は和らいでいく。

そして衝撃が過ぎ去った後に残るのは、ただ受け入れる他に処理のしようがない、澱のように濁った感情だけだった。

黄昏が暗闇に変わる時間を、たどり着いた路地裏でへたり込んで過ごした桐は、視線を落としたまま内心でつぶやく。

(何度考えたって、今日の前にある現実是不変ならない…)

『見過ごしようがないことを、完全に見見過ごしていた』という、自らの認識能力の異常。

今日の昼、否定のしようがないほどに突きつけられたそれを噛みしめながら、また同じコトを桐は考えた。

(たまたま気付けた今回の『あれ』が、唯一のズレだって信じてしまえばだいぶ楽になれるんだろうけど、それは楽観が過ぎるか。僕はきつと、僕の気付いていないところで、まだまだいるんな『ズレ』を抱えているって考える方が妥当だ…)

おっくうそうに視線をあげて、完全に日の沈んだ夜の闇を見つめる。

（『これ』が、内的要因か外的要因かなんて関係ない。確かに抱えているのに、自分でそれに気付けないバグ…）

「なかなか救えない感じだね、自分で自分が信じられない『トリッパー』（現実からの移行者）って…」

つぶやいた言葉は、誰にも届かない。

自虐に満ちた、へらりとした笑みを浮かべて、桐はぼんやりと虚空を見つめた。

そして、また同じコトを最初から考え始めようとした青年の意識に、微細な振動が割り込む。

（…ん…これは？）

その振動は、携帯のバイブレーションだった。

着信を知らせて震え続けるそれをのろのと手に取ると、桐は惰性のまま、通話ボタンを押し込む。

「ああ、やっとつながりましたの！須臣さん、聞こえていますの？」

スピーカーからこぼれた聞き覚えのある声に、青年はぼんやりとこたえた。

「白井さん、か…」

「白井さん、か…」じゃありませんわよ全く。風紀委員の試験をボイコットして何をされてしまったの？ああ初春、電話がつながりましたわ。そのツールは使わなくてもよさそうですの「え、つなが

ったんですか！！須臣さんは大丈夫なんです？！」だからそう慌てる事ではないと言いましたでしょう？ああもう、耳元で騒がないでほしいですの「だって心配で……！！」だから耳元で話すなと……！」

（つて、初春さんもいっしょか……）

通話中の携帯の液晶をのぞくと、もう午後の6時を回っていた。

電話越しに知り合いの少女たちの声が響いて、桐はしばし、現状を忘れて微笑む。

（なんか僕、思った以上にこの子達の声、聞き慣れちゃっているんだね……）

「さあ、納得いく説明をしていただきますわよ。もしくだらない理由だったら初春のツールを走らせてすぐにお迎えに上がりますので覚悟して答えて頂きたいですの」

その声には、青年を心配していたからこそその、強い苛立ちが込められていた。

それを嬉しく感じ、同時になぜかひどく救われた気分で、桐は彼女達のために明るい口調を選ぶ。

「…連絡できなかったのはごめん、ちょっと急用が出来ちゃってさ。ああ、あのサクラの三人にはよろしく言うておいてもらえると嬉しいな？」

意識して作った悪戯げな口調に、電話の向こうで少女たちが息をのむ気配がする。

ややあって、決まり悪げな声が響いた。

「…やはり、お気づきになっていましたの？」

「まあ、さすがにあれだけヒントがあればね。途中で抜けさせてもらったのはそれが理由ってわけじゃないんだけど。せっかくだし種明かしてもしようか？」

意識を切り替えて、昼間の公募の中で気づいた事を脳裏に呼び出す。ゆっくりと立ち上がり、背中をぬるいコンクリートに預けて、桐は言葉を続けた。

「うかがいますの。最初におかしいと思われたのはどこです？」

「まずおかしかったのは、午後の1500mまで全く何の動きもなかったことだね。『公募荒らし』（エグザルイン）って言うからには、午前の筆記の時に誰かがカンニングペーパーでも押し付けられて騒ぎになるとか、午後の運動の時にやっぱり誰かが原因不明の怪我をする、くらいの事はあっても良いだろうし」

「確かに、そうですね…」

「その1500mにしたって、あの三人はわざわざこちらが怪我しないように、走るスピードをこれ以上ないくらい遅くしてから足を引っ掛けてくれたわけだしね。その上、僕がかわした後、彼らは他の参加者には指一本触れずに完走していた。なにより、座学で受けたあれだけの適性検査であぶりだせない不心得者って時点で、現実的にありえないんじゃないかな。あらゆる科学に秀でた、『学園都市』の名が泣くよ？」

「……………」



電話から流れてくるのは、沈黙のみ。

反論が返ってこない事を確認してから、桐は締めくくった。

「以上の事から彼らは僕を狙ったサクラ、具体的には僕に『風紀委員』の資格を取らせる為に君らが仕掛けてくれた狂言の一部かなって当たりを付けたんだけど、どうかな？」

(まあ、『公募荒らし』(エグザルイン)って言い回しがすでにある以上、スキルアウトが以前、今しがた挙げたようなわかりやすい『公募荒らし』をやっていたのかもしれないけど。って、それだとよりタチの悪い可能性も出てくるけれど…)

「初春：あなたがあんな半端な事をするから…。「え、ええ?!」なんなんですかあ?」：いえ、そこまでおわかりなのなら初春だけの不手際というわけでもありませんわね。やはりいささか強引だったと」

!?

音のない予兆、とでも言うべき、それ。

会話の途中に気付いて対処したのは、もはや本能だった。

「……………」

声にならない息を吐きながら前触れなく、なんということもない動きで、だが的確に安全圏へと桐は踏み出す。

直後、空を切った電磁警棒が、コンクリートに撥ねる硬質な音と共に、バチリと剣呑な放電音を漏らした。

つい今、脳裏に浮かべた言葉を、桐はもう一度繰り返す。

(わかりやすい『公募荒らし』より、夕子の悪い可能性…)

「おうおう、余裕だな？『風紀委員』(ジャツジメント)の協力者  
サマは」

(ただの『公募荒らし』(エグザルイン)なら適性検査の時点で  
弾かれる…。それなら、目的をより先鋭化して、従順に適正試験を  
すり抜けて『風紀委員』(ジャツジメント)にまで食い込もうとす  
るスキルアウトは…?)

そこにいたのは、八人ほどの風体のよくない男達だった。  
その中では幾分か常識的な服装をした、見覚えのある青年が、進み  
出てくる。

路地裏の暗闇の中、月光で透かし見たその容貌は。

(それはもう、『風紀崩し』(ラウトジャツジ)とでも名づけるし  
かない存在だよ…)

まぎれもなく、昼間に夏季公募の試験を受けたメンバーのうち  
の一人だった。

…あいつ…間違はなく…あの子を殺しかかっていた…  
…いっただい…なんだっていうのよ…!?

E  
X  
T

T  
O  
N

それは、それなりにヤバい底辺を這いずる自分にとっても、その場所を想像できないほどの『上』からの命令だった。  
いわく、

【書類を操作してやるから、『風紀委員』（ジャッジメント）に潜りこめ】

まともに授業に出ていないほとんどの仲間が条件反射で嫌がる中、彼だけはその命令を、

（なるほど、道理だ）

と思っていた。

同時に、『美味しい』命令だとも。

おそらくこれは、さしあたって深い目的があるでもない、純粹に『何かがあった時のための保険』なのだろう。

学園都市の『公』に対する書類操作を必要とするレベルの『援助』にもかかわらず、潜り込んですぐの行動が明示されないとことから、彼はそう当たりをつけていた。

もっとも、その命令を彼が『美味しく』感じる事ができたのは、自分が持ち前の小狡さと器用さで立ち回ってきた頭脳派だという自負があったからこそ、だったのだろうか。

（『風紀委員』（ジャッジメント）の中に入っちなまえば、『警備員』（アンチスキル）の情報も取り放題だ。奴らは連携しているからな。

情報を握れば、仲間に対しても強く出れる。俺の敵に回るようなら『風紀委員』を差し向けることだって出来る。なににより、正義面したバカどもの鼻を明かせるってのがたまらないじゃないか)

公募で受ける試験自体に問題はなかった。

学園都市に関しては、スキルアウトの自分は大多数の一般生徒より精通しているし、身体だって比べるべくもなく鍛えている。

だが、公募に参加した彼にひとつだけ厄介な問題が立ち上がってきた。

それは考査で一緒になった、見覚えのある一人の青年。

(あいつ、『風紀委員』の協力者…。あの腹黒空間移動能力者と一緒に俺のチームを潰した奴じゃないか…)

数週間前、チームの一人の『仕事』のとばっちりを受け、摘発という名の襲撃を受けた一件。

あの時、迷う事なく仲間を見捨ててその場を逃げ出した彼の目には、ツインテールの少女と、それを的確にサポートする黒髪の青年とが、しっかりと焼きついていた。

(…都合がいい)

あの時根こそぎ失った『稼ぎ』を思い浮かべながら、彼は暗い気持ちで笑みを浮かべる。

今、こちらは髪を下ろしているとはいえ、奴は自分の顔を覚えていくかもしれない。いや、すでに気付いている可能性だって否定できない。

それなら、奴を潰すのは『上』の意向にも沿う事になる。

拳銃のたぐいすら容易く回してくれるような『上』のためならば、一般生徒のひとりやふたり壊したところで、なんともしてしてくれる

だろう。

いや、潰すだけ潰して、そもそも関係ないという顔をしていれば、それで終わりだ。

（四肢を撃ち抜いて二度と逆らう氣に出来なくしてやるのか。いや、どのみちクスリで何もわからなくすれば済む話だな…）

リスクの低減に加え、さらに彼にとっては後腐れなく自らの恨みも同時に晴らせる方法。

そんなものを転がしながら、青年の後をつけさせていた仲間から、奴が都合よく一人になったと連絡を受け、彼はその現場に向かった。そして多数の人間で囲んだ圧倒的優位の中、銃口を向けた拳銃を構えながら、彼はなぶるようにこう言った。

「おうおう、余裕だな？ 『風紀委員』（ジャッジメント）の協力者サマは」

自分がどうなるかを、彼はまだ知らない。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

桐は、考える。

（僕が『風紀委員』の協力者だっことを知っている…。わざわざ僕を襲いに来たのはどこかで会った事があるから、なのかな。どの道この態度ってことは、考えるまでもなくスキルアウトの回し者って事なんだろうね。それにしたって思い当たった瞬間にそれに襲われるっていうのも、どれだけ運が悪いんだかって話だけれど…）

「…ああごめん、さっきも言ったけど、用事で急がなきゃいけないんだ。お叱りはまたの機会ってことで、ね？」

目線だけで油断なく相手の人数と装備を把握しながら、青年は努めて明るい声で告げると、返事を聞かずに携帯の通話を終わらせた。ついでに電源そのものも落としておく。

（相手は八人。話しかけてきた奴は拳銃を持っているか…。他のメンツもいちいち得物が凶悪だね）

対する素手の自分を意識して、少しだけげんなりとする。

「誰と話してたのかは知らないが、助けを呼ばなくてよかったのか？まあ、呼んだとしてもこれからお前はさらわれるんだけどな」

いつかの時よりも気軽に引き鉄が引かれそうな銃口を前に話をするのは、思った以上に彼の心をすり減らす作業だった。

「…意外だね、こんなふうにならわれないのは女の子だけだと思っていただけ。最近は男も守備範囲なのかな」

それをおくびにも出さずに、桐は相手を激昂させない程度に軽い口調で話を続けた。

同時に構成を編み始める。

「ああ、それは勘弁だ。次にさらうなら女がいいな。あの空間移動能力者の女とかどうだ？味方だと思っていた奴に騙された上に、ぐちゃぐちゃになったお前の前に引き出されれば、いい感じに壊れると思うんだが」

(ぐちゃぐちゃに、ね…。明らかに、僕を無事に帰す気はない、か) 粘つくような視線が、青年を捉える。

(というか、昼間の僕はこれに気付かなかったんだね…。どれだけ緩んでいたんだか)

理由のわからない苛立ちと共に自虐を浮かべながら、桐はひねりのない言葉で情報収集のための一手を打つ。

「それは怖い話だね。ところで、今回スキルアウトから『風紀委員』に潜り込もうとしているのはあんだだけなのかな。それとも他にもっと？」



そこで唐突に、彼は『それ』に気付いた。

（何で僕は、追い詰められてるっていうのにわざわざこんな情報収集なんかしているんだ…？）

通話を強引に切った後、手に持ったままの携帯がつつすらと汗ばむ。

（認識を歪められて、自分で自分が信じられないような人間が、危険をおかしてまで『風紀委員』の危機を気にする理由…？）

桐のそれに気付く事なく、どこか得意気にスキルアウトの男は口を開いた。

「冥土の土産でも欲しいってクチか。いいぜ、教えてやるよ。俺の知る限り、今回潜り込んでいるのは俺だけだ。まあ、他のやつにそんな器用な真似ができるとも思えないがな」

（ああ、そうか）

拳銃を持つ男の言葉の意味を拾いながら、桐は全く別のところで得心していた。

（単に僕は、白井さんたちがひどい目にあうのが『嫌なだけ』なんだ！）

浮かんだ結論と共に、視界が急に拓けたように桐は感じる。

(前提として、僕の認識は歪められている。…それはいいよ、いや、よくはないけど今はどうしようもない)

「それじゃあもういいな。付いて来いよ、いや、優しく眠らせて連れて行ってやるうか？」

思考を続けながら、青年は言葉を返す。

「お誘いは嬉しいけど、こちらからも提案があるんだ。今、この瞬間からあんたらが全部忘れてとっとと消えてくれれば、僕も穩便に忘れようと思うんだけど、どうかな？」

それは気楽な、だが、

ひどくよく通る声色だった。

(今この瞬間にしたって、僕は僕のどこがおかしいのか自分で判断できない…。それでも時間は流れていくし、見過ごせない目の前の現実に進んでいってしまう…)

救いのない、濁った澱のような感情は、今も厳然としてあった。それでもそれを心の奥に沈めて、桐は拳を握り締める。

(それが嫌なら、セルフチェックで拾えないバグが纏わりつこうが、

抱えて先に進むしかない！)

いつの間にか霧散していた構成を、ゼロからアレンジを加えて編み上げる。

「ああ、今さら命乞いかあ？おまけにどれだけ上から目線なんだよ、寝言言ってるじゃねえ……」

「交渉決裂だね」

その『音声』が、呪文だった。

刹那の間に、極小に限定された爆砕の波紋が走る。

それは速やかに、男の拳銃とそれを握っていた右手とを完膚なきまでに『壊した』。

そして『音声魔術』の発動と同時、

ありえないほど自然に変えられた、身体の向きにあわせて。

振り抜くような拳の一撃が、拳銃の持ち主の顎を砕いて、手ひどくその脳を揺らす。

「…ぞひゃ、ふい??」

そこで、思い出したかのように爆砕の轟音と振動が敵陣の中央で弾けた。

桐がこれまで戦ってきた人間の中で、もっとも重い傷を、もっとも短い瞬間に刻み込まれた男は、世界がぐちゃぐちゃになる感覚を味わいながら、悶絶して倒れ込んだ。

それを一顧だにせず、なおも混乱する敵の中に踏み込みながら、桐は脳裏に言葉を滑らせる。

（感情を冷まして、思考を醒ませ）

踏み込む先は大地ではなく、一番近くにいた男の膝頭。

関節を踏み抜かれて電磁警棒を取り落とす男から、それを丁寧に引き取る。

握り締めた右手の感触で電磁警棒のスイッチを探りつつ、その柄を振り上げて正面の男の鼻を潰し、続けた足払いで転ばせる。

探り当てた電磁警棒のスイッチをONに。

すぐさま背後の二人を薙ぎ払う。

違法な改造でもしてあったのだろうか。

コメカミを強打した二人目だけではなく、薙いだだけの一人目も悶絶して倒れ伏した。

（意思のままに身体を動かして、自分の心を突き詰める！）

耳障りな仲間の悲鳴に我に返ったのだろうか。

ゴルフクラブを握り締めた男が、奇声を発しながらそれを桐に向かって振り下ろす

対応はもはや、自動的だった。

斜めに構えた警棒を受けたシャフトに沿って滑らせ、クラブを握り締めたその指を痛打。

増えた悲鳴に心を揺らす事なくトドメを重ね、青年は新たな敵へと

向き直る。

ナイフを振りかぶって向かってきた相手の刃を警棒で制しつつ、喉元に深く左のひじを突きこむ。

一方的に進む戦闘の中、桐が考えるのは『絶対能力進化』（レベル6シフト）実験と『妹達』（シスターズ）の事だった。

（彼女：あのミサカは、自分を九九八二号だって言っていた…）

気付くと、残った二人は揃って背を向けて逃げ出そうとしていた。

（『原作』3巻で『救われる』彼女は10032号…）

追いかける事なく一瞬で構成を編み上げ、それを空間に解き放つ。

「我は流す天使の息吹！」

ほとんど無風だった狭い路地裏に、魔術による気流が発生し、突風が巻き起こる。

逃げる背中を風に煽られてバランスを崩した二人は、そのままその先の建物へと激突した。

（僕が手を出さなくても、後一週間足らず…『原作』三巻、八月二十日から始まる『物語』の中で、彼女たちは今から五十人殺された後、十全に救われる…）

走り込んで、サッカーボールをクリアするような勢いで片方を蹴り上げる。

跳ね上がったからガクリとうなだれ、土下座するような姿勢で頭から倒れ込むスキルアウト。

瞬く間に七人を地面に沈めながらも特に感慨を浮かべる事もなく、桐は最後の一人の喉もとを、スイッチを切った警棒で押さえつけた。場に、静寂が戻る。

「これでチエツクメイト、かな。このままこいつのスイッチを押せば、あつちで吐いてる彼と同じ気持ちを味わえるんだろうけど、どうしようか？」

内心にひどく重い言葉を浮かべながら、桐は気楽に最後の一人に告げて見せた。

「わ、悪い…悪かった、だ、だから…！」

おびえきつた目で芸のない謝罪を並べはじめ男を見下ろして、桐は警棒を適当にそこらに放った。

それがコンクリートに落ちる音にすら怯える男に、噛んで含めるように丁寧に『忠告』してから、仲間のために救急車を呼ぶように言い置いて、青年はその場を足早に立ち去る。そのまま数ブロックを進み、

(とりあえず『風紀委員』に潜りこもうとしていたのはあいつ一人だけみたいだし、あれはあれでおしまいにしておこうか…)

そうしてあっさりと『彼ら』を意識から追い出すと、歩きながら桐は先ほどからの思考を再開した。

街灯の途切れがちな裏道を、目をすがめて歩く。

(そう、『妹達』(シスターズ)は『上条』(主人公)の手で確かに救われる。だからって…僕は『気付けなかった』これまでと同じ

ように、『気付いた』今からもずっと、知らない振りでこれから『原作』通りに五十回、殺されていく彼女を見殺しにしつづけるのか…？)

そこまで考えたところで立ち止まって、桐は誰に言うでもなく、鋭く囁いた。

「それは、『嫌』だな」

この時点で心は、決まってしまうていた。

それでも、それを確かめるような気分で、青年はそのデメリットを挙げていく。

(彼女達の問題…『絶対能力進化』(レベル6シフト)実験は、そのまま、『とある魔術の禁書目録』の科学側主人公、『一方通行』の物語の起点だ…)

建物の陰から差し込んだ月光に、彼自身の影が伸びる。

(彼だか彼女だかの能力は文字通りの、『最強』。おまけにその物語は後々まで少なくない影響を与える。これまで関わった事とは比べ物にならない。『妹達』(シスターズ)のひとりを手助けしてはいおしまい、じゃ話は済まない。これに手を出すって事はこの先、実験の当事者である御坂美琴を含めたすべての事象に対して責任が生まれるってことなんだ。本来なら、到底取るべきリスクじゃない。今回ももちろん、その先も上手く出来る保証はないっていうのに…！)

ネガティブな要素を、列挙していく。

それなのに、彼自身の結論は、揺れる事すらなかった。

青年のほかに誰もおらず、街灯の光すら届かない、薄汚い路地裏。そこで一人、差し込んだ蒼く薄い光を浴びながら、自身を再確認した桐は口を開く。

「いいさ、受け入れてやる。リスクもデメリットも、抱えているバグも全部のみこんで、これから立ち回ってやる。これは僕の自己満足だ。彼女達を助けてやる、なんて口が裂けても言えない。当然、これが世界にとって正しいことだなんて間違っても思えない。それでも僕は、今、この現実立ち会うものとして、ただ、こうしたいと思うから　！」

薄闇に目を凝らして、青年は駆け出す。

同時に意思を言葉にして、それを自らの耳へと届けた。

「僕は、『禁書世界』（このせかい）の『物語』（ストーリー）に介入する…！！」

…わたしは…なにも…なにもしてない…

…あの子が…自分の意思で介入と改変を…！！？



E  
X  
T

暗闇の中、桐は走っていた。

(まずい、時間を食いすぎてる…！)

「僕は、『禁書世界』(このせかい)の『物語』(ストーリー)に介入する…！！」

すでに先の結論を出してから、二時間ほどが過ぎようとしていた。交通機関はもちろん、メインストリートの人通りすら絶えた、夜の学園都市。

先日紛れ込む羽目になった、『領域』をそこに幻視しながらも、桐はひたすらにある場所を目指していた。

(都合の悪いトラブルは向こうからガンガン来るっていうのに、望んだ時には全くタイミング合わないっていうのは、もう真剣にどれだけ運が悪いんだらうね…！)

苛立ちと共に苦い自虐を吐き出しながら、桐は足を緩める。軽く荒れた息を整えながら、現在の行動方針を再確認した。

(彼女達の『戦場』…いや、『一方的な相手の虐殺』(ワンサイドゲーム)にそんな言葉を当てたくないね。『実験場』は、おそらく多岐に渡る。それを一発で当てろって言うのがそもそも無茶な話なんだけれど…)

桐は、自身の知る『原作』の中での『実験場』を思い返す。  
ビルのある地域での屋上からの狙撃。路地裏での殺し、そして。

（十日足らずで五十人『こなす』ってことは、当然、どこかの施設  
の中で誰にも知られずにまとめて終わっている可能性もあるよね…。  
それだったらアウトだけれど、望みはある。今日、ミサカは『一人』  
で行動していたんだから…！）

頭上で街灯の電源が瞬くのを感じて、桐はそちらを振り返る。

同時にそこにあつた街頭時計の時刻を確認して、あらためて焦りを  
感じた。

（もう八時半を回っている……！）

青年の知る『原作』での実験開始時刻。

すでに数分過ぎてしまっているそれに追い立てられるように、桐は  
また、駆け出す。

（現状、可能性が高い場所は、『原作』でも使われた操車場くらい  
しか思い当たらない。だからこそ今そっちに向かっているんだけれ  
ど、それにしただって他よりはマシ、くらいの可能性でしかない。な  
により一本挟んだ路地裏で今、この瞬間、『静か』に『実験』が行  
われている可能性だつて捨てきれない！）

出来るだけ辺りに注意を払いながら、青年は目的地へと向かう。  
しばらく走り、もう到着するといふところで、

目指す方向から爆発音が聞こえた。

（大当たりか…！）

内心で快哉を叫びながら、桐は操車場へと走りこむ。  
そして積み上げられたコンテナの横を抜けて、拓けた視界に映ったのは

もうもつと上がる爆発物の粉塵と、

細身で白髪の少年に左足をちぎり取られる、見知った少女の姿だった。

(…な、…にをつ…!!)

その光景に、思考が沸騰する。

放った電撃を『反射』されて、紫電と共に倒れ込む、ミサカ。  
熱に侵された脳髄はそれを余すところなく捉えて…

その時にはもう、桐は弾丸のように飛び出していた。

彼我の距離は70m程。

全身のバネを躍動させて、青年は『ミサカ』へと走る、だが。

白髪の少年が、貨物用の機関車へと向き直った。

それが容易く浮き上がるのを見て、桐は相手の目的を悟る。

(あれで押し潰す気が…！くそ、距離が、開きすぎてる…このままじゃ…！！)

同時に青年は、自分が間に合わない事にも気づいてしまった。

(ここから何か撃つても、『自動反射』で意識もされないかもしれない…とつぐにあれが浮いてしまってる以上、あそこまで行くしかないっていつの間に…いや)

後、15m。

這いずるミサカに、ゆっくりと、機関車の影が触れる。

(間に合わないなら、間に合わせればいい…！)

駆けながら構成を編み上げる。

空間にそれを展開し、桐は弾む息の下、鋭く言った。

「 我は踊る天の楼閣！」

疑似空間転移。

魔術によって対象の質量をごまかし、絶大な加速をかける事で、擬似的な転移を可能とする術が発動する。

カメラのシャッターのように桐の視界が一瞬だけ消え、元に戻る。そうして青年は、6mほどの距離をその一瞬で、『涉っていた』。

後、2m。

そうやって強引に縮めた距離を当然のものとして処理しながら、桐は続けて魔術の構成を編みあげる。

機関車の作る影はもう、とつぐに少女を覆ってしまっていた。

構成を展開しながら、転がるように『ミサカ』の元へと辿り着き、  
その手を掲げ

とある十二カヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase .

46

ガチャ、と耳障りな音が響く。  
続けて開いた扉の中には、無骨なギターケースがひとつだけ置かれていた。

時間は夜の八時過ぎ。  
ぼつぼつと帰宅のための人が行きかう駅の構内で、常盤台の夏服半袖の白いブラウスにサマーセーター、灰色のブリーツスカートをまとい、額に大型の電子ゴーグルをひっかけた少女、ミサカ九九八二号は、それを取り出す。

(問題なく、装備を回収しました、とミサカは内心で確認します。  
これでミサカの準備は整いました、とミサカはプロセスの進行を継

続します)

それを肩にかけると、少女はひとり、街の灯の届かない裏路地へと歩いていった。

とくに考えるべき事のない空白の時間に、彼女は昼間の情景を脳裏に浮かべる。

(総じて、悪くない時間でした、とミサカは評価をつけます)

自分のオリジナル 『お姉様』である、御坂美琴と過ごした時間。彼女にとってのそれはすべてが新鮮で、楽しい時間だった。

それを純粹に、『新鮮だった』『楽しかった』と判断できるほどの情緒は、まだ、彼女の中に育ってはいなかったが。

それでもぼんやりと暖かいものを感じながら、ミサカはその時間を思い返す。

同時に、彼女はある青年のことを思い出していた。

(そういえば、彼は)

「君の『検体番号』(シリアルナンバー)を」

鋭い言葉と共に、ふれあうような至近距離で自分を見据えた黒髪の青年の瞳。

感じていたぼんやりとした暖かさに、じわりとした『熱』が加わる。それほどそれは、ミサカに強烈な印象を与えていた。

それは実験動物として常に冷めた姿勢で扱われてきた彼女が、初めて触れた他人の強い『感情』だったからなのだ。

やはり、それを理解するほどの情動を持たない少女はただ、茫洋とした思考を走らせる。

(彼は、『実験』の関係者だったのでしょうか。それとも、まったく別の?)

だが、緩やかな思考は現れた誰かの足音によって途切れた。ゆっくりと視線をあげるミサカ。そこには、

学園都市最強たる、『一方通行』(アクセラレータ)が立っていた。

髪も肌も、恐ろしいほどに白い少年。

白、といってもそれは清廉や潔白といったイメージとは対極に位置する、濁りに濁った白濁の白だった。

その腐敗する白を強調させるような黒い衣服に身を包み、鮮血のような紅い瞳を光らせて、少年はそこに存在していた。

現れた、自分の『死』そのものともいえる少年に、冷静な声でミサカは促す。

「現在時刻は二〇時四八分です。第九九八二次実験開始まであと十分四十秒ですので、指定のポイントへの移動をお願いします」

そして二人は、一言も会話をかわす事なく、ほど近い路地へと移動する。

蛾のたかる街路灯の白っぽい明かりの下で、ミサカがギターケースから積層プラスチック製のアサルトライフルを取り出し、マガジンを挿入して、初弾を薬室に装填している間も、白い少年は一言も声を発しなかった。

そうやって少女も準備を整え、場に沈黙が満ちる。

やがて瞑目していたミサカが、額の軍用ゴーグルに手を伸ばしながら



ら、『一方通行』（アクセラレータ）に向かって口を開いた。

「二二時〇〇分になりました。これより、第九九八二次実験を開始します」

そして、そのゴーグルを装着する。

すでに薄く歪んでいた白い少年の唇が、さらににいい、と深く歪んだ。

彼は無言のまま、その足を踏み出し

唐突に、壁をだんっ、とその手で叩いた。

ドン！ガン！と、その衝撃が壁面を伝って連鎖していく。

「…？」

何が起こっているのか把握できないながらも、ミサカは銃を構えようとしながらあとずさった。

だが、下がったちようどその上で、室外機が連鎖した衝撃にガアアアン、と外され、その鉄の塊が少女の頭へ向かって落ちる。

「…ッ?!」

かろうじてそれを避けるミサカ。

だが、間髪を要れずに白い少年の蹴りが彼女の頭部を襲った。からくもまた、それをかわす少女。

背後に着地した気配を感じ、ミサカが顔を向けると、

彼はもう、そこにはいなかった。

「…！」

視線を正面へと振り向ける。

そこには人間離れた動き、態勢で、空中に飛び上がり、少女へとその手を伸ばす白い少年がいた。

「…ッ！！」

あっさりと追い詰められ、ミサカは能力を使用する。

『欠陥電気』（レディオノイズ）。

ミサカに宿るその能力は、オリジナルである美琴の劣化能力でしかなく、その出力もせいぜい『異能力』（レベル2）といった程度のものでしかない。

それでも、ピンポイントな使用に限定する事で、ミサカはその『能力』を最大限に利用した。

パチ、と走ったささやかな紫電によって、スッと街路灯の光が『停まる』。

暗闇に投げ出され、目標を見失う『一方通行』（アクセラレータ）。

（これで）

そうして生まれた隙に、無駄のない動きで彼の死角へと滑り込んだミサカは、アサルトライフルの銃口を向け、微塵も躊躇する事なくその引き鉄を絞った。

最小限の炸裂音と共に、フルオートで吐き出される五・五六ミリの弾丸。

暗闇の中、白い少年へと致死性を持った小口径の銃弾がばら撒かれる。

その内の一発、少年のコメカミへと走ったその弾丸は、

なぜか、カアアン！と硬質な音をたてて、ミサカの軍用ゴーグルを破壊していた。

（なっ…！？）

視界が一瞬暗転し、遅れてやってきた衝撃に、少女はようやく自分が背後の建物に叩きつけられた事に気付く。  
遅れて熱いものが、彼女の額をつたって頬へと流れていった。  
眩暈を感じながら伸ばした手に、ぬるりとした感触。

「…………？」

それが自らの血液だと認識したところで、

「…………！！」

白い少年が笑みを浮かべてこちらを見ていることに気付く。  
通用しない、と判断してアサルトライフルを破棄、ミサカは眩暈をこらえながら細い路地へと逃げ出した。  
白い少年は、焼け爛れたような笑みを浮かべながら、急ぐ事もなくゆっくりとその後を追う。

まるで、無力なウサギを躡るように。

暴れ狂う心臓の鼓動、不規則極まりない呼吸、明滅し混乱する思考。  
それらに苛まれながら、ミサカは操車場へと通じる階段を必死に駆け下りる。

それを階段の上 鉄橋の縁から眺めながら、『一步通行』（アクセ

ラレータ）はのんきな声をあげた。

「はっはア、逃げる逃げる。その分だけ長生きできっからよオ。なにしろ、こいつは命がけの追いかけっこだからなア？…だから」

そこまで上機嫌に言いおいて、白い少年は背を預けていた手すりを飛び越えて あたかも、スクーバのバックロールのように 頭から操車場へと飛び降りた。

能力の行使により空中で半回転し、ダアアン、と階段を降り終えた ミサカの目前に着地する。

ゆらあ…と身を起こしながら、白い少年はまた、歪んだ笑みを浮かべた。

「追いつかれたら…ゲームオーバーだぜエ？」

(……………！！)

瞬間の判断で、距離をとるべく、ミサカは動く、が、

「遅っせエ！！」

ズン、と。

『一方通行』（アクセラレータ）は、まるでリズムを刻むように、足の裏で砂利を踏みしめた。 たった、それだけで。

白い少年の足元の地面が、爆発した。

撒き散らされる砂利が、散弾銃のような勢いでミサカを襲つ。

「あッ…がっ…」

逃げ場のないそれを喰らって、ミサカはにこった。つめき声をあげた。ぐらあ、と、身体のバランスが崩れる。だが、それだけでは終わらなかった。

「そらそらア、寝っ転がってるヒマなんざねえぞオイ！」

「…ッ………!!」

再び、彼の足裏から爆音が響く。

同じ攻撃を重ねられて、ミサカの息が詰まる。

華奢な身体は、散弾のような石の激突に吹き飛ばされて一瞬、宙に浮いた。

短い滞空時間を経て、砂利に投げ出され、その勢いそのままに鉄橋の柱へと叩きつけられる少女。

交通事故のようなその衝撃に、もはや、つめき声も出なかった。

それを見ながら、つまらなそうに白い少年はつぶやく。

「オイオイ何だ、もう壊れちゃったのかア？…つまんねエ。こんなんでホントに『絶対能力者』になれんのかね」

(…まだ………)

それでも、ミサカはぎりぎり立ち上がっていた。

よるめきながらも駆け出して、『一方通行』（アクセラレータ）から再度距離を取る少女。

その姿を見て、白い少年に歪んだ喜色が浮かぶ。

「ククッ。いいねエ、シブといじゃねーか。そーこなくっちゃよオ」

そこから二度、三度と。

もはや戦闘とも呼べない、一方的な鬨りは続いた。

そしてとうとう、散弾のひとつ　拳大の石が、ミサカの背中の中に命中する。

声も出せず、頭から倒れ込む少女。

「どーしたどーしたア？そろそろへバツちまったかア？それとも諦めちまったのかなア」

白い少年から投げられるのは、他に判別の仕様もないほど明確な、嘲りの言葉だった。

それに反応する事なく、地面に倒れた少女は少し血を吐いてから、口を開く。

「ミサカは」

それは、この『実験』が始まってから初めて、少女の意思で紡がれた言葉だった。

「目標の能力を正確に把握できていません。…が、これまでの実験結果から周囲にバリアのようなものを張り巡らしていると推測します」

とがった砂利に血に塗れた柔らかな頬を埋めながら、ミサカは言葉を続ける。

「目標が地に足をつけて歩行している事から下方…少なくとも足裏には能力は展開されていないと思われるため…足裏からの奇襲が最も有効であると結論づけます」

「何ブツブツ言ってんだ？逃げねエなら終わりにすんぞ」

震える自らの身体を、ミサカはゆっくりと起こす。

「…逃亡ではありません」

一方的に追い掛け回され、血を吐き、ボロボロになって、起き上がる事すら苦勞するような有様で、ミサカは決然と振り返った。

「…計画通り、目的地への誘導を達成した。とミサカは訂正を求めます」

そして、細い紫電が走る。

「…?!」

間をおかずに、『一步通行』（アクセラレータ）の足元から、ピッ、という電子音が上がり、

視界をすべて真っ白に染め上げるような、大爆発が起きた。

もはや対人地雷とは規模の違う、十kg単位の火薬が生み出す対戦車地雷の爆発ガスが、垂直に夜の操車場に吹き上がる。遅れて熱風と共に爆発音が、夜の静寂を引き裂いた。

爆発それ自体はすぐにおさまり、かわって白い噴煙が上がり始める。

「目標…完全に…沈黙……?」

よろよろと立ち上がり、爆心からもうもうと噴き出してくる煙に髪

をなぶられながら、ミサカはポツリとつぶやいた。

人間どころか、鋼で出来た装甲を纏った車両を破壊するための爆炎。人間なら…いや、生き物なら、間違いなく終わっているはずの破壊。

だが、学園都市最強には、届かなかった。

煙の中から無傷の白い少年が、狂熱にまみれて飛び出す。

「…!？」

ポロポロのミサカにできたのは、それに気づく事、だけだった。

「あっっ」

反応する事すら許されずに、少女の身体は乱暴に押し倒される。

「ギアーンねんっ!! テメエの考えはてんで的外れなんだよオ」

そしてずぶずぶと、少女の太ももに少年の手がめりこんでいった。

「あっ…あっ…」

気が遠くなるような痛みにも、ミサカの思考は白く灼けて

ブチブチブチ、という耳を塞ぎたくなるような音と共に、少女の左脚はあっけなくちぎり取られていた。



「ぐッ」

それでも、ミサカは戦意を失わなかった。

想像を絶する痛みで逆にクリアになったように感じる思考を、『能力』の演算に注ぎ込み、少女は雷撃の槍を解き放つ。

光の速度で突き進む紫電の槍は、人の意識を奪う程度の破壊力は秘めていた。

だがそんな、少女の最後の最後を集約した一撃すらも

「があッ」

『反射』により、跳ね返される。

『電撃使い』（エレクトロマスター）の特性ゆえだろうか。

自身は気絶する事すらできずに、彼女はズシヤア、と地面へと倒れ込む。

(…あ……)

同時に美琴からもらったカエルのバッジがこぼれて、てんてんと砂利の上を転がっていくのを、ミサカはその瞳に映していた。

「追いかけてこできなくなっちゃったなア？」

加害者の少年がちぎり取った脚をポイ、と放り捨てる。

「このままほっといてもくたばんだろっが、ジッと待ってんのもたリイからよオ……」

気楽にそう告げる『一步通行』（アクセラレータ）。  
だが、ミサカにはもうその言葉は聞こえていなかった。  
少女は、ただ、

震える手を伸ばして。

…ゆっくり、ゆっくりと、移動していた。

「…！」

脚を失い、もう立ち上がる事すらできない。

それでも少女は、まだ動く部分すべてを使って、ズルズルと『そこ』  
を指す。

「あアア？」

むしろ呆れたような口調で、白い少年は問いかけた。

「よオ、まだ逃げんのかよ。つってもそっちは行き止まりだぜ？」

(…あ…あれ…だけは…)

しばし、白い少年はそうやって這いずる少女を見下ろしていたが。

「……………もオいいや、オマエ。終わりにしてヤンよ」

壊れた玩具に興味を失ったような顔で、機関車に向き直った。  
白い少年がそれにそっと手を添えるだけで、鉄の塊が、容易く浮き  
上がる。

(はなしたく…ないと…ミサカは…)

ほぼ、時を同じくして。

ミサカも、目的へと辿り着いていた。

傷だらけで、見る影もなくベコベコになってしまった、安っぽい、カエルのバツジを手にとつて、

ただそれを、ぎゅっと抱きしめた。

「  
」

そしてふと、声が聞こえた気がする。

同時に、誰かが走りこんできた気も。

だが、暗闇が落ちて、轟音が響き。

彼女には何もかも全部、わからなくなってしまうたのだった。

…  
…。

E  
X  
T

T  
O  
N

「うそ…うそっ！そんな…！！」

自分が、何を見ているのか、わからなかった。

操車場にかかる、<sup>バス</sup>鉄橋の上。

初春に昼間聞いた符丁を解析してもらい、近くの路地で銃弾によって壊された、見覚えのある軍用ゴーグルを見つけ、この場所まで至った美琴は。

（なんなの…一体なんなのよ…！！）

目の前の光景を受け入れることが出来ずに、それをただ、食い入るように見続けていた。

自分と同じ姿をした少女が、倒れ込んだまま地面を這いずり。

そのそばで、白髪の少年に触れられた貨物用の機関車が容易く浮き上がった。

機関車作り出す影が、少女を中心に捕らえ。

「やめっ…！！」

蒼白になって、美琴は叫び…、

ドゴツシャアア！！！！

そしてその時には、破壊音と共に、それは地面に叩きつけられていた。

(な…なん…なの…)

またしても、今見えてしまった光景を処理しきれず、美琴は全身をおこりのように震わせる。

昼間話した自分と同じ姿をした少女が、鉄の塊に無慈悲に押し潰される。

それだけだつてもう、十分以上にどうかしているというのに。

(いま…いま…)

見慣れた青年も、その下に飛び込んでいってはいなかったか？

(うそ…だつていま…あそこにはあたしの…それに…あいつ…  
須お…)



うか。とミサカは状況に疑義を呈します…)

ぼんやりとした思考に少女は身を任せる。

体の感覚は、深い泥の中に埋まったかのように沈んでいた。痛覚が麻痺しているのだろうか、それともすでに何も感じなくなっているのだろうか。

とにかくすべてが鈍く、重くなって、何もかもが遠くに感じる。

そしてなにやら先程から、背中が温かいような気がしていた。

「…ごめん、ちょっと動かすよ」

そして唐突に背中側から誰かの声が聞こえて。

ミサカの身体に、激痛が走った。

…  
…

(我が契約により、聖戦よ終われ)

その呪文を脳裏でつぶやいたのは、本当になんとなくのことだった。まさか、先程轟音に紛れた分を補おうと思ったわけでもなかったのだろうか。

掲げていた右手を、ゆっくりと下ろす。

地面に叩きつけられた際の衝撃の余韻が残る、ほこりっぽい車内の中。

桐とミサカがいるその部分だけ、くり抜かれたかのように円を描いて車体の壁が『消失』していた。



( やっぱり、物質の消失は骨が折れるね… )

それでも前回よりは高次のレベルで成功した構成に思いをはせながら、桐はところどころから月光の差しこむ車内を見回した。

横倒しになった状態で地面に叩きつけられたのだろう。

左側が床、右側が天井、そして上に並んでいるような形になっている窓にちらりと視線を走らせると、桐は差しこむ月の光の下、腕の中の少女を見おろす。

( このままってわけにはいかないね。まずは、彼女を横にしよう… )

「…ごめん、ちょっと動かすよ」

出来るだけ、腰に近い部分に手を差し入れて、桐はミサカを抱き上げる。

「…くあ……………」

うめき声をあげる彼女。

その身体は、哀しくなるくらいに軽かった。

( …………… )

唇をかみ締め、努めて何も考えないようにしながら、等間隔に並ぶ車窓をさけて、平らな部分に少女を横たわらせる。手のひらを上に向けて彼女へと差しだし、唱えた。

「我は生む小さき精霊」

ぼうつ、と手のひらから白い光を放つ鬼火のようなものが浮かび上がる。  
無機質な白光をもつ魔術の明かりは、その下に寝ている少女をはつきりと浮かび上がらせた。

(……………っ!?!?)

無意識のうちにかみ締めていた唇が切れ、口内に血の味が広がる。

ミサカは…彼女はどうしようもないくらいに、満身創痍だった。

一番初めに目が行くのはやはり左足。

抉られたようにその脚は太もものところでちぎりとられて、ピンク色の筋繊維とともに、白い骨がのぞいていた。

脈拍のせいなのだろう、断続的に血管からは出血を続けている。

唇には吐血の跡。

やはり、内臓が傷ついている結果、と見るべきだろうか。

肺や気道にも障害が出てしまっているのか、呼吸はひゅっひゅっとならぬようになってしまうていた。

そして、全身の打撲と擦過傷。

これに至っては、無事なところを見つけるのが難しいくらいにくまなく、少女の身体に刻まれていた。

あえて考察するまでもなく、執拗に痛めつけなければ出来るはずのない傷。

それらを一通り見て取って、桐は目の前が真っ赤になるような感覚を味わう。

湧きあがって来た壮絶な自責と怒りが

(…なんて、ことを…!!…いや)

暴走しかけた感情と思考をねじ切って捨てて、改めて口の中に広がった血の味を強引に噛み潰す。

そして桐は構成を編み、魔力を解き放った。同時に口を開く。

「我は癒す斜陽の傷痕…」

鍵となる『音声』 そのつぶやきにより、魔術は完成し、発動するはずだった。

だが、その感触が、いつまでも訪れない。

「……………っ!？」

(なんだ、何がまずかったんだ…?)

戸惑う桐。

「我は癒す斜陽の傷痕…!」

もう一度試すが、それもうまくいかない。

(…っ!?)

「…なんで…、くそ、いいから治れよ…!!」

構成を編み上げ、対象に展開し、魔力を流し込みながら、『音声』

を投げつける。

それでも、桐の魔術は発動しない。  
思考が、焦燥に塗りつぶされる。

意識には、用を成さないでたらしめな構成が次々と浮かんでは、霧散して消えていった。

(冗談じゃない、こんな時に使えないなんて笑い話にもならない！  
何が足りない？何を間違った？何を見落としている？いったい何を  
…！！！)

「あな、た、は」

「っ！！」

正しく恐慌に陥る青年を引き戻したのは、目前に横たわる少女自身の言葉だった。

冷水をかけられたような心地で、桐はミサカの顔へと視線を落とす。  
こんな時でも感情の混ざらない、純粹で透明な一対の瞳は、青年を  
まっすぐに見つめていた。

「ひる、ま、の…なぜ、ここ、に…」

言葉の区切りでこぶっ、と血を吐くミサカ。  
それでも言葉を続けようとする少女を見て、

(ああ、そつだ…)

桐の頭がすつと冷える。

唐突に取り戻した判断力の下、青年は口を開いた。

「…今は無理に話さなくていいよ、だから口を閉じていて欲しい。後で…そう、後で全部聞かし、答えるから」

意識して出した、落ち着いた声。

同時に自らの無様さに、青年は心の中で悪態をついていた。

(本当、僕は何をやっているんだ…)

気が付いてみれば、それはひどく単純な事だった。

『音声魔術』は、その構成の下、限りなく直接的に奇跡を起こす事ができる。

だがそれは、あくまで奇跡であつて、不条理ではない。

意味的なパラドックスを含んでいたり、曖昧さを残した構成では、なにもできない。

つまり、正確に事態を把握し、効果をイメージできなければ、実用に足る構成を編むことなど出来るはずもなかった。

(そんなこと、当然わかっていたはずだったのに、僕は)

くしゃりと自らの髪を掻いて、桐は自分の間違いを言語化する。

(ただ、漠然と、すべてを治そうとしていた)

実感して把握しているものならともかく、『音声魔術』では、わけのわからないものをわけのわからないままに治癒する事はできない。

(落ち着こう。後悔も反省も、後に。今はただ、僕にできることをすべてやって)

「君を、救うよ」

目的を、口に出す。

なぜか目を見開いたミサカには構わず、桐は自分に出来ることと、手持ちの道具とを意識の上に並べていった。

（僕には専門的な医療知識はない。せいぜい一般レベルの応急手当の知識くらいだ。正直、それにしたって怪しいものだし、道具だつて足りてない。だけどそれでも、できることはあるから…！）

断続的に出血を続ける傷口を見据えて、桐はあらためて構成を編み上げる。

「我は癒す斜陽の傷痕…」

目的を明確にした上で編まれた構成に沿って、『音声魔術』が発動した。

その魔術の効果は、出血を続ける血管そのものを発生させた力場で軽く『絞って』、太ももからの出血を抑える。

（間に合わせだけど、止血はこれで。次にするべきは、患部の冷却と保存…）

身につけていたボディバッグから、昼間支給されたゴミ袋とミネラルウォーターのペットボトルを取り出す。

そして、丁寧にビニール製のその袋を傷口にかぶせてから、余った部分を巻きつけた。

(確か、急激に冷やすのはよくなかったよね…)

一瞬考え、もう一枚余分に患部に巻き付けてから、桐はペットボトルのキャップを捻った。

ボトル全体の三分の一ほどの水を、患部を塗らすように少しずつ振り掛けてから手を添える。

構成を編み上げ

「凍れ…！」

ポツリと、つぶやいた。

巻き付けられたビニールに付着していた水が、瞬時に氷へと相転移する。

さらにその上にビニール袋を巻き付けてから、青年はそれをきつく縛って立ち上がった。

(これで、この中でこの子に今出来る事は終わった。次は外だね)

少女から適当に離れると、頭上に存在する車窓を見上げ、半瞬でその使用を却下して目前の『天井』を見据える。

(外には、彼女の脚があつて…なによりきつとまだ、『アイツ』がいる。すぐにでもこの子を医者に診せたい以上、いなくなるまでここで息を潜めるって選択肢は無しだね)

『アイツ』 『一方通行』 (アクセラレータ)

心の芯に、荒々しい熱が灯る。

今もここで浅い息を苦しそうに吐いている、ミサカをここまで傷つけた存在。

必要以上に自分が熱くなってしまうていることを自覚して、桐はその激情の落としたところを探った。

（…仕方、ないよね。今、この瞬間だけ、八つ当たりしよう。外に出たら迅速に、やるべきことだけをやらなきゃいけないから）

再び湧き上がってきた苛立ちに逆らわずに、桐は感情のままに構成を編み上げる。

右腕を斜め上段へと振り上げ、掲げた右手に添えるように左腕もまた振り上げた。

「我掲げるは」

『音声』が世界に触れ、発動しはじめた魔術が構成のままにその世界を書き換えていく。

瞬間、ぶわっと後ろ髪が総毛立ち、掌の中に発生した超磁場に、あたりの空気が細かく振動を始めた。

「降魔の剣　　！！」

そして、彼の手の中に重みが生まれ、同時に光剣が発生する。

眩い光が形作る、放電を伴うその剣を視界に納めながら、桐は場違いな思考を走らせていた。

（かろうじて制御は出来ているけど、構成を失敗してるね…この術は本来、無音、不可視の力場剣なんだけど、構成が荒かったかな…）

そんな事を思いながら、溢れる余力に構わず、青年はさらに『剣』の威力を高めた。

手の中の術式が放つ放電が、一際その輝きを強め



（それでも、充分以上に使える！）

結論と共に、桐はその手の力場剣を、目前の障害に叩きつけた。

……。  
……。

E  
X  
T

T  
O  
N

「わあ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ  
あ あ !!!!!!!」

手加減など、初めからそこにはなかった。

美琴はおそらく、生まれて初めて、初手から相手を『気遣うことな  
く』、そのチカラをふるう。

右足に電磁波を集中。

何が起こっているかを正確に観測した白い少年が、感心したような  
声をあげた。

「おおっ」

地中の砂鉄を掻き集め、背後よりそれを隆起させる。

それは、巨人の黒い腕のように、土と砂利とを押し上げて持ち上が  
った。

「スゲエスゲエ。何だ新ワザかア？」

「……………」

無言のまま、砂鉄で出来たその黒い流れを飛ばして白い少年を覆う。  
ドオツ、と少年を飲み込んだそれは、数瞬を待たずに砂鉄の竜巻と  
化した。

並の人間ならば、全身をくまなく砂鉄で削られる、圧倒的な攻撃。

「ふーん、磁力で砂鉄を操ってんのか。おもしれー使い方だ」

それなのに竜巻の中からは、ひどくのんきな声が聞こえた。  
美琴の顔色が変わる。

そしてピツと、何かが触れる音がして、

「タネが割れたらどーってことねエがな」

あっさりと、それは霧散した。

(そんなっ、アレを食らって傷ひとつ負ってない!? 一体…)

驚き、戸惑いながら美琴はその視線を周囲に泳がせる。

そしてその先、視界の隅に転がっている少女の『脚』を見つけた。

「……!!」

美琴の思考が沸騰する。

「……っっ!!!!!!」

声にならない声をあげ、美琴は自分を抱きしめるようにしてまた、  
能力を発動させた。

それは周囲のレールを電磁力によって無理矢理引き剥がし、空中で  
連なって巨大な蛇のような姿を見せる。

「……?このパワー、おまえ……」

初めてこぼれた訝しげな声に聞く耳を持つことなく、美琴は連なった  
鋼鉄の矢を地面へと連続して打ちこんだ。

白い少年へと伸びる軌跡に次々と突き立っていくレール。  
だがそれは、彼に到達したところで

「……………!?!」

ガアアン！と弾かれ、逆に美琴自身を襲った。

「っ……………ぐっ……………」

かろうじてかわし、体勢を立て直す美琴。

目線を上げ、信じられない気持ちで状況を確認する。

(何が…)

突き立てられていくレールは間違いなく、白い少年を襲っていた。  
それなのに、大地に突き立っているレールの軌跡上に、微動だにす  
る事なく今も彼は立っている。

(弾き…返された!?!?私の攻撃をあしらえる能力者なんて)

混乱する美琴の耳に、愉快そうな声が響く。

「そうかそうかア。予定と違うから何かと思ったら」

そして焼け爛れたような笑みが、白い少年に浮かんだ。

「オマエ、オリジナルかア」

美琴の背筋に感じたことのない寒気が走る。

「クローン共はオリジナルの代わり……てこたアだ」

ジリ、と少年の足が踏み出した。

「オマエと戦えば、このダリイ作業もグツと短縮できんだろ？ イ加減飽き飽きしてたんだ、頼むぜエ、オリジナル」

その、這い登るような声色に。

美琴は、ゲームセンターのコインを取り出す。

その手には、ジワリと動揺から あるいは、恐怖から くる汗が浮かんでいた。

それでも、美琴は言葉を搾り出した。

「何で……何でこんな計画に加担したの……？」

「ああ？ 何だイキナリ」

「答えて！ それだけの力があって…無理矢理やらされてる訳じゃないんでしょ?! こんなイカレた計画に協力する理由は何!? あの子に恨みでもあつたわけ？」

本当に、美琴にはわからなかった。

たとえフィクションでも差し止められそうなほど残酷で狂気に塗れた、『計画』。

そんなものに自分から進んで協力できる『ニンゲン』など、彼女には想像すら出来なかった。

だが、返ってきた言葉に、美琴は慄然とする。

「理由？理由ねえ。そりゃあ」

拳を天へとゆっくり掲げ、白い少年は誇らしげにこう言った。

「絶対的なチカラを手にするため」

(なにを、いつて…)

理解できない美琴に構わず、詠うように彼は続ける。

「『最強』(レベル5)だとか学園都市で一位だとか、そんなつま  
んねエモンじゃねえ。俺に挑もうと思つ事すら許さねえ程の絶対的  
なチカラ 『無敵』(レベル6)が欲しーんだよ」

視線だけを向けて、彼は美琴に同意を求める。

「オマエも『超能力者』(レベル5)なら分かるだろ？」

「何よ…それ…」

その言葉に、美琴のナニカが、切れた。

「ゼツタイテキなチカラ？ムテキ？そんな…そんな事でっ！」

噛みしめた歯が、ギリツと軋む。

「アンタはっ、そんなッ」

そして美琴は、

「そんなモノのためにあの子を殺したのか  
！！！！」

ッ

絶叫と共に、『超電磁砲』（レールガン）を撃ち放っていた。

オレンジ色の直線が、白い少年へと走る。

それは音速の三倍で撃ち出された、金属片の一撃。

針のように細いその熱線は、その残像すら空間に焼き付けながら標的へと迫り

次の瞬間、『反射』して美琴の直近を掠めていた。

髪の毛の先端がその余波に持っていかれ、続いてそこに突き立っていたレールを容易く抉って飛び去る。

（え………？）

学園都市の『超能力者』（レベル5）の第三位。

御坂美琴の代名詞でもある、象徴的な、それ。

『超電磁砲』（レールガン）が

全く、通じなかった。

あまりの衝撃に、美琴の意識に空白が落ちる。

「人聞き悪いな、人殺しみてえに言うなよ。俺が相手してんのは、ボタンひとつで造れる模造品だぜ。…？何固まってんだよ」

そこで初めて、白い少年は美琴の様子に気付いた。

一瞬だけ思考をめぐらし、すぐに彼は得心してうなずく。

「ああ、そうか。悪い悪い、今のがオマエのとおきってヤツだったんだな。…仮にも同じ『超能力者』（レベル5）だ、クク…」

そこまで話してから、たまらなくなっただかのように、学園都市最強は笑みを漏らす。

続けられた言葉は、呆然とした美琴にも、なぜか鮮明に聴こえた。

「まさかこんなシケたもんだとは思わなくてよオ」

空白になっていたはずの美琴の心に、やけにはっきりとその言葉が、



内容と共に響く。

積み上げてきたものが、ガラガラと崩れていく音が聴こえた気がした。

目の前が真っ暗になる感覚を、現在進行形で味わう美琴に、愉快げに白い少年は口を開き

「無茶な事を言うね。お前にかかれば、強弱に関係なくだいたい  
の事は『シケたもん』になるっていうのに」

だがそれは、ひどくよく通る、『ダレカ』の声に遮られていた。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

48

Phrase .

「無茶な事を言うね。お前にかかれば強弱に関係なく、だいたいの事は『シケたもん』になるっていうのに」

初手から、状況は予想の外にあった。

『剣』で車体の壁を四角く切り裂いて強引に蹴りはずし、傷ついたミサカを抱えて車外へ出た桐は、視界に映る光景に、冷えた思考を走らせる。

(ミサカ…じゃないね。さっきのは間違いなく超電磁砲レールガンだった。彼女は疑う余地もなく御坂さん本人なんだろう。このタイミングでこの場に現れるっていうのは、出来すぎな気がするけど)

『禁書』小説本編でしかこの世界を知らない青年は、それでも眼前の事態に動揺することなく、ただ、それだけを脳裏に浮かべてから自らの行き先を見定めると、その足を踏み出した。

(それでも、やることは大して変わらない…)

ミサカを抱えたまま、歩き始める桐を認めた白い少年が、興味深そうに声をかけてくる。

「ああ？オマエはさっき飛び込んできた一般人じゃねエか。すごいな、あの状況で生きてたんかよ。不可抗力とはいえ、マジモンの一般人じゃ後味悪イと思ってたんだ。にしても、なんで生きてる？どんな手品を使ったんだア？」

他人事のような、軽い言葉。

かけられたそのセリフに、新たな苛立ちは湧いてこなかった。  
そんなことよりも、傷ついた少女を抱えた青年は、近づく事で見えてきた美琴の様子に気を取られる。

(なんて表情を、してるんだよ…)

信じていたものが、折られてしまった者の表情。

その少女が浮かべるには、あまりにもそぐわないそれを視界に納めて、桐は内心でポツリとつぶやいた。

だがやはりそれにも、彼が新たな怒りを感じる事はなかった。

無言のまま、目的へと辿り着いてひざまずくと、腕の中の少女をその場に丁寧に横たわらせ、そこに転がっている彼女の脚に、先ほどと同じ処置を加えていく。

そんな青年に、白い少年の苛立った声がかけられた。

「オマエ、何シカトしてゴソゴソやってやがるんだア？オマエに話しかけてる相手が誰だかわかってねエわけじゃねエんだろうか」

「安い手品だよ。それに、わざわざ教えなきゃいけない義理もないだろう？」

「あア？」

振り返ることもなく、こだわりなく返された桐の言葉に、『一方通行』(アクセラレータ)の表情が尖る。

自らの質問をはぐらかされることに慣れていない彼は、すぐに軽い苛立ちの中に、凍りつくような殺気を溶かし込み始めた。

それを鋭敏に感じ取りながらもやはり、桐の感情に変化はなかった。

「さてと、それじゃ提案だ。明日、同じ時間、同じ場所でどうか

な」

どうということはない動きでミサカから数歩離れ、桐は初めて学園都市最強に向き直る。

ミサカを、そして今、美琴をあんな風に痛めつけた相手を正面から見ても、彼に新たな感情が生まれる事はなかった。

そう、何を見ようが、今さら感情が変わるはずはなかった。

青年はとっくに、一番深いところで切れていたのだから。

「ハア？何言い出してんだオマエ。まさか見逃してもらえるなんて思ってるワケじゃねエだろうなア？オマエが今何を考えてよオが、後生大事に命がけで助けたソレはどうあがこオとここで壊す。オマエもクチに気をつけねエと仲間入りだぜエ？」

明確な、恫喝。

文字通り、絶対的な自信を裏打ちに放たれたそれにも、青年は特に口調を変える事なく返す。

「いや、どうせ終わった後に話しても聴こえないだろうしね。先に言うておこうと思っただ。今日は付き合っている時間が惜しいから、明日、同じ時間、同じ場所で」

その視線だけで横たわっているミサカを示して、桐は続けた。

「ここまでやってるんだからある意味、第九九八二実験は終わっているって言うてしまってもいい気はするけど、ね。それでもお前はそれで片付けて彼女を殺さないまま、なあなあに次に進むってわけには行かないだろう?」

「…ゴチャゴチャと面倒くせエ。一緒に潰してクダサイってことでいいなア?」

相手が根拠のないブラフ、または虚勢を張っていると判断して、その足を進める白い少年。  
対峙する桐は迅速に構成を編み上げ、それを展開し、腕を振り上げると魔力を流し込んだ。  
発動するのは、使い慣れた構成。

「我は撫でる獅子の鬣！」

最速、最鋭、最薄。

アンダースローのような動きと共に繰り出されたその魔術は、集束されつくした空刃と化して、白い少年へと迫る。

だがやはり、それは目標に届く事なくあっさりと、『一方通行』（アクセラレータ）に『反射』されていた。

撃ち出すと同時にサイドステップを踏んでいた青年を際どく掠めて、それは彼自身の背後に突き立っていた鋼鉄のレールをあっさりと斬りとばす。

「ああ? 殺す気で撃ったツてのはわかるがそんだけかア? さんざんもったいぶってそりゃ」

そして拍子抜けしたように、『一方通行』（アクセラレータ）が声をもらそうとしたその時には。

桐の構成は、編みあがっていた。

「我は呼ぶ」

同じくらいに使い慣れた構成が展開し、解放された『音声』を媒介に世界を書き換えていく。

「破裂の姉妹！」

結句と共に空気の破裂を伴う、無差別な衝撃波を発生させる魔術が完成した。

だがその発動ポイントは、目標の超至近

そのすべては、一瞬のことだった。

無差別に 言葉通りどの方向にもまんべんなく 『一方通行』(アクセラレータ)に極めて近い複数のポイントを起点に、無数の衝撃波が暴れまわる。

その半分ほどは『反射』によって返され、また返されなかったうちの三割ほども『反射』に干渉する事なくただ、虚空を叩いた。

だが、その残り、『自分から遠ざかっていく』衝撃波を。

一方通行の『反射』は完璧に『反射』する！

「がつ…あア!!!」

自らに突きこまれる『逆反射』による衝撃の束。

手加減無しで放たれた、複数の人間を容易く無力化する、その威力の一部。

それらをなすすべなくその身に受けて、白い少年は速やかに昏倒する。

魔術の効果が終わった後には、ただ、しん、とした沈黙だけが残った。

（能力の性質 その対抗策も含めてタネが割れていれば、対応は難しくない…。それでも次同じ手がまた通じるかは、正直疑問だけだ）

今よりも先の、『物語』で。

『原作』に登場し、『一方通行』（アクセラレータ）を一時にせよ圧倒した研究者、木原数多を思い出しながら桐はひとりごちる。

初撃にあえて『反射』しやすい高威力で単調な攻撃を選び、それを『反射』させることで相手の油断を誘ってから、間をおかず練り込んだ本命を叩き込む。

そうやってとりあえずの勝利を収めた青年はミサカのもとに戻ると、また、ゆっくりと少女を抱き上げた。

千切れた脚も忘れずに手にしてから、美琴に声をかけようと振り返ったところで。

桐は音もなく現れていた、大量のミサカたちをその目に映す。

「あなたは、何者ですか」

(まあ、『原作』でも後始末は彼女達の仕事だったし、ここで出てくるのは不自然じゃないか)

バイザーをかけたミサカの誰何に、桐は特に感情を混ぜる事なく答えた。

「ただの自分勝手なお節介だよ。ところで、実験の邪魔をした僕をどうにかする気はあるのかな。ちょっと急いでいるから、何も言わずに通してもらえると助かるんだけど」

「ミサカたちは」「このような事態に対して」「なんら具体的な指示を」「受けていません、とミサカは」「この実験は機密事項」「ですからあなたは」「しかし一般人の拘束を」「ミサカは認められていません、とミサカは」

(まあ、そうだよな。『原作』でも実験にニアミスした上条に何もせずに立ち去っていたし)

リレーされていく言葉を拾って、彼女達には自分に対して何かをする気はない、と把握した青年は、そこでいったん彼女たちとの会話を切り、改めて美琴に声をかけようとする。

「…アンタ達…」

だがその言葉も、今度は美琴自身によって遮られた。

「何なの…？おかしいよ…なんでこんな計画に付き合ってるの？殺されちゃうのよ？こんなのワケ分かんない……………」



独り言のような、ちいさな言葉が美琴から紡がれる。顔を見合わせる、ミサカたち。

うずくまった少女は、ガリツ、と目の砂利にその手を突き立てて、叫んだ。

「何だよ！！生きてるんでしょ！？命があるんでしょ！？」

脳裏に浮かぶのは、つい数時間前の情景。

自分と同じ顔をした少女と一緒にアイスを食べ、その口元をぬぐった、姉妹のようなその記憶だった。

「アンタ達にも…あの子にもッ！」

そしてまたうなだれて、美琴は言葉をもらした。

「こんなの…これじゃ一体何の為に……」

泣きそうなその声に、だが無感情な声に応える。

「ミサカは計画のために造られた模造品です。作り物の体に借り物の心。単価にして十八万円の 実験動物ですから」

そうして、ミサカは現場の処理に向かうべく、きびすを返す。その背中に、桐は声をかけた。

「それでも、」

大きくも、小さくもない、叫んですらない、その声。

だが不思議と、それはひどく明瞭にセカイに響いた。足を止め、振り返るミサカ達から視線を外す事なく、桐は続ける。

「僕はそれを絶対に認めない。君らはこれ以上、一人だつて死なせない。宣言するよ、これは僕の『意思』だ。そこで寝ている優等生にも、伝えておいてくれると嬉しいな」

(といつても、今の時点じゃこれは、ただの負け惜しみと大差はないけど)

この時点でのそれは現実を伴わない、ただの夢のような幼い言葉だった。

それを痛感しながらも、桐は腕の中の少女を抱きなおす。くったりと脱力し、ほんの少し何かを間違えただけでも、折れてしまふような華奢な体躯。でも、そこに確かに宿っている、命の熱を感じる。

(それでも、僕は僕の望みのために、これから立ち回ろう。ここからは、ひとつだって失敗できない！)

決意と共に自らの意思を再確認して、桐は美琴に声をかけた。

「行くのか、御坂さん。今は、この子をなんとかしないと」

E  
X  
T

⋮ ⋮  
◦ ◦

T  
O  
N

彼ら すなわち、『その日』、『その学区』にいたとあるスキルア  
ウトの一派にとっては。

まごうことなく、その日は掛け値なしの厄日だった。

いつものように路地裏にたむろし、ここ数日はお気に入りにしてい  
るセダンの窓を開け放してオーディオを最大音量で鳴らし、やはり  
これもいつものように適当にダべっていた彼らは。

「我は砕く原始の静寂！！」

突如、すぐそばにあった金属製のダストボックスが、なにか凶暴な  
ものに吹き飛ばされる轟音と共に、束の間の非日常へと叩き込まれ  
た。

「な、なんだ!？」

なおも爆砕の波紋が揺れる空間の中、どこかからの襲撃か、と吹き  
飛ばされ、砕かれたダストボックスの破片が転がっていく様子に注  
目する彼ら。

思えば、それは最低限の配慮だったのだろう。

前触れなく放たれたその一撃は、彼らのうち、ただの一人だって巻  
き込んではいなかったのだから。

ただ、気がつくくと、

見覚えのない青年が、セダンの運転席の横に陣取り、車の力ギに  
手をかけていた。

青年の手によって切られたオーディオが、たまり場に騒々しい音楽を流すのを止める。

そのままおざなりに腰に吊るされた腕章を示しながら、彼は口を開いた。

「僕は風紀委員だ。悪いけど、この車を徴収する。のんびりしている時間がないから、交渉は省くよ。…そうだね、文句があるなら手を挙げてくれ」

紡がれるのは、ひどく平静で冷静な言葉。

「まとめて吹き飛ばすからさ」

それなのに、その内容はどうしようもなく有無を言わせないものだった。

その迫力と、差し向けられた掌を前に、スキルアウトたちはなす術なく、ただこくこくとうなずく。

「ありがとう、感謝するよ」

その言葉だけを残して青年はするりと運転席に乗り込み、間をおかず、滑らかにセダンがバックを始めた。

そしてそのまましばらく下がると一番手近な四つ角で停まり、後部座席に人に乗せるような間を取ったのち、その場から走り去る。

あまりにも鮮やかにクルマを強奪されたスキルアウトの一人が、呆然と口を開いた。

「おい、どつするよ…」

同じく隣で呆けていた仲間がぼんやりと、それに答える。

「どつするって言われても…あれ、オマエがパクったやつだろ…?」

「いや、そうじゃなくて。お、俺達、ここから歩いて帰るのか…?」

この街にとっては掛け値のない深夜。

街の中心から遠く離れた、人通りはもちろん、朝までまともな移動手段もない、学園都市の片隅で。

スキルアウトたちは、放心状態で顔を見合わせたのだった。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

49

Phase .

学園都市謹製の自動車らしく、エンジン音やロードノイズのほとん

ど聴こえない車の中。

車内には桐の声と、ひゅうひゅうという、ミサカの呼吸音だけが響いていた。

「ええ、そうです、急患です。一刻を争う…」というか、もうあなただじやないと無理だと判断してそちらに向かっています」

「わかったよ。すぐに連れて来るといい」

電話はそれだけで、速やかに切れた。

その返答の速さに逆に安心感を抱きながら、青年はハンドルを危なげなく操る。

自分にそれが出来ているという事実にはやはり疑問を覚える事なく、桐は思考を走らせていた。

(あらためて、御坂さん本人がいたのは予想外だったね…。『光列の檻』あたりで攪乱してから適当に逃げ出すつもりだったのに、結局切り札の一枚を切ることになっちゃったし…)

バックミラー越しにちらりと、傷ついた少女を膝枕する美琴を見やる。

「……………」

ある意味では『姉』というべき少女は先程からずっと無言のまま、ただ『妹』の顔を見つめていた。

(それでも逆に、彼女がこの場にいること自体はプラスと捉えるべきなのかな。『彼女に係わってもらおう事で』打てる手が変わってくる。…そんな風に考える事自体、救えない話だけだ)

脳裏をかすめるのは、相反する感情と理屈。

それでも頭に浮かぶ善後策の素案に新たな要素を加えながら、桐は減速し、ウインカーを点滅させてハンドルを切った。

そうして広い道に出て、彼はアクセルを深めに踏み込む。

同時に、そうすることで心中にジワリとじんできていた自虐を、意識して振り払った。

(…構わない。今さら思考を止めるわけにはいかないし、動き出した事態はどう願っても止まってなんかくれない。投げ出すつもりがない以上、今はただ、僕に出来ることを重ねていくしかない)

……

……

二十分ほどで、クルマは目的地に辿り着く。

すべりこんだ病院のエントランスには、すでにストレッチャーと共にカエル顔の医者が待機してくれていた。

クルマから出された『患者』を見た瞬間、カエル顔の医師の表情が変わる。

「よく連れて来てくれたね？ここからは僕の領分だ」

そしてそのまま、病棟の中へと入り、清潔感に溢れた院内の廊下を進む。

だが、ストレッチャー上のミサカと共にカエル顔の医者が、処置室へと消えていこうとするところで、

「ああ、ちょっと待ってもらえますか？」



部屋に入ろうとする二人を、桐はひどく自然な仕草で遮っていた。二人の視線が集中する。

「アンタ…!？」

「どういつつもりなのかな？一刻を争うということにはわかってい  
るだろう?。」

美琴の信じられないものを見るような目と、カエル顔の医者には珍しい、咎めるような口調。

それを当然のようにその身に受けながら、桐はなにくわぬ顔で答えた。

「ええ、判っています。そしてこれからあなたが最高の治療をして  
くれようとしていることも。それでも、口を出したいことがあるん  
です。あなたは患者のためになるものならどんなものでも揃え、使  
う人だそうですね?。」

落ち着いた口調で、桐はカエル顔の医者ポリシーを指摘する。  
だがそれは原作で使われていた内容とは、微妙にニュアンスを変え  
た言葉だった。

(でも、ここは譲れないから、ね)

自分にとって都合のいい改変であるそれを自覚しつつ、それでも返  
答させる間をおかず、桐は自らの感情と組み上げた理屈の求めるま  
まに、続いて言葉を紡ぐ。

「それなら、僕を使ってください。あなたに知識をもらえれば、

僕は彼女の足を完璧に繋げることができる！」

「アンタ、何を、言ってるのよ…?」

呆然とした美琴の声が、処置室の前、無機質なリノリウムの廊下に響いた。

(この子にこんな形で明かすことになるとは思っていなかったけど、今は躊躇ってられる余裕はないしね…)

「君には前に言ったよね？僕は『普通』じゃないんだ。こんなふう」

構成を編み上げ、桐はストレッチャーに横たわるミサカにすつと手を伸ばす。

そして、ポツリとつぶやいた。

「我は癒す斜陽の傷痕」

そして音もなく、彼女の頬からつけられていた痣と擦過傷とが消える。

「え…そんな、治癒だなんて…アンタは風使いだったんじゃ…」

驚く美琴に、青年は準備していた嘘をつぶやいた。

「僕は『原石』なんだよ。知ってるかな、学園都市の開発によらない天然の『能力者』の事をそう呼ぶそうなんだけど」

(『音声魔術士』を学園都市のカテゴリで見れば、他に当てはまる言葉なんかないしね…この街の一般の人間にとっては、この世界の魔術師だって原石扱いされる気もするし)

「そ、そんなもの、ただの噂でしょ？」

「現実に関、君の目の前にいるのに？」

「だからって、千切れた神経を繋げるなんてこと、アンタに」

「コミクロンにはできたんだ。とにかく、説明は後ですよ。それで先生、僕はあなたの指示によって、人体を合理的に把握する事さえできれば、それを完全に癒す事ができます。僕を使ってください。この子の命を救いつつ、挫滅した脚部の組織を完璧につなげるのは、いくらあなたでも骨なハズです」

『魔術士オーフェン』の登場人物の名前が、ひどく自然に自らの口をついて出てきたことに内心で驚きながらも、桐はその言葉で美琴との会話を打ち切って医者を見据えた。  
ややあつて、

「…いいだろう、そうやって啖呵を切った以上、切っただけのことはしてもらおうよ？」

「もちろん」

そして開かれた処置室の扉に、ミサカのストレッチャーと共に桐とカエル医者は滑り込んだ。

「ちょっと、わたしは」

後ろから追いかけてきた声は、あっさりと閉じた扉に阻まれて消える。

そのまま桐は、すぐ隣の更衣スペースへと案内された。

本来はこちらから処置室にはいるものらしいその場所で、看護師の一人に渡された術衣をどこかぎこちなく身につけていく青年に、備え付けられたモニターから声が響く。

「今回は状況が特殊だから、最適な手段を使うよ？オペ中は人払いをするが、構わないね？」

それは、自身にとっても都合のいい申し出だった。間をおかずに、桐は答える。

「わかりました」

更衣スペースの中にもこちらの声を拾うマイクがセットしてあったのだろう。

表示された画面の中、ミサカが運び込まれた処置室で最低限の救命処置を行いながら、カエル顔の医師はうなずくと、話を続けた。

「今ウチの手術用シミュレーションシステムで、負傷箇所のCGデータを作成させているね？包括的に把握するには、十分な資料になるだろうね？」

「助かります」

「いやいや、礼には及ばないね？これから君はこの僕の代わりに彼女の脚を完璧に治すのだからね？把握すべきことは山ほどある。骨・皮膚・筋肉・筋・血管・神経。その全て、そのチカラで余すところ

なく癒してもらおうよ？」

丹念な手洗いを済ました桐は、術着の帽子をかぶり、樹脂製の手袋と共にマスクをつけた。

看護師から手渡された無菌パックに入っていた、シューティンググラスのようなゴーグルをかけると、かすかな起動音と共に視界に3Dの表示が現れ、手術室のシステムとのリンクが確立した事を知らせてくる。

（よし、いこうか）

準清潔ゾーンである更衣エリアから、完全な清潔ゾーンである処置室へとあらためて踏み出しながら、桐は先ほどかけられた言葉に、直接こたえた。

「もとより僕は、そのつもりで今、ここにいるんですよ」

やるべきこと、考えるべきことは山積みだった。

（『条件』を整えないと……。『絶対能力進化』（レベル6シフト）実験はきつと、あんな事じゃ止まらない）

恐らくそれは、これ以上の介入を行わなければ、まるで何もなかったかのようにあっさりと、そのプロセスを再開するだろう。少なくともあの現場に立ち会った青年は、そう感じていた。

次に介入するタイミングは、自身が先ほど指定した時間、明日の夜、

二十一時過ぎ。

それまでに、桐は全ての準備を整える必要があった。

（明日にしたのは失敗だったかな……。とても時間が有り余ってるなんて言えない、それでも）

刻一刻と迫る時間の中で、

（今はできることの全てで、目の前のミサカを助ける！）

心の一番深いところで青年はつぶやき、奇妙に明るい手術室の中、横たわるミサカへと歩み寄ったのだった。

……。  
……。

EXT

TON

人を癒すというのは、想像以上に重労働だった。

（といっても、『想像』できなきや構成も編めないんだけどさ）

病的なほど、清潔に保たれたその部屋。

無影灯と呼ばれる、どんな角度から手を差し入れても患部に影が出ないよう計算された、眩い照明が頭上に輝く、手術室で。

限界以上に引き絞った集中の下、桐は映し出される眼前の情報に必死で食らいついていた。

（骨・皮膚・筋肉・筋・血管・神経…）

思えば、カエル顔の医者あのセリフは、あれでもひどく簡略化された言葉だった。

（できれば血流から再開させたかったけど、僕の魔術で再生させる上では、位置を固定してからのほうがスムーズにいけそうだね。そのためには、まずは骨から）

あらためてその傷に向き合った直後、一度の術式行使ではとても全体をカバーしきれない事を当然のように思い知った青年は、段階的な再建に向けて、掛けている薄手のゴーグルのディスプレイに表示

された情報を咀嚼していく。

（骨、とヒトコトに言ったって、その構成物質はタイプI型コラーゲンに骨芽細胞と破骨細胞：生理的な事を言うなら副甲状腺ホルモンが存在だって無視できない。それらを全て織り込んだ上で、包括的に構成を編み上げなきゃいけない…！）

流れる汗を自らぬぐい、また目前の傷口に集中する。

（だけど履き違えるな…！必要なのは細密すぎる情報じゃない、あくまで具体的な効果 『結果』のイメージなんだ…）

『魔術士オーフェン』の世界では、決して『現実』よりも医学が発達していたわけではなかった。

にもかかわらず、医者でもなく、経験則による半端な身体の知識しか持たない音声魔術士はそのイメージによって容易く皮膚を再生させていたし、同じくその世界の魔術士であるコミクロンはその発想法によって神経を繋げることにすら可能とされていた。

（そう、大事なのは、合理的な理解とイメージ そして、出来るという確信）

なぜかひどく近く感じる『魔術士オーフェン』の世界』の知識を思い出しながら、桐は自らに言い聞かせる。

（矛盾なく、奇跡を扱うんだ。この魔術が存在し、オーフェンのいた『あの世界』にはなかった『現実』の医学知識を裏付けとして、今、この場所で、この望みを結実させる）

願いを内心でつぶやき、そのために意識を集中させる。



『世界』が、見えるようになる。

『音声魔術』で言うところの『魔力』 『世界を作り変える感覚』は、そういった感触を術者に与えていた。

実際は、どうだか分からない 単に術者の思い込みの産物なのかもしれない。

だが、コンセントレーションに入った術者は、そんなことを気にしないのが普通だった。  
実感することは、ひとつだけ。

瞬間、自分の魔術が世界を支配する。

仮初めの全能感に触れながらも、ひどく平静に、桐は構成を編み上げた。  
あるがままであったすべてを  自分の望むものへとまとめあげる。

そうして差し出した掌の先に奇跡を求めて、青年は言葉を紡いだ。

「我は癒す斜陽の傷痕」

媒介となる『音声』が『世界』に触れ、魔術が発動する。  
そして、そこには。

完璧に『復元』されて胴体と『繋がった』、ミサカの大腿骨があった。

気を緩める事を自分に許さず、ただ、先程から見慣れないシステム（としか言えない何か）でミサカの胴体の方に処置を加えているカエル顔の医者に目線だけで進捗を伝えて、桐は意識をまた彼女の脚へと戻す。

（次は、血管を繋げて、血流を回復させる。まずは『止血』を解かないと）

『手術』はまだ、始まったばかりだった。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

Phase .

最後の最後まで。

ひとかけらも気を抜く事なく、桐は細心の注意を払って構成を展開し、魔術を発動させた。

もう何度目になるかという呪文が、手術室に響く。

「我は癒す、斜陽の傷痕」

それだけで音もなく、ミサカの身体に開かれていた手術創があとたたもなく消えた。

カエル顔の医者 of 感心したような声が、少女に向かったままの青年にかけられる。

「たいしたものだね？こちらの技術も相応に進歩していると自負してはいるが、それにしたって一瞬でもとから存在しなかったかのよううに完璧に傷を消すとはね？ともかく、これで手術は終了だ」

「…いえ……」

言葉少なく青年はそのねぎらいに答える。

限界に近いレベルの精度による立て続けの術式行使は、当然、桐自身の精神にひどい消耗を強いていた。

深い倦怠感を抱えたまま、青年は目線を上げて医者に問いかける。

「それで、彼女は…？」

「誰に言っているのかと問いたいくらい、全く問題ないね？術後説明は一度にまとめたほうがいいだろうから、後にするよ？『彼女』も早く知りたいだろうしね？」

そうしてカエル顔の医者は、ミサカを病室へと搬送するためのスタッフを、備え付けのインターフォンを使って呼び出したのだった。

……。  
……。

「それじゃあ、あの子は大丈夫なの……!？」

「だからそう言っているよ？確かにここに運び込まれた時点では交通事故の負傷例を全て網羅したようなありさまで、文字通りの死に体だったけれどね？なんなら順にその負傷をあげていこうか？」

ミサカを医者的好意によってあてがわれた個室のベッドに寝かせた後、彼の仕事部屋に案内された桐と美琴は、ミサカの術後説明を受けていた。

その様子を見るともなしに視界に納めながら、桐はぼんやりと思考を浮かべる。

(とりあえずはこちらの迷惑通り、あのミサカは助けられたってことでいいかな……。あくまで僕の目的は、『これから先、彼女を含めたミサカをこれ以上ひとりも殺させない事』なんだけどね……)

順にミサカが負って『いた』負傷を説明していくカエル顔の医者 of 言葉を聴き流しながら、桐は思考を続ける。

(どのみち、その目的のためにはすぐに『実験』を潰すしかないか……。『原作』を待ってはられないし、そもそも事態を介入によって『揺らしてしまった』以上、ここから先は『原作』通りにことが運ぶのを期待するのは虫がよすぎるしね)

「次に肺だが、折れた肋骨が突き刺さっていたね？外傷性気胸も併発していたが」

（それでも僕はどうしたって『原作』での『絶対能力進化』（レベル6シフト）実験停止を参考に動いていくしかない。まずは、『原作』でなぜ実験が停止したかだけだ）

あてがわれた安物のパイプ椅子が、軽くきしむ。

桐はそれを気にする事なく、背もたれに身を預けた。

（『禁書原作3巻』で、直接的な理由として焦点を当てられている『無能力者』（レベル0）が『一方通行』（レベル5）を倒したという理由 恐らくこれは、きっかけではあったのだろうし、表向きの実験停止条件としては申し分なかったかもしれないけれど、恐らく十分条件ではなかったはずだ。だからあの時、いやもう昨日になるか。レベル3という事になっている僕がなんとか不意をついて、『一方通行』（アクセラレータ）を止めたけど、恐らくあれでは『実験』は止まらない）

あまり歓迎できない解を脳裏にうかべて、その理由を桐は続けて拳げる。

（なぜなら、『倒されたところで』それが『超能力者』（レベル5）であるという『価値』がなくなるわけじゃないからだ。今より先の『物語』で『無能力者』（レベル0）や別の誰かに『倒された』超能力者』（レベル5）は、莫大なカネと貴重な技術をもって『再利用』されている。『麦野に施された』負の遺産』』しかし『垣根の』能力を吐き出す塊化』』、しかりだ。どんな存在に『倒されても』それだけの手間をかける『価値』が『超能力者』（レベル5）

あの二人にはあった。それならば、学園都市最強にその価値がな

いとは思えない。だから、『たとえ倒されたところで』そのつもりが『学園都市の上層部』になれば、実験を継続させることくらいは簡単な事だったはずだ。しかし『原作』では間違いなく、実験は停止している。ではなぜ、実験は止まったのか？)

それは、状況を俯瞰すれば、おのずと浮かび上がってくることだった。

(おそらくそれは、『一方通行が倒される』ことに付随して実験の当事者たちに発生した、『条件』が直接の原因なんだろう。実験を阻害するそれを押し切つてまで、学園都市の上層部が実験を続けることにこだわらなかつたから、としか考えられない。なら僕は、それを模倣すればいい)

推論に推論を重ねて、結論を導き出す。

(僕が模倣する いや、達成するべき、『条件』 それは、『妹達』(シスターズ)ミサカたちと『一方通行』。それぞれから、『実験を継続させる意思を失くさせること』だ…。言うまでもなく、どちらも厳しい『説得』になるだろうし、そもそもこのやり方自体、絶対的な信頼性はない。それでも、これから僕にできることはそれくらいだし、ね…)

「以上が患者の負っていた傷の全容だね？もつとも、今ベッドの上で寝ている患者はあと三時間で、完全な健康体になるわけだがね？これで知りたい事にはなつていたかな？」

「そうね、ありがとう。そして同じくらい知りたいことがあるんだけど、そちらはアンタが説明してくれるのよね？」

考察をひと段落させた桐が顔をあげるともつ、カエル顔の医者  
の説明は終わった。

頷いた美琴が、先程から椅子に座ったままの青年を振り返る。  
その視線に気付いて、桐はゆっくりと顔をあげた。

「…説明、か。何が聞きたいのかな？」

「全部よ。わかっているでしょう？」

（まあ、そうなるよね…）

他人事のような思考を浮かべながら、彼は何をどこまでを話せば  
いいのかを組み立てる。

（嘘をつく気はないけれど、やっぱり全部話すわけにもいかないか。  
そのあたりのさじ加減が難しいけれど、ね）

おおまかな指針をたててから、青年は口を開いた。

「まずは、僕的能力についてでいいかな」

「そうね。聞かせてもらうわ。あなたは そう、『多重能力者』  
デュアルスキル）なの？」

その質問を受けて、桐は立ち上がった。

「『多重』というよりは『汎用』、というべきかな。学園都市にお  
いての能力 『自分だけの現実』（パーソナルリアリティ）は、ひ  
とつの事象を起こす事に特化しているけど、僕はそうじゃないんだ。  
僕の場合は、能力の礎となる『自分だけの現実』（パーソナルリア

リテイ)が『世界そのものへの干渉』に特化しているって言い方ができると思う」

だからいろいろできるんだけどね、と『音声』を全く引き合いに出す事なく、桐は自分のチカラをそう説明した。うなずいて、美琴が口を開く。

「なるほどね。にわかには信じられない話だけど、それを目の前にしちゃ否定できないか…。ところで、あなたのほかにもあなたと同じチカラを持っている人はいるのよね？その…ほら、救命室に入る前、コミクロンって言ってたじゃない？」

当然来ると思っていた指摘に、桐は曖昧な笑みを浮かべて答えた。

「コミクロン、か…。彼は今、この世界のどこにもいないよ。そして僕と同じチカラを持っている人間も、今現在、一人も存在していない。あくまで僕の知っている限りで、の話だけねど」

「え、それって…、あの、ごめんなさい」

美琴の表情が、さっと曇る。

「いや、いいんだ、気にしないで欲しい」

その優しさにひどく後ろめたいものを感じながら、桐は努めて気楽な口調で答えた。

「それでは僕からもいいかい？」

ずっと沈黙を守っていた医者が口を開く。



「ええ、もちろん」

「といつても、僕が興味を持つのは君の能力にじゃない。基本的にも応用的にも、僕が興味を持つのは患者の事だけだ」

いつもの疑問系が剥がれた、真剣な口調。  
それに話しやすさを感じて、桐は頷いた。

「患者の来歴に疑問を持つのは趣味ではないが、状況が状況のようだからね？あの患者は今そこにいる御坂くんの双子の妹、とかいう平和な状況で生まれた存在ではないね？彼女は間違いなくクローンだ。一体何が起こっているんだい？」

的確な、抱えている問題の中心を射抜く言葉。  
それに美琴の肩が、ビクリと震える。

(…すまない、と思うこと自体、おこがましい話だね。僕は自己満足の目的を達成するために、他人に彼女にとって『深い』ところにある話をさらけ出すんだから)

感じるのは、重い自虐と、後ろめたさ。  
それを表に現す事なく、桐は答えた。

「『絶対能力進化』(レベル6シフト)実験という言葉を、聞いたことはありませんか？」

……  
……

そうして、事件の背景を含めた概要を彼は語った。  
長いようで短い話が、終わる。

「なるほどね？『絶対能力進化』（レベル6シフト）実験か……。二  
万人の『妹達』（シスターズ）、そして学園都市最強の『一方通行』  
……」

得心した様子のカエル顔の医者に、青年は頷く。

「それで、君はどうするつもりなのかな？」

無遠慮に放たれたその質問に、桐は躊躇わずに答えた。  
そう、これだけは躊躇うわけにはいかなかった。

「実験を止めます。彼女達をこれ以上、ひとりも殺させないつもりです」

その返答に、美琴が息をのみ、医者が目を細めた。  
医者顔に浮かぶのは、視線の先の青年を憐れむような、慮るような、複雑な表情。

「前にも言ったと思ったが、君はやはりお人よしが過ぎるね？僕も似たような人間を他に知っているが、君はその彼より明らかに、弱い。それなのに呼吸するようにそんな在り方を選ばれると、僕としては少し君が心配になるよ？」

「……え？」

なぜそんな表情と言葉を向けられたのかわからずに、桐は戸惑う。だが青年の言葉を待たずに、医者は続けた。

「まあ、今それをいつても詮無いことかな。僕がこの件について言える事はひとつだけだね？」

そして医者は、彼の立場から、彼自身の言葉を吐く。

「彼女達に関しては任せろ。いいからとつとと、患者をここに連れて来い」

息つく事なく、彼は力強い言葉を続けて吐き出した。

「一万人超のクローン？殺されるために生み出された、救われない命？いいね、実にいい。嫌になるほど僕向きの話だよ」

学園都市の『冥土帰し』（ヘヴンキャンセラー）の言葉が、狭い部屋に響く。

「『絶対能力進化』（レベル6シフト）？』『一方通行』（アクセラレータ）？悪いが僕はそんな瑣末な事に興味は持てない。出来のよくない前座と変わらないね？僕にとっての本番はその『妹達』（シスターズ）の治療だ。退屈な前座にかける時間は短ければ短いほどいい。楽しい楽しい本番を早く僕に始めさせてくれ」

呆然として、桐は言葉を紡ぐ。

「それじゃ、残りのミサカたちは…」

「白々しいことを言わないでほしいね？どうせそのつもりで先の『彼女』もわざわざ僕の下まで連れて来たのだから。わかったら今日はもう休みたまえ、その日まで学園都市最強を相手取るつもりかい？」

言われて桐は、初めて自らが疲労しきっている事に気付いた。

(あ、あれ、やっぱり僕、疲れ…て)

それは例えるなら、何かの糸が切れてしまったような感覚だった。思考がまとまらない。

考えていた理屈や、渦巻いていた感情が、ぼろぼろと剥がれていくような感触を桐は味わう。

「そ、そうですね。じゃあ僕はもう…」

部屋に帰って寝ますね、と言おうとした瞬間に。

唐突に、壁が自分に迫ってくるのを感じる。

それが、壁ではなく、半瞬前まで自分が立っていた床である事にすら気付く事なく

そのまま青年は、その場に派手に倒れ伏したのだった。

E  
X  
T

⋮ ⋮  
◦ ◦

T  
O  
N

ひどい、ユメを見た。

僕がのうのうと学園都市で暮らしている間に、『一方通行』に潰され続けてきたミサカたちが、無表情にこちらを見つめている。

(身体が…うごかない…)

血流が止まり、全身に重い泥水が詰められたような感覚。何処とも知れない場所で、全方位から無感情な瞳に囲まれている僕はただ、自らの視線だけをいたずらにさまよわせていた。

(僕が…憎いのか…?)

ひとりの『ミサカ』が、僕の前に立つ。

彼女には、左腕がなかった。

残った華奢な右腕が、僕に向かって伸ばされる。

ゆっくりと差し込まれたそれは容易く、僕の喉元に到達した。

(…う、ああ……)

抵抗は、できない。

なぜだか、対処するための構成を編む気さえ起きなかった。

僕はうごけないまま、自身の頸動脈に、細い指がめり込んでいく感触を受け入れる。

感じるのは、緩い諦観と…、奇妙な、安堵。

しかしそこに、苦しみはなかった。

唐突に、思う。

(なんで…苦しくないんだ…?)

そう、もがくように自問して

ただ、苦笑する。

(当然だ)

これは、僕のみているユメなのだから。

(悪夢は精神的な自衛衝動の表れ、だっけ? いや、この展開に安心してるってことは、僕は、壊れたがっているのかな...? そんなことしなくなつてある意味、とっくに壊れているっていうのに)

それでも、それを意識してしまえば、身体はすぐに動いた。

自分で自分を強く認識することから始まる、初歩的な精神制御。方法論と共に脳裏に浮かんできたそれを自らに容易く行使して、僕はミサカの手に分の手を重ねた。

正面から彼女の瞳を見据えながら、一本一本、ゆつくりとその指を外していく。

「...ごめん。僕は『君』を...いや、『君たち』を、救えなかった。

この世界で目覚めた瞬間にそれに気付いていれば、もしかしたら何人かは救えていたのに」

のぞきこんだミサカの瞳は、全く揺れていなかった。

何の感情も浮かんでいない、ひたすら無機質な瞳。

(それでも彼女達を悪夢として出すなんて、わかりやすくてとことん最低だね、僕は)

構わずに、僕は言葉を続ける。

「恨んでくれて、いいよ。だって僕は、いまごろ『気付いて』手を出すんだから」



とある十二カヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

51

P h a s e .

なにかをさいごにつぶやいた、きがした。

「う、ううん…?」

掌をはじめとする全身には、どこかよそよそしい、布の手触り。ひたいに当てられたひんやりとした感触に桐は身じろぎし、しばし時間をとってからようやく、うつすらと目を開ける。

「お目覚めですか、とミサカはあなたに問いかけます」

視界に映ったのは、無機質な天井を背景にした、少女の肩まであるセミロングの茶色い髪と、整った顔立ちだった。

(ミサカ、か。ユメの続き…ってわけじゃなさそうだね…)

彼女の手のひらが自身のひたいからすつと離れ、続けてゆっくりと

覚醒していく意識の下、桐はそう判断する。

(ここは…病室…？そうか、僕は術後の話し合い中にぶっ倒れて…)  
状況を思い出しながら、意識して掌を持ち上げて自分の胸に当ててみる

寝起きという事を差し引いても、身体は随分と素直に動いてくれた。

(とりあえず回復はしてる…うん、この分なら支障はなさそうだね)

そこまで確認してから、いつもの半袖のブラウスにサマーセーターではなく、入院している人間に渡される病院着に身を包んだ彼女に、青年は口を開いた。

「そうだね、起きたよ…。って、いや、そんな事より、君はもう動いて大丈夫なのかな？」

「ミサカはすでにほぼ健康体ですが、とミサカは若干のあきれをにじませながら答えます」

内容の割には、全く抑揚を感じさせない平坦な口調。  
それが気になって、桐は声を荒げた。

「だからって病み上がりには変わりないだろう？手術の後なんだからちゃんと寝てなきゃダメだよ」

(そりゃ、傷は完治『させた』けど、あんな無茶な『再生』のあとで違和感が残らないわけがない。今だってそうやって椅子に座ってるだけでも辛いはずなのに…！)

「現在、身体の機能に問題はありませんが、それよりもミサカはあなたに尋ねたいことがあります、とミサカは単刀直入にきりだします」

「いや、そんなことより」

なおも言い募ろうとする青年に、ミサカもまた、はっきりとした奇立ちを感じていた。

少女の胸の中で、何かがじくりと傷む。

その痛み of 正体が分からないまま、ミサカは口を開く。

「なぜ、ミサカを助けたのですか？」

青年の言葉を遮って投げかけた疑問は、彼女が意図したよりも強く、無機質な病室に響いた。

桐の視線が、あらためてミサカに向けられる。

「なぜあなたは、あんな無茶をしたのですか、とミサカは続けて問いかけます」

昨夜からついさっき、青年より先に目覚めるまで。

その間、自分の身に何が起きたのかを、彼女は最初から最後まではつきりと理解していた。

そう、自分がどのような状態になり、何を持ってその存在を終わらされかけ、そして、誰にどうやって助けられたのか。

だからこそ、彼女は青年に言わなければならなかった。

「あなたの行動は、全く意味のない危険を冒したに過ぎません、とミサカは断定します。一歩間違えば、いえ、あなたが非凡な能力者

であることを差し引いても、あの状況で生き残れたのは万に一つの奇跡です、間違っても次はありません、とミサカは吐き捨てます」

言葉とは裏腹の、淡々とした口調で。

自分を助けたのは無意味だったと、少女は告げる。

今この場、この瞬間にあっても自分の命に価値を見出せないミサカは、彼女にとって正しい論理を、生まれて初めて、自身の感情のままに青年にぶつけていた。

「ミサカは」

なぜか言いよどみ、あらためて言葉を紡ぐ。

「ミサカは、ただの模造品です。単価にして18万円、いくらでも替えの利く工業製品にすぎません。そんなもののために、替えの利かないあなたはなぜあんな無茶をしたんですか、とミサカは再度詰問します」

そんな、彼女の言葉を。

桐は、味わいなれた感情と共に、しっかりと受け止める。

そうやって広がる自虐に連動して、急速に冷えていく思考の下、青年は言葉を準備した。

(これから僕がすることは、何度謝ってもきつと足りない…)

そして、ひどく苦いそれを味わいながら、桐はあっけらかんと、笑みさえ浮かべて彼女に答えた。

口から滑り出るのは、いつかも使った、本音で編まれた、ただの詭弁。

「…僕がそうしたいと思つて、そうしようと思つたからだよ？」

無表情だったミサカの頬に、傍目からもわかるほどに朱みがさす。感じるのは、自分の言葉をまるで受け入れてもらえない事に対する苛立ちと、青年の前にいると溢れてくる、なんだかわけの分からない熱さ。

それは彼女にとって、何もかも、初めてのことだった。

「だから！」

「僕はもう昨日、君にはつきりと言つたよね？ 『君を、救つ』つて」

とうとう言葉を荒らげたミサカに、桐はそつと言葉を差しこむ。

はつと目を見開いたミサカをまっすぐに見つめながら、青年は言葉を続けた。

「君がどんな存在でどんな価値があるかとか、今どんな事思っているかなんてことは、残念ながら僕にはどうでもいいんだ。だってこれは単に僕が、君に生きていて欲しいって本気で思っている、ただ、それだけの話なんだから」

視線が、交錯する。

片方は、そらさず。

そしてもう片方は、そらせないまま。

「僕は、あんな『実験』で君や君の姉妹が殺されるのが嫌なんだ。昨日も言つたけど、僕はそれを絶対に認めない。君らはこれ以上、一人だつて死なせない！」

青年の手のひらが、少女にむかつて伸ばされる。

内心、少しだけ迷ってから、桐は軽く握った拳の甲をこつん、とミサカのひたいに触れさせた。

「もう一度言うね。僕は、君に生きていて欲しい。本当に今さらの話になっちゃってるけど、僕は僕の意味で、君の命に価値をつけてるんだ。これは当事者の君にだって曲げられないし、もちろん僕を含めた誰にも曲げさせない」

つぶやく言葉はやはり、うすっぺらな正義感にしか聞こえない、ただの本音だった。

それでも、青年は

（構わない）

そう、結論して、その身をベッドの外へと押し出した。

続けて、いつのまにかこちらに乗り出すようにしていたミサカの背を軽く押して、自分がそれまでいた場所に押し込む。

「あ  
」

「じゃ、病み上がりさんはちゃんと寝ててね？」

「ま、待つてくださいとミサカは  
」

背中側から上がる声にひらひらとおざなりに手をふることでだけ応えて、桐は病室の外へと出た。

個室と違い、エアコンが効きすぎている廊下につすい病院着をつまんで、ひとりこちる。

(うん、やることをやるために一個一個片付けていかないのかな。とりあえず、この格好で決戦に臨むのは避けておきたいところだね、それに)

薄くて無機質な生地から指をはずし、すこし汗のにおいが気になる髪をくしゃり、と握りつぶす。

(シャワーも浴びておきたいな。もう午後も遅そうだし、ここから部屋まで戻る時間があるといいけど…、いや、ここの風呂、使わせてもらえないかな？でも、それ以前に)

「さて、と」

そこまで現状を確認してようやく、部屋を出たところからずっと自分に刺さっている視線の主に桐は目を向けた。

「気持ちはわかるけどこんなザマだからさ。すぐにお話って感じじゃないから、少し時間をもらえないかな？」

茶色の髪。

半袖の白いブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカート。

そんな、すでに見慣れてしまった常盤台中学の夏服をまとう少女、御坂美琴に。

桐はとても自然に、笑いかけたのだった。

E  
X  
T

⋮ ⋮  
◦ ◦

T  
O  
N



熱い湯が、フックに引っ掛けたシャワーヘッドから流れ落ちてくる。

その水流に覆われる髪に指を通しながら桐は顔をあげると、その流れを無造作に頬へと当てた。

(これから)

『原作』の流れを脳裏に浮かべて、同時に『今、ここから』の流れを構築していく。

(『一方通行』(アクセラレータ)との戦闘前に御坂さんと会話か。ある意味で原作をなぞろうとしている僕には好都合だけど、ことう上手い流れになると逆にいろいろ疑いたくなってくるね……)

病院内の、簡素なシャワールーム。

バスタブなぞ到底望めないスペースに立って、青年は思考をまとめていた。

(疑ったところで、何ができるわけでもないんだけどさ……)

考えが優先度の低い方に流れていくのを押しとどめて、安物のせっけんを手取る。

(それに、どうあろうと『目的』は変わらない。僕の目的はあくまで『これから先、彼女を含めたミサカをこれ以上ひとりも殺させない事』だ。そのためには『絶対能力進化』(レベル6シフト)実験を止める必要がある。そして、実験を止めるのに必要なのは)

泡を洗い流し、唐突に青年はお湯のバルブを反対方向へと捻った。シャワーヘッドから流れ出した冷水の冷たさが、すぐに桐の全身をおおっていく。

(『原作』で『一方通行が倒される』ことに付随して実験の当事者たちに発生した、『条件』の再現 カエル顔の医者、『冥土返し』(ヘヴンズキャンセラー)に実験の実態を把握させた上で、『一方通行』(アクセラレータ)と、『妹達』(シスターズ)双方に実験を継続させる意思を失くさせる事。前提はすでに済ませた。後は双方の『説得』だけだ。どちらにも手をつけてはみたけれど)

きゅっ、とコックを捻り、桐はシャワーを止める。

皮膚を伝った水滴が、肩からわき腹にかけて、冷たい線を描いた。その感触に心が研ぎ澄まされるような感覚を味わいながら、ぼつりと青年は言葉を吐く。

「どつちもホント面倒な『説得』になりそうだね」

狭いスペースに吐き出された言葉は、真実誰の心にも届く事なく、ただ青年の鼓膜を震わせたのだった。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

着替えを済ませ、安物のタオルを頭にぞんざいにかぶったまま、院内の西階段を登りきった桐は、そのまま屋上へと足を踏み入れた。時刻はすでに夕刻。

日差しはすでに、どこか褪せたオレンジへとその色を変え、周囲を囲む手すりが格子状の長い影をのばしている。

昼間、干されていたシートもとつくに取り込まれたのだろう。見通しのいいそこは、どこか寒々しく青年の眼に映った。

「……来たわね」

そんな、どこかさいはてのような、やけに広く感じる屋上の端に、彼女は立っていた。

背にした手すりに背中を預けるでもなく、きつい視線だけを剣呑に青年へと投げかけてくる。

（なんていうか、あからさまにやる気満々って感じだね。まあ、『原作』で上条を止めようとした時と、似ているといえれば似ている気もするけど）

視線を受けた桐は、

「お待たせ。洗濯と乾燥までやっておいてくれてありがとう、かな

「？」

自らの服を示しながら、あえて関係のない話題をふって見せた。美琴の眉が、そうとわかるほどにしかめられる。

「…知らないわよ。あの医者がやったことじゃないの？」

「…そっか、納得。やけにごわごわしてると思ったんだ。病院って柔軟剤使わないのかな？」

「っだから！！」

のんきな言葉を続けた桐に、少女が激昂する。

「そんな話をするためにここに呼んだんじゃないってわかってるでしょ！？アンタは」

そこで言葉を切り、美琴は今度こそ本題を吐き出した。

「アンタは、昨日なにをするって言ったの？そしてこれから、なにをするつもりなの！？」

それは、青年にとっては予想通りの言葉。

感情の表し方も、言い方も全く彼女の『妹』とは違うそのセリフに、それでも桐は両者の共通点を垣間見て頬を緩める。

(二人とも結局、誰かを『自分の事情に巻き込む』ことにものすごい拒否感を抱いているんだよね…。自分の勝手にくちばし突っ込もうとしてる僕なんかには、そんな事考えなくていいのに)

「なに笑ってんのよ……。アンタは昨日、『実験』を止めるって言い切ったのよ？あの『一方通行』（アクセラレータ）、学園都市第一位に対峙してその実験を止めるって！」

「確かにそう言ったね。それこそ、つい昨日の事なんだし。なんだ、覚えてくれているのなら今さら大声で僕に訊かなくても知ってるんじゃない」

「それがどういうことが判ってるのかって訊いてんのよ！」

感情に呼応して、御坂から紫電が溢れる。

無意識にビリビリをまとう少女に、青年は態度をかえる事なく、あっさりと返した。

「リスクって意味なら、かなり深いところで覚悟してるつもりだよ？」

「なっ…！？」

返された言葉に戸惑う美琴に、桐は言葉を重ねていく。

「だってそうだろう？とりあえずで何とかなるほど学園都市第一位は軽くないよ。当然、出来る備えは出来る範囲で全部するし、出来ることはなんであるつと全て使つてコトに当たろうと思ってるよ？」

すらすらと流れる言葉。

それを顔をしかめて聞いていた少女は、ゆっくりとくちびるを震わせる。

「なるほど、ね…。アンタの中じゃあくまで手を出すのが前提にな

ってんのね……。そんなんじや、どれだけ言ってもわかんないか……」

（やっぱり、か。まあ、こんな流れになるよね）

彼女の周りに走っていた紫電の数が急に増すのを視界に納めて、桐は構成を編み上げる。

「なら」

帯電する空気が剣呑さを増していき、

「もう黙らせるしかないわよね！」

「我が指先に琥珀の盾！」

電気の槍が、走る。

それに割り込ませるように、桐も術式を発動させた。急速に圧縮された大気が迫る雷槍を阻み、行き場を失った電気は伝導率の高い虚空へとほどけて消える。

次の構成を脳裏に編み上げながら、桐は軽口を叩く。

「危ないね、すぐに力任せに走るより、もうちょっとコミュニケーションを大事にしたほうがいいと思うよ？」

「アンタがいちいち話をはぐらかそうとするからでしょ!？」

続けて放たれる紫電。

青年はそれを、とにかくその場を移動することでかわした。

首にかけていたフェイスタオルが宙を舞う一瞬。

ほんの半瞬前まで桐が立っていた場所を、電気の刃がなぎはらう。

(でも、少し遅い…?こちらに撃つのを多少は躊躇ってくれているってことなのかな?)

体勢を立て直しながら右腕を中心とした構成を展開すると、桐は別の魔術を発動させた。

「我は撫でる、獅子の鬣!」

放つのは、速度重視の空圧の波。

念のため鋭利さを限界まで削ったそれは狙い通り、次撃を準備しようとしていた美琴をきわどく掠める。

それ自体が本来絶縁体である空気の圧は、彼女の周りの電気を乱して吹き抜けるとそのまま中空に解けた。

「っ、電磁波の収束が?!」

そうして出来た空隙に、桐は言葉を滑り込ませる。

「 実力で来てもらっても、僕らが無駄に消耗するだけで、僕がやることは変わらないよ?」

「……っ!」

反射的にうつむいた少女に、桐は続けた。

「さつき下で君の妹にも似たような事を言ってきたけど、君が何を言っても、何をやっても、僕のこれからの大まかな行動が変わることはないんだ。まあ、それでも成功率や生存率が下がっちゃうから、割と本気で今、君の相手はしたくないんだけどね」

ともすれば気楽にもきこえる口調で、桐はあっさりと本音を並べる。

「……なんでよ」

それに返ってきたのは、ふるえるようなこえだった。

「なんで！あなたはそんな当たり前みたいに手を出そうとするのよ！？」

叫びと共に、美琴は視線をあげる。

視界には、憎らしくなるほどの自然体でたたずむ、最近知り合ったばかりの青年。

「アレはこの学園都市第一位、『一方通行』（アクセラレータ）なのよ？！成功率？生存率？そんな数字はそもそも成り立たない。死ぬかもしれない、じゃないわ、アレに相対すれば確実に死ぬのよ！」

「でも、今相対しないとまたひとりずつ、彼女達が終わっていくんだ。そうさせないためには」

「だからなんでよ？なんでアンタは全部を知ってるの？なんで知ってるのに手を出そうなんて思うの？一体なんで」

「なんで、助けに来てくれようなんてするのよ！！？」



その言葉は、別の意味でひどく深く桐の胸をえぐった。先ほど、ミサカから尋ねられた質問と、全く同じ疑問。当然のように浮かんできた感情に、青年は顔を歪める。

（そりゃ、君らにとってはなんで、だよ。それでも）

「なんで、なんで、なんで、か……」

もはやその味に慣れはじめた罪悪感を噛みしめて、足を止めた桐はすっと、先ほど床へと落ちたタオルに手を伸ばす。

もちろんさつきと同じ本音で、煙に巻くことは出来た。

それに、あれだって決して嘘ではないと、桐は心底から思う。

だが、口について出たのは、まったく別の言葉だった。

「君だって混乱してるのに、わかんないことばかりにさせてごめん」

うつむいた青年の表情は、美琴には見えない。

「あ、謝ってほしいわけじゃ……」

「それでもなんだ、ごめん、本当にごめん」

（放っておけば完璧に解決する事に、僕は要らない手を突っ込んで  
いるだけなんだ……）

「いろんなことを伝えたいけど、そのための覚悟も時間も僕には足りてないみたいだから。だから今はただ、許してもらえとは思わないけど、謝らせてほしい」

「な、何を」

そして皆まで言わずに、桐は手首をすばやく捻った。  
つまみ上げられるように空に浮かんだタオルが

「 我は流す天使の息吹」

つばやきと共に発生した風にあおられて、美琴の顔に覆いかぶさる。

「っ!？」

次の瞬間。

視界が塞がったことに美琴が危険を感じる前に

「我導くは死呼ぶ掠鳥」

ささやくような声と、のどもとに触れた指先の感触を最後に、痛みを感じる間もなく少女の意識はブラックアウトした。  
そうやって極小威力に絞った超音波で美琴の意識を奪った桐は、あ  
っけなく崩れ落ちていこうとする少女の身体をそっと抱きとめる。

「結局、最後はこんなやり方しか思いつかないって……。ほんと、  
僕は上手くないね。これも含めて、後で謝らないと。それでもやっ  
ぱりこれ以上、ここで消耗するわけにはいかなかったし」

レベル5との対峙の結果として、背中ににじむ汗と軽い消耗を意識  
しながら、青年は抱きとめた少女の身体をあらためて抱えなおすと、  
屋上の出口へと歩き出した。

「真似しなきゃいけないんだけど、やっぱり主人公の真似って簡単にできないものなんだろうな……」

しまっていた重めのドアを苦勞して開けると、桐は独り言の続きをつぶやいた。

ポケットの携帯を意識しながら、これからの行動を内心でひとつひとつ、確かめていく。

「それでも、何とかしないと。出来ることにすべきこと。自分が吐いた言葉を守るために、打てる手は全部打って、使えるものは全て使おう」

……。  
……。

E X T

T O N

青年が現れ、再び去った、病院の一室で。

先ほどからずっと、ミサカはくりかえし自問を続けていた。

(ミサカのいのちの、価値…?)

視線は、ベッドの上に横たわるものになんとなく向けたまま。

(それはすでに確定しています、とミサカは再度心中で繰り返します。ミサカはただの模造品でしかなく、単価にして18万円、いくらでも替えの利く工業製品にすぎません、とミサカは自明の事実を思い浮かべます)

それなのに。

(君を、救うよ)

(僕はそれを絶対に認めない。君らはこれ以上、一人だって死なせない。宣言するよ、これは僕の『意思』だ)

彼は、そんな自分と自分の姉妹たちを救うと言い切った。

決定的な場面に現れ、躊躇いや葛藤を微塵もこちらに見せる事なく、学園都市最強を向こうに回して。

そして事実、昨日、ミサカは『助けられてしまった』。

(不合理の極みです、とミサカは慥然とします)

生まれて初めて感情を持て余す少女は、先ほどから視線を向けていた存在 青年がこの部屋に運び込み、ミサカの隣に寝かしつけた彼女自身のオリジナルの頬をつんつん、とつつく。

「う…ん…んん」

むずがるような声が、無機質な室内に響く。

すでに日は沈みきり、窓の外には夜の帳が下りていた。

あの青年がこの少女を伴ってこの病室を訪れ、そして去ってからもう、数時間が過ぎていた。

それにもかかわらず目を覚まさないのは、ここ最近の彼女がろくに眠れていなかったという事だろうか。

そのすべらかな頬をぶにぶにと手慰みにつつきながら、ミサカはネットワークを意識する。

(……………)

(……………)

(……………)

返ってきたのは、とりとめのない、思考と意見の羅列だった。

あえて総括するならば、『戸惑い』という言葉が妥当だろうか。

自身以外のミサカにも明確な答が存在しない事を確認して、ミサカは無感情な瞳をぼんやりと頭上の照明へと向ける。

いつの間にか自動的に点灯されていたそれは、白っぽい無機質な光をふたりに投げかけていた。

そしてまた、しばし時が流れた後。  
唐突に、彼女が覚醒する。

「なによ……くろ、こ……？ つ！いえ、ここは！？」

身じろぎし、がばつと身を起こす、美琴。

応じて、表情を揺らす事なく、ミサカは口を開いた。

「ここは病室です、とミサカはお姉様に答えます」

「アンタ……！そんなことよりあいつは！？」

問われて、ミサカは視線を時計へと向ける。

時間は午後の8時を少し越えたところだった。

「2時間ほど前、こちらを出て行かれました。とミサカは淡々と事実を伝えます」

その言葉に、美琴は顔色を変えた。

「も、もうこんな時間！まさか、そのまま行かせたっていうの！？」

「引き止めはしましたが、ミサカに彼の行動を制限する権利はありません、とミサカはいらだたしげに吐き捨てます」

その語尾が少しだけ揺れたように思えたのは、美琴の気のせいだったのだろうか。

「そんな！」

それでも、あくまで平静なその答を聞いて、美琴の思考は熱くなりかける、が。

「…いえ、そうね。でも、あんたはそれでいいの？」

その思考を切り替えて、てきぱきと美琴は動き出すための準備を始めた。

寝かされていたベッドからはいだすと、足元に揃えて置かれているローファーに足を突っ込み、とんとん、とそれをぞんざいに履いた。多少、しわになってしまっている制服に、少しだけ顔をしかめる。

「いいはずが」

「なら一緒に来なさい。アイツを止めるわよ」

最小限の支度の後、病室の扉を、乱暴に開く。

『妹』の手をとって、美琴は部屋を飛び出した。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

53

Phrase .

限られた時間の中、持てる全てを使って、できるだけ用の意はした。それでも、足りているという自信は何処からも湧いてこない。

(『目的』が『目的』、だしな……。そもそもそんな自信、どんな準備すればわいてくるんだよって話だけどさ)

そんな事を思いながら、桐はアクセルから放していた足を、ブレーキペダルへと移動させ、ジワリと踏み込む。情性で進んでいたセダンが、ゆっくりと減速する感触。

(ついでにクルマ、返しておこうって思ったけど誰もいない、か) 危なげなく路肩に自動車を寄せて停車すると、桐はエンジンを切った。

誰もいない路地裏に、かちゃ、とドアを開ける音がやけに大きく響く。

アスファルトを真新しいブーツの靴底で踏みしめると、青年は助手席に投げ出しておいたかばんを取り上げた。

片手で抱えられるほどの重さの、ボディバッグ。

この中身とこれまでの行動、そして今身につけているものが、桐がこれからの時間のために用意した、『準備』の全てだった。

荷物を取り出すと車のキーを中に投げ込み、ドアを閉める。

続けて、アウトドアタイプのボディバッグを長袖のジャケットの上から背中側に固定してから、桐は待ち合わせ場所へと歩きだした。



「ああ、そうだ」

そこでふと思い当り、黒いカーゴパンツのポケットから携帯を取り出してフリップを開く。

電話の着信と、メールの着信があわせて5件。

『風紀委員』（ジャッジメント）のふたりとノーネからだった。

目当ての相手からの連絡がないことに少しだけ落胆しながら、視線を移して今の時間を確認する。

時刻は、午後9時を少し回っていた。

（厳密に昨日と同じ時間ということなら、待ち合わせの時間は9時10分過ぎつてところかな。メールの返事を悠長にうつてる時間はなさそうだね）

内心で彼女達に謝罪しながら、返信はせずに携帯をポケットに落とし込む。

数分間、暗闇を歩き、路地裏を抜けたところには、

「ずいぶん遅かったなア？あやうく待ちくたびれちまうところだったぜ」

拓けた視界に広がる、操車場のほぼ中心に。

『一方通行』（アクセラレータ）が立っていた。

鮮血のような紅い瞳が、この場に素直に現れた青年をねめつける。

( つ！この感覚は… )

向けられた視線『だけ』で全身が粟立つのを感じながら、桐は努めて、平静に聞こえる声で応えた。

「待たせちゃったかな。悪いね」

返された答えに、嫌味の類は混ざっていなかった、だが、裂けるような笑みが、白い少年に浮かんでいく。

「ああ、ホント待ち焦がれたぜエ。ようやくこれで、感じた事ねエ鬱憤を晴らせるんだからよオ……！」

ざん！と黒い服に包まれた足が、地面を叩く。たった、それだけで。

昨夜に倍する勢いで、散弾銃のような飛礫が桐へと襲い掛かった。

( いきなり！？ )

やはり、と思うよりも先に、桐は準備していた構成を強引に展開。

「我が指先に琥珀の盾！」

『音声』と共に、魔力が構成によどみなく染みこみ、術式が発動する。

差し出した桐の指先に、空気が殺到し、圧縮を繰り返して魔術によって作られた空気の壁が、術者を攻撃から護るために出現した。

だが  
指先に、

(っ…！)

続いて頬に。

擦るような熱が生まれる。

それはすぐに、紅い雫と鋭い痛みをそれぞれから滲ませてきた。

(こちらの防御をあっさり抜かれた！『琥珀の盾』じゃ、防ぎきれない！？)

それでも構成の維持は捨てないまま、桐は両腕で急所を守りながら、安全圏を求めて倒れこむように地面へと転がる。

「オイオイどうしたア？まだまだいくぜエ！？」

それを追って執拗に繰り返される、2撃目、3撃目。

(まずい、これは『受け』るだけじゃしのぎようがない！)

転がりながら構成を編み上げる。

視線を前へと向けながら防御の構成の維持を捨てると、今度は左手を差し出しながら桐は叫んだ。

「我は呼ぶ破裂の姉妹！！」

使い慣れた、範囲攻撃術式。

あえて効果範囲を凝縮した状態で発動されたそれは、すさまじい空気の破裂音を伴って、術者の目前で荒れ狂う。

衝撃波によつて盛大にかき混ぜられた空間は、叩きつけられた飛礫を四方に打ち散らし、その流れをせき止めた。

（なんてデタラメな。初手から終わるところだった……）

内心でうめきながら体勢を立て直し、油断なく半身になって一方通行に向きなおる。

「そうそう、ソイツが見たかつたんだ。5……いや、7かア。複数の発現点からランダムに衝撃波を撒き散らす……。昨日のアレは発現点をこちらの表面ぎりぎり『反射』が利いてる範囲に設定して撃つたってことかア。随分と器用な真似すんだなア？」

「パツと見でそこまで見切るほうが器用なんじゃないかな？」

（想定以上に適応力が高い……。どう手を打つにしても、厳しくなりそうだね）

あえて気楽な口調を続けながら、桐は足元を確かめた。

「ああ、こつちの『能力』はあらゆる『向き』（ベクトル）の操作だ。操作できるモンを見えねエって話はねエだろ、なア？」

そんな青年に向かって、楽しそうに、言葉が続く。

「言ったよなア？感じた事ねエ鬱憤を晴らすってよオ。昨日の続きだ、面白エ真似して見せるよ三下！」

『一方通行』（アクセラレータ）の足が、勢いよく上がる。同時に桐は構成を展開、叫びながらバックステップの要領で跳んでいた。

「我は跳ぶ天の銀嶺！」

重力中和。

重さを失った桐の身体は大地を蹴った勢いのまま、飛びあがるように中空へと退避し、そのまま背後にあったコンテナの上に着地する。今は自身の足場となったコンテナに突き刺さる飛礫の音とその振動を感じながら、桐は『一方通行』（アクセラレータ）を見下ろして口を開いた。

「続き…？それはそれでいいけど、何かはきちがえてないかな？僕はここに、君と戦いに来たわけじゃないんだ」

「あア？」

訝しげに問い返される、白い少年の声。

剣呑なそれにも、青年の表情は変わることはなかった。

（出来る手は全て打った、今は出来ることを全部やる時間だ）

その青年 桐の手が、真新しいカーゴパンツと着込んだ黒いシャツを軽く払って、続けて羽織っているジャケットの襟を軽く直す。

（ただ、『目的』のために。そう）

内心の緊迫を悟らせないまま、笑みさえ浮かべて黒ずくめの衣装を身につけた桐は答を返した。

「そう、僕は戦いに来たんじゃない。僕は君を、『説得』しにきたんだよ」

……。  
……。

EXT

TON  
N

彼が312号室の患者の不在を知ったのは、消灯に伴う巡回の途中、時間にして午後9時を少し回ったところだった。

泡を食って報告に駆け込んできた、まだ経験の浅い看護師をなだめ、騒ぎにならないように言い含めてからもとの職務に復帰させる。

ナースコールに付随してセットされていた、患者の在、不在を確かめるためのセンサーは、ご丁寧にも電子的な欺瞞を掛けられて沈黙していたらしい。

(……やれやれ、さすが『発電系能力者』(エレクトロマスター)といったところかな?)

そうして彼以外誰もいない執務室で別件の作業を進めながら、カエル顔の医者は考えをめぐらせていた。

仕事のほうにある程度キリがついたところで立ち上がり、インスタントのコーヒーをカップに注ぎなおしてからふと、彼は窓の外へと視線を向ける。

いくらかの灯りを残した病院の外観。

見慣れたその風景を視界に納めながら、カエル顔の医者は問いかけるかのようなひとりごとをつぶやいた。

「しかし状況は彼の言った通りになってしまったね?彼自身、望んではないなかったようだが、そこまでは見えていたということかな?」

「ああ、そういえば御坂さんですが、彼女と同じ部屋に寝かせて

おきました。それでさつきからお願いばかりで申し訳ないんですが、もし、彼女達が自分の意思でここを抜け出そうとした場合、そのまま見逃してあげて欲しいんです」

今日、夕方の終わりにこの部屋に訪れた青年の言葉を、彼は思い返していく。

「いや、来て欲しいってわけじゃないですよ。でも、そうやって彼女たちが自分から動く可能性を潰したくない、というか」

「彼女達が自身の意思で動くなら、きつとそれは彼女達自身の状況を打開するきっかけになってくれるだろうって、思いますし、ね」

ひどく、申し訳そうな表情でそう結んだ桐の表情を思い浮かべながら、カエル顔の医者は

「彼は、やはり『彼』とは違うね。明らかに弱すぎる」

ぼつりと一言で、須臣 桐と名乗る青年を評していた。

（自身を定義する、『在り方』のレベルで他人のトラブルに関わろうとする性格はどちらも大差はない。そもそも、あの二人は知ってしまった厄介ごとにこれ以上関わらないようにする、という選択肢を初めから何処かに置き忘れてきているようだからね？）

もう一人の、よく似た少年を思い浮かべながら、医者は黙考を続ける。



(だが、思うままに行動する事がそのまま関わった者と本人にとっての正しさとなる『彼』と違って、彼のほうはどうも、相手のために行動しているというのに、いちいち自身の行動に後ろめたさのよ  
うなものを抱いているフシがあるね?)

よくない兆候だ、とカエル顔の医者は内心で嘆きながら再びパソコンの前に座る。

(『自らの正しさを羞じる青年』、か。言葉にすればずいぶんと叙情的な存在ではあるが、それにしてもたやすく折れてしまいそうなその脆さはどうもいただけくないね?)

これから来る患者『達』のために空き時間を確保するため、膨大な量の事務仕事をこなしながらカエル顔の医者はつぶやく。

「君には確実に、『妹達』(シスターズ)を僕の前に連れて来てもらわなければならないのだからね? 折れるなよ、須臣 桐」

とあるナニカの音声魔術士  
ヴォイス・ソーサラー

Phrase .

「そう、戦いに来たんじゃない。僕は君を、『説得』しにきたんだよ」

黒を基調とした衣装をまとった、黒髪黒瞳の青年の言葉が操車場に響く。

そうして告げられた声に、色素の抜けた自らの髪を揺らして白い少年『一方通行』（アクセラレータ）は怪訝な表情を浮かべた。

「説得、だア？」

「そう、説得だよ。『いいこと教えてあげるから、こんな実験やめてくれないかな』って言いに来たんだ」

コンテナの上に立つ桐は、あくまで緩やかな口調で提案する。そこにある、敵意を含まない、余裕のようなものに。

「あア？こつちがはいそオですかアツて言つとでも思ったのかよオ？！」

『一方通行』（アクセラレータ）はひどく苛立っていた。どうということもなく振り下ろされた右足に連動して、今度は鋼鉄製のレールが軋み音をあげながら無理矢理に反りあがっていく。その様子を見ながらも、桐の表情はとりたてて変化する事はなかった。

それがまた、白い少年の癪に障る。

(……気に食わねエ、気に食わなくて仕方ねエぞオ？なんでコイツは平然としてやがる。『超能力者』(レベル5)の中でも突き抜けた頂点って呼ばれてるこの俺を前にして、誰が目の前にいるか、判つてねエとでも言うのかア?)

『一方通行』(アクセラレータ)は自問して、

( 違う )

と自答する。

ギリギリギリと射出体勢を整えていくレールごしに青年を視界に納め、彼は考えを続けた。

(コイツは、俺が誰だか判つた上でここに立ってる)

ざわりと、白い少年の中の、おぞましいものがわななく。

(その上で、この余裕をかましてやがるんだ )

そうして学園第一位にとっては、けして許せない結論にたどり着いた。

(昨夜、俺をたやすく下しているから ！！)

脳髓にこもった苛立ちが、たやすく狂熱へとシフトする。

「ふっ……ざけんな三下ア……京分の一をたまたま拾ったからっていい気になってんじゃねエぞオ!!!!」

言葉と共に、『一方通行』（アクセラレータ）は裏拳で直立したレールを殴り飛ばした。

本来、小さな音を立てるくらいが関の山のその行動。だが、それに桐は全力で身構える。

（『アレ』が、来る）

そして、

その場に響いたのは容赦のない轟音だった。

くの字に折れ曲がった鋼鉄のレールが、砲弾のように桐へと撃ち出される。

その標的となった青年は。

軽いステップから体重移動をおこす。

可能なかぎり最速の踏み込みで、襲い来るレールをすり抜けるように中空へと飛び出した桐は、構成を編みながら左足から着地、地面を転がって勢いを殺した。

間髪をいれず、殺しきれなかった勢いのままに駆け出しながら、編み上げた構成を展開する。

「我が指先に琥珀の盾!!!」

これで防ぎきれるとは、最初から思っていなかった。

完全に、『抜かせる』ために創りあげた空気の盾ごしに、続けて放

たれた数十本のレールが襲ってくる。

(それでも少しは勢いを殺せるはずだ　！)

バックステップを重ねてそれらから少しでも身を離しながら、続けて桐は別の魔術を行使した。

「我は撫でる獅子の鬣　！」

今度は地面と並行して、圧縮された空圧が波となって奔る。

横薙ぎにふるわれたそれは鋼鉄のレールの着弾点を削るように解き放たれ、その着弾点から散弾銃のように撒き散らされる瓦礫の粒を、ごっそりと巻き込んで無力化した。

その、二段構えの防御法を駆使して、なお。

(ここまで、してるのに　！)

桐は、濃密な死の気配に浸されていた。

相手にどう見えているかは知らないが、余裕などもちろん、ひとかけらだつてない。

例えるなら、限りなく細い綱渡り。

一手でも間違えれば、致命傷か、単に致命か。

(こんなものをボロボロの身体で、しかも事前情報皆無で相手にしてたあいつは、いったいどれだけ　)

このセカイの『主人公』に思いを馳せながら、今、自身に突きつけられていく破壊に戦慄する。

同時に安全圏を求めて構成を編み上げ、桐は掌を振り上げた。

そして、襲い来る鋼鉄に向かって、青年はそれを押しそらすための

術式を放つ。

「我は呼ぶ、破裂の姉妹！！」

衝撃波が、空気の破裂を伴って、暴れまわる。

先ほど行使した際と同じく、集約して解き放たれたそれは、突き立てられた鋼鉄のレールをわずかに押しそらし、ささやかな安全地帯を作り出した。

そのスペースに自らの身体をねじ込みながら、青年は後ろにあったコンテナにその背を預ける。

（　　）　　って、コンテナ！？）

五段、六段とうずたかく積み上げられ、三階建ての建物と同じくらいの高さに到達している、貨物用のコンテナ。

胸に湧き上がった嫌な予感と共にチラリとその壁を振り返った桐に、

「おら、余所見たアオフジエ余裕だなオイ！んなに死にたきやギネスに載っちまうぐれエ愉快な死体オフジエに変えちまおうかア！！」

『知っている』セリフがかけられ

隙だらけのクセにありえない速度で放たれた『一方通行』（アクセラレータ）の飛び蹴りが、半瞬前まで桐の頭のある場所をつらぬいていた。

教会の鐘のような轟音が響く。

当然のように、積み上げられたコンテナの山が崩れはじめる。

(この、流れは)

脳裏を染め上げるのは、明文化されない、だが絶対の確信を伴う予感。

(急がないと、不味い　！)

耳を弄する轟音にさらされながら、直前にその場を飛びのいていた桐は、崩れてくるコンテナを見上げ、空けた片手で背中の中のボディバッグに手を伸ばしつつ、最速で編み上げた構成を眼前に展開した。半瞬、呼吸を整え、叫ぶ。

「我は流す天使の息吹！」

発動するのは、風を巻き起こす術式。

そうして、桐は目の前から自身に向かって吹きだした突風に身を預けて、一気に十メートルほどの距離を押し流される。

頭上から落下してくるコンテナを回避するように。

そして、正面から襲い掛かる『一方通行』(アクセラレータ)から距離を取るように。

「……………くそがア！」

ここまで、ほぼ三秒。

状況を把握した『一方通行』(アクセラレータ)の顔が歪んだところで、大量のコンテナが地面へ激突した。

衝撃で破損したコンテナから、白煙がもうもつと溢れ、場を覆い尽くす。

(小麦粉、か……。やっぱり、というべきなのかな)

そんな事を思う桐は、伸ばしていた手でバッグから目当てのものを取り出し、構える。

そうして準備が整ったところで、

「……………なア、オマエ。粉塵爆発って言葉ぐれエ、聞いた事あるよなア？」

声が、響いて、

あらゆる音が、吹き飛ばされた。

……。  
……。

EXT

TON



人通りもほぼ絶え、ぽつぽつとした街灯以外、目立った灯りのない中。

遅れがちな、『妹』を連れて、美琴は夜の学園都市を急いでいた。病院から出てくるときにはとくに終電を迎えていた公共交通機関を諦めて、あの操車場へと徒歩で向かう。

「ちよつと、大丈夫なの？」

また、遅れ始めたミサカに向かつて、少しだけ上がった呼吸で美琴は問いかけた。

「……………問題、ありません。そもそも……………ミサカはすでに健康体で、あり、この程度の道行きに……………疲弊するほどヤワではあり、ません……………、とミサカは……………間髪いれずに、答えます……………」

「ああもつ、全くアンタは……………！」

間髪いれずに、というにはずいぶんと間を空けて、なおかつ途切れ途切れに返されたこたえに苛立って、美琴はミサカの腕をとって強引に肩を貸す。

「ほら、行くわよ」

「……………」

近くなった距離で、ミサカは無表情のまま、美琴を見かえした。

「な、なによ？」

戸惑う美琴に、ミサカは表情を変えず、ひとりごとのようにつぶやく。

「……………すこし……………驚きました、とミサカは率直な、感想を述べます……………」

「何が驚くつてのよ？今は少しでも早く、あのバカのところに行かないといけないんだから。それに健康体も何もアンタ病み上がりでしょう？」

自身の姉 オリジナルの肩に回された、自らの腕が感じる、生き物の熱。

ミサカはその感触に、なぜか小さくない驚きを感じていた。同時に今日の夕方、病室でこっん、と自身のひたいに触れた、とある青年の拳の感触を思いだす。

(コトの……………熱……………?)

新しい情報を受け入れたミサカネットワークが、さざめくのを感じる。

(……………)  
(……………)  
(……………)

期せずして情報の流出を行ったミサカに、ネットワークから次々と疑問と戸惑いの感情が投げ込まれた。

それを処理しきれずに、ミサカの瞳が焦点を失う。

不意に、あの感触と、耳朶に残った言葉がミサカのなかで再生された。

僕は、君に生きていて欲しい。

正直なところ、ミサカにとってここまでの流れは、どこまでいっても不可解極まりなかった。

（ミサカは、ただの実験動物です、とミサカはわかりきった前提条件を繰り返します。そのミサカになぜお姉様とあの人はこんなにも構おうとするのでしょうか、とミサカは疑問に思います）

それがミサカにとって当然の事実であり、変わりようのない現実だ。いや、現実だったはずだった。

（そう、事実は事実のほずです。それなのになぜ、ミサカはお姉様の感触やあの人の言葉に、こんなにも）

「ちょっと、一体どうしたってのよ!？」

しかし浮かびかけた言葉は、美琴の言葉に止められる。

一回だけまばたきをして、ミサカは眼前の美琴の顔を見つめた。

「もしかして動けないほど調子が悪いの？それなら」

こちらを本気で気遣ってしまっている美琴に、ミサカは口を開く。

「いえ、そうではなく、とミサカは」

そこで、鈍い爆発音が響いた。

火薬による爆弾や地雷のような、刺さるような爆発とは違う、ズムという、こもったような空気の振動。

間違いなくそれは、美琴たちの向かう操車場の方から響いてきたものだった。

「いったい、何が」

「早く行きましょう、とミサカはお姉様に進言します」

自分の現況を説明するのを切り上げて、ミサカは美琴に端的に告げた。

「でも……、いえ、そうね、行きましょう」

一瞬の戸惑いの後、うなずいて歩みを再開する美琴。

その美琴に肩を借りながら、ミサカもそれにならうのだった。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

粉塵爆発は、文字通り爆発的な燃焼によって一瞬であたりの酸素を奪い取り、気圧を急激に下げる。

そうして作り上げられた紅蓮の煉獄の中を、『一方通行』（アクセラレータ）は平然と歩いていく。

炎の海のせいで昼間のように明るくなった操車場に、世間話のようなトーンという言葉が流れていく。

「ああ、ちょっとやりすぎちまったかなア？しかしまいったね、酸素奪われるところっちも辛いとはよオ」

本当に楽しそうに、声は歌う。

「くっくっ。こりゃ核を撃つても大丈夫ってキャッチコピーはアウトかなア？ま、酸素ボンベでも持ってるりゃ良いンだが。あれっさいくらくらいするかわっかんねエ？」

目前にうずくまる黒い影に向かって、『一方通行』（アクセラレータ）は問いかける。

その声に滲んでいるのは、それを聞いたものならば誰にだってはつきりと判る、喜悦だった。

だが、

「 そうだね、スポーツショップで千円ちよつとだったかな？」

返ってきた声に、白い少年は表情を変えた。

直後、うずくまっていた黒い影が、かぶっていた黒のジャケットをめくり上げる。

現れた無傷の顔は、ボトルから伸びる細いチューブをくわえていた。

「……ふう。引火したら結構ひどい目にあうから、もうちよつと頑丈なものにした方がいい気はするけどね。ああ、君の能力ならボトルの強度は関係なかったかな？」

(なんとか、なった……)

白い少年に向かって軽口を叩きながら、桐は自身の行動を思い返していた。

といっても難しい事をしたわけではない。

準備したのは、いくつかの小道具。

それはこの酸素ボンベと、火打ち石として使うためにオイルを抜いた100円ライター、そして高い難燃性をもつ学園都市の最新素材で作られた衣服に、薬局で仕入れたやはり学園都市謹製の耳栓。その四つだった。

桐が行ったのは、『一方通行』（アクセラレータ）が着火するその瞬間、ほぼ同時か直前にこちらからも火をつけたことだけだ。

粉塵爆発は空气中に充満するようにただよう細かい粉塵に火がつき、それがものすごい勢いで燃え広がっていく事により起きる。

逆に言えば、着火の基点となった場所では今回のように閉鎖による爆風の反射がない限り、衝撃はそれほどひどいものとはならない。

黒ずくめの青年と白い少年が起こした爆発は、前者の狙い通り、そ

それぞれの威力を両者の中間点で相殺する形で発生していた。それでも、頭からかぶったジャケット越しに青年が受けた爆音と衝撃は、ひどいものがあったのだが。

(ここまでは思惑通り。正直、耳栓なかったら詰んでただろうけどね)

立ち上がり、相手を見据える。

そして『一方通行』(アクセラレータ)が何かを口にする前に、桐は言葉を彼に向かって放っていた。

「さてと、『説得』するよ。あの『実験』を続けても君が今より強くなることは　そう、次のステージに上がるなんてことはない。だからもう、こんなこと止めてくれないかな」

すつと、黒ずくめの青年の手のひらが、白い少年に向けられる。

「そう、『実験』はここで行き止まりだ。ミサカは　彼女たちはこれ以上、一人だって死なさない。そして今、『説得』の対価としてこの実験が無意味だって事実を君に伝えた。まあ、君もうすうす感じてた事だろうけどね。それになにより」

挑発的な、皮肉げな笑みが、桐の口元に浮かぶ。

「君より強い人間の言葉だ、信じるには充分だろう？」

そして投げられたのは、学園都市で最強というプライドに、真正面から唾を吐きかけるような言葉だった。

瞬間、空気が、ピシリと凍る。

直後、狂熱が白い少年を中心とした空間を炙るように燃え上がった。

「あ、は、はは。面白エ、最っ高に面白エぞオマエ。イイぜ、愉快に素敵にキマっちまったぞ、ああア!!?」

辺りが振動する。

殺気の塊が充満し、いまましい対象を一刻も早く押し潰そうとコンテナがゆるゆると浮き上がっていく。

(よし、こちらの挑発に乗ってきた)

「それでいい。全力でかかってきなよ『第一位』。その全てをこともなくいなしてやる。君には僕を倒せないって事実を充分以上に実感させて、『説得』を受け入れてもらう」!

(後は相手が疲れきるまで付き合うだけだ。もっとも)

桐は覚悟を固め、切り札とも呼ぶべき構成を脳裏に浮かべる。

(『全部』使わなきゃ、もう支えられないだろうけどね)

砲弾のように、ありふれた20フィート型 2.4tもの積載が可能な中身入りコンテナが容赦なく、いくつも連続して標的に向かい、撃ち込まれた。

目視すら困難な速度で迫るその脅威に向かって、桐は単純な物理破



壊という意味では最大威力を誇る術式を放つ。

「 我は砕く原始の静寂！！」

桐の目前の空間が一瞬たわみ、次の瞬間。

爆砕が波紋となって、その先の空間を覆い尽くした。

そこで繰り広げられていくのは、圧倒的な破壊。

撃ちこまれたコンテナが波紋となって広がる爆砕に噛み砕かれ、文字通り、細切れにされて吹き飛んでいく。

続けて、爆砕の効果範囲外に余波として溢れた複雑な力の流れが辺りの空気をかき乱した。

その中を白い少年に向かって駆けながら、桐はアレンジした術式を展開する。

「 我は呼ぶ、破裂の姉妹！」

その発動ポイントは、いつかと同じ、目標の超至近。

無差別に 言葉通りどの方向にもまんべんなく 『 一方通行』

( アクセラレータ ) に極めて近い複数のポイントを起点に、無数の衝撃波が発生しようとする、が。

「 ハッ、何回見せた手が通用すると思っただよオ！！！」

白い少年の顔に、裂けるような笑みが浮かぶ。  
そして、発生した衝撃が

捻じ曲げられた。

「……っ！」

それは、例えば桐の進行上。

衝撃波が、本来叩くはずのなかった範囲を薙ぎ払う。

急制動をかけた桐は、しかし両腕を交差した状態で、その衝撃を受け止めることになった。

「……がつっ！」

勢いのまま、重力に逆らって浮き上がる身体を制御する事ができずに、2 mほど滞空してから、地面を削るように青年は転がっていった。

三転、四転と荒い受身を繰り返して、ようやく青年は勢いを殺しきる。

(通用、しなかった……。接近して精度を詰めればもう一回くらいっていうのはさすがに甘い考えだったね……)

苦い思いと共に上体を起こし、全身を苛む激痛に耐えながら、桐は視線を土煙のわだかまる、ある一点へと向ける。

爆砕の波紋の余波と、捻じ曲げられて撒き散らされた衝撃波が起こした土の煙は、さほど時間をおかずに晴れていった。

「ざまあねエな、デカイクチ叩いてやるこたアそれかア？底が  
知れるぞ、オマエ？」

いや、晴らされた、のか。

青年の視線の先に、計ったように学園都市最強が現れる  
裂けるような笑みを深くして、白い少年が言葉を発した。

「それにしても妙だなア？なんで生きてんだ、オマエ」

「……………」

返事が返ってこないことには頓着せず、『一方通行』（アクセラレ  
ータ）は続ける。

「今の衝撃、全部『搦ン』で十倍返しにしてやったつもりだったン  
だがなア？今頃クチャクチャのミンチになってなきやいけねエのに、  
なんでピンピンしてやがる？」

「……………」

「ああ。妙といえば、妙なハナシがひとつあるンだが。なア、『空  
気制御』（ヌマーティックコントロール）」

耳を打った単語に、桐は初めて、相手の言葉に感想を抱いた。

（さすがに調べられてる、か。それにこの状況。下手に動いたらそ  
れだけでまたあの乱戦が再開しそうだね）

「学園都市の『書庫』（バンク）じゃ空気使いツツーことだったがよオ、さっきのといい今のといい……ありゃアどオしたって空気なンかじゃねエよなア？」

ほとんど動かす事なく、身体の各部の状態を確かめる。

先ほどからずっと、そんな作業を続けながら、思考を桐は走らせた。

（そしてこれも妥当といえは妥当な話か。ベクトルが『視え』てれば当然、それくらい気付いてくる　　）

「アレらのメインは純粹な威力、衝撃だ。で、オマエはいつたいなンなんですかアツツーハナシになるわけだが。どんな手品か、教えてくんねエかア？」

白い少年の指が、くい、と曲がり、呼応して鋼のレールが揃えられた銃剣のように屹立する。

それだけで、戦闘準備が整ったようだった。

「　オマエがグチャグチャになって、物が言えなくなる前によオ！？」

だがそこで、閃光が走った。

桐と『一方通行』（アクセラレータ）の間を阻むように、次々と磁力線が引かれ、

その線を辿って、音速の三倍の速度で、金属製の飛翔体が次々に撃ち込まれる。

走る閃光は、ほんの一瞬。

対峙していた二人には見えるわけもなかったが、安っぽいゲームセンターのコインが着弾した後に、純粋な余波としての轟音を伴う衝撃波が、その射線に溢れかえる。

「あア………?」

それは、巻き起こした土砂を持って壁のようなものを向き合う黒ずくめの青年と白い少年との間に作り出していた。

第一波の着弾の後、今度は浮き上がったレールに向かって同じ砲撃が撃ち込まれる。

土砂越しにもかかわらず、正確に軸をあわせて叩き込まれたその威力は、鋼鉄製のレールを容易く消し飛ばしていく。

(これは ！？)

その光景を見て、桐に浮かぶ言葉は、一つしかなかった。

(レールが超電磁)

だがその単語を意識の中で形にする前に、ぐい、と強く腕が引かれる。

視界を埋める土煙の中、その相手を確かめようと首をめぐらす青年

に、声がかげられた。

「こちらです、とミサカは冷静に促します」

……。

EXT

TON

事態は、数分前にさかのぼる。

「何とか、しないと」

その場所から、その景色を見るのは、二度目だった。

（でも、どうしたら？）

操車場にかかる、鉄橋の上。

『前回』、まさにそこにいたミサカを今は隣に伴って、美琴は操車場のやや奥まった場所、コンテナが積んであるあたりで対峙する、須臣桐と『一方通行』（アクセラレータ）を視界に納める。

（あのバカを、何が何でも止めないと。でも、主導権を取れるのは間違いなく向こうがこちらに気付いてない今だけ。うかつなことは絶対に出来ない）

最善手を探して思考する美琴に、淡々とした声がかげられた。

「具体的にはどうするのですか、とミサカはお姉様に問いかけます。そしてその『何とか』を達成するためにはミサカの行動も必要なのでしょうか、とミサカは重ねて問いかけます」

ペースを落とした上、肩を貸されていたのが良かったのだろう。

幾分か回復した様子の少女は、自らの『姉』に向けてよどみなく言葉を発した。

「……ど、どついつ意味よ？」

そんなミサカの質問の意図を計りかねて、美琴は尋ねる。

「ミサカはミサカで今すぐあの場所へ行かねばならないからです、とミサカはやる気持ちを抑えてこたえます」

「ちよつとー！」

それだけで階段を駆け下りていこうとするミサカに、美琴は手を伸ばしてその腕を掴んだ。

「離してください、とミサカは」

「どつするつもりなのよ！まさかアイツの前に棒立ちしに行くつもりじゃないでしょうね！？」

「その通りです、とミサカは端的に答えます。時間が惜しいのでとつと離してください、とミサカは再度要求します」

「だから、なんでアンタはそう」

「現状が、もう間違っているのです、とミサカは訴えます」

その声は、先と変わらない速度で紡がれていた。



それなのに、それがひどく濡れているように感じて、美琴は言葉を失う。

「やはり、ミサカはただのモルモットです。必要な器材と薬品があればボタンひとつでいくらでも自動生産できる、量産品なんです。作り物の体に、借り物の心。そんなモノのために替えの効かない彼が危険にさらされる現在の不合理は、あつてはならない、とミサカは結論します」

「だ、だからって、何の策もなしである学園最強の前に出て行くつていつの……?」

「……………」

もうその言葉にはこたえる必要を感じない。

そう言いたげに、ミサカは美琴の腕を振りほどこうとする。手を離す様子のない姉に、妹はあらためて言葉を重ねた。

「早く離してください、本来はミサカがあ場所にいるべきなのです、とミサカは自明の理を説きます」

そんな、この期に及んでも自らの立場を全く崩そうとしない『妹』に、美琴は苛立つ。

「んな事が、通るとでも思ってるの、アンタは!」

感じるのは、明確な苛立ちと、こらえきれない悔しさ。

(それじゃ、アンタが助けられた意味が アイツが倒れるまで無理してアンタを『救った』意味がないじゃない …!)

だが、それを歪めずにうまく伝える方法を思いつけずに、美琴は奥歯を噛みしめる。  
だが、そこで、

( ！ )

熱くなった思考は、ひどく乱暴な手段を閃いていた。

「 さっきの質問に答えるわ。アンタの行動が必要よ、協力しなさい」

自分を掴んでいた掌から力が抜けるのを感じて、ミサカは美琴を見上げる。

「 協力、ですか？とミサカは訝しげに問いかけます」

「 アンタが行くのはもう止めない、でも、アイツはきっちり助けてもらうわよ」

「 ミサカが行けば自動的に 」

「 もうそんな場所はとっくに過ぎ去ってんのよ。アンタがただ出て行ったところで、あそこまで戦ったアイツが見逃される保証なんてどこにもない。隙は私が作るわ。派手に目くらましをかけるから、アンタはアイツを連れて そうね、あちらの陰に隠れなさい。私もすぐにそこに行くから」

眼下にあった、隠れるのにちょうどよさそうな電車を指差し、美琴は言葉を続けた。

「いい？隠れたら間違ってもノコノコ出てきたりしないで。場所があの白いのにはれたらおしまいなんだから。合流したら一度、三人でこの場を離脱する。いいわね？」

「しかしミサカは」

「時間がないわ。このままアイツがやられちゃうのをここでのんびり見てたいの!？」

二人の視界の中、黒いジャケットを纏った青年が、その掌を白い少年へと向けるのが映る。

「……わかりました、とミサカは不承不承うなずきます」

音を立てないように気をつけながら階段を下りていくミサカを見送ってから、美琴はスカートのポケットに手を入れた。

目的のものを掴んで、美琴は階段の手すり越しに、その手を突き出す。

親指に乗せられたコイン越しに、美琴は宙に浮き上がっていくコンテナを見つめた。

（ まだよ ）

美琴の全身から紫電が溢れる。

後は親指を軽く弾くだけで、御坂美琴の異名となった超電磁砲レールガンは音速の三倍もの速さで撃ちだされることになる。

だが、美琴はそれを砲弾と化したコンテナに向かって撃ちだすのを意識して抑えた。

(アイツは下がる素振りを見せていない。きっと対抗する手段があるんだ。私が動くのは、もっと、そう、決定的なチャンスにしないと )

「 我は砕く原始の静寂! ! 」

その『声』は、美琴にも聞こえた。

そして、離れていたからこそ、美琴はその全容を見ることになった。

( すい )

圧倒的な爆砕の波紋が、コンテナを砕きながら広がっていく。

今なお戦場で燃える炎のオレンジ色の光が、その波紋に歪められてちかちかと踊った。

息をのみながらも、美琴は桐を見続ける。

そして、間髪をいれず相手の懐に走りこんだ青年が、

逆にもんどりをうって、こちらに向けて吹き飛ばされてくるのをその目に映す。

( わざと派手に距離を取ったってこと ? いや、違う! )

白い少年がゆっくりと、片ひざをつく黒ずくめの青年へと歩み寄っていく。

レールが浮かび上がり、また砲弾と化したにも関わらず、ぴくりとも動かない、青年。

( もう撃つしかない。上手くやりなさいよ、私 ! ! )

震えそうになる腕を叱咤して、美琴はその照準を『一方通行』（アクセラレータ）に向けてると、少しだけそれをずらして、超電磁砲レールガンを撃ち出した。

初撃はあやまたず、『一方通行』（アクセラレータ）の目前に着弾し、

狙い通りの土砂の壁を、彼らの間に出現させる。

立て続けに数発、同じような場所に撃ち込むと、浮かんでいるレールの場所を頭に叩き込んで、美琴は手すりを乗り越え、なにもない空間へと飛び出す。

落下する感覚を味わいながら電撃を利用した磁力線を展開、スピードを殺して操車場に降り立つと、また右腕を突き出した。

そして御坂美琴は、再び『超電磁砲』（レールガン）を行使する

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase .

「こちらです、とミサカは冷静に促します」

(なんでこんなタイミングで )

突然、すぐそばに現れたミサカに強く腕を引かれ、桐は戸惑っていた。

(この二人は、戦場に来ても見てるだけだって思ってたのに !)

『原作』とは相反する状況に疑問を浮かべる。  
だが、

(とにかく、今はこの場を動かないと。ぼつつとしてたら『一方通行』(アクセラレータ)の前にこの子をさらすことになる)

そう、それ以上の思索をとどめて結論すると、桐は素直に彼女に従った。

土煙で全く視界が利かない中、『超電磁砲』(レールガン)の着弾地点からこぼれる、焦げ臭い匂いを感じながら、手を引かれるままにどこかの物陰に連れ込まれる。

(これは、電車の車体か)

どうやらレールの土台とあいまって、上手い具合に視線を阻んでくれているようだった。

そこでようやく桐は、自分をここに連れてきた少女が荒い呼吸を繰り返していることに気がつく。

「え……、って、君は、大丈夫……でもなさそうだね」

声の大きさに気を使いつつ、ふらりとこちらへ向かってよろめく少女を抱きとめる。

そこで青年に、後ろから聞きなれた声がかげられた。

「だいぶムリしたみたいね。まあ、どれだけするなって言っても、その子はこうしただろうけど」

(この声は……?)

振り返る桐の頬を、そう大きくない手のひらが、ほとんど音を立てる事なく叩く。

そこには、腕の中の少女と同じ姿をした『超電磁砲』(オリジナル)の少女が立っていた。

消耗のためか、腕の中のミサカと同じく息を荒げながらも、その目はしっかりと桐を見据える。

「とりあえず、夕方のお礼ね。こんなもんじゃ全然足りないし、言いたい事もいっぱいあるんだから。覚悟しときなさいよ」

いまだ、右手を操車場の中心へと向けたまま話す美琴に、桐はゆっくりと尋ねる。

「……やっぱり、君も来てたんだね」

「そりゃそうよ。あんなバカな真似されて、私がじっとしてると思

うっ？」

(じっとしてるとは思ってたけど、じっと見ててくれるとは思ってたんだけどね……)

「わかったらとっとと行くわよ。砂鉄の嵐で足止めと目くらましはしてるけど、いつまで持つかわかったもんじゃないし」

有無を言わさないその声に、桐は反論した。

「いや、僕は」

「いいから来るのよ！あんなのとマトモにやりあう必要なんかない。手段は強引になるけど、この『実験』をやってる研究所を洗い出して潰してやることだって、私のチカラなら出来る。能力研究に使う、一台数億するような研究器材をまとめて根こそぎにしてやれば、どんなプロジェクトだって続けてなんかいけないはずよ。だからアンタが無茶する必要なんてないの！」

たたみかけられた激しい言葉は、だが確かに青年を思いやって吐かれた言葉だった。

( ああ )

しかしその言葉を聞いた青年は、全く別の事に気づいて内心でつぶやく。

( そう、か。そうなんだ )

『それ』を理解するのに必要な時間は、本当にわずかなものだった。



(僕の介入が早かった、所為で )

ほとんど意識せず、桐は思考を明文化する。

(彼女はまた、『何も』知らないんだ)

気付いてみれば、それはひどく当然の事だった。

(本来の『原作』は実際のところ、まだ始まってもない。なんてミスだよ……。僕はそこを間違えてた)

全ての前提が、その一点で変わってくる。

そしてそれならば、『一方通行』(アクセラレータ)との戦闘に、彼女達が積極的に立ち入ってきた事も、簡単に説明できてしまった。

(だって、『原作』に存在していた、『無能力者』(レベル0)が『超能力者』(レベル5)に勝てば、実験が立ち行かない)、という建前自体がそもそも今、この現実存在しないってことだからね。そりゃ手も出してくる )

同時にそれは、『美琴がまだ、何をしても実験を止めることが出来ずに絶望し、自殺まがいの方法に頼らざるを得ないところまでは追い詰められていない』という事も意味する。

(そう、僕がいなければ 『こんなイレギュラーがなければ』彼女はきつと今ごろ、独りで実験を止めるために動いていたんだろうし)

だからこそ、今ここにいる美琴は桐に対して、自分が研究所を潰すことで実験を止められる、と本気で言っているのだ。桐の目がほんの少しだけ、まぶしいものを見るかのように細められる。

感じたのは、ひどく独りよがりな、希望に似たもの。

(うん、それなら)

先ほどから無言のままの青年の様子にしびれをきらしたのだろう。美琴はやはり強い調子で口を開いた。

「聞いているの?! わかったら早く」

桐はそれに、ぽんぽん、と頭を撫でる事でごたえる。

たったそれだけで、あっけに取られていく美琴の表情を少しだけ面白く感じながら、

(それなら、僕はもう少し、無理できる)

そう、結論した。

(ミサカたちが五十人、死ぬのを止められるだけじゃなかったんだ)

次の瞬間、桐はそれを察知して、鋭くささやいた。

「ふたりとも、伏せるんだ!」

同時に、自分の両腕も使って、引き倒すように二人を強引に地面に伏せさせる。

それが完了する寸前、

「ああ。そこにいたかよ」

声が聞こえ、

桐たちが身を隠していた電車の車体が、前触れもなく吹き飛んだ。

土煙と砂鉄の嵐は強引に散り晴らされ、現れたギラギラと敵意に光る瞳が、桐たちをねめつける。

「なアーにコソコソしてンだつての。そしてなんだア？三下に三下の救援かア？」

学園都市最強 『一方通行』（アクセラレータ）にとっては間違いないく、邪魔なものをひよい、という感覚でのけられた鉄塊が、別のコンテナの塔にぶち当たって破滅的な音をたてた。

耳を弄する轟音の中、それでも白い少年の声ははっきりと聴こえる。

「なんで分っかんねエかなア？どんだけ小物がタカろうが結果は変わんねエンだよオ！！」

叫び声に応じるかのように、先ほどのものよりひとまわりは大きい鋼鉄のレールが、強引に中空に浮かび上げられる。

それにこたえて、桐はひとり、前に進み出た。

「救援、か。まあ、そう見られても文句は言えないんだけどね」

つぶやく青年に、迷いは見えなかった。

右腕を振り上げ、構成を編み上げていく。

直後、浮かび上げられたレールが、桐たちに向かって撃ちこまれた。

かわしきれない質量、逃げ切れない速度。

撃ち込んだ『一方通行』（アクセラレータ）自身が確信する、必勝の手ごたえ。

だが桐はそれに全く構う事なく、自らの構成を編み上げる事のみ集中していた。

強靱な、だがしかしそれ以上に柔軟で細密な、とある魔術の構成。編み上がるその一瞬に、桐は叫ぶ。

「我は放つ光の白刃　！」

自身を超える、セカイに存在する力が、自らの望む一点へと収束していく。

構えた掌の中に一瞬で純白の光球が発生し、大気を巻き込むような激しい静電気が音を立てる。

そのただ中に身を置きながら、桐はそのチカラを開放した。

純白の光の帯が、伸びる。

それを構成する高熱と衝撃波の渦が、やや曲線を帯びて相手の砲弾に到達した。

瞬間、つんざくような轟音と、跳ね返ってくる光、熱が、あたりを全て白く染め上げ

解き放った光熱衝撃波がおさまり、場に静寂が満ちる。

それが着弾したレールは、地面に叩き落されていた。

着弾点が融解しているのだろうか、頭から突っ込むように沈められたレールの埋没点から、新たな炎と煙がぶすぶすと上がる。

その結果をただ、認識した桐は、一度途切れた思考を再度、意識に上らせていた。

後ろに立っている少女を意識して、視線だけを気持ちそちらへと向ける。

（御坂美琴が　こんな優しい女の子が、絶望しないで済むかも知れない）

「それは正直なところ、ずいぶん上等な話だと思っしね　」

つぶやいた言葉は、誰の耳にも届く事なく、ただ虚空に解けたのだ。  
った。

……。

あの子が……戦っている……？

E X T

T O N

(……あの子が……戦っている……?)

『ナニカ』は、

その場所で、身を擦じらせていた。  
といっても今の彼女にとっては、身体という概念そのものが、失われて久しかったのだが。

(……あの子が……戦っている……?)

自分の思考の意味を掴みかねて、『ナニカ』はただ、それを無感動に繰り返した。  
彼女を構成する意識から、言葉の意味が、ほどけて、するすると流れ出していく。

(思考を止めてはダメ……。わたしは、わたしをたもたないと……)

そのはしっこにすがりつくようにして、『ナニカ』はようやく、ほんやりと覚醒した。

その自意識を持ってさえ、半透明にかすむ自らの掌に視線を落とす。

(薄く……なっちゃったものね)

『自分』の希薄さ。

それはそのまま、どれほどが『取り込まれ』ているかを意味していた。

(ああ、このくらいにしないと)

意識しなくても、意識しすぎても、それは余計に進んでしまう。

そんなコツに気付いたのはいつだったか。

モノクロの、いや、色さえつかない『ちらつき』から、『彼』とその周囲の情報を読み取る。

(そう、そうなのね……あの子は、そうあることを選んだ……)

手に入れた理解に、むりやり彼女は感想を浮かべる。

そのプロセスで、すこしだけ、『自分』が安定する感覚。

それは逆に言えば、そんなささいなことが明暗を分けるほど、事態が差し迫っていることを意味していた。

現状を言葉にする事なく、だが泣きたいほどそれを深く痛感しながら『ナニカ』は声にならない声を吐き出す。

(どっつであるともう、今のわたしはなにもかもすべて、あの子に



賭けるしかない )

『全知全能』に浸される事に抗いながら、自らの『個』を抱きしめる、『ナニカ』は願う。

ただ、それが叶うことを、『思っ』て』。

とあるナニカの音声ヴォイス・ソーサラー魔術士

57

Phrase .

操車場には、数トンはあるような鋼鉄のレールが、斜めに突き立っていた。

それが、桐の放った光熱衝撃波　はたから見れば白い光線としか形容しようのない魔術　が鋼の塊を迎撃した、その結果だった。ゆらゆらと上がっていく真新しい煙越しに、視線をその着弾点へと投げかけ、『一方通行』（アクセラレータ）はつぶやく。

「なんだア、そりゃア……？」

「……………」

その質問に返答するものは、この場にはいなかった。

眼前の光景に言葉を失っている美琴とミサカをかばうようにもう一步進み、その質問に答えるべき青年は無言のまま、次の一手を脳裏に編み上げる。

「なんだアって聞いてんだよオ！！」

激昂した『一方通行』（アクセラレータ）は片足を振り上げ、それを、『振り下ろす事なく』、『蹴りだした』。

そうして起きた、微細な振動のベクトル、そのことごとくを増幅する。

それまで使っていたものに倍する数の砂利が、凶悪な散弾となって三人に襲い掛かった。

桐はただ、掲げていた右手を、それをさえぎるように少し下へと下ろす。

「我は紡ぐ光輪の鎧　！」

ガラスがこすれあうような音をたてて、光で編まれた網のような防御力場が発生し、桐たちを包む。

それは焼ける鉄板の上に水滴を落とすような音を立てて、ぶつかった飛礫すべてを、こともなげに蒸発させた。

場に、静寂が戻る。

もう一步を踏み出して、ようやく桐は『一方通行』（アクセラレータ）に答えていた。

「安い手品だよ。これは昨日も言った気がするけど、ね？」

あくまで気楽な口調で挑発しながら、桐は歩む足を止める事なく、思考を走らせていた。

（状況は最悪に近い。彼女達がこうやって舞台上上がってきた以上、準備してきた手はもう7割がた使えないか。これはもう、つくづく自業自得だけだ）

「そいつらが来てから急にワケわかんねエチカラを使い出したなオマエ。つまりは、ああ、つまりは、だ」

（いいさ、反省は後で。とにかく、彼女達を守りながらの長期戦は自殺行為だ。仕込んでおいたカードに期待できる状況でもない。ここは　　）

「マジで、信じ難てエンだが、オマエ、オレを相手に　　」

ぶるぶると。

何か、耐え難いものに耐えるかのように、白い少年の手は震える。

「この『学園都市最強』を前に、手加減してやがったってのかア、  
オイ　！？」

(『切り札』をばら撒いて、最短で心を折りに行く　！！)

両者が、動いた。

叫んだ『一方通行』(アクセラレータ)は、無警戒に近づいてくる  
桐を睨みつけながら、重ねた双掌を突き出す。

触れただけであらゆる『向き』を変換するその手は、同時にあらゆる  
生物に死を与える暗黒の手だった。

ただ、ほんの少しかするだけで、致命傷となる、苦手に毒手。  
対する桐は

ただ強く、強く、踏み込んでいた。

踏み込みの動作に連動して放たれるはずの打突を放つ事なく、桐は  
その間合いに進んでその身を置く。

ふれあうような零距离で、しかし青年は、相手に触れさせることす  
ら許さなかった。

最小限のステップに、不規則な『捻り』を加える。

無策のまま突き出される『最強』の掌が、虚しく空を搔く。  
2度、3度と。

『一方通行』（アクセラレータ）は重心や、次のつながりなどを全く考える事なく左右の手を振り回す。

（このあたりのお粗末さは、『原作』通りなんだね）

その姿をいなし続けるのは、桐にとって難しい事ではなかった。

（もっと疲れる。それに）

「ちつくしよ、フラフラ逃げてンじゃねエー!!」

息を荒らしながら毒づく学園都市第一位に、桐は表面上、楽しげに挑発を投げる。

「はいはい鬼さんこちら　　というか、これが始まってからずっと思ってるんだけどさ」

くちびるに嘘を、そしてほぼ同時に、

右へ、足を半歩分だけ滑らせる。

せいっぱいに指を伸ばした毒手が、掠めることさえできずに空振っていく。

「ああ、何を……?」

「始まってから今の今まで君は、ずいぶん調子よかったよね。一から十まで悦に入ってるというか」

フェイントを交えてやはり触れる事なく、身体を入れ替える。

「まあ、勝ち誇るのは結構なんだけど」

たたらを踏んだ隙だらけの背中に追い討ちをかける事なく、ただ相手がゆっくりと振り返ってくるのを待つ。

そして、ようやく相手の目が自分を捕らえたことを確認したうえで。

「僕に剥いたその牙。一本でもちゃんと届いた事、あったかな？」

桐は致命的な台詞を、投げつけた。

『一方通行』（アクセラレータ）が、絶句する。

（よし、かかった）

どろりとした、もう煮詰まり切った本物の殺意が白い少年から溢れる。

（これでこいつは理性での『本気』を超えた状態 『全力』になる）

「よく言った。もオ、死んだぞ、オマエ」！

（この、『全力』を叩かないと、心なんて折れない。それに、こゝまでやればあの子たちに攻撃が向く事もないはず　！）

狭窄した視界に自分しか映ってないことを確信して、桐はようやく『一方通行』（アクセラレータ）から距離を取った。

美琴とミサカから充分に離れた場所を選んで、そこに陣取る。

「そっか、それは怖いね？まあちょうどよかった。こちらもそろそろ限界だったんだよ」

視線は、ただ真直ぐに、『一方通行』（アクセラレータ）を射抜く。

「君を殺さないように相手をするのはさ」

さらに適当な嘘を重ねて油を注ぎながら、桐は構成を編み上げる。両手を振り出して、あの魔術を最初に行使した。

「我は呼ぶ破裂の姉妹　」

本日二回目。

瞬間、目標の超至近で、無差別に無数の衝撃波が発生する

「……………つ、ざけんなアア！！！！」

標的にされた彼にとっては使い古された、しかもすでに潰した手段の、再度の行使。

狂熱に塗れた『一方通行』（アクセラレータ）はそれを、侮辱と取った。

刹那、『一方通行』（アクセラレータ）は超人的な反応でその衝撃のベクトルを演算、取捨選択し、適正に『掴み取り』『捻じ曲げる』。

『今度』は9割、掴んだ。

それをそのまま、愚かな術者に返そうとしたところで

「 我は描く光刃の軌跡」

じっ………！

セミが鳴くような、そんな一瞬の音が鼓膜に残り、『一方通行』（アクセラレータ）の背後と真下の地面が爆発した。

「ぐっ………」

すんでのところで演算による『取捨選択』からデフォルトの『反射』に切り替え、白い少年は足元から膨れ上がってくる爆風をその視界に納める。

それが止んだところで、やはり平静な青年の声が響いた。

「一発も戻ってこなかったことは狙い通り、反応できなかったみたいだね。まあ、できるはずがないんだけど。一応、説明しておこうか。今のは光速で転移する疑似球電」

人差し指をぞんざいに突きつけて、宣言する。

「マトモに撃ち込んでたら、死んでたよ？そして」

口を挟ませる事さえなく、桐は次の構成を編み上げ、展開する。



「 我は築く太陽の尖塔！」

唐突に。

「ごうっ！と」『一方通行』(アクセラレータ)の身体が炎の渦に包まれる。

それはまるで、天空に向かってそそり立つ、炎の塔のようだった。

「さあ、続けていくよ？」

すぐにもその炎が散らされていくのを感じて、青年はつぶやいた『音声』で全く同じ構成を重ねがけする。

その倍加された、ごうごうと高温で燃え盛る魔術の炎を視界に納めて、桐は独り言のようにつぶやいた。

「酸素がないと厳しいってのは『原作』でも、さっきこの場でも口にしてたよね。初見で完璧に操作できない魔術の炎。足元もまとめて溶けるように構成を調整してるから、足場がないって気付くまでの時間も合わせつつ、これを何度か重ねれば、それだけで終わるだろうけど」

そう言いながらも、あえてそれ以上同じ術式を重ねることなく、桐は別の構成を編む。

そして、少し勢いが衰えた炎の塔から、小規模な爆発が起きた。

その反対側からほぼ同時に、『一方通行』(アクセラレータ)が飛び出してくる。

「 っがあああああああアアア！」

足元の砂利をロケットのように爆発させ、まるで水面を跳ねる飛び石のような動きで一気に距離をつめて、白い少年は凄まじい速度で黒づくめの青年へと飛び込むが。

「我は踊る天の楼閣」

疑似空間転移。

視界が、消えて。

桐は数メートル離れた場所へと一瞬で転移していた。

身体ごと狙いを外された『一方通行』（アクセラレータ）は、何か信じられないようなモノでも見るような横目を残して、

その先に止められていた、作業用の車体につっ込んだ。

数トンある車体が、一瞬でスクラップの塊になる。

壮絶な自爆の結果を視界に納めながら、桐は炎上する車体へと向き直った。

（さすがに大きな魔術を使いすぎたか　　）

疲労のせいで、身体を重く感じる。

踏み替えただけの足から力が抜けそうになるのを、桐は意識して抑えた。

（それでも、ここまでやれば戦力差を思い知ったはずだ。後はダメ

押しを重ねて )

そのまま、視線をゆっくりと立ち上がろうとしている、『一方通行』(アクセラレータ)に向ける。

(この『説得』を、終わらせよう)

思い描くのは、『切り札』の中でもさらに特別な構成だった。複雑な構成が セカイの裏側に直接作用する特別な『魔術』を形成していく。

「我が左手に 」

差し出した指先に、

「 冥府の像 」

黒い、球状のモノが発生する。  
小さなビー玉のような、黒球。

それはまっすぐ、むしろ、緩やかに『一方通行』(アクセラレータ)へと向かっていった。  
身じろぎする白い少年に、鋭くささやく。

「動かないほうが良い。これは手加減できるようなものじゃないし、干渉できるようなものではないんだ。僕らが今見ているそれは、『破壊の因子』 現象の引き金に過ぎない」

そしてそれは音もなく、白い少年の横に垂れ下がった、鋼板に吸い込まれた。

元は列車の天井だったそれは、無音のまま黒球が触れた場所から、

ず…、と抉られ

なにもかもひっくり返すような、大爆発が起きたのだった。

…。  
…。

E  
X  
T

T  
O  
N

なにもかもひっくり返すような、大爆発が起きた。

(それでも、これはただの余波でしかない)

黒球を撃ちはなった先。

この爆発の爆心地を見据えながら、桐はそれだけを脳裏に浮かべていた。

全身をなぶる風に正面から向きあい、髪を乱れるままに任せる。

物質崩壊。

先ほど青年が放った『切り札』の、それが名前だった。

(チャイルドマン・パウダーフィールド教師によって編み出された  
最秘奥魔術の一つ)

ひどく身に馴染む、チカラの『原典』、『魔術師オーフェン』の知識。

それがやはり意識しないままに青年の脳裏に浮かび上がり、先ほど紡いだ構成と噛みあって、確信と共に霧散する。

(接触した部分を空間ごとえぐり取りつつ、大爆発を起こす術式

。でも、実際『崩壊』させているのはえぐり取られた部分だけ。  
あくまでこの爆発は、ただの余波でしかない )

彼にとっては本当にわかりきった事を繰り返して、無言のまま、桐は頷いた。

(そう、ただの余波だ。そしてそれなら、『一方通行』(アクセラレータ)は防御できる )

いくばくかして、煙が晴れる。

そこにはやはり、無傷の白い少年がいた。

深い椅子に身を沈めているかのような姿勢で、頭を垂れている。

もとは電車の車体だったのだろう、身体の形に陥没した鋼鉄が、彼を支えるロックチェアの様になりはてていた。

その姿に、桐は声をかける。

「無事なんだろう、『一方通行』(アクセラレータ)。「説得」を続けるよ。「実験」を止めてくれ。最初から最後まで、こちらの話はそれだけだ」

繰り返される、言葉。

『一方通行』(アクセラレータ)は、だが、ぴくりとも動かない。

(なまじ、『ベクトル操作』なんて反則的な能力を持っている存在が『物質崩壊』なんて際物をその眼で『視れ』ば、そうもなるか )

事態が収束したと見て、美琴たちが動いたのだろうか。

少し離れたところから瓦礫交じりの砂利を踏む音が聞こえてくる。

( 思えば、『禁書原作』でもそうだった……。それが不条理でない以上、わけのわからないものを、わけのわからないままに意のままにすることは出来ない。要はそういうことだね )

自分も昨日、ミサカに応急処置をする際に引つかかったポイントに思いをさせて、桐はひとことも返答を返さない白い少年に視線を落とした。

( 普通の能力者なら、気にする事すらないような話だったんだろうけど。万能に近い能力者だからこそ、その穴に落ちることになったか…… )

あらためて数瞬置いて、動きがないことを確認すると、

「まあ、これでとりあえず、おしまいかな」

それだけを呟いて、桐はきびすを返そうとする。  
だが、

闇に塗りつぶされた、『声』が響いた。

「何が」

「何が、オシマイだってエ？」

とある十二カヴォイス・ソーサリーの音声魔術士

58

Phase .

理解、出来なかった。

「そう、戦いに来たんじゃない。僕は君を、『説得』しにきたんだよ」

なぜこの『実験』に、関わってくるのか。

「さてと、説得するよ。あの『実験』を続けても君が今より強くなることは、そう、次のステージに上がるなんてことはない。だからもう、こんなこと止めてくれないかな」



なぜこの自分に、逆らおうとするのか。

「それでいい。全力でかかってきなよ『第一位』。その全てを  
いなしてやる。君には僕を倒せないって事実を充分以上に実感させ  
て、『説得』を受け入れてもらう」！

なぜこの自分と、対等に敵対できるのか。

思い浮かべた言葉を、唐突に、自分で否定する。

（ いや、違う）

なぜ コイツは、

「そっか、それは怖いね？まあちよつどよかった。こちらもそ  
ろそろ限界だったんだよ」

「君を殺さないように相手をするのはね」

この自分を、凌駕できるのか　　！！？

(コイツは、たかがレベル3。書庫には他に何一つ特筆バンクされていない平凡な空気使いでしかなかったはずだ、ありえねエ、ありえねエよ。なんでそんなただの風使いが、あんなよくわかんねエチカラでこの俺をここまで追い詰めてんだア?!)

嫌だ、と『一方通行』(アクセラレータ)は反射的に思っていた。

『一方通行』(アクセラレータ)には事ここにいたつても『負ける』という事がどんなものか分からない。

生まれてこの方、一度も負けたことのない『一方通行』(アクセラレータ)には『負ける』という事に対する耐性が一切ない。

当たり前だ、今の今まで『負けるかもしれない』と思うことすらなかったのだから。

それなのに、青年の声が聞こえる。

「これでとりあえず、おしまいかな」

『一方通行』(アクセラレータ)の自我とほぼ、同一化し、凝り固まっているプライドは、それを決して看過できない。

ピシリ、と、

ヒビが入った。

(ただの、)

(ただのただのただのただのただの！)

(全く取るに足らねレベル3ごときが学園都市最大最強のこの『一方通行』(アクセラレータ)に向かって……!!)

(ただの、風使いが 風?)

そこで『一方通行』(アクセラレータ)は、不意に気付く。

風。

「何が」

気付いてしまえば、

「何が、オシマイだってエ？」

おそろしいほどさりと、その声は滑り出していた。

「く、」

『一方通行』(アクセラレータ)は座り込んだまま笑う。  
振り返った黒ずくめの青年がいぶかしげな表情でこちらを見た。

「くか、」

そこで初めて、須臣桐の表情が驚愕へと変わる。

まだ何も起こしていない、この時点で浮かべる表情としては早すぎる気もしたが、『一方通行』（アクセラレータ）は気にしない。どうであろうともう遅い。

『一方通行』（アクセラレータ）の力は触れたモノの『向き』を変えらるというもの。

運動量、熱量、電力量。

それがどんな力であるかは問わず、ただ、『向き』があるものならば全ての力を自在に操る事ができる、ただそれだけの力。

「くかき、」

ならば、同様に。

この手が、大気に流れる風の『向き』を掴み取れば。

世界中にくまなく流れる、巨大な風の動きその全てを手中に収める事が可能　　ッ！

「くかきけこかきくけききこかきくこくくけけけこきくかくけけいえこかくけきかこけきくくききかきくこくくけくかきくこけくけくきくきこきかかか　　ッ！！」

『一方通行』（アクセラレータ）は見えない月を掴むように、頭上に手を伸ばす。

音を立てて風の流れが渦を巻く。

この場に響きわたるもはや耳を圧するほどの重低音は、大気が力任せに凝圧縮されていく、その証左だった。

その中で青年が何かを叫んだ気がした。人形とそのオリジナルが青

年に駆け寄るのも見える。

だがもう遅い。

すでに頭上には、まるで地球に穴が開いたかのような巨大な大気の渦が、球形を取って砲弾のように待機している。バチバチと辺りの砂利が舞い上がり、直径数十メートルに及ぶ巨大な破壊の渦が歓喜の産声をあげる。

（　　ンン？）

そこに少しだけ違和感が混じった　気がした。だが『一方通行』（アクセラレータ）は構わず、笑いながら殺せと叫んだ。

世界の大気をまとめあげた破壊の渦は風を切り、

風速120メートル。

自動車すら簡単に舞い上げるほどの烈風の槍と化して、見えざる巨人の手は容赦なく対象に襲い掛かった

E  
X  
T

⋮ ⋮  
◦ ◦

T  
O  
N

気付いたのは

「くか、」

いや、気付けたのは、掛け値なしに奇跡だった。  
喉の奥を鳴らすだけの、その時点では声としてすら認識するのが難  
しい、その音。  
だがその音を、

桐は『文字』として、受け取っていた。

（これは ダメだ、殺さずに止める手段が思いつかない ！）

『原作』知識に合致しすぎる情報に歯噛みしながら、桐は慌てて自  
分に向かってくる足音に振り返り、叫ぶ。

「こつちに来ちゃ、ダメだ ！」

しかしそれに、意味はなかった。

逆に足音の勢いが増してほどなく、桐の視界に同じ姿をした少女が  
二人、現れる。

同時に風が、背中側の『一方通行』（アクセラレータ）から吹き上  
がった。

「どこかそばにある物かげに」

そう、続けかけて、

(いや、それで何とかなるようなレベルじゃない！?)

「っ、こつちへ！早く!!」

だが言葉を切り替え、乱暴に手招く。

自らも二人に向かって駆け寄りながら、桐は構成を編み上げた。背後から、白い少年の声が響く。

「くかきけこかきくけききこかきくこくけけけこきくかくけ  
けいえこかくけきかこけききくくききかきくこくくけくかきくこ  
けくけくきくきこきかかか      ツ!!」

それは狂った笑いなのか、演算に伴う雑音なのか。

『一方通行』(アクセラレータ)は見えない月を掴むように、頭上に手を伸ばす。

轟!!と音を立てて風の流れが渦を巻く。

(編み上げる！)

桐は最速で脳裏に構成を思い浮かべる。

あくまで可能性の一つして、これを使われるケースも、想定はしていた。

だからそれに合わせるかのように、桐は空を振り仰ぎ、叫ぶ。

「我は裂く、大空の壁」



全力で展開された魔術が、中空に次々と、数十本に及ぶ真空の刃を作り出した。

桐の頭上に発生した刃は『一方通行』（アクセラレータ）にまとめられた巨大な大気の渦に突き刺さり、直後、それを形作る真空に流れ込む空気が乱流を描き出す。

事前の想定では、これでこの後に放たれる、烈風の槍の威力を大幅に抑えるつもりだった　　が。

（こちらの威力が　　足りてない！相手の規模が大きすぎる　　！）

戦慄しながら、桐は美琴たちに駆け寄る足を止める事なく、強引に次の構成を思い浮かべた。

バチバチと辺りの砂利が舞い上がり、直径数十メートルに及ぶ巨大な破壊の渦が歡喜の産声をあげる。

『殺せ』と、叫ぶ声が聞こえた気がした。

（少しでも、威力を削らないと　　！）

「我は砕く原始の静寂！！」

ほとんど二人に向かって飛び込むような姿勢をとりながら、頭上に振り上げた左手から直上へと破壊的な魔術を撃ち放つ。

その起点から空間が、歪んで跳ねる　　。

今度は空間爆砕によって無差別に広がる衝撃波によって、相手がこちらに向かって打ち下ろした烈風の槍をある程度、跳ね返せるはず

だった。

問題は、十分に構成を編めなかったため、望んだ規模には程遠いものになってしまっている事だったが。

（それでもないよりは、マシなはずだ）

視界に、ミサカの無表情と、美琴の驚いた顔が映る。

飛び込んだ勢いそのまま、押し倒すように彼女達を、桐は抱きしめ、地面に伏せさせる。

同時に、さらに防御のための構成を編む。

（護ら、ないと）

風速120メートル。

耳を弄する轟音が自分達を押し潰そうとする中、桐はそれだけを思っ  
て何かを叫んでいた。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

Phase .

風が死に、音が死に、大気が死んだ。

狂乱の後に創り出された、強制的な静寂。

操車場の地面を覆っていた砂利は風の塊に舞い上げられ、所々土の地面が見え隠れしている。

黒ずくめの青年は、驚いた事に攻撃を食らった場所から動いていなかった。

だがうつぶせのまま、ちからなく美琴たちに覆いかぶさり、ぴくりとも動かない。

そんな中、ちいさな少女の音が、彼の下から響いた。

「ア、アンタ、大丈夫……よね？」

「なにが、起きたのです　？とミサカは現状を問いかけます」

もぞもぞと、左手を桐の身体の前から取り出して、美琴は視界を確保する。

同じように、ミサカも反対側から顔を出す気配。

不思議なことに、青年を中心とした半径2m弱の範囲では、砂利はほとんど散ってはいなかった。

すうつ　と、金色の網のカケラが視界をかすめたような気がして、美琴は眼をしばたたかせる。

「　よかった……怪我は……ない？」

そこでようやく、青年の声が応えた。

倒れこんでいた状態から膝をつき、腕立ての要領で、崩れていた身体を持ち上げる。

「そんなことより、アンタは」

「巻き込んでおいて怪我させるなんて、冗談にもならないしね」

問われた言葉に答える事なく、青年はつぶやいた。

防御は間に合っていたものの、飛礫がかすっていたのだろう。

ぼたり、ぼたりと、紅い雫が桐のコメカミを流れ、ミサカの頬と美琴の髪を濡らす。

「あ……ごめん……」

世界がたわむような、くらりとした感覚。

震える指が、ミサカの頬を拭おうとして、戸惑ったように止まる。

（意識が）

そこで初めて、桐は自身の状態に気付く。

その心と身体はこれ以上ないほど、消耗しきっていた。

端的に言えば、会話を成立させる気力も残らないほどに。

（意識が……まとまらない……）

立て続けの大魔術に加えて、想定外の危機に対する限界速度での強引に過ぎる連続行使。

とどめに、最後に紡いだ防御力場は、青年の能力を超える負荷をその術者に与えていた。

断続的に視界が明滅し、自分が今何処にいるのかすら、たやすく忘

れそうになる。

(それでもダメ……だ。ここで終わるわけ、には……いかない！)

唇をかみ締める。

力がろくに入らない身体で、上がりきった息を無理に押さえ込みながら、桐は二人から離れ

「はっ、はあ、……くっ、はあ……」

よろめきながら立ち上がり、先ほどからこちらを見つめていた『一方通行』(アクセラレータ)と相対した。

すでに準備した手札はあらかた使い果たし、残りは状況にもぎ取られ、テーブルの外に放り出されている。

構成を編もうと意識するが、形を保てずにそれはむなしく霧散した。それに伴って響いた頭痛に、うめく。

「くうっ……！」

(息が……あがっている……。魔術はしばらく使えそうにない、か……)

頭をかすかに振って、崩れてしまった構成の残滓から意識を切り替え。

絶望的な現状を、青年はあらためて把握する。

(それでも……まだ身体は、動く、から)

そして桐は、『一方通行』(アクセラレータ)に向かって一步を踏

み出した。

「ちょっと 안타」

追いかけるように投げられた美琴の声を、上機嫌な別の声がさえぎる。

「く、何だ何だよ何ですかアそのザマは！結局デカイ口叩いた割には大したことねエなア！おら、もう一発かましてやるからさつきみてエにカツコ良くヒーロー気取ってみろつての！」

「……………」

その言葉には、桐は答えなかった。

ただ、必死に一呼吸分の余裕を作って、青年は、背後の二人に声をかける。

「ごめん、二人とも早く、ここから逃げてくれ」

どうするにしても、どうなるにしても。

事ここに至っては、青年が美琴たちに投げられる言葉は、それだけだった。

（情…………けない、ど…………るの、話じゃない、けど）

そうして言葉を吐き出してから、桐はくちびるを深く噛み切った。新たに鋭い痛みが走り、口の中に、鉄臭い血の味が広がる。明滅する意識をその痛みで強引につなぎとめて、ただ正面を見据えた。

それを見ているのか、見ていないのか。

『一方通行』（アクセラレータ）は夜空を抱くように両手を広げて頭上へ吼えた。

「空気を圧縮、圧縮、圧縮、ねエ。はん、そうか。イイゼエ、愉快な事思いついた。おら、ちゃんと立ってるよ三下。オマエにやまだまだ付き合ってもらわなきゃ割りに合わねエンだっつの！」

無数の鋼鉄のレールが砂利の上へ十字架のように突き立つ景色の中、暴風と狂笑が墓地に流れる死風となって吹き抜けていく。

瞬間、街中に流れる『風』が一点に集中した。

空気は圧縮される事で熱を持つ。

あまりの圧縮率で凝縮された街中の空気は、摂氏一万度を超える高熱の塊と化し、周囲の『原子』を、『陽イオン』と『電子』へと強引に分解する。

結果、『一方通行』（アクセラレータ）の頭上、100メートルの位置に、溶接のような眩い白光が生まれた。

### 高電離<sup>プラズマ</sup>気体の発生。

それは周囲の空気を呑み込み、一瞬で直径20メートル以上のサイズへと膨れ上がる。

周囲の闇の全てが、その純白の光によって絶滅した。核シエルターを丸ごと地下から掘り起こすような圧倒的な高熱。

それが、おそろしい事に中空で砲弾として、『安定』する。

真昼のような いや、それ以上の光に溢れた操車場で、『一方通行』（アクセラレータ）はひとり、勝利を確信した。

これを落とせば、普通の人間なら いや、そこらに転がっている電車の車体さえ、形どころか影も残らないだろう。事実、目の前に立つ青年は満身創痍の死に体でしかないし、人形と第三位の能力ではこれを防ぎきることはできない。白い少年は狂った笑みを深めて、暴風の巻き起こる空を見上げる。

だがその時。

轟！という風のうなり声と共に、いきなり頭上に浮かぶ球状の高電離<sup>プラスマ</sup>気体の形が、崩れた。

……。  
……。

E X T

T O N



「ごめん、二人とも早く、ここから逃げてください」

その言葉を聞いた美琴が最初に感じたのは、総毛立つような、怒りだった。

(コイツは、なんでそう)

自分一人で、抱え込もうとするのか。

(これは、『私』の問題なのに)

いつの間にか現れて、むりやり関わってきて。

殺されるはずだった『妹』を助けたうえ、学園都市最強を相手に、互角以上に戦って。

(そう、勝手に私たちを助けようと出てきて、勝手にかばってボロボロになって。今も、もう立っているのすら辛そうだっていうのに)

「それなのになんでまだ、私たちの心配なんかしてんのよ」!

押し殺した、声もれる。

傍らのミサカが、自分の顔にチラリと視線を向けるのを、美琴は感じた。

それと同時に、暴風と狂笑が、戦場に流れる死風のように吹き抜けていく。  
遅れて、溶接のような眩い白光が頭上から降り注いだ。  
周囲の闇が消え去り、高熱の余波が、美琴の皮膚に火傷のようなジリジリした痛みを植えつける。

「ッ！」

美琴の背骨が瞬間冷凍したように寒気を覚えた。

高電離気体。  
フラスコ

あれはもう、逃げてどうなるというものではない。  
落とされれば周囲数十メートルを、それこそ溶鉱炉のように溶かし、焼き尽くすだろう。

あれはもう人類では、そう、能力者を含めた個人の存在では、防ごうと考える事さえおこがましい、一撃。

にもかかわらず、美琴はひどく平静だった。

いや、厳密には平静とは言えないのかもしれない。

いまだに感情は目の前に立っている黒ずくめのわからずやのせいで煮えたぎっているし、頭上に振り上げられた破壊がどうしようもないものである事も、頭の冷静な部分で理解してしまっている。

それでも、美琴がパニックに陥る事はなかった。

（覚悟が決まるって、こういうことなのかしらね）

だって、もう、目の前の青年が終わってしまうということが、美琴には絶対に許せなくなってしまうから。

（見過ごせるわけ、ないじゃない）

美琴は、事態を打開する方法を、必死に考える。自分の能力が通用しないという事を再確認したところで、

ふと、とても簡単なことに気がついた。

そして、ミサカは。

「ごめん、二人とも早く、ここから逃げてくれ」

桐の吐いた言葉によってまた、このところ感じていたものと同じ疑問を突きつけられていた。

（なぜ、私たちの安全を彼は自身より優先するのでしょうか、とミサカは疑問に思います）

<sup>オリジナル</sup>美琴だけを優先するのならば、まだわかる。

だが、目前に立つ青年は美琴もミサカも全く同じように、身を呈して護ってみせた。

その青年の言葉が、勝手に浮かんでくる。

「僕は、あんな『実験』で君や君の姉妹が殺されるのが嫌なんだ。昨日も言ったんだけど、僕はそれを絶対に認めない。君らはこれ以上、一人だって死なせない　！」

（しかしミサカは、ミサカの価値は　　）

自分はただの、取替えが利く工業製品でしかない、とミサカは彼女にとつての事実をあらためて繰り返す。

「僕は僕の意味で、君の命に価値をつけてるんだ。これは当事者の君にだって曲げられないし、もちろん僕を含めた誰にも曲げさせない」

それなのに言い聞かされた言葉が脳裏によみがえって、ミサカの思考を止める。  
あげくに

「それなのになんでまだ、私たちの心配なんかしてんのよ　　！」

押し殺した声を耳にして、ミサカは自分の『姉』に視線をやった。  
どこか悔しそうに顔を歪めた、美琴の表情。

それを、『泣きそう』と受け取っている自分に気付いて、ミサカは息を止めた。

さらに、溶接のような眩い白光が頭上から降り注ぐ。  
周囲の闇が消え去り、高熱の余波が、美琴の皮膚に火傷のようなジリジリした痛みを植えつける。

（あれは、高電離<sup>フリスケイ</sup>気体　　？！あれでは、お姉様とあの人は　　）

めまぐるしく変わる状況。

様々な感情が、ミサカの中に溢れて止まらなくなる。

それを止めたのは、自分の手をぎゅっと掴んだ、美琴だった。

「アンタも……ううん、アンタ達も手伝って！」

暴風が吹き荒れる中、ミサカは美琴の簡潔な説明を受ける。

「なの、いいわね？」

説明というにはあまりにも端的な言葉の羅列を、しかしミサカは一度で理解してみせた。

「学園都市中に存在する風力発電のプロペラにマイクロ波を送って、プロペラを動かせばいいのですね、とミサカは確認を取ります」

「そうよ。そうすればあの高電離<sup>プラズマ</sup>気体や風のコントロールを『一方通行』（アクセラレータ）から取り上げる事ができるはずなの」

美琴自身はきつと意識していない、必死なその表情。

それを瞳に映して、ミサカはなぜか、渦巻いていた感情が落ち着いていくのを感じる。

それでも変わらず、ミサカは自身の命に何の価値も見出せない。

ボタン一つで作り出せる肉の体に、プログラム通り注入される無の心。単価十八万円のこの命など、壊れたところでいくらかでも替えが利くと本気で信じている。

でも、そんなものに価値を感じて、全部を投げ出して守ろうとする人が、いたから。

確かに自分の命には何の価値もないけれど、そんなちっばけなものが失われる事に本気で抗うひとがいて、そのひとを助けるために、『姉』が必死になっているから。

だからミサカは、それを『やるべき事』だと、率直に感じる事ができた。

ミサカ九九八二号は、ミサカネットワークに、発信する。自らも一角を担う、意識の集合体。

自分と同じ、1万を超える『妹達』（シスターズ）に、現在の状況、自身が抱える未整理の感情、そして、それでも選ばうと思えた選択肢、その総てを。

その上で、学園都市中に散らばる全てのミサカたちに、助力を依頼する。

（ミサカは、ここにいるひとのために、ミサカに出来ることがあるとお姉様に教わりました。そしてこのミサカは今、進んでお姉様の手助けをしたいと、感じています。その結論にいたる感情は複雑すぎて、ミサカには良く判りません。だけど、判らないまま、その過程全てを今から伝えます。『これ』を受け取ったミサカに、ミサカは問答無用で手助けを求めます　　！）

情報の波が、ミサカネットワークを駆け巡る。

レスポンスによるざわめきが鳴動して、発信したミサカをのみこむ。

結局のところ。

協力を拒んだミサカは、ひとりもいなかった。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

Phase .

60

694

学園都市の風が、大気が、大きく揺らぐ。

もともと、『一方通行』（アクセラレータ）の手によって、今夜の風は存分に荒れていた。

それなのに、さらなる空流が、学園都市の大気をかき混ぜる。

その流れを巻き起こしていたのは、風力発電のプロペラだった。

学園都市のある部分 第十七学区の操車場を中心として、突然、学

園都市全体に溢れかえったマイクロ波が、十万近い風力発電のプロペラ、その全てを干切れんばかりの出力で回す。

一つ一つは、それでも小さな風だった。

だが、十万という数は、都市そのものの大気を攪拌するには充分すぎる数となる。

作り出された小さな風は、『一方通行』（アクセラレータ）がベクトルを演算し、望む一点へと集約するよう『操作』した風に干渉し、溶け込み、それを彼にとって意味を成さないものへと次々に変えていく。

結果。

轟！という風のうなり声と共に、いきなり頭上に浮かぶ球状の高電離<sup>プラズマ</sup>気体の形が、ぐにやりと崩れた。

それはまるで、破れてしまった風船のように。

溜めこまれていた熱と電子が、まとめあげられていた圧力から逃れて中空に拡散をはじめめる。

「な………?」

目の前の『一方通行』（アクセラレータ）が、驚くのが見えた。

頭上の高電離<sup>プラズマ</sup>気体も同じ視界の端で、みるみるうちに弱体化していく。

（すごい……。あの崩れ方はきつと『原作』以上だ。レベル5が手を出すにああなるんだね……）



実際は、美琴と『妹達』（シスターズ）が同時にマイクロ波を起こしていたからこそその結果だったのだが。その場にいながら、状況を正確に把握できなかつた青年は、的の外れた感想を抱く。

こうして、頭上の高電離<sup>プラズマ</sup>気体の脅威は一時去つた、が。

それでも、状況は最悪のまま。

桐は、潰れるような倦怠感にまみれていた。

変わらず肩で息をしながら、いつこうに回復してくれない自分に苛立つ。

編み上げようとすると、はしから鈍い痛みと共にほどけていってしまう、脳裏の構成。

それどころか少しでも気を抜けば、そのまま倒れ伏そうとする身体を必死に支えて、桐は前を見据える。

（あと5分……いや、3分あれば……）

平時なら、気にする事もなく過ぎ去るような、わずかな時間。

だが、事ここに至つては、そんな猶予は存在しなかつた。

マイクロ波によってプロペラを操る御坂美琴とミサカ九九八二号。

二人に背を向けて立つ満身創痍の須臣桐に、風を操る思考と試行を一時中断し、邪魔な彼らに顔を向けた無傷の『一方通行』（アクセラレータ）。

また、少女達をかばうような立ち位置で対峙することになった、黒ずくめの青年と、白い少年が、視線を交わす。

「ハッ、そうかいそうかい。オマエはあくまで、そやって立ち塞がるってワケかア。面白エ。前言は撤回してやるよ。ちゃんとヒーローやってンじゃねエか」

舌なめずりと共に、じくじくとなぶるように。

得意気に話す少年の顔に、引き裂けるような笑みが浮かぶ。

「そンじゃそのまま死ンじまえよ、三下ア！！」

『一方通行』（アクセラレータ）の足裏が爆発した。

弾丸のような勢いで、白い少年は黒ずくめの青年の懐に飛びこんでいく。

振るわれる為に振り上げられるのは、右の苦手に、左の毒手

（終わった）

自らに向かって飛び出した『一方通行』（アクセラレータ）を視界に納めて。

桐の脳裏に浮かんだのは、その言葉だった。

構成は編めない、『音声魔術』は、使えない。

迫りくる脅威に向けて持ち上げはじめているこの両腕も、あの相手にとっては何の脅威にもならないだろう。

（結局、何も出来なかったね）

引き伸ばされた瞬間の中、桐は諦めと絶望に、その身を浸して

(要らない手を出した、だけで　　って)

いや、浸しきる寸前で、桐は見過ごせないものを見つけて、踏みとどまった。

御坂美琴と、ミサカ。

自身が倒れば、次に学園都市第一位が牙を剥くに違いない、その二人。  
血にまみれた二人が意識にちらついて

(ダメだ、させない　　)

青年の脳裏が、たった一つ、それだけで埋まる。

もう、原作に沿う、なんて小賢しい考えも、自分が死ぬ、なんて些細な事も、全てが消え去る。

そう、そんなことをさせるくらいなら

(　　僕が)

(僕が、お前を『暗殺』(スタップ)する　　)

生まれた空白の中心に。

ただそれだけの思考が、意思が、すみやかに『彼』に沸きあがった。後はその流れのまま。

行動だけを残して、自分を消し去る。

かすかに腰を落とす。

衣服をまとった左腕で、攻撃を受ける。

こちらの血管が破裂しているうちに、致命の掌打を放つ

無意識の上で、当然のように組み上げられる工程。

通用するかどうかという大前提すら、もう、その中にはなかった。

ただ、透明で絶対的な確信だけが、からっぽになった存在を満たす。

( 僕に 殺せないものなんかない )

もう、『一方通行』（アクセラレータ）の瞳の色さえ、見える距離に はない。

だがもうそこに、 はない。

ただ、残った行動だけを完遂するために、青年は左腕を振り上げ

振り下ろされる、『一方通行』（アクセラレータ）の右手。

死を約束する、苦手。

だが、

それは。

突然現れた、別の『右手』に、阻まれる

！！

その手は、文字通り苦もなく『一方通行』（アクセラレータ）の右手を受け止め、払った。

「……な、なアツ？」

あっけなく数歩よるめき、しりもちをつく学園最強。  
遅れて、どこか戸惑った『少年』の声が響く。

「あー、どう見ても危なさそうな感じだったからあわてて手を出してみたんだが、間違っていないよな？」

ぼりぼりと空いている左手で頬をかきつつ、『ツンツン頭の少年』は言葉を続ける。

「こりゃ、どついう状況なんだ？」

そこには。

上条当麻が、立っていた。

……。  
……。

EXT

T  
O  
N

「　　っ！！」

致命打を受けるために振り上げた左腕が空を切って、須臣桐は我にかえる。

直後、すぐそばに立っていた少年に気付いて、目を見張った。

（か、上条当麻　　！？）

だがもちろん、そうなるように手を打っておいたのは他ならぬ、驚いている桐自身だった。

なかば呆然としながらも、自分で誓った言葉を思い出す。

「　　それでも、何とかしないと。出来ることにすべきこと。自分が吐いた言葉を守るために、打てる手は全部打って、使えるものは全て使おう」

（そこまで言い切った以上、この世界の『主人公』（上条当麻）を引っ張り出そうなんてことは、最初の最初に思いついて手をつけたことではあつただけだ）

つい数時間前、今日の夕方の終わり。

病院で、カエル顔の医者を探ねて上条の携帯番号とメールアドレスを入手し、連絡を取っていた青年は、それでも信じられない思いで

ツンツン頭の少年を凝視する。

（結局電話もつながらなかったし、ダメ元で送っておいたメールにも反応がなかったから、もう無理だと思ってたっていうのに。まさかこんなタイミングになるなんて）

半分以上　いや、ほぼあきらめていた手札の登場に言葉を失う桐に、どこまでも普通の声色で少年は問いかける。

「　お前が須臣、でいいんだよな？あの娘達をかばってたし。何度も着信とメールくれたのに悪かったな。禁書目、いや、ウチの居候がいろいろとうるさくて電話に出れなかったんだよ。落ち着いてから連絡入れてみたけど繋がらなかったから、こうして直接来てみたんだが」

その、日常に立ち位置を置いた平和な言葉に自分を取り戻して、桐はにこやかな笑みを意識して口の端に浮かべた。

（　いいさ。運だろつがご都合だろつが、その他のナニカだろつが構わない。最初から使えるものは全て使っつて決めて、僕はここにいるんだから）

「ああ、ちゃんと僕は須臣だよ。すごいタイミングで来てくれたから呆然としちゃっただけでさ。だいたい上条もひどくないかな、」  
須臣、でいいんだよな？』ってなんだよ。一応クラスメイトだっていうのに」

後半は笑みを含んで。

さらりと、詐欺染みた言葉で応対する。



(僕がこっちに『居た』のが夏休み前……。だからまともにクラスメイトやった記憶、僕にはほとんどないし、上条にいたってはそのあたり『原作一卷』のせいで真っ白になっちゃってるはずなんだけど、ね)

浮かんだ罪悪感、悟らせないように胸のうちで噛み潰した。

「あー、いや、も、もう夜だしな。暗くてあんま顔が見えなくなってる」

『記憶喪失』にからむ話題はやはり上条にとっては鬼門なのだろう。頭上の高電離<sup>フリスケム</sup>気体のせいでいまだに真昼以上の光の溢れる操車場に、ツツツ頭の少年のしらじらしいセリフが流れる。

「そっか、とにかく」

そこにはわざとツツコミを入れる事なく、桐は用意していた台詞を舌に乗せた。

「何よりもまず、こんな場所に来てくれてありがとう。おおまかな状況は、メールで送ったとおりだよ。『僕らの大事な後輩たちがひどい目にあっているから、助けるために手を貸してほしい』んだ。

詳しい事情なんだけど」

「ああ、訊いといて悪いが、それはいいや」

「え？」

続けようとした説明をさらりとさえぎられて、桐は言葉に詰まった。

「言つたる？危なさそうな感じなのは見ただけでわかつちまつたし、お前があのお双子？をあいつから本気でかばっていたのも俺は見  
た。その上で手を貸してほしいと言われたんだ、なら  
」

当然のように、『とある魔術の禁書目録』の『主人公』は拳を握る。

「  
手助けしない理由はないだろ？」

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

6  
1

P h a s e .

「  
ああ？何だそりゃア  
」

どこか緩くなりかけた雰囲気を引き裂いたのは、地の底からわいてくるような、学園都市最強のセリフだった。

「何俺を放つといてクチャクチャしゃべってやがんだア!!!?」

駄々のように振り上げ、下ろした手足が、瓦礫を吹き飛ばした。

それは身構えた上条と桐たちを危うくかすめ、後方の瓦礫にぶつかってひどい騒音を撒き散らす。

「う、わ　考えるよお前、あんなもんが当たったらお陀仏だぞ!」

白い少年に向かって声を上げる上条に、桐はさとすように平静な声をかけた。

「もうここはそんな場所なんだよ。ああ、ちなみにあいつには能力のおかげで、『右手』以外で触ったら問答無用で死ぬから」

それなんて無理ゲー!?!となにやらショックを受けている上条。

「まあ、それでも始まったら『切り替えて』くれるんだろうし、ね。」

そんなツンツン頭の少年から視線を外して、

「さて、『一方通行』(アクセラレータ)」

桐は『敵』に視線を向ける。

「このやり口にあんたが今、僕に何を思っているかはなんとなくわ

かるけど、それも含めて今、この場にあるのが現実だ。受け入れてくれるとうれしいな？」

返答を待たずに、言葉を重ねる。

「ああ、でも『三下に三下の救援』、『どれだけ小物がタカろうが結果は変わらない』、だったかな？それにしたって、さすがにこの状況は文句を言われても仕方ないかな、とは思うけど」

朗々とした語り口。

この期に及んで安っぽい皮肉を交えながらのそれは、しかしどこか儀式のような荘厳さを帯びていた。

この長かった二日間の、終わりを告げる、儀式。

「『説得』するよ。『実験』を、止めてくれ。もう彼女たちは、あの子たちはこれ以上、一人だって殺させない。ふざけた実験は、今ここで止めさせてもらおう」

何度も

昨日と今日だけで、本当に何度も繰り返された『説得』。そのあまりの内容に、上条の顔から表情が抜け落ちる。桐はただ、まっすぐに『一方通行』（アクセラレータ）を見据えていた。

そしてその『説得』に、一度も首を縦に振らなかった『学園都市最

強』の顔に、裂けるような笑みが広がっていく。

「面白エよ、オマエ」

『一方通行』（アクセラレータ）は拳を握った。

「最っ高に面白エぞ、オマエ！」

そうして、夜空に吼えるように絶叫した『一方通行』（アクセラレータ）は、少女を守るように立つ、二人に向けて突貫した。

白い少年の足裏が爆発し、砲弾のような速度で迫る。

単純な反作用として『一方通行』が居た場所に残された衝撃が、ごっそりと砂利を抉り取って爆散する。

おそらく今日一番の速度での、微塵も容赦のない突貫。

だがそれは、悲しいほど直線的な機動だった。

ほどほどにケンカ慣れた少年が、狙ってカウンターを取れるくらいには。

「どうも手加減は必要なさそうだな、歯を食いしばれよ」

『切り替え』 た上条の獰猛な声が、『一方通行』（アクセラレータ）の耳に響く。  
右下から、左上に振りぬくように。  
今夜、いや、文字通りこの世界で初めて。

直接的な打撃が、『一方通行』（アクセラレータ）の顎に突き刺さった。

「が、はアアッ……」

『反射』を無効化して、到達する上条の『右手』。  
飛び込んだ勢いを殺されて、白い少年の身体が中空に浮き上がる。  
そこに滑り込む、黒い影。  
衝撃に意識をシェイクされながらも、『一方通行』（アクセラレータ）はその動きを嗤った。  
あのツンツン頭がどんな手品を使ったのかは知らないが、『反射』自体は利いている。  
かさにかかって攻撃してきたのなら、それは『反射』してやれる。  
いや、なんなら、『ベクトル操作』で上乘せして破裂させてやることだって……！

「我打ち消すは魔神の足跡」

もう構成は痛みを伴う事なく、明確に脳裏に編み上がる。すでに、あれだけ欲しがっていた時間は過ぎ去っていた。加えて

（その『構成』は、ずっと『視て』いたんだ　！）

常時発動する『反射』の『領域』を、ある種の『結界』と、捉えて発動した魔術は、その『領域』を打ち崩す。

（な、ア……！？）

デフォルトで発動させていた『反射』……脳裏で常に為されていた演算が、割り込まれた『ナニカ』によって強引に打ち消される、感触。

『一方通行』（アクセラレータ）の驚愕は、声にならないまま。

間をおかず、そつとみぞおちに掌がそえられた。

視線が交錯する。

吹き飛びかけている白い少年の目には愕然とした光が。

掌をそえた黒づくめの青年の目には、確信を帯びた意思が宿る。

右足に重心を。

振り上げるところか、浮かせることすらなく。

地面に足裏をつけたまま、ただ、全体重を持って踏み込まれた脚が大地からの反発を手に入れる。

その勢いを身体の中に溜めに溜めて。

臨界で、力を解放する

そうして、青年の末端から身体を縦に奔った力は、そえられた右掌を通して、

余すところなく、『学園都市最強』に叩き込まれた



E  
X  
T

⋮ ⋮  
◦ ◦

T  
O  
N

身体の内部　内臓そのものに打点をおいた掌打、その威力は、結果として対象にうめき声の一つもあげさせることなく、ただ、悶絶させて意識を奪った。

鈍く、深すぎる打撃音が辺りに響き

桐と上条は、もつれ合って砂利まみれの地面へと倒れる。

（直前に、『幻想殺し』（イマジンプレイカー）で無効化されてるところを『視て』なきゃ、成功率は四割切ってたんだろっけど）

成功した構成に思いをはせながら、桐は落下の痛みを甘受した。

「つてて。まさかお前まで突っ込んでくるとは思わなかった」

「まあ、チャンスだったしね。正直、もう二度とやりたくないけど」

上条が身体を起こすのにあわせて、桐も視線をあげる。

拓けた視界には、白い少年がぐったりとした状態で寝転んでいた。

手近な小石を拾って、『一方通行』（アクセラレータ）の靴に向かってそっと投げ、『反射』が切れているのを確認する。

「ん、何をしてるんだ？」

石ころがトン、と『一方通行』（アクセラレータ）のブーツにふれ、何の影響もないままそこに転がるのを見届けて、上条が尋ねた。

「ちゃんと終わったかどうかの確認だよ。でも、どうやら無事に終わってくれたみたいだ」

それだけをつぶやくと一気に身体から力が抜けて、桐はズルズルとその場に座り込む。

そのまま上条を見上げて、桐は口を開いた。

「あらためてありがとう。来てくれなきゃ、終わったたのは僕達の方だった」

まっすぐな感謝。

だが、照れたような様子も見せずに、上条は答える。

「いや？結局俺はほとんど何もしてないだろ」

本気でそう思っているような返答に苦笑を浮かべながら、なおも青年が言葉を続けようとしたところで

「あ、あ、アンタは……！」

御坂が、上条たちのもとへと駆け寄ってくる。

「な、なんでアンタがここにいのよ!？」

「え、ええ!？」

狼狽する上条。

(ああ、記憶喪失のせいで彼女が誰だかわかってないんだね…)

状況を一人把握して、桐はツンツン頭の少年に助け舟を出す。

「僕のクラスメイトだよ。僕が無理だった時に後を頼もうと思って連絡入れておいたんだ。それに上条だつて面識あるだろ?だからメルに『僕らの大事な後輩たち』なんて書き方をしたんだし」

「だ、大事な!?!な、なにいつてんのよアンタは…….というかく、クラスメイト?!アンタらが?!え、ええ、い、一体何がどうなつてんのよー!?!?」

「うわわっ!?!」

「まがりなりにも恩人だというのに、照れ隠しに即攻撃するお姉様はいかがなものかと、ミサカは嘆息します」

なぜかビリビリイ!と紫電を撒き散らす美琴と、それを器用に右手で弾く上条。

そして、少し離れた場所で無表情にそれを見守るミサカ。

殺伐としていた空気が一気に取り払われていくのを感じて、桐は肩を落とす。

(まったく、無様な話だね)

同時に、自分の不手際にため息をついた。

疲れきり、思い出したように鈍痛が全身をさいなむのを受け入れながら、ひとりごちる。

（それでもとりあえず、これである程度ヤマは越えたかな。事後処理には相応に時間かかるだろうし、狙い通りにことが運んでくれるかどうか経過を見なきゃはつきりとはしないけど）

思索を止めて、桐は携帯電話を取り出す。

あれほどの目にあいながら、多少汚れるだけで正常に機能しているその電話にはもう驚く事もなく、青年はカエル顔の医者電話番号にコールを入れた。

「もしもし、僕です。救急車を」

見回して、治療が必要そうなのは自分だけだという事をあらためて確認して、桐は言葉を続けた。

「一台と、そちらの病院とは全く関係のない病院に運んでくれる救急車を一台回してもらえませんか？ ええ、そうです」

続けて、いくらかの事務的な会話を済ませてから、青年は報告する。

「退屈な前座は無事に終わりました。後はお願いします」

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

62

Phrase .

どうやら、眠ってしまったらしい。

驚くほどクリアに浮かんだその認識を受け止めて、桐は身体の各部をほとんど動かさなのまま、ひとつひとつ確認していく。

右脚、左脚、腹部、胸部、左腕、右腕、頭部。

結果は、ひどいものだった。

もうあれから何時間かは経っているはずなのに、余すところなく痛みを伝えてくる神経にうんざりしながら、青年は目を開く。

視界に映ったのは、目を閉じた時と同じ、暗い病院の個室だった。天井のファンから流れる、弱い冷房の音が耳朶を叩く。

（まずいね、僕、入院費なんかまともに払えるあてがないのに個室なんて……）

やくたいのないことを思い浮かべながらさまよわせた視線が捉えたのは、常盤台中学の制服を身に着けた女の子だった。それには特に驚きを感じる事なく、桐はゆるい思考を続ける。

（ああ、『原作』にもこんなシーン、あったよね。たしかミサカが）

「起きたみたいね」

だが思考を断ち切ったのは、腕組みをして不機嫌そうにこちらを見下ろす少女の、どこかつんとした言葉だった。

なぜか肩透かしを食らったような気分で、青年はぼつりとその名前を口にする。

「え、御坂、さん？」

「他の誰に見えるってのよ。あ、いいわ別に答えなくて」

見当つくし、と少女は肩をすくめる。

意外と似合っているその仕草におかしさを感じて、桐はちいさく笑みを浮かべた。

「まあ、笑えるなら大丈夫そうね」

「大丈夫そうって？」

「アンタ、ケータイ握り締めて座り込んだまま動かなくなったのよ。話しかけても全然反応しないし。自分で呼んだ救急車のベッド占領したのも覚えてないでしょう？」

問われて、桐はうつすらと頭に残る記憶を振り返る。

「いや、担架で運ばれて救急車にのせられたのはなんとなく覚えてるかな。あの時は身体が動かないっていうか、動かそうと思うことすらできなかつたから……」

一種の虚脱状態、だったのだろう。

カエル顔の医者との電話がすんだ辺りから、桐の記憶は怪しくなっていた。

さかのぼってみても断片的な無音の映像と、同じくどこかの瞬間瞬間の画像しか思い出せない。

「どうも恥ずかしいところを見せちゃったみたいだね。早めに忘れてもらえる嬉しいかな」

「バカ。そんなことより今、体は動くんでしょうね」

言われて、桐は左手を持ち上げる。

もともと感じていた鈍痛に、さらに激痛が上塗りされたが、青年はそれを素知らぬ顔で隠し通した。

「そうだね、問題はないと思うよ。こんな感じに」

軽く握って開いて見せてから、たったそれだけで震えてしまっているのを悟らせないようにシーツの下へともぐりこませる。それには気付かなかつたのだろう。

美琴は少しだけ声を明るくして、話を続けた。

「そう、それならよかった。あのお医者さんもあと4時間で健康体って言ってたわよ」



「あと4時間で健康体……?」

「ええ。病院についてからアンタ、あのお医者さんにずいぶん大仰な処置受けてたみたいだし。とりあえず、肋骨はいつちやってたつて話だったから、なにか特別な回復促進剤か医療用ナノでも使つてもらつたんじゃないの?」

リコンビナント線維芽細胞増殖因子 2 製剤をはじめとする（現実ではまだ実用化されていない）タンパク剤や、もはやSFの領域に足を踏み入れる治療法をさらりと引用する少女に、桐はすこし、うんざりとした声をあげた。

「うわあ……ついに僕の身体も最先端謎テクノロジーに……」

ベッドに横たわったままうめく青年に、美琴はすこしだけ強めの口調でたしなめる。

「何言つてんのよ。あの子だつて似たような治療受けたんでしょ? だいたい、謎つていうならアンタの治療の方がよっぽどじゃない。なにせ、学園に7人しかいない『超能力』（レベル5）より特別なチカラなんだから」

「あ、ああ、そうだね。失言だった、撤回するよ。それで彼女は……?」

「さっきまでここにいたわよ。なんか聞きたいことがあるつてあのお医者さんが連れて行つたけど、そのうち戻つてくるんじゃない?」

「そうなんだ……」

そうして、桐は大きく息をつく。  
会話が途切れて、また、沈黙が病室におりた。

「……………」

「……………」

よそよそしくもなく、居心地が悪いわけでもない。  
ただ、冷房のファンの音だけが響く、ゆるい沈黙。

(……………あれ?……………)

だが、それに違和感を覚えて、

「ええと、御坂さん?」

数分の後、桐は口を開いた。

それから、少しだけ苦労して半身を起こす。

そんな青年に、美琴は不思議そうに問いかけた。

「……………どうしたのよ?寝てなくていいの?」

目覚めてからずっと、壁に背中を預けてこちらを見ている少女の表情に桐は注目する。

どこかきよとんとした、普通の表情。

そのなかにおかしなところをひとつも見つけられずに、青年は戸惑う。

だが、その顔がだんだんいぶかしげになり、そして、

「だからどうしたのってきいてるじゃない。アンタ、耳でもおかしくなってるの?!」

彼女は一步、こちらへ向かって踏み込んできた。そして今度は急に、美琴は心配そうな顔になる。

「うそ。まさかホントにどこかおかしいんじゃないでしょうね。患者は患者らしく、自分の状況は正確に」

「い、いや、そうじゃない、そうじゃないよ」

わけがわからない。

だいたい近くなった距離で、桐は大きく首を振ってみせた。

ただそれだけのことで、激痛が走って、背筋に冷たい汗が浮かぶ。

それでも声の調子を変えないことに細心の注意を払いながら、桐は美琴に問いかけた。

「そうじゃ、なくてさ。なんで、何も聞いてこようとしないのかな?」

「なんで……って?」

言っていることがわからない、といった表情を浮かべる眼前の少女に、青年はじれて言葉を続けた。

「知りたいこと、いっぱいあるだろう?だって僕は、マトモな説明をひとつもせずに勝手に君らの事情に首をつっこんで、好きなように事態をかきまわしたんだよ?」

それは比較的、状況の深いところに触れる言葉だった。

それなのに、美琴は表情を揺らす事なく淡々と答える。

「そうね。わかってるじゃない」

「その上、止めようとした君にだましようみたいだな真似までして」

開いた口から、思った以上に言葉が滑り出てきて、桐はうろたえる。

（なんで僕、こんな事まで口走ってるんだ……？相手が触れてこないのなら、むしろ好都合だっていうのに）

そんな青年の動揺を知らぬげに、美琴はやはり、余裕のある笑みを浮かべた。

「いいわ。じゃあ説明してよ。最初から最後まで、全部」

軽く投げられた言葉に、桐の顔がさらに引きつる。

「……！？え、えっと……」

言葉に詰まる桐。

（いや、全部って言うても何を話そう？出来るだけ、状況に即した説明をしないと。そもそも、僕が学園都市の実験関係を知ってた理由も適当にでっち上げなきゃまずい……）

慌てて、思考を振り回そうとしたところで

「ちゃんとつじつまが合ってたなら、信じた振りしてあげるわ」

「……っ」

さらに意外な言葉を重ねられて、今度は思考ごと、青年はだまりこむ。

先のはまた違う沈黙が流れ

「ふふっ、アンタ、すごい力オしてるわよ。目を白黒させるってこということなんだってカンジの」

「な、え、ええ……!?!」

あっけに取られる桐に、美琴は笑みを向ける。

「ようやく一矢報いれたってことなのかしらね、これ」

一瞬だけ、青年と視線を合わせて、しかしふい、と少女はあさっての方向を向いてしまった。

戸惑いながら、桐は口を開く。

「それって、どういう……」

「そのままの意味よ。最初から最後まで状況の説明。ちゃんとつじつまが合ってたなら信じた振りしてあげる。後回しにするなら、それでも構わないわよ」

桐からは、横顔しか見えない、微妙な位置に立って。

少しだけ早口になりながら、美琴は続けた。

「さすがにあれだけ一緒にごたごたに関わったら、わかるわよ。アンタがとんでもなく危ない場所にひとりで立つてるってのは」

照れたような、それでいてひどく真摯な口調。

「そんな反則染みたチカラを持つてて、なのに学園都市のランクには触れないで。アンタにはあのバカと同じ　　ううん、もしかしたらそれ以上の『事情』があるのよね？」

彼女が抱く確信は、これ以上ないほど真実の輪郭をなぞっていないが、同時に根本で間違っていた。ようやく状況を把握して、

「そんなの、無理に聞けないじゃない」

(この子は　　)

優しすぎる、と桐は思った。

(あれだけ好き勝手に怪しい真似した僕からこれ以上何も聞かずに、この話を終わらせようとするなんて　　)

疑念は当然あるのだろう、いや、ないわけがない

桐自身、場当たりに思わせぶりな行動を重ねてきたのだから。それなのに、その上で彼女は何も聞かない、と言っているのだ。提案を反復して、この申し出に乗るのがどれだけ楽なのかを思い知る。

(どのみち、僕自身が『現実からの来訪者』(トリッパー)である

事を波風立てずに彼女に上手く説明する方法は思いつかない、か…  
…)

葛藤すらできずに、結論は出てしまっていた。  
そして、精一杯の笑みを浮かべて桐は答える。

「じゃあ、僕はもう、何も言わない事にするね。ありがとう」

虫のよすぎる自分の返答に、自虐が、青年の胸を満たす。

それでもでっち上げの話カヴァーストーリーを口にしなかったのは、少しでも誠実でありたい、という思いからだった。

(何が、誠実だよ。本当のことはほとんど伝えないのを選んだくせに……)

そんなことにすら罪悪感が、明確な痛みを胸に刻んだ。

それに気付かないまま、

「礼を言われるようなことじゃないわよ。でも、そうね」

自らの不器用な申し出を受け入れた青年に、美琴は笑みを深める。

「アンタが、もし困るような事になったんなら。アンタの『事情』  
に私をちゃんと巻き込みなさい。借りを作ったままじゃ気分悪いの  
よ」

それは違う、と桐は口を開きかける。

(これはあくまで、僕が勝手に手を出して事態を　もしかしたら  
運命と呼ばれるべきものを　ねじまげてしまったって、それだけ

の話なんだ……)」

何をおいても、こんな事を美琴に『借り』だと思って欲しくないと、桐は痛切に感じる。

だがここでそんな反論を口にするのは、美琴の好意に泥を塗るような行為だった。

「……………」

結局、否定も肯定も出来ないまま、その場に生まれた沈黙が肯定の役割を果たしてしまう。

「じゃ、この話はこれで終わりね。私もいい加減寮に戻んなきゃ。たぶん黒子が上手くやってくれているとは思っけど……。そういや、アンタはこれからどうすんのよ?」

「え、どうする……って?」

少しだけ戸惑ってから、

「このままここでぐっすり寝るつもりだよ?」

思いついた軽口を、そのまま口に出す。

美琴の顔が、やれやれと言いたげにしかめられた。

「もう、つくづくアンタはそんな感じなのよね……」

あわてて、桐はまじめな顔を作る。

「ごめんごめん、なんていうか条件反射な気がするね、これ。それ



で、これから、か」

良くないクセだ、とあらためて自分を戒めながら、桐はそれに思考を振り分ける。

実際のところ、そのあたりは一応、考えてはあった。実験をいったん収束させる事が出来た、その後のこと。

(巻き込むつもりはなかったんだけど、こうなったら巻き込まない方が不義理になっちゃうか……)

そう思つて、伝えるつもりがなかった内容を、桐は口に出す。

「僕らはさ、一応『実験』を止めたよね。あのお医者さんの言う、『退屈な前座』をやりきつたつて意味で」

「そつね、それが？」

「でも、実験が止まっただけじゃ『この話』は終わらないと思うんだ。雑多なごたごたは依然として山積みになつてる、だから、さ

」

「楽しい楽しい『本番』にも手を出せないかなくなって思つてるんだ。さしあたっては、絶対に存在するだろう、『彼女達』を素直に解放しない人たちの『説得』、とかね」

まるで、道化のように。

ぱたぱたと大げさに手を振りながら、桐はこれから取るうとしてい  
る行動を美琴に明かした。

（本当、どうしようもない）

後ろめたさにまみれた心と、痛んだ身体の双方が悲鳴を上げる。

身体の痛みか、心の痛みか。

どちらなのは、もう判らなくなっていた。

……。  
……。

E X T

T O N

常盤台中学、学生寮。

潤沢な予算に支えられて幾重にも張り巡らされたその寮のセキュリティを抜けるのは、ほぼ不可能、ということになってはいる。それでも、蛇の道は蛇、とでもいうべきか。

(何度も使うのは、あんまり具合よくないんだけど……)

代々、生徒間で寮内に伝統として伝わるセキュリティの薄い抜け道を、美琴は能力による電子的欺瞞を併用して突破していた。

人気のない寮内を、今度はセキュリティシステムではなく、巡回してくるかもしれない寮監の存在に注意しながら走る。

運よく誰ともはちあわせないままたどり着いた自室のロックを能力で外し、美琴はできるだけ音を立てないように部屋に滑り込んだ。

(よし、到着)

なじんだ部屋の空気に迎えられて、そこでようやく美琴は肩の力を抜く。

廊下と同じ暗闇の中、砂でざらつく自分の身体を意識した。

(お風呂入りたい……でも、さすがに黒子が起きちゃうわね、朝まで我慢か……)

せめて着替えだけでもしようと、美琴は制服のサマーセーターを脱ぎ捨てた。

それだけでとても重いものを降ろしたような気分になって、美琴は

ひとりごちる。

(本当、とんでもない一日だったわね)

今日、この目で見たものは、思い返しても夢かと疑うほど、非現実的な光景ばかりだった。

(学園都市第一位の全力に、それを相手に翻弄した『原石』 須臣の能力。アイツの『右手』も合わせれば、下手なタブロイドなら半年は持ちそうなネタよね……)

自分をかばうように立つ、黒ずくめの青年とツンツン頭の少年の背中を思い出して、美琴の頬がかあつと熱くなる。

(な、なにかんがえてんのよ、私)

同時に、物思いにふけてしまっていたのに気付いて、美琴はかぶりをふった。

何度かそれを繰り返して、気を取り直す。

(さて、と)

まとわりつく、砂利の感触にうんざりとしながら、暗闇の中、サマーセーターを手探りでランドリーパックに突っ込み、同じくいつもの場所に置いてあるはずの、替えの下着とパジャマの類を探る。だが、使い慣れたサイドテーブルに手が触れたところで、ぱっと部屋の灯りがついた。

「今夜はずいぶんと宵っ張りですね、お姉様？」

「黒子……」

そこには当然のように、茶色の髪をツインテールにくくった、自身のルームメイトがいた。ベッドに座った彼女は、言葉を続ける。

「いえ、今夜も、でしょうか。寮監を追い返すのもこれでなかなか骨の折れる作業ですよ」

瞬時に美琴は、完璧な笑顔を作って答えた。

「悪かったわね、今度何かで埋め合わせするから。それと起きてるならいいわよね、汚れてるからお風呂使わせてもらおうよ」

眠るときに身に着けるネグリジエではなく、いつでもどこにでも出かけられそうな常盤台の夏服をまとったその姿には触れることなく、美琴はユニットバスの扉を押し開けてその中へと入る。

それ以上の追及をさらりと諦めて、黒子は『いつものように』八割本気、二割冗談のセリフを投げた。

「よろしければお背中お流し」

「間に合ってるわ。って何度言わせんのよ。そんなことよりアンタ、こんな時間まで起きていいの？しばらくはあっちの仕事で朝早いつていってなかった？」

皆まで言わせず、『いつものように』にべもなく切り捨ててから、美琴は意識して『表側』にしか派生しようのない話題を振った。驚くほど自然に、黒子は答える。

「何時まで起きているのか、なんてことは黒子が勝手に決めること  
です。それに多少眠くても問題ありませんのよ、明日の捕り物は  
『新入り』さんのおかげで楽ができそうですから」

ユニットバスのドアを閉めて、プリーツスカートを落とす。  
気になる言葉を耳にした気がして、美琴は尋ねた。

「え、『新入り』？黒子のトコ、新しく誰が入ったの？」

「ああ、いえ、須臣さんですの。一応先輩、とお呼びしたほうが  
いいのかもしれませんが」

なぜか先輩呼びわりする気が起きませんのよね、あの方は、と黒子  
は続ける。

遅れて、バスルームから少し裏返った声が響いた。

「え、す、須臣!？」

「……………どうかされましたの、お姉様？」

「え、だってアイツ」

何か致命的な言葉を吐きそうになって、美琴は自分の言葉を必死に  
押しとどめた。

(『風紀委員』(ジャッジメント)に正式加入するなんて話、聞いて  
ないわよ?!そもそもこのところのアイツにそんなヒマなんてな  
かったはずなのに……………!)

代わりに胸の内で絶叫する美琴に

「昨日付で梓外のお手伝いさんから晴れて『風紀委員』（ジャツジメント）の正式な一員ですの。もっとも手続きはこちらでしましたし、正式といっても研修扱いの仮免さんなのですけれど」

どこか楽しそうに、黒子は言葉を重ねる。

いろいろと見過ごせないものを感じながら短パンと下着もつけて放り込み、シャワーのコックをひねるのをいったん保留して、美琴は口を開いた。

「ねえ、黒子」

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

63

Phase .

彼らは、ひどく追いつめられていた。

いつもと同じ、大したことのない仕事だったはずなのに。  
荒々しく、5対の足がじめついたコンクリートを蹴りつける。  
学園都市の路地裏で、それぞれの足に蹴りだされた身体が加速して  
いく。

だがしかし、全く足りない、とその中の一人、リーダー格の青年は  
思っていた。

心のほうは少しでも前へ、前へと渴望しているのに。

こんな速度では、とても足りない。

打ち捨ててきた荷物に思いをめぐらすことなく、ただ、路地の奥を  
目指してジグザグに駆ける。

(くそっ……くそがあー!!)

心中で悪態をつきながら、彼は走った。

早く、早くとせかす脳裏の片隅で、こんなことになっている原因を  
思い出す。

(途中までは、何も問題はなかったのによ……)

そろそろ2ケタに届こうとするこの8人組でのこの『仕事』は、こ  
れまでにないほど手際よくいっていた。

恐らく、『リハーサル』よりも速かったそれに、感心すらしたのだ。  
ケチがついたのは、無事に車に乗り込み、ずらかりはじめてからだ  
った。

突然ワンボックスの進路上、目の前に茶髪のツインタールが現れ、

何の前触れもなく、左側のタイヤが前後同時に破裂して、

バランスを失った車が空き店舗に突っ込んだところで、



道の向こう側から、『警備員』（アンチスキル）の車が向かってきた。

あまりといえはあまりの悪さに吐き気がする。

泡を食って逃げ出したが、一緒に路地に駆け込んだ時には、仲間はずりに減っていた。

だが、残った奴らの心配をする余裕はない。

さつきからずっと、ぞわぞわとこの背筋に走っている怖気は……。

「『風紀委員』（ジャッジメント）ですの！！器物破損、および強盗の現行犯で拘束します！」

それは、さつきと同じように。

また突然目の前に現れた、茶髪ツインテールに常盤台中学の夏服をまとった少女は、左足にそえるように右腕を突きおろし、その腕にかかった『風紀委員』の腕章を左手で強調して宣言する。

「て、テレポーター空間移動能力者あ！？」

仲間の中の誰かが、悲鳴のようにうめく声が聞こえた。そうして一瞬、足を止めた集団に、

「ええ、そうですよ。どうぞ大人しくお縄につきなさい！」

凜、とした口調が投げかけられた。

青年の傍らにいた2人が、いきり立つ。

「っざけんな、能力者だろうがここでたたんじまえば一緒だろう…」

逃走の興奮も、彼らを後押ししていたのだろう。叫びとともに、華奢な少女に襲い掛かる。

「あらあら、しつげのなつてない犬みたいですね」

だがそれは、明らかに失策だった。

叩きつけようとした拳、正確には手首の部分をするりとつかまれ、飛び込んだ勢いを利用して逆側にひねり落とされる。

もうひとり、そのついでのように振りだされた膝にカウンター気味に鼻をつぶされて、みつともなく転げまわっていた。

鈍い音と共にあっさりとなり無力量化されていくふたりに、青年は歯噛みしていた。

（ちきしょう……）

あの女は、抑えこんでいる一人目の意識を落としたら、すぐにでもこっちに向かってくるだろう。

こうしている間に後ろからだって、追手は迫ってきているに違いない。

（こんなところでモタモタしてたら……）

逡巡は、一瞬にも満たなかった。

哀れな仲間を見捨てて、別の手近な路地へと駆け込む。遅れて残りの二人も、それに続いた。

「ハア、ハア、ハッ……」

4つ、5つと。

目の前に現れる曲がり角を、でたらめに走り抜ける。

(そろそろ逃げ切れた、か……?)

息が上がってきたところで、ようやく広い道へとでて、青年は走る速度を緩める。  
だがそこには、

片手を耳にあてた青年が、ひどく自然に立っていた。

「ああ、ちょうど出て来たよ。さすが初春さんって感じだね、待機してくれてた佐天さんにもよろしく言っておいて。うん、それじゃ後で」

その耳につけたイヤーフックタイプの無線で通話を終わると、黒髪黒目の青年はこちらへと向き直る。

生成りだるうか、薄い色のチノパンツにやはり白を基調としたトッブスの、特にどうといった特徴のない、どこにでもいそうな青年。その青年はベルトループに吊り下げられた『風紀委員』の腕章をつまみあげ、それをおざなりに示しながら、逃げ出してきた三人に声をかけた。

「一応、『風紀委員』(ジャッジメント)だよ。拘束させてもらう。何も私刑を執行するわけじゃないから、大人しく従ってくれると嬉しいんだけど」

「ふざけんなあ!！」

全く武装しているように見えない手ぶらの青年にそう告げられ、リーダー以外の2人は絶叫する。  
思い出したように伸縮式の警棒を取り出したところで

「やっぱダメか　　我は流す天使の息吹」

つぶやきの直後、不意に巻きあがった突風が、猛っていた二人を容赦なく吹き流し、路地のじめついたコンクリート壁へと叩きつけた。

(じよ、「冗談じゃねえ……あんなの相手してられるかよ……!」)

青年が視界に入った直後、逃げるために数歩動いていたためにたまたまその効果範囲から逃げていたリーダー格の青年は、それを目の当たりにし、戦慄しながらも駆け出す。

「あ、そっちはあぶな……」

だが、どこか焦ったような『風紀委員』の青年の声と、

「ったく、ツメが甘いのよ!！」

初めて聞く女の子の声が聞こえ

響いた電磁音が、その意識を根こそぎ刈り取った。

「それにしても、彼には悪いこととした気がするね……」

引き渡しを含めたひとつおりの事後処理を済ませ、177支部に戻る。

デブリーフィングと称した打ち上げのために買い込んだ菓子や飲み物を狭いテーブルに一通り出していきながら、桐は美琴に向かってつぶやいた。

「何よ、アンタの詰めが甘いからじゃないの。それにあいつら、組織的な金品強奪を繰り返してたんでしょ。あれでもぬるくらいよ」「さすがにいくらい、電気で気絶したことがないひとのセリフだよね……。確かにまあ、あんまり同情する気にもなれないといえばなれないけど。そんなことより、白井さん?」

「あら、なんですか?」

初春の隣に立ち、報告書の作成についてあれこれとやり取りしていた黒子は、その声に振り返る。

その、あまりに平然とした声に苦々しく思いながら桐は続けた。

「なんですの、じゃないよ。なんであんな無茶なことするかな。能力があるからって、走っている車の前に飛び出すのは自殺行為っていうんだよ?」

「もちろん止まらなければすぐにその場を離れるつもりでしたの。別に須臣さんがフォローしてくださらなくとも問題はありませんでしたわ」

「そついう話じゃなくて」

「でもすごかったですよね須臣さん、あの風の刃。タイヤ、パ  
ンクどころかホイールごと『切り裂いて』ましたし」

口論になりかける二人に初春が声を挟む。

反射的に最鋭威力で使った、『獅子の鬣』に言及する彼女に、

「あ、あれはとっさのことで思わず、ね……」

桐はぼつが悪そうに言葉を濁した。

「ほう、ほうほう。わたくしのピンチに思わず全力を出してしまっ  
たと。それはずいぶんと光栄なことですね」

「なんでそんな言い方するかな、友達が危ないと思ったら本気にな  
るのは当たり前だろ。だいたいデブリーフィングなんだから気にな  
ったことを指摘するのは当然だと思っただけど」

ニヤニヤとからかうように投げられた黒子の言葉に、どこか少年っ  
ぽさをにじませて桐は言い返す。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

するとなぜだか、場に薄い沈黙が下りた。

「……………」

沈黙の理由がわからず、きよとんとしている青年に美琴は深いため息をつく。

(まったく、大人びてんだか子供っぽいんだか……………)

心中でそう嘆息してから、言葉を挟んだ。

「とにかく、黒子はもうちょっと気をつけなさい。いつでも自分一人で片付くわけじゃないだし、ミスった時に都合よくフォローがあるかどうかなんてわからないんだから」

「お姉様がそうおっしゃられるなら……………わかりましたの。須臣さんもすみません」

そうして、とりなしに黒子が頷いたところで、少しだけ頬を染めた佐天がぼつりともらした。

「な、なんかみんな、ちゃんと反省会してますね。部外者のあたしがここにいていいのかな……………」

「何言ってるんですか佐天さん、佐天さんだって立派に協力者なんですから」

あわてたような初春の言葉に、桐も同意する。

「そうだよ。君が分岐のところまで網はつてくれてたから、僕が初春さんの指示で先回りできたんだし、立派な関係者だと思っよ。むしろ個人的には御坂さんがいることの方に驚いたくらいで」

その言葉に、

「なによ、飛び入りの協力者は関係者じゃないっていつの？」

美琴が笑みを含んで問いかけて、

「えっと、ああ、それは……」

桐が返答に困る。

そのまま、場はデブリーフィングとは名ばかりの、わきあいあいとしたお茶会になったのだった。

743

夕方近くに、177支部を出る。

そのまま佐天を部屋まで送った桐と美琴は、今度は常盤台の寮に向かって歩いていった。

「ふう……」

伸びをする青年に、美琴が口を開く。

「そんなんでもう疲れたの？」



「まあ、気づまり、とまでは言わないけどさ、あの中に男一人って  
いうのは、ね」

(まあ、それなりに思うこともあるし……)

簡単な上半身のストレッチを続けながら答える桐に、

「じゃあ、なんで黒子たちに付き合ってるのよ。あんた、『風紀委員』(ジャツジメント)の選抜受けて通ってさえいるんでしょ?」

不思議そうに、美琴は尋ねた。

「……まあ、その辺りはいろいろとあるんだよ」

なし崩しで選抜を受け、あまつさえ通ったことにされているのには  
触れることなく、桐は言葉を濁す。

美琴も、それほどの関心はなかったのか、あっさりと話題を変えた。

「……でも、大丈夫なんでしょうね」

脈絡なく投げられた言葉の真意をくみ取って、青年はトーンを変えずに返す。

「問題ないよ。それじゃ僕はこっちだからこれで、『また』、ね?」

さらりと返されたその返事にくすりと笑み浮かべて、美琴はうなずく。

「ええ、『また』」

そうして、二人はそこで別れた。

一人になって、桐は手近なスーパーに向かって足を向ける。

ちやうど西を向く形になって、青年は視界を染め上げる夕日のオレンジ色に目を細めた。

「さて、適当に買い出しは済ませておかないとな……」

ぼんやりとひとりごとをつぶやきながら、この後の『予定』を思い浮かべる。

そう、『今日の予定』は、まだ半分も消化されていなかった。

『長い夜』が、これから始まる。

……。  
……。

EXT

TON

じくじくと、濁った何かがしみ出すように。

あるいは、チクチクと、不穏なもので執拗に浅く刺されているかのよう。

途絶えることなく、その『疼き』は桐を苛み続けていた。

シーツの上で身を起こし、とつくにわかりきった現状をぼつりと言葉にする。

「やっぱり眠れない、か……」

午後十時過ぎの学園都市。

その第七学区にある、ありふれた学生寮の一室で。

明かりをすべて落とした部屋で、安物のカーテンが通してしまいう学園都市の夜の灯りだけがぼんやりとその床の一部を浮かび上げさせているのを視界に収めて、桐は自嘲した。

「……本当、我ながら無様な話だね」

たかだか三時間の仮眠もとれないなんて。と続く言葉は、口に出す気になれずに心中で噛み潰す。

薄い布団から立ち上がり、だが電気をつける気にはなれずに青年はカーテンを開け放した。

うつすらとした、光源も定かではないうすく、ぬるい光が、部屋に差し込む。

清冽とは程遠いその光にどこか安心を覚えながら、ぺたぺたと素足でシンクへと向かい、ぬるい水道水をコップに汲んで飲み干す。

「ふう……」

そこでよつやく、ひとごこちを付けた。

(考えなきゃいけないことは山ほどあるっていうのに……)

眠れない理由である、心中にこびりつく疼きを今回の件に対する後悔、あるいは罪悪感として捉える青年は、そう思いながらも思考を進める気になれずに目をつぶった。

(考えようにも、前向きな結論が出る気が少しもないっていうのは、きついね。それに……)

ゆるゆるとかぶりを振って、くしゃりと髪をかき握る。

そう長くもない黒髪の感触を右の手のひらに遊ばせながら、空いた手で二つ折りの携帯を取り出し、バックライトを灯した。目を薄く開け、シンプルな数字4文字を確かめる。

(やるべきことが目の前に山みたいに積みあがってるせいで、のんびりと考えてられる余裕もない……)

「もう10時過ぎ、か。残念ながら、タイムオーバーって感じだね」

これからの『支度』の手間を考えれば、それは当然のことだった。彼女との待ち合わせは12時過ぎ。

効率的に動き回って間に合うかどうか、というところだった。考えをずると先延ばしにしている自分を自覚しながら、桐はおざなりにコップをシンクに置くと、シャワールームへと歩き出した。

11:30の奥で、

ずっと、ナニカが疼いているのを、感じながら。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサラー

Phase .

64

「おっそいわね、アイツ。何してんのよ……」

午前0時、5分前。

人通りの絶えた学園都市の街角で、美琴はコーヒーショップの降りたシャッターに背を預けてつぶやいた。

彼女がこの場所に来て、すでに30分近くが経過している。

時おり、巡回に来る警備員アンチスキルを警戒して、美琴は気を張り続けた。

だが、

「ごめん、待たせちゃったみたいだね」

かけられた声とともに上げた視界にあっさりとして青年が映るのを、美琴は小さくない驚きとともに受け入れた。

唐突というほどのインパクトはない。

だが、何もなかったはずの空際にすっと音もなく現れたかのような、そんな登場。

「でも、時間自体はなんとか間に合ってるか。よかった、待ち合わせ相手が時間より早く来てくれてるのに、遅刻でもしたらヒンシュクものだし」

取り出した携帯で時刻を確認して胸をなでおろして見せる桐に、美琴は内心の驚きを悟られないようにしながらこたえる。

「別に待ってないわよ。ところでアンタ、昼間とずいぶん雰囲気ちがうわね？」

「……え、そうかな？服以外はそう変わってないと思うけど。ああ、まずはこれを」

言われて、黒づくめの青年は、ポケットから取り出したものを美琴に渡しながら、自分の格好を見下ろす。

本人に自覚はなかったが、昼間のどこか白っぽい服装と違い、トップス、ボトムス共に、全身を黒一色でまとめたその姿は、ひどくしなやかそうな印象を見るものに与えていた。

なぜだかそれが少しだけ気に入らなくて、美琴は受け取ったものに視線を落として声をとがらせる。

「……なによ、これ」

「レンタバイクのキーだよ。目的地から3ブロック北側の雑居ビルの駐輪場に停めてある。ただの気休めだけど、必要になったらめらわずに使ってくれ。確認するまでもない気はするけど、乗れるよね？」

「そりゃ、まあ……。でも、アンタはどうすんのよ？」

問われて、桐はアパートの自室のカギを見せないようにちゃらりと鳴らして見せた。

「もちろん、僕も僕で準備はしてきてるよ。これからがこれからなんだし、リスクに見合う用心はしておかないとね」

自分のための準備は何一つしていない青年は、なんでもない顔でさりりと嘘をついて歩き出す。

「ま、待ちなさいよ。それでこれからいったいどうするってのよ！」

あわててそれに続いた少女を肩越しにみやって、のんびりと声をかけた。

「そうだね、それを話しておかないと目的地についても始められないしね。少し歩かなきゃいけないし、道すがら話すよ」

追いついて横に並んだ美琴に向かって、桐は続ける。

四つ角を左に曲がり、

「これから向かうのは、とある高層ビルの21階から33階までを借りているルモノ製薬日本支社。目的は『説得』。といつてもごたごたするのは避けられないだろうけど」

さらりと今夜の目的を明かした。

「そいつらが昨日アンタが言った、あの子たちを素直に解放しない奴ら、なのね？」

「そうだね、彼らが抱えてる『あの子たち』は308人。この街にある、彼女たちの居場所としては中規模って感じになるそうだよ」

「え、待ちなさいよ、300人以上いるのなら、製薬会社のひとつやふたつ、あの子たちでなんとでもなるんじゃないの？脳波のネットワークでつながってる以上、事情は筒抜けなんだし」

その、当然といえば当然の発想に、桐はうなずく。

「そうだね。実際のところ、ほとんどの居場所は彼女たち自身の手で占拠するような形になっているらしいんだけど、ね」

「そうじゃない、と？」

「彼らは製薬会社と名乗ってはいるけど、医療機器の開発って側面が強いらしくてね。やり方を間違えるとそちらを使って物理的なネットワークの寸断に出てくるかもしれない。だからこうして悪だくみをしてるんだよ」

物理的なネットワークの寸断 投薬や処理によってミサカ達に危険が及ぶ可能性をぼんやりと指摘して、その後に行っている事態、ミ



サカネットワークから切り離された健康な中学生女子と同じ身体がどう扱われるだろうということには全く触れないまま、桐は内心の暗い怒りを再確認する。

（もつとも、こんなことは彼女が気にするべきことじゃない。俗といえはあまりにも俗な話だし、それこそ下劣すぎて考える価値もない）

カエル顔の医者から受けた、ブリーフィングが思い出された。

心中で疼くナニカとははつきりと別のところで、明確にくすぶる苛立ちを確認しながら桐は笑みを浮かべる。

「さて、どうしようか。彼らの事務所に一発、最大出力の超電磁砲でもぶち込んでおく？それともこつちで限界規模の光熱衝撃波を撃ち込もうか。ただの破壊力なら爆砕の波紋でもいいし、物質崩壊をシステムの中枢に仕掛けるのもいいね。なんならビルごと自壊連鎖まで大盤振る舞いするのもアリかな。そこまでするなら、先に彼女たちを逃がさなきゃいけないけど……」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！」

この時だけは感情のまま、物騒なことをにこやかに口走る青年の袖を、美琴はあわててつかんだ。

「……え？」

「なんでそこで不思議そうな顔でキョトンとこつちを見てんのよア  
ンタは！！そんな真似したら大事じゃすまないでしょうが！！！！  
て  
いうかそこまでするつもり！？」

噛みつくように声を荒げる美琴に、桐はさわやかに笑みを深める。

「まさか。そんなわけないよ。あくまで今夜の目的は、『説得』、なんだから」

いつそ白々しいその態度に美琴がさらに言葉を重ねようとしたと「るに。」

「タダで済ます気は最初からないんだけどね？」

ひどく、冷えた言葉が、やはり楽しそうに差し込まれる。

ぞつとするより先に、なぜか違和感を強く感じて、美琴はくちごもった。

そんな美琴には気づかないまま、桐は言葉を続ける。

「さて、具体的な状況と手順だけど、昨日の時点で最初の『説得』……あの医者さんが協力要請したんだけど、すげなく断られちゃったらしいんだ」

（学園都市の『冥土返し』（ヘブンキャンセラー）の要請を蹴れる医療関係っていうのもたいがいすごいな、とは思っけど……。資本が学園都市外の企業はそういうものなのかな？）

どうでもいい感想を脳裏に浮かべ、話すつもりの内容だけを口に出す。

二人はもう、とある高層ビルの入り口に踏み入っていた。

「それから何度も接触を試みたけど状況は動かず。そこで僕らの出

番つてことなんだけど……ああ、あの監視カメラ落してもらっていい？できるだけ静かに」

「え、ええ」

戸惑い気味に頷いた美琴が、指先から紫電を走らせる。

パシ、という乾いた音が響いて、電灯が一瞬だけ瞬いた。

そのまま、青年はエントランス横の守衛室に近寄り、構成を編みながら眠そつな守衛にガラス越しに声をかける。

「こんにちは、そしてお休みなさい」

その言葉を呪文として、差し出した右手から衝撃を伴う一種の超音波が、必要十分の威力 具体的には美琴を気絶させたときの4倍強 の威力で守衛に叩き込まれた。

目の前で昏倒する人間には眉一つ動かすことなく、受付の隣にあるドアの鍵を確かめる。

「思った通り、守衛室はずいぶん単純な力ギ使ってるね……」

そして構成を編み、ささやくようにつぶやいた。

「我招かれる踏まれざる門」

小さな音を立て、開く鍵。

当然のように部屋へと滑り込み、桐は物色を始める。

「さつきも言ったように、向こうさんはこちらの要請を何度も跳ね除けてる。ほぼ間違いなく臨戦態勢か、そうでなくても密な警戒は敷いてるだろう、だからこそ」

目当てのものを見つけて、そこからさらに選別に入る。

「僕たちは徹頭徹尾、『静か』に事を進めようと思うんだ。向こうがこちらを把握した時には首筋にナイフ、つてのが理想になるかな」  
カードキーとIDカード、そして前時代的な鍵束を掴んで、青年は振り返った。

「さあ、『本番』をはじめようか」

.....  
イメージング  
.....  
スタート  
.....  
想像  
.....  
開始  
.....  
.....

E X T

T O N

……イメージングスタート……  
……想像……開始……。

明確な意思を持って紡ぎだした言葉は、しかしセカイに響くことなく立ち消える。

(それでも……)

自分<sup>わたし</sup>には聴こえた。そう言い聞かせて彼女は子細に対象を思い浮かべた。

それは、『自分』を構成する要素。

隙間なく並べ上げればそれこそが『自分』だと言えるものを、ひとつひとつ、丹念に想起し、固定化させていく。

波のように寄せては返す、意識の希薄化の中にあつて、けなげにそれらを護る彼女は、ひたすら、ある、『言葉遊び』を繰り返した。

(想像する……)

ただ、真摯に。

(想像する……)

自らの主観のみを、拠り所にして。

(想像する……)

もう、後がないから。

見ないようにしていた事実につきあたって、唐突に恐怖心が湧き上がってくる。

深海の中、酸素が枯渇したかのような。

あるいは絶壁のただなか、身をゆだねるロープが消失したかのような、致命的な感触。

ぎゅっと目をつぶり、固定化したイメージにすがりつく。

(想像する、想像する、想像する……)

大きな揺らぎは、恐怖の後にやってきた。

自分という存在が、たやすく振り回され、歪められ、希薄化していく感触。

(そ、想像する、想像する、想像する、想像する……！)

いまはもう、する必要すらないはずの呼吸が、詰まる。

『言葉遊び』に心を振りわければこうなってしまうのは、わかっていたつもりだった。

それでも、彼女はすがりつくように、



その青年は

ひどく手慣れているように、美琴には見えていた。

無音のまま、警戒しているはずの警備員の背後に入り込み、

「っ」

ごくごく短い呼気とともに、その足を払う。

「な……があっ!?!」

引き倒した相手のコメカミをきつちり踏み抜いて意識を奪いながら、二人目へと。

ようやく青年に気付いたところであっけなく懐に入られた二人目は、あごを尖った肘で縦に打ち抜かれ、しりもちをつくように座り込んだのちに、左からのローキックを側頭部に重ねられて、電池が切れたように倒れこむ。

カエル顔の医者に持たされた警棒を抜くことすらなく、瞬く間に二人組の警備員を無力化しておきながら、桐の呼吸は乱れてすらいなかった。

「これで4組目……そろそろばれてもおかしくないころかな、気を付けないと」



用意してきたビニールテープで手早く警備員を拘束しながらつぶやく青年に、美琴はどこか呆れ顔で視線を振った。

「これ、私がいる意味あのかしら……やっぱり別行動にしない？」

だが、そのぼやくようなセリフには、意外なほどはつきりとした口調で否定が投げられる。

「冗談じゃない、捕まったら何されるかわからない本職にたった一人で立ち向かうなんて僕はごめんだよ。ただでさえ危ない橋わたってるんだし、リスクは最小限にしないと」

(よく言っわね、ホント……)

実際のところ、もうこのやり取りも4回目だった。

拘束の済んだ警備員を暗がり押し込んで、自分へと歩み寄ってくる桐を美琴は見やる。

「そんな身のこなししておいて言うセリフじゃないんじゃない？ だいたいさっきからどうやって歩いてんのよ、それ」

とんでもないことに、この青年は望む時には、実に気軽に無音で歩く。

美琴がそんなことに気付いたのは、このビルに入ってからだった。

「どっやって……普通に忍び足してるだけだよ？」

「それでそこまで足音がしないのがおかしいっていつてんのよ。どんな手品なわけ？」

「手品つて……いや、歩くのに余計な力を入れなければいいんだよ。強すぎれば音が出るし、弱すぎれば転んじゃうよね。だからちよūdい感じで歩けばいいんだ」

疲れずに済むしね、となんのてらいもなく答えてくる青年にそれ以上の追及をする気をなくして、美琴はため息をついた。だから、別の疑問を投げることにする。

「それに、さつきから気になってたけど、なんで『あの子』を連れてきてないのよ?」

「『あの子』?……ああ」

おうむ返しに繰り返したところで、桐はそれがミサカを指すことに気付く。

「いえ、連れてこなくても、連絡手段だけでも準備しておけば『使える』情報源になったはずでしょ? 『あの子たち』は今まさに目的地にいるんだから」

続けられたまっとうな意見に頷いて、青年は準備していた言葉を口に上らせた。

「それも単純にリスクの低減のためだよ。『彼女たち』には今ここに僕たちが遊びに来てるってことも知らせてない。情報源として下手にラインを引いたら、ここの連中はそれをモニターしてしまう可能性があるんだ。『ミサカネットワーク』が、相手にとっての情報源になることは避けたかった。こちらのリスクを下げるためにも、彼女から提供された情報は最初にあのお医者さんが一通り尋ねた情

報だけにとどめてるんだよ」

もっともらしいがその実、自分たちよりもミサカの安全を主眼に置いた言葉。

それ自体には異論を唱える気にはならず、美琴は口をつぐんだ。淡々と、彼はすべきことをしようとしている。

(でも、本当に　?)

そんな言葉が思い浮かんで、美琴は立ち止った。

「　タダで済ます気は最初からないんだけどね？」

同時に、楽しげにつぶやかれた言葉に感じた違和感が強く思い出されて、少女は青年を見やる。

前を歩く、黒ずくめの衣装をまとった、年上の青年。何の根拠もなく、考えが浮かぶ。

(こいつ、もしかして無理してる……?)

だが、それを口に出すことができないまま

二人は、目的の場所に辿り着いた。

非常階段からエントランスに滑り込み、そこが無人なのを確認して青年と少女は一息をつく。

「32階……。研究用フロアはこの階まで。この上は会社の事務用のフロアだから、ここで間違いないはずだよ」

メモ帳代わりの携帯を開いて、やはりたんと桐は言った。

「この階は中央にあるメインルームが7割を占めてる。しらみつぶしにしたわけじゃないけど、ここまで登ってくる途中にあったそれらしい部屋には『彼女』たちが一人もいなかったことを考えると、ここに集められてるって考えるのが妥当かな」

道すがらに眠らせた、研究員らしき白衣の男から奪ったカードキーをポディバッグのポケットから取り出す。

同時に、紙擦れの小さな音を立てて抜き出したメモを、桐は美琴に手渡した。

目くばせをして、疑問の声を返そうとした美琴を制する。

「案外簡単な仕事だったね。とっとと終わらせて早く帰ろうか」

渡した紙切れには、いくつかの短いメッセージ。

さっと目を通した美琴は、真剣な顔を驚きに変えて、桐を見やる。それに取り合うことなく、桐は構成を編み上げた。

構成を編み上げ、手に持ったカードキーを分厚い鉄の扉横にある、カードリーダーに滑らせる。

遅延なく、開錠を知らせる電子音とともに扉が音もなく開き

「我は乱す光列の檻　！」

だが飛び込まず、桐は、大音声で叫んだ。

魔術が発動する際に感じる、じわりとした、魔力の消費。

そしてそれは、術者の望んだ効果を世界に顕す。

部屋の中の光がめちやくちやくに歪められ、結果として視界に映る光景が万華鏡に放り込まれたかのようにぐちゃぐちゃになる。

泡を食ったのだろう、待ち構えていた連中から、ワントンポ遅れて銃弾が部屋の中から開いた扉に向かってばらまかれた。

だがもちろん、桐たちは『飛び込んでいない』

（拳銃が2、サブマシンガンが3……いや4か。後ろに研究者っぽい白衣……）

先の魔術でそこだけは意図的に歪めた光線で、顔を出すことなく部屋の中を覗き込み、青年は相手の位置を確認する。

斉射が終わったところで、桐は身を乗り出しざま、呪文を唱えた。

「我は呼ぶ、破裂の姉妹　！」

衝撃が、部屋に生まれる。

この魔術での最大威力　人を昏倒させて余りある威力の衝撃の破裂が、銃を持つ人間たちのちょうど中央で荒れ狂った。

ある者は床にたたきつけられ、またある者は中空で何度もあふれかえる衝撃波に叩きまわされ、打撲まみれの身体になって地面にくずれおちる。

そうして武器持ちを無力化したことを確認してから、桐は部屋の中へと踏み込んだ。遅れて美琴も続く。

その部屋のつくりは、事前に見た見取り図とは多少違っていた。広さ自体には違いはない。

ワンフロア丸ごとを使った、ちょっとしたホテルのホールなみの面積は見取り図で確認した通りだ。

ただ、桐から見て左右の奥に、急造のガラス張りの部屋が新しく作られていた。

それぞれ学校の教室ほどの広さに四角く区切られたガラスの壁ごし

に、ミサカ達が見える。

彼女たちは、文字通り、詰め込まれていた。

薄い手術着のようなものを着せられ、まるで満員電車の中のようにぎっしりと、座ることもできないスペースに押し込まれた、同じ姿をした少女たち。

（やっぱり、か。まずはシャワーの場所を吐かせるトコから始めなきゃダメかな……）

（こいつ、なんて真似をするのよ！）

それに二人がそれぞれの感想を抱くのと同時に、

「役立たずどもが。あれだけ大口をたたいてこのザマか」

粘ついた、いやらしい声と微細な駆動音が響いた。

モールドディング コンプリート  
形成……完了……。

コンタクト  
接触……。

EXT

TON



桐が扉を開ける寸前に美琴に渡した、一枚の紙切れ。

そこには、短いメッセージが三つだけ、並んでいた。

目前の青年が行使したチカラの余波として起きた風に髪をなぶられながら、美琴はそれを思い返す。

一つ目のメッセージは。

ほぼ間違いなく、待ち伏せされてる。扉を開けてもとびこまな  
いこと。

（こんな直前で渡してきたっていうのは、やっぱりそついつことよ  
ね……）

そして、二つ目。

主戦力は、パワードスーツ駆動鎧が3機。搭乗者に絶対に怪我をさせないこと。

（わかってんなら先に言っとけつてのよ……。なんだってこんな面  
倒な……まさか）



内心で毒づいて、自分の言葉を思い出す。

昨日……いやもう、おとこの夜。

彼女自身、ほとんど照れ隠しで伝えた、深夜の病室での言葉。

「アンタが、もし困るような事になったんなら。アンタの『事情』に私をちゃんと巻き込みなさい。借りを作つたままじゃ気分悪いのよ」

（まったく、最初から最後までこんなお客様扱いのくせに、まさかこれで『ちゃんと巻き込』んだ、なんて思ってたんじゃないでしょうね。だとしたらとんだ勘違いよ。後でとっちめてやらないと……）

ポケットの中でくしゃりとメモを握り潰す。

そこに記された、最後の言葉。

それだけはなぜか、焦ったような走り書きで書かれていた。

ごめん、実はもう、このもめごととは全部終わってるんだ。

「役立たずどもが。あれだけ大口をたたいてこのザマか」  
粘ついた、いやらしい声と微細な駆動音が響いた。

「まあいい、本命はここにある。お姫様達を助け出す、義賊の真似事は楽しかったかね？ここまでずいぶんと好きにしてくれたようだが、これで終わりだ」

のっぺりとした印象の銀色が2機、多脚をつごめかして白衣の前に出る。

全長は2mほどもあるだろうか。

卵形をした、繭のようなコアの背部に武装保持用のフォールドアームと、昆虫を思わせる4対の脚がまるで束ねたように取り付けられている。

なめらかな駆動音とともに、フォールドアームがなにがしかの武装へと延びる。

「しかしまあ、ずいぶんとオーヴァー・キルになってしまいそうだがねえ？トライアルにこそ落ちたものの、この駆動鎧パワースーツ、ステイブル  
デリスト」

「 我は描く光刃の軌跡」

ねちねちと続く言葉を遮ったのは、底冷えするほど冷静な声で発せられた呪文だった。

その時にはすでに駆け出している青年の周囲に、握り拳ほどの光の球が七つ浮かぶ。

蛍光灯のような、暖かみのない白い光。

イメージの上乗せで、桐は自らが作り出した光球たちのそれぞれの軌道を描き出す。

( 撃ち抜け )

直後。

ジッ、という、セミが鳴くような、そんな一瞬の音が鼓膜を掠めた。その音とともに、思い描いた通りの軌道をたどって、光の球が滑っていく。

のが見えたはずもなかったが。

その魔術 光速で転移する疑似球電は、パワードスーツ 駆動鎧がそれを認識することすら許さぬまま、すべてそれぞれの目標に着弾した。

脚部と腕部、それぞれの接続地点を巻き込んで膨れ上がり、激しく燃焼する。

「 我は飛ぶ天の銀嶺」

それによる室温の急激な上昇を肌で感じながら、桐は一瞬だけ重力を中和し、もう一機のパワードスーツ 駆動鎧へと飛びかかった。

中空で描き上げた構成に魔力を流し込みながら、右腕をだらりとたらし、長剣をひっさげるような態勢をとって鋭くささやく。

「我掲げるは降魔の剣　　！！」

何もない掌にふっと、剣を握っているような重みがかかる。

青年はためらうことなく、その『剣』をもって脚部を斬り上げた。

不可視の『剣』に前面にある数本の脚部を斬り落とされ、パワードスーツ駆動鎧のバランスが揺らぐ。

それに体を預けて、桐はさらにそのバランスを崩してやった。

振り上げられた魔術の剣が、剃り落すように背中にある脚部と腕部を根こそぎにして。

パワードスーツ小さな爆発が、駆動鎧の背後で起きた。

「くっ……！！」

集中が乱れ、『剣』が消える。

『剣』の力場が、パワードスーツ駆動鎧のウエポンラックをえぐったために起きた爆発。

炎にあぶられる頬に刺すような痛みを感じながら、しかし危なげなく桐は着地すると、腰のホルスターから警棒を引き抜いた。

ここまでで、たったの6秒。

地面に倒すまでもなく尻餅をついている白衣の男に歩み寄り、首筋にカーボンスチール製の武器をつきつける。

みっともなく足をばたつかせる男に、桐は言い捨てた。

「チェックメイトだ。最後の一機はどこにある？」

たったそれだけの言葉で、顔色が変わる男。

「ようやく気付いてくれたかな、最初から全部筒抜けなんだよ。ソフトウェア実証名目で借り出しておいて二機おしゃかにしちゃったのは大減点だね、明日社長にどう言い訳するのかな？」

すうっと目を細めると、桐は何かを言いかける男の腹を、鉄芯の入ったブーツのつま先で軽く蹴った。

「が、ぐあ……！！」

濁った声とともに取り落とした拳銃を同じ挙動で蹴り離す。あっけなく、リノリウムの上を滑っていく武器。

「ああ、言い訳といえば、あんたにはまだまだそれが必要になるんだろうけどね。たとえば」

空いた手を背中に回したボディバッグに突っ込み、桐は起用に書類の束を掴みだす。

取り出した書類に視線を落として、青年はそれをつらつらと読み上げた。

「生体電極における、電極ヘッドのレントゲン透過性を高めるための専用パッドの構成……生体の電気現象、特に電気生理的脳活動の測定、診断システム……直交仮想チャネルを使用したマルチチャネル測定データの分析法……ああ、学園都市規格の統合医療情報処理システム及びプログラムってのもあるね。面倒だからこの先は自分で確かめるといいよ」

ばさばさと、綴じられていないA4の紙が男の目の前にばらまかれる。

びっしりと文字で埋まったその紙を前に、男はうめいた。

「な、なんのつもりだ、こんな」

「これが、あなたの会社が明日……じゃない、今日の午前8時から使えなくなる特許の目録だそうだよ」  
バテント

その一言で、青くなっていた顔色が、紙のように白くなっていく。

「同時に、銀行からの融資の引き上げが7件、特許侵害で36件の訴訟が今日付けで起こされるそうだから頑張っただけ？」

朗らかな声。

それなのにその声は、ひとつも笑っていなかった。

「でも、本当に感心するよ。よりもよってこの『学園都市』の医療分野で、『冥土帰し』（ヘヴンキャンセラー）に逆らうなんて。すごい根性だよ。心から応援したくなってくるよ。そうだ、せっかくだしアドバイスをしようか、ノダ副社長？」

名前を呼ばれて、白衣の男は青年を見上げる。

「銀行屋さんや法律屋さんを相手にするときは、事実の把握が何よりも大切だよ。だからとりあえずひとつだけ、あなたの間違いを訂正しておくね」

もはや土の色へと変化した顔色を前に、桐は言い放った。

「僕たちは義賊じゃない、ただの宣告者だったんだよ」

糸が切れたようにへたり込む男。

それにとりあうことなく、桐は朗らかにつづける。

「さて、わかってくれたところでこっちにもひとつ教えてくれないかな。シャワールームはどこにある？」

……。

……。

……。

主だったものを縛り上げる。

ミサカ達を解放し、体調をくずしている者をひとところに集めて休ませながら、順番にシャワーを使わせる。

300を超える人数からして、煩雑な作業になりそうなものだったが、意外なほどスムーズにそれは進んでいた。

その理由は簡単だ。

薄い実験着一枚だけをまとったミサカが、落ち着いた声で桐に話しかける。

「第2グループ、ミサカー二六〇五号からミサカー二六二五号までがシャワールームに入りました、とミサカは報告します。そしてミサカー二七二三号が第三備品室でクリーニング済の実験着を六二着発見しました。ミサカー二六七二号が搬出の手助けに向かっています、とミサカは付け加えます」

このように、一人に伝えるだけで完璧に全体に意志が通じるからだった。

務めて視線を向けないようにしながら、青年は答える。

「ありがとう。じゃあそれは第一グループに優先的に配ってあげてもらえるかな。生乾きの服を着るのはさすがにづらいだろうし」

「洗濯に当たっているミサカより、あと三〇分ほどで第一グループの乾燥までが終わるとの報告がありました、こちらはどうしますか、とミサカは重ねて問いかけます」

「じゃあその乾燥が終わり次第……いや、どこで交代してもあまり変わりはないか。そのまま第一グループに洗濯役を交代、順番待ちの列に加わってもらってくれ、それと」

そのまま続けるのに限界を感じて、桐は薄手の黒いジャケットをぬいで、目の前のミサカの肩にぽすっとかける。

ミルアラミド繊維製のそれに手をかけて、ミサカはきよとんと桐を見返した。

「悪いけど、それ着てってくれるかな。主に僕の精神衛生のためにね」

「なぜなのかわかりかねますが、はあ、とミサカはとりあえず頷きます」

「うん、理由はわからなくていいから。っと、ちょっとごめん……」

ミサカが羽織ったジャケットのポケットに入った携帯がかすかに震えているのに気付いて、桐は手を伸ばしてそれを取り出す。

外側の液晶に目を落として、それがカエル医者からのものだを知る。フリップを開いて、着信を受けた。

「……もしもし。……ああ、こちらは今のところ問題ありません。」



応援の人員は予定通りで。……はい。診療が必要なのは7名、いずれも意識ははっきりしています。できるだけ早く、車を回してあげてください、それでは」

短い通話を終え、フリップを閉じる。

携帯を戻そうにもジャケットはミサカが着ているので、桐は何となくそれを手の中におさめた。

「なるほど、そういうことだったのね？」

かけられた言葉に、ばつの悪い思いで視線を振る。

そこには、つい先ほどまでミサカたちとともにシャワールームまで付き添っていた美琴が立っていた。

「だから、『もめごとは全部終わってる』ってわけね。外堀どころか本丸まで埋まってたなんて、普通は思わないわよ。それで全部予定通りってわけ？」

(怒ってる、というより、あきれられてる、かな)

ちくりとした、疼きを感じる。

それに気づかないふりをして携帯をもてあそびながら、桐は答えた。

「おおむねは、だね。ここはあのお医者さんの要請を蹴った時点で、すでに詰んでたんだ。それでも埋まってることに気付かない人間が、本丸の中でバカやる可能性があったから、こうやって抑えが必要になっただけでさ」

「それを言わなかったのは、消化試合だとわかると私の気が抜ける  
とでも思ったから？ずいぶんと」

文句を並べていく美琴。

だがそこで、桐は唐突に立ち上がった。

「伏せる　　！！」

魔術ではなく、速度だけを優先して手の中の携帯を機材の陰からあらわれたモノに向かって投げつける。

銃声は、その後に響いた。

（　　っ！）

三步、踏み切る。

それだけで青年の身体は、その場にいた誰よりも銃声に近い場所に飛び込んでいた。

とっさに投げつけた携帯には、何らかの効果があつたのだろう。

あらためて、拳銃をもたもとこちらへ向けようとする男が、見える。

つま先を右足のかかとで踏み抜いて、首もと付近へ手加減抜きの掌打をねじ込む。

多少目測が狂ったそれは、男のあごを砕いて止まった。

悶絶した男が、声にならない悲鳴を上げながら床をのた打ち回る。

取り落とした拳銃を拾い上げると、マガジンを外して適当にそこに投げ捨てた。

薬室に入った弾丸も手早く取り出して足元に放ると、そこで初めて、桐は襲撃者の顔を見る。

「副社長……。ロープが緩かったのか？ いや……。」

縛った手首と足首に、真新しい傷口を見て取って、桐は嘆息した。

(機材の尖ったところを使って無理やり破ったのか……。そこまでやるとは思ってなかった、っていうのは言いわけだね。なんて無様な……)

失態に気を重くしながら、床に落ちた携帯を拾い上げる。  
指先にざりっという、細かな金属の感触。

(……うわ)

運の悪いことに、携帯には銃弾が直撃していた。  
いや、運よく携帯に当たってくれていた、というべきなのかもしれないが。

それを見て取った桐の背中側から、声がかけられる。

「そ、その……あ、ありがとう、須臣」

「おげがありませんか、とミサカは真っ青になりながら問いかけます」

「ああ、その携帯はもう駄目そうね」

そこで、聞いたことのない声を耳にしたような気がして、桐は振り返る。

その少女は、ミサカと美琴にはさまれるようにして、そこに『居た』。

ウェーブがかつた短めの黒い髪。

ローブのような、ゆったりとした黒い衣服。

年の頃は美琴と同じくらいだろうか。

しゃがみこむようにして、彼女は桐を見据える。

わずかに茶色っぽい瞳が、複雑な色をたたえていた。

追い詰められきった人間がようやく希望を見つけた時のような、向けられる側に寒気すら感じさせる、必死な色。

(え……?!)

その視線に触れて、桐は動けなくなる。

そんなことは知らないとしても言いたげに少女は立ち上がり、青年へと歩み寄った。

「それにしても」

抱きつくように……いや、真実抱きつきながら、少女は青年の耳元でささやく。

「ようやく……逢えたわね……」

そして、糸が切れたかのように意識を失った。

「え……？ いったい……」

事態を把握できないまま、ずり落ちていく少女の身体を支えようと、救いを求めるように桐は美琴へと視線を向ける。

怒ったような視線を返されて戸惑い、

「無理させないの。お医者さんに診てもらうまでは無事だなんて言えないんだから」

投げられた言葉に、愕然とした。

あわてて、桐は尋ねる。

「ちょ、ちょっと待ってくれ、御坂さん、この子を知ってるの？」

「何言ってるのよ、知ってるわけないじゃない」

「今さっき、ここで助けただばかりで、今日初めて会ったっていいの？」

当たり前のように。

本当に『当たり前のこととして』返された美琴の返答に、桐は絶句する。

「あのままここに放っておいたらどんな目にあうことになったのか、考えただけで寒気がするわ。早く医者のところ连接到いてあげないと……」

……。  
……。  
……。

ひとつも、意味がわからなかった。

それでも、もともとのプラン通り、予定していたさまざまな雑事を片づけ、件の製薬会社をミサカたちの快適な宿舎として使う手筈をカエル医者とともに整えた青年は、混乱したまま家路についていた。

美琴は当然のように、その少女をあ製薬会社で助けた、と証言した。

ミサカたちも当たり前のように、その少女は初めからあのフロアにいた、と言う。

電話でカエル医者に搬送を頼んだ病人の数は、初めから8人だったと、カエル医者本人にも言われた。

その少女は今、治療が必要なミサカ達とともに、カエル医者者の病院に入る事になっていた。

(なんだって……いうんだ……?)

学生寮に辿り着き、目的の階でのろのろとエレベーターを降りる。見渡した廊下の中ほど、桐のアパートの前に、人影が座り込んでいた。

(……………)

混乱しきっていた頭に、さらなる重みがかかる。

歩み寄ると、向こうもこちらを見つけて立ち上がった。

確かめるまでもなく、それは例の少女だった。

「おそかったわね。どこで道草食ってたのよ」

耳に届くのは、数時間前も聞いた、快活な声。

邪気のない様子に、なおさら背筋が寒くなる。

そして桐は、唐突に気づく。

ここ最近感じていた、自分では罪悪感や後悔だと思っ込んでいた、断続的な『疼き』。

それは 結局のところ。

「さあ、私を助けなさい」

『嫌な予感』でしか、なかつたのだということに。

EXT

TON  
N



『嫌な予感』、と言うのなら。

そんなもの、とつくに突きつけられていた。

それも、これ以上ないほど明確に。

ふと、自分の言葉を思い出す。

僕の認識が、恣意的に誰かに阻害されている……？どこかで精神系能力でもかけられたのか……？わからない、わからないけどとにかく僕は、ダレカにナニカを気付けないようにされてる……！！

今この瞬間だって、僕はあの時の衝撃をありありと思いだせる。

『とある魔術の禁書目録』の世界に、たった独りきりで放り出されて、それでもなんとか歩き始めた、その矢先に叩きつけられた悪夢。自分で自分が信用できない、現実からの移行者<sup>トリッパー</sup>としての、自分。

僕はそこから、ずっと、逃げていた。

……違う、逃げてなんか……。

意志とは無関係に、近い過去の記憶が浮かぶ。

いいさ、受け入れてやる。リスクもデメリットも、抱えているバグも全部のみこんで、これからを立ち回ってやる。

そうだ、そうだよ。

これは嘘じゃない。

他の誰が否定したって、僕はこの決意を嘘だなんて認めない。

結局はただの、棚上げなの？

ち、違う。

すぐにやらなきゃ終わっていつてしまうものがあるから、僕はそれを優先しただけだ。

そのために、思考を停めた？

一度だって停めてない。

考えたよ。自分がおかしいかもしれないっていう可能性を前提に置いて、すべてにおいて考え尽くしたさ。

自分が考えた、『彼女達』を救う方法に致命的な矛盾は混ざっていないか。

御坂さんとミサカたちにとって、最良の落としどころはどこなのか。そのために、何が必要なのか。

こちらの手札は。それに伴うリスクは。それを可能とする条件は。

彼女達への負担を少しでも減らせる要素は。想定されるマイナス要

因は。それを潰し、あるいは軽減する手段は。全部、全部。

擦り切れるほど考えた。

どうであろうと、失敗だけは絶対にできなかったから。

そうして、僕自身への考察を放棄した？

……放棄、したわけじゃない。

のみこんで、それでも先に進んだんだ。

今も挙げただろう、考えなきゃいけなかったことはそれこそ山のようにあつた。

そうしなければ、ミサカたちが。

それは、『一方通行』（アクセラレータ）を倒した後も？

一瞬、何も思いつけなくて、僕は息をのんだ。

たった、それだけの空隙。

そこに、思考が流れ込む。

あえて、『原作』では語られもしなかったミサカ達のフォローを優先したのは？そもそも、僕が手を出さなくてもまちがいなく、あのカエル顔の医者は適正に処理していたはずだ。『原作』では、確かにそうだったのだから。

なにより。

僕はあの夜、自覚していただろう？ 『考えをずるずると先延ばしにしている自分を』。

自問が、自身に刺さる。

吐き出す血の代わりに苦いものが胸に広がる。

もはやその自問にあらがう気力さえ尽き果てて、僕はゆっくりとそれを認めた。

ああ……そう、そうだよ。僕はずっと、そこから逃げていた。

だって、さ。

それが、

それが、本当に取り返しのつかない『奈落』だって、僕はもう、どこかで確信していたから。

とあるナニカヴォイス・ソーサーの音声魔術士

67

Phase .

「さあ、私を助けなさい」

こうして、致命的な場面はやってくる。

深夜の学生寮。

市営アパートのように外気にむき出しとなっている、人気のないその廊下に、くつたくの無い声が響いた。

ひどく自信に満ちたそれになぜだか気後れしながら、桐は答える。

「いきなり『助けなさい』っていわれても……。今日会ったばかりの他人に、それはちよつと唐突だつて思わないかな？」

「そうかしら。あなたはここに存在し始めてからこつち、ずっと誰かを助けてばかりいたじゃない？わたしだつて……。いえ、特にわたしに限つては、助けてくれなきゃウソでしょう？」

どこか、持って回った言い回し。  
だがその内容に、寒気が走る。

(この子は、これまでの僕の行動を把握している……!?)

その事実を胸に刻みながら、桐はことさらにゆっくりと混ぜっ返しのセリフを吐いた。

「なんだかずいぶんと、僕を知ってるみたいだけれど……。ひよっとして、どこかで会ったこと、あるのかな？」

だがその質問に、目の前の少女は存外あっさりとかえす。

「ごうして会うのは初めてね。でも、あなたのことはよく知っているわ。たぶん、あなたよりもね」

あくまで思わせぶりな台詞に、桐は視線を鋭くした。

(考える……)

目前の状況から、ひとかけらだつて情報を取りこぼさないように、

(まず把握するべきは、この子が科学側なのか、魔術側なのか……。偽装自体にそれほど手間をかけた覚えはないから、どちらでもおかしくはないけど……って!?)

そこまで思考したところで、桐は自らの考えに愕然とする。

(な、なんで僕は偽装に手間をかけてこなかったんだ……? 学園都

市には『滞空回線』（アンダーライン）があることなんて、最初から知っていたっていうのに……！）

このタイミングで、自身が抱える『矛盾』、彼にとっては二つ目の『ズレ』に気付いて、青年は総毛立つ。

だがそうやって混乱する桐など知らぬげに、目前の少女はさらなる爆弾を放りこんできた。

「とにかく、『一方通行』（アクセラレータ）編、おつかれさま。ほぼ、『原作』通りの場所に着地させたとはいえ、『主人公』がほとんど関わらないまま事態を前倒しできたのはあなたが思う以上の快拳なのよ。あなたときたら、1巻のエピソードはスルーしちゃうし、『幻想御手』（レベルアップ）編も全面的に介入しながら結果はほとんど同じだったものね。しまいに2巻のエピソードであなたがチヨイ役務めた時にはぞっとしたわよ。ストーリーに『取り込まれた』かと思っただもの」

（……っ！！？）

その、あまりの内容に、思考が止まる。

「『幻想御手』（レベルアップ）編……？何を、言って……」

「ああ、『あなたは知らなかった』わよね。御坂美琴を主人公に、科学側の学園都市に焦点あてたスピニアウトがあるのよ。媒体は小説ではなく漫画で」とある科学の超電磁砲』っていうんだけど。あなたが知らずに巻き込まれた『幻想御手』（レベルアップ）編はその中で語られたエピソードのひとつってわけ。ああ、実際のところ、巻き込まれたって言い方も正しくはないけど、それはまあいいわよね」

会話を初めて、一分足らずで。  
もはや、科学がどうか、魔術がどうか、そんなレベルの話ではなくなっていた。

「まあ、そんなことはどうでもいいわ。それであなたにやってもらうことだけだ」

こちらの混乱に全く頓着しないまま続けようとするのに、あわてて桐は言葉をはさむ。

「ま、待ってくれ。君が僕と同じ、現実からの移行者トリッパーだっていうのは判ったよ。だけど話がいきなりすぎる。もっとこう、順を追って

「僕と同じ、現実からの移行者トリッパー………?」

さえぎってはさんだ言葉が、またさえぎられる。  
それに不快感を覚えるより先に、どこまでもきよとんとしたその声色に底知れない不安を感じて、青年は言葉をとめた。

「ああ、そうね。そうなるわよね。ふふふっ」

対して少女は、くすくすと猫のような笑みを浮かべる。  
場違いな、いや、少なくとも話を聞いている青年にとっては場違いだと感じる明るさ。

それに不安を感じて桐は声を荒げた。

「だから　！」



「そうね、あなたには順を追って話さないかね。まずはこんな話をしましうか、キリ？」

どこか、不思議なトーンで名前を呼ばれる。

それだけで青年は、反論を続けられなくなった。

感じるのは、断崖のふちで落とされる順番を待っているかのような、救いのない焦燥。

「返ってくる答えがわかっているのに尋ねるのは滑稽だけれど……」

笑みを納めないままそう前置きして少女は、まずこう問いかけた。

「あなたは、この状況をおかしいと思わなかったの？」

明白すぎる質問に、桐は即答する。

「そんなの、おかしいと思ってるに」

「ちがうわ。そんな最近の話じゃない。そもそもの話、あなた自身のことよ」

「僕の話……？」

「ふうん、その反応……。ちゃんとフィルタリングがほどけ始めてるってことよね」

「フィルタリング……？」

きな臭い言葉に、反応する青年。

だがそれに取り合うことなく、少女は話を続けた。

「そういう風にしたんだもの、すぐにわかるわ。だから話を続けるわね。話の焦点は、あなたが現れた状況よ。ねえ、これから言うことは、あり得ると思う？」

「……………」

何も言えない桐の目を覗き込んで、うたうように言葉を紡ぐ。

「まず、一般人である、『現実からの来訪者』が大学生の記憶を持ちながら『学園都市の高校生』として『主人公』と同じクラスに受け入れられ、住むところまであてがわれているという状況」

桐は、答えない。

「一般人である、『現実からの来訪者』が人生を賭けた鍛錬が必要である『音声魔術』を苦も無く使いこなし、なおかつ原作の主人公が扱う体術さえも備えているという状況」

いや、答えられなかった。

「ああ、これだけならありえない、とまでは言えないわよね。すでに十分トンデモなのは間違いないけれど、それでもそれ自体を明確に否定するのは難しいわ」

意識が、どんどんクリアになっていったからだ。

まるで、薄布で隠していたものを根こそぎ取り払うように。

掛けられていた『制限』が、どんどん取り払われていくのを感じる。

（これが、彼女の言う所の、『フィルタリング』なのか……。完璧に事実を『誤認』させる能力……？）

「……いつから、僕を騙していたんだ？僕はあとどれだけ、何をわからなくされてるんだよ……！」

絞り出した言葉は、やけに冷えていた。

その声にも、少女はやはりあっさりと返してくる。

「ああ、そこも説明しなくちゃいけなかったわね。結論から言うと、あなたは何一つ狂っていないわ」

「そんなはずが」

「事実よ。あなたは何一つ、現実を誤認していない。だって、変わっていたのは世界……現実の方なんだから」

信じがたいことにそう言っつて、少女は肩を器用にすくめてみせた。

「ちょっとした、『言葉遊び』から始まってしまった『能力』なんだけどね。私が出したのは、『現実の一部を上書きした』、それだけなのよ。できるだけ簡単にいうなら、そうね……」

すうっと人差し指を立て、少女は中空に円を描く。

「世界の事象 『現実』にはパラメータがある。あくまで便宜的なものだけだね。たとえば、『ナイフ』は『切れるもの』 『鋭いもの』というパラメータがあり、『ナイフ』を見た人間はそれを『切れるもの』 『鋭いもの』と受け取る。でももし、その本質を変えないまま、パラメータの名前だけを『柔らかいもの』 『潰れるもの』という風に『現実』を上書きしたら？」

「『ナイフ』を見た人間がそれを『柔らかいもの』 『潰れるもの』だと思う……？」

「そうね。見る人……受け取り手を歪めなくても『現実』の方を歪めてしまえば、それを受け取った人間は誰もが『歪んだ現実』を『正しく受け取って』見ることになる。あなたが、『手を出したらほぼ確実に原作がらみの厄介ごとに発展する』 『銀行強盗』を『とりあえず手をだしても問題なさそうな』 『銀行強盗』と認識したようにね」

「そ、そんな、神様みたいな……」

「神様みたいな能力なのよ。それだけのせいで『世界』自体に絡み取られて、併合されそうになるくらいなのね」

吐き捨てるように言うと、彼女は一度言葉を切った。かわいらしくあごに人差し指を当て、桐に目をやる。

「……さて、どこまで話したかしら。ああ、『魔術士オーフェン』の主人公の魔術と体術を自在に扱える、大学生の自覚を持った現実世界からの移行者トリッパーはあり得るか否か、だったわよね。とりあえず能力と状況は確認した通りだけれど」

「ありうるも何も、現に僕はここにいるじゃないか！」

焦燥に駆られて、桐は自らを指して叫ぶ。  
だが、

「そうね、あなたはここにいるわ。でも、ひとつだけ決定的なポイントがあるのよ、キリ」

また、さっきのトーンで名前を呼ばれて、桐は凍りついた。

「もし、『現実世界』の誰かがここまでを見ていれば、とっくに気付いていることなんでしょうけどね。いや、あなたももうそろそろ気づける頃かしら」

そういつて頷くと、少女は青年に尋ねた。

「キリ、『魔術士オーフェン』の主人公は誰だかわかる？」

内容はともかく、質問の意味を掴みかねて、桐はそのまま答えた。

「何言ってるんだよ、オーフェンだろ」

「そうね、でもそれは義姉が行方不明になった自分を『孤児』（オーフェン）になぞらえて名乗った偽名よね。本当の氏名は？あなたならもちろん、知っているはずだけど？」

ひどく嫌な言われ方をされたように感じて、桐は顔をしかめる。

「……キリランシエロ・フィンランディだろう？家名であるフィンランディは、『塔』に入るときに捨てたけれど」

「その通りよ、スオミ・キリ。いえ、キリ・スオミと呼んだ方がいかしら。言うまでもなく、フィンランディという家名は、フィンランドをもじったものだけれど」

そこで『気づいて』、桐の身体が強張る。

「『スオミ』という言葉の意味、判るわよね？」

答えられない青年の言葉を待つことなく、

「そう、フィンランドの言葉で、フィンランドそのものを指す言葉が、『スオミ』よ」

放たれた決定的な言葉に、ぐらりと視界が揺れる。勝手に足が震えて、桐は数歩後ずさった。

「名前の方は触れるまでもないわよね？あなたのフルネームそれ自体が、あなたが『魔術士オーフェン』の主人公に由来する存在であることを示しているのよ」

のどが、乾いてひきつれる。

無意識に左手をそこにやりながら、青年はうめいた。

「じゃ、じゃあ僕は、いつたい……」

対照的に、どこか得意げな声がかえってくる。

「『言葉遊び』からはじまった私の『能力』……『幻想殺し』（イマジンプレイカー）の対極、『現実創り』（リアルクリエイター）によって創られた、『現代知識を含めたパーソナリティを備えた高校生のキラランシエロ』よ。……そうね、『能力』のせいで神様みたいなの『ナニカ』になっちゃったわたしが創ったんだから」

そして彼女は、

「『とあるナニカの音声魔術士』ヴォイス・ソーサラーってところかしらね？」

そう、言い切ったのだった。

E  
X  
T

T  
O  
N



「『とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士』ってところかしらね？」

少女が発した音声が、空気を通し、鼓膜を震わせ、桐の脳に突き刺さった。

自身が、きしむような感覚。

「っ……あ……」

吐きたいのに、否定の言葉がどうしても吐けない。

（初めから当然のように扱えた能力。用意された学生の身分。僕の方だけ抜けていた『書庫』の記録。『滞空回線』（アンダーライン）があるっていうのに、いや、そうでなくともあれだけ派手にやりながら、『学園都市』の上層部が何の行動も起こしてこなかったこと。節目節目でのオーフェン……キラランシエロに酷似した僕の行動。なにより、僕自身の名前、そのものが……）

『フィルタリング』が取り払われたことによって制限なく広がる思考は、身も蓋もない『現実』を青年に突き付ける。  
なにより。

総身に走る、圧倒的な『実感』。

彼女の言葉は、すべて真実だと。

他ならぬ桐自身が、それをどうしようもない現実として、受け入れようとしていた。

そんな青年に、

「これでわかったわね、キリ。さあ、私を助けてくれるわよね？」

いっそ、傲岸とでも言えそうな態度で、一片の疑問も不安もない、ひとつの答えしか返ってくるのが想定されていない、問いかけとも呼べない問いかけが投げられる。

「……………っ」

自身が、きしむ。

この身が、存在が、分裂していくような気分を味わう。

視界が歪み、ポケットから取り出しかけたまま握っていた部屋の鍵が、寒々しい音を立ててコンクリートの廊下に落ちた。

(そんな……………!?)

それを視界に映すことなく、だがほぼ同時に、桐は驚愕していた。理性とはかけ離れたところ、いっそ本能とでも言うべき場所で、彼は少女のその問いかけを当然のように肯定しようとしていたからだ。

深淵に墜ちるような絶望とともに、青年は自覚する。  
目の少女に、無条件で従おうとする『自分』がいることを。

（　　）　　だって、そのために存在したのだから

前触れなく浮かんだ思考に呑み込まれそうになって、桐は強くくちびるをかみしめた。

尖った歯が薄皮を破って、口の中に鉄錆の味とひきつれるような痛みが広がる。

焦燥と混乱にまみれながらも、彼はそれだけで何とか自分を保とうとした。

だが。

さらにそこに投げ込まれたのは、そうして耐える桐をあざ笑うかのような、突拍子もない言葉だった。

「　　それじゃあキリには、『このセカイ』をメチャクチャにしてもらうわね？」

答えを返せなかった桐の沈黙を、勝手に肯定と取ったのだろう。

あっけらかんと、無邪気に猫毛の少女はそう言い放った。

親しげな、安心しきった表情で続ける。

「やることは大きいけど、たぶんあなたにならそう難しくはないわ。もうすぐ、遅くとも十日後ぐらいには、待ちに待った原作4巻のエピソード、『御使墮し』（エンゼルフォール）が始まる。これに介入して『このセカイ』を引き裂く寸前まで歪めてやれば、わたしがその隙について　　」

「けるな」

だがすべての理性を総動員して、桐はそのセリフをさしこんだ。

「……どうしたのよ？」

いぶかしげに、少女がその言葉をとめる。

あいかわらず、青年の本能のようなものは目の前の少女に従おうと続ける。

それでも、

(このセカイを、メチャクチャにする　?)

理性がその内容を反復すると、ようやく、わずかながらも怒りが生まれた。

その苛立ちにすがりつくように、桐は言葉を吐き出す。

「……聞こえなかったかな、ふざけるなって言ったんだ。今頃ノコノコ現れて、好き勝手えんえんと話してくれたと思ったら僕に何をしろって？つきあってられないね」

ただ、それだけを言い捨てて、青年はきびすを返した。

なにごとか、背中に投げられる言葉を必死に無視しながら廊下を早足でもどると、つきあたりのエレベーターではなく、下りの階段へと駆け込む。

頭の中は、形容するまでもなく、ぐちゃぐちゃだった。

悪い夢にうなされているような気分の下、正しく『あの場から逃げ出した』青年は、寮の建物を飛び出す。

行く先なぞ、どこにもありはしないのに。

とあるナニカヴォイス・ソーサラーの音声魔術士

68

Phase .

ヒマだし、ただ、ちょっと気になっただけ。

『妹達』（シスターズ）の一部を製薬会社から保護したあくる日、  
そう自分に言い聞かせながら美琴はまた、病院の門をくぐっていた。  
そろそろ慣れた感のあるナースセンターに足を運んで、カエル顔の  
医者の部屋に通してもらおう。

「昨日は大変だったね？ところでどうかしたのかな？見たところ、  
特に怪我をしているようにも見えないけれど？」

かなり遅めの朝食……もしくはやや早めの昼食だろうか。

ありふれたサンドイッチをたいして美味しくもなさそうに摂りながら、迎え入れたカエル顔の医者は美琴に尋ねる。

「ああ、私がどうってわけじゃなく……そ、そう。昨日の『あの子達』はどうしたのかわって」

「ああ、君たちが保護した子達だね？もちろん問題は無いよ？こちらに来た子達には多少の発熱はあったが、それも抗生物質で治まる程度だったしね？しっかりと栄養を取ってもう一日休めばそれで健康体だろう。せっかく来たんだ、会っていくかい？」

「……えっと、その……嫌ってわけじゃないし、あの子たちが大したことなかったのは本当によかったなって思うんですけど……。今日は遠慮しておきます」

やや言いよんどからそう答えた美琴に、カエル顔の医者は頷く。

「そうだね、君がそう思うのならそれでいいと思うよ？とくに答えを焦る必要はない。どうするのが正しいかなんて、誰にも明言できないのだからね？」

「は、はい。ありがとうございます」

そうして、『妹達』（シスターズ）以外にあの場で助けられた少女のことには触れられることなく、『昨夜の話題は終わった。それは単に会話の当事者がそれぞれ、その事象を』話題にするまでもない、取るに足らないこと』と感じていたからだっただけだ。

気を取り直して、美琴は口を開く。

「そういえば先生、あいつは……」

「ああ、彼かい？彼なら今日は来ていないね？今まで連絡もなかったから今日はこちらには来ないと思うよ？来るならば彼は几帳面に連絡を入れてくるからね？もっとも、明日は昼には来るだろうけれど」

「え、それって……？」

「彼の知り合いが明日、退院することになっていてね？もっとも、退院先でもリハビリはしなければいけないがね？」

「え、アイツの知り合いが……？そうなんですか？」

初めて聞く内容に、美琴は驚く。

だが、その反応にむしろ不思議そうに医者目は目をしばたかせた。一拍おいて、コーヒーを口に含み、飲みこむとともに頷いて息を吐く。

「そうか……君には話してしていなかったんだね、彼は？全く、らしい話だね？」

どうやら、その息はため息だったらしい。

やれやれ、とでも言いたげに投げられた言葉を、美琴は質問で受けた。

「それって、どういっ……」

「まあ、君も無関係というわけじゃないから、話しても構わないだろうね？木山春生、という名前に覚えはあるかい？」

当然、その名は覚えていた。

木山春生。

個人ではどうしようもない事情から、『幻想御手』（レベルアップ）事件を引き起こした人間の名前を出されて、美琴は頷く。

「それは……もちろん。先生に協力してもらった事件ですし」

「なら話が早い。でも、彼女のことはここでは置いておくね？これから話すのは、あの事件の動機となった彼女の教え子たちのことだね？」

「え、教え子たちって……じゃあ、あの子たち……！！」

意識の外にあつた存在に話の焦点を向けられて、美琴は息をのみ、目を見開いた。

「うん、君の察した通りだよ？まあ、それほど大した話でもないね？彼 須臣くんが僕に話を持ち込み、僕がその患者を趣味で治療した、それだけのことだよ？」

「そ、そう……なんです、か……」

（あいつ、そんなことは一言だつて口にしなかつたくせに……）

思い出されたあの時の記憶 あいまいな笑みを浮かべていた青年に、なぜか不思議ともやまとしたものを感じて、美琴は頷いた。そうして話題もなくなったところで、適当にあいさつを済ませてその場を辞する。

病院を出てまずは携帯を取り出し、だがそこで、昨日、青年が携帯を壊していたことを思い出した。



「あっちゃー、そういえばあいつの携帯、壊れちゃってたっけ……」  
それでもいちおう掛けてはみるが、やはり聞こえてくるのは留守番用の無機質なメッセージだけだった。

「……まあ、あいつも電話ないと困るだろうし、いつまでも繋がらないままってわけじゃないだろうけど……それでも今日は無理そうね……」

そうひとりごち、携帯をスカートのポケットにしまって歩き出す。

(……………ああもう)

しかしすぐに立ち止まって、美琴はガリガリと頭をかいた。

「ったく、なんつーか、連絡取れないって思うとそれはそれで妙に気になんのよね。どうせ今日は特に予定もないんだし……」

言い訳のようにぶつぶつと独り言をつぶやき、美琴は再び歩き出す。足を向けるのは、風紀委員の第177支部。

(とりあえず、あいつがいなくても黒子や誰かはいるでしょ。いたらいたで、いろいろとっちめてやればいいんだし )

昼過ぎの、夏の日差しの中。

そうして一歩踏み出す少女の顔には、軽い笑みが浮かんでいた。

E  
X  
T

T  
O  
N

「……須臣君？彼なら今日は来ないって言ってたわよ？」

どうやら、今日はとことんまでそういう日ということらしい。

『風紀委員』（ジャツジメント）第177支部となっている、柵川中学の一室。

どこかオフィスを思わせるすっきりとしたつくりの部屋で、窓際にいた固法は入室してきた美琴に振り返ってそう告げた。

いつもの定位置に座っていた初春も、キーボードを打つ手をとめて話に入ってくる。

「そうなんですよ。須臣さん、なんでも昨日の夜からなにか用事があるそうで、もしかしたら長引くかもしれないから今日はお休みにして欲しいって言っていました」

（昨日の夜の用事って、もしかしなくてもあの製薬会社の件よね……。たしかに、うまくいかなかったら長引くような話だったし、あらかじめ来れないって連絡を入れててもおかしくないか……）

昨夜の立ち回りを思い返して、美琴はその言葉にひとり納得する。

「御坂さん、何か須臣さんにご用事だったんですか？」

「あ、いや、そうたいした用事ってわけじゃないんだけど……」

続けて飴を転がすような甘い声で投げられた質問に、あいまいな返

事を返しながら美琴は初春に近づいた。

「何かあれば携帯に連絡をとってことでしたので、なんでしたらこちらから連絡を取ることもできますよ?」

「い、いいえ、そこまでしてもらうほどのことじゃないわよ」

そう言いつつ端末を取り出そうとする初春の腕を、美琴は軽く抑えることで押しとどめる。

「そもそも、あいつの携帯は今、使えなくなっちゃってるし」

ついでのように付け加えた言葉に、初春は不思議そうに首をかしげた。

「え、須臣さんの携帯が使えなくなってるって……?」

「ええ、昨日壊れちゃったのよ、なんていうか、こっ、グシャって感じで」

昨夜銃弾を受け、放射線状にひびの入った携帯を拾う青年の背中を思い出しながら、美琴は答えた。

「ええ!? だってあれ、耐久性でもミルスペックそのけな廃仕様のはずですよ? いっそ拳銃の弾でも撃ち込まれない限り、ゾウに踏まれたって大丈夫なはずなのに……。いったい、何があったんです……?」

大げさに驚く初春に、美琴は内心冷や汗をかきながら、

「さ、さあ、落しどころが悪かったんじゃないの」

とだけ答えると、話題を探して彼女のデスクの上で起動しているモニタに目をやる。

「そ、そんなことよりこれ……第6学区の地図よね？」

「あ、はい。今白井さんがパトロールしてるんですよ。最近また、スキルアウト絡みの恐喝事件が増えてるみたいで。支部同士持ち回りて人を出して警戒しているんです」

そう解説する初春の目の前のモニタに表示された地図を、いくつかの光点がゆっくりと移動していた。

「なるほど、これがみんな『風紀委員』なのね」

その地図の外、画面の右下でさかんに点滅しているウィンドウに気付く。

「あれ。これ、なにか呼んでない？」

「ああ、これはですね……っ……」

答えようとした初春の声が詰まる。

それからしばらくわたたとどこかコミカルな動きで狼狽した少女は、やがておそろおそろといった感じでマウスをクリックした。

「う・い・は……！？ようやく出ましたわね。どれだけ待ったと思ってますのよ……？」

「あ、あわわ、す、すいませんすいません白井さん、ちょっと来客があつてですね！」

パソコンのスピーカーから流れだす、怒気にあふれたルームメイトの声。

それにちよつとほつとしながら、美琴は口を開いた。

「あー、黒子？つてこれ、聞こえてんのかしら」

「……………っ！？」

通信の向こうで、狼狽したように息をのむ声が響く。  
ややあつて、

「そのお声は、お、お姉様！？お姉様ですの！？……………う、初春、あなたわたくしがこのクソ暑い炎天下で不毛なパトロールにいそしんでいるっていうのに、自分はクーラー効いたお部屋であまつさえ私のお姉様と談笑してこちらの定時連絡ガン無視ですの……………。ずいぶんといい度胸と身分ですのね初春……………」

慌てたような声、次いで何かとても真つ黒な感情に染まった声がスピーカーから溢れる。

「あ、あわわわ……………」

涙目で震え上がる、頭に花を飾った少女。

(やれやれ……………)

それに苦笑を浮かべて美琴はぼん、と後輩の少女の肩をたたくと、

身を乗り出して口を開いた。

「マイクは……っと、まあいいかこのままで。さっきも聞こえてたし。黒子、あんた今どこにいるのよ?」

「…………お姉様?」

「いいから!とつとと現在地!」

急かしてやると、慌てたような声が返ってくる。

「シ、C地区北西の公園のベンチですの。ですがお姉様、そんなことをお聞きになってどうされるんですの」

モニタ上のマップに素早く目を走らせ、美琴は黒子を表すフリップを見つける。

「今から合流するわよ、とつとと終わらせてアイスでも食べましょう?」

『先輩』として美琴が選んだ言葉は、ひどく快活に響いたのだった。

とあるナニカの音声魔術士

ヴォイス・ソーサー

69

Phase .

うめき声とともに、身体を起こす。

砂でざらつく口の中が、うっとおしい。

昨夜吐いた吐瀉物の残滓に目をやって、だがとくに感想を浮かべる  
ことなく、桐はそのままじめついたコンクリートの壁に背中を預け  
た。

思い出すまでもなく、昨夜のことが頭に浮かんでくる。

あの少女に一方的な宣言を受け、反論らしい反論をひとつも浮かべ  
ることができないままその場を離れた青年は、

ただ、ひたすらに走った。

何かから逃げるように、いや、真実ナニカから逃げるために駆けた。  
思考はかき乱され、無意味な言葉の羅列が秩序なく踊り狂う。

それは、身体が限界に触れるまで続くことになった。



最後に記憶に残るのは、酸欠に歪んだ視界と苦痛に、倒れこんだ先の地面の色だけ。

「……………うう」

ぼんやりと、首を振る。

あの、凍てつく水の中でもがくような。

あるいは、焼けた鉄板の上に放り出されたような、恐慌。昨夜感じていたそれらは今、あっさりと失われていた。

一晩明けた青年の胸中にあるのは、ただ、色褪せた感触。希薄になった現実感が、目の前の光景をすべて、遠い他人事のように映し出していた。セカイの全てから見捨てられたような、絶望。

(ここには、いたくないな……………)

のろのろと思考して、座り込んでいた桐は立ち上がる。ふらりと足を踏み出し、

(でも、どこかにいきたいってわけでも、ないんだけどね……………)

そんな思考を転がしながら、幽鬼のように青年は歩きだした。

喧噪の気配から離れるように、日の当たらない路地裏を選んでただ、うつらうつらと歩き続ける。

飽和してしまった思考と緩く拡散した諦観を包む、どこまでも透明に淀んだ自身。

そんなゆるゆるとした認識の中にノイズが走ったのは、歩き出して4時間ほどたったころだった。

「……………！」

「……………!?!」

「……………たしは……………!」

「……………べこべ……………じゃ……………!……………キが……………!」

道の先、進行方向より、桐の耳が言い争うような声を拾う。

「わ、私は……………、そんな、お金なんて……………」

いや、それは言い争いですらない、一方的な恫喝だった。  
変わらない速度で四つ角を曲がった桐の視界に、大仰な男たちと、  
それに囲まれている小さな誰かが見える。

「いいから出せつつつてんだよ。学生証でいいつつつてんだろお?」

どすの利いた声とともに、ガシャン、と何かが割れる音がする。

「だ、だから私は、ほんと、そ、そんなのイヤで……………」

「ああ?!?!」

少女のか細い声が、十人からの男の声に押し潰される。

また一步、歩みを進めたところで、男たちの隙間から囲まれている  
女の子の姿がすけて見えた。

思考も、テンションも。

全く振れることなく、桐は、

ただ、踏みだす。

心は絶望に染まった、フラットのまま……いや。

（こんな時だって、こうしたくなるんだね、僕は　　）

（どのみち全部まとめて、どうしようもなく終わっているっていうのに……）

自らを唾つような言葉だけを脳裏に浮かべながら、黒づくめの青年はすりと彼らに近寄る。

この瞬間、少女を囲んでいる輪の隅、角の部分にいた少年は、間違はなく不幸だった。

「あ？オマエは　　っ、うあ、ぐべえっ」

文字通りの一瞬で、左足の関節を砕かれ、崩れ落ちた髪を掴まれ、手加減なしの膝で鼻ごと意識を潰されたのだから。

行動はよどみなく。

吐き捨てるような呼気と共に振り抜いた左の掌打が、あっけなく鉄棒で武装した二人目の喉を叩く。

轢かれたカエルのような声をもらしたその少年は、至近距離で横なぎに埋め込まれた右ひじにアバラを砕かれ、いつそ優しいと言えるほど正確に振るわれた足払いで自分の仲間たちへと投げ込まれた。その手にあったはずの鉄棒は、いつの間にか黒づくめの青年の手に

握られている。

そして、いきなり動いた状況をつかめないまま、棒立ちになっている少女に声かけられた。

「 回れ右」

「 え、ええ!？」

そう、もう少女は囲まれてはいなかった。

迅速かつ、強引極まりない手段でこじ開けられた包囲網に桐は自らの身体をねじ込み、かけた言葉の通りにぐいっと少女の向きを変え

る。

間髪入れず、  
「次は駆け足だよ。息が切れるまで立ち止まらないこと。わかったら行け!!」

鋭い声に後押しされて、オーバーオールをまとった少女は走り出した。

空隙はつくらない。

奪ったばかりの鉄棒を繰って、仲間を投げつけられて身動きの取れていない相手を立て続けに三人、最小限の動きだけで意識を奪う。そうして瞬く間に五人を潰して、桐は視線をあげた。そこは、どこかのチームの縄張りだったのだろう。

それでもまだ、二〇人近い人数がその場所にはいた。加えて奥の建物からも、似たような少年たちが怒号と共にバットや

ゴルフクラブ……それぞれの武器を持って走り出てくる。  
だが、それには全く頓着することなく、桐は構成を編み上げた。

（何やってるんだらうね……）

皮肉げに顔を歪めながら、描いた構成の威力を調節することなく、呪文とともに解き放つ。

「 我は放つ光の白刃」

振り出した掌に純白の輝きが生まれ、わずかの遅滞もなくそれが爆発的に伸びる。

その先に誰かの身体がなかったのは、単純に偶然だった。

アスファルトが白い光条に喰らいつかれ、次の瞬間、盛大に吹き飛ばす。

「う、うわ、うわ、わああああー!!」

「こ、こいつ、能力者だ、能力者だぞ!？」

粉塵の中に現れるのは、小さなクレーター。

遅れてあがる散発的な怒号と悲鳴には興味ひとつ持たないまま、桐は自分を嗤った。

（自分がこんな状況になってるっていうのに、わざわざ他人を助  
けようと思うなんて ）

急激な運動と魔術の行使によって、弾んだ息。

ようやく理性が、あの圧倒的な自覚に追いついてくる。

( 本当に、僕は )

「 どうしようもないくらい、そう在るように創られた『存在』、  
なんだね」

そうして、桐はそう結論した。

( お話の中にしか存在しない主人公、『キラランシエロ・フィンラ  
ンディ』 〓 『オーフェン』の劣化コピー、か…… )

さらに何もかもどうでもよくなった青年は、三〇人以上に膨れ上が  
ったスキルアウトの目前で、唯一の武器である鉄棒を投げ捨てる。  
その行動にざわつくスキルアウト達に視線を向け、少しだけ思いを  
巡らせてまた、自嘲する。

( 『<sup>フィルタリング</sup>制限』が外れた今ならよくわかるね、本当に。こんなセリフし  
か出てこないんだな、僕は )

「 ああ」

皮肉げな笑いを浮かべながら、険しい顔つきで向き直ってきた少年  
たちに口を開く。

「神様っぽいものの計画を潰す手伝いをしてもらいたいんだけどね」

いつかの作中で、『オーフェン』の言ったような言葉を、『キラランシエロ』のような口調で。

『僕を殺してみてよ。できるならさ』

そうして桐は、言いおいて腕をだらりとたらし、目を閉じる。  
……激昂したスキルアウトの暴力は、遅れてやってきた。

思考が、滑る。

たった、十分にも満たない短い邂逅。

得られたのは手ひどい拒絶と、安っぽい部屋の鍵、だけだった。

「なんで、こうなっちゃったのかしらね……」

西日の差しこむフローリング。

青年が住んでいた部屋の片隅にあるシンクにもたれかかって、黒髪の少女はうずくまってつぶやく。

ここに座り込んだままで、そろそろ一日半が経過しようとしていた。

(急ぎすぎたの……?でも、『わたし』はずっと、ずっと待っていたのに)

とりとめない思考が、浮かんでは消えていく。

あとには何も残さないそれに感想を浮かべることもできないまま、

少女はただ、夕日に染まりゆくフローリングに視線を落とす。

ふいにその顔をあげて、少女は部屋の全体を見渡した。

特に家具らしい家具が存在しない、いつそ寒々しいとすら言える部屋。



( やっぱり、ちゃんと揃えてあげるべきだったかしらね…… )

まだ余裕のあった、『あの時』。

こちらの世界に来てすぐ、須臣桐を『想像』することで、『創造』したばかりの『自分』を思い出す。

( でもしょうがないじゃない。だってこうやってここをからっぽにしなきゃ、絶対にあの子はこの部屋に引きこもってたんだから )

あの時の自分は何でも出来た。

不可能なことなんか、何もなかった。

そう、あの時に先を見通すことさえできていれば、こんな無様で危うい手段に頼ることなく、このセカイから帰還することだってできていたかもしれない。

( だというのに、その『先を見通すこと』こそが、『わたし』にとつての不可能ごとだったというのはいったい何の皮肉かしらね…… )

鬱々とした思考と共に、ため息をこぼす。

「ほんと、なんだっていうのよ」

同時にまた、じわりとにじんだ涙をこしこしとこすって、少女はうめいた。

「あいつは私の……だっていうのに、なんで気持ちよく助けてくれないのよ。憎たらしいくらい、あいつは私の『想像』通りなのに、なんで、なんで……」

新たなしずくが目じりに浮かんだのを感じて、顔をうつむける。  
黒いローブの布地に、ぼたり、ぼたりと染み込んで、濃い点が出来  
上がった。

みっともなくしゃくりあげる自分を抑えようと、少女はぐっと自分  
を抱きしめる。

ただ、惨めだった。

今、この部屋で沈んでいく夕日の差し込む光だけを見ている現状も、  
ここに至ってしまった経緯も、昨夜の邂逅での拒絶も、握りしめる  
ローブの裾がしわになった感触すらも。

(セカイにひとりだけって、こういうこと、なのね……)

声を出さずにぼろぼろと涙を流しながら、少女は鬱々と絶望にまみ  
れていく。

滲み続ける視界にうつる、部屋。

そこにやはり誰もいないことを再確認してさらに落ち込もうとした  
とき、

遠慮のないノックの音が、青年の部屋に響いた。

「まあ、いいんだけど……」

昨日、黒子と合流し、パトロールを済ませてからふたりでアイスを食べた美琴は。

「アイスティとオレンジジュース、お待たせしました」

「ああ、アイスティはわたくしですの。オレンジジュースはそちらで」

今日も今日とて、黒子の対面に座って頼んだジュースにストローをさしていた。

「それで今日はなんなのよ？ 思えば、2日続けて黒子とお茶するってなかなか珍しいわよね」

「たしかにそうですの。全く、つれないんですものねお姉様は。黒子はいつだって、お姉様と過ごす時間を一分一秒でも長く多くと、魂の底からそれはもう狂おしいまでに望んでおりますというのに」

濁りのない紅茶をティーサーバーからたっぷり氷の入ったグラス

に注ぎながら、茶髪のツインテールを揺らして黒子は口をとがらせる。

「あーはいはい、そりゃありがとね。あんたのその若干病んだ願望はどうでもいいから。で、どんな用事だったのよ？」

うっとうしいげな姿勢を隠そうともせず重ねて尋ねた美琴に、後輩の少女は嬉しげに答えた。

「実は前々からお誘いするつもりでしたのよ。ここの新作のケーキが美味しいと初春の友達が教えてくださいます。ですからどちらかと言えば昨日の方が特別ですよ。まあ、お姉様のスケジュールは二月前から子細に確認していましたし」

そのセリフに、ひくりとこめかみをひきつらせながらも美琴は口を開く。

「た、確かに予定はなかったけど……その確認の手段は後でゆっくりと尋問させてもらうとして……。あの子の友達って」

そう、言いかけたところで。

「こんにちは御坂さん！……あついでに白井さんも」

「どもー。こんにちはです、御坂さんと白井さん」

見知った二人の後輩がそれぞれのあいさつと共ににぎやかにテーブルに歩み寄ってくる。

だがそのうちの一人、頭に花を咲かせた少女は速やかに茶髪ツインテールに捕獲された。

「初春……？わたくしをさらりとついで扱いというのは、たった一晚見ないうちにあなた随分と偉くなれましたの、ねええ？」

ぎりぎりぎり。

そのまま速やかにヘッドロックに移行し、熟練を思わせる手つきで締め上げられた少女は悲鳴を上げる。

「い、いひゃいひゃいひゃい！いひゃいですよ白井さん！ほんのちよつとした同僚のお茶目じゃないですかあー！！」

「あなたの場合、それが時々真剣に看過できないウザさに達するくらいじゃないの。これを機会に徹底的に矯正してみるのもよろしいかと」

「きよ、矯正っていうかむしろ歪んじやう、あたまのカタチが歪んじやいますー！！」

「ま、まあまあ白井さんもそのくらいで。……でも、今は初春も悪いと思つよ？」

じたばたする親友を見かねて、ロングヘアの少女　佐天がとりなす。

そうして、お茶会が始まった。

「だから、クランベリーの旬は冬、冬なんですよー！！」

「まるでわかってませんのね初春。もとは確かに保存のための技術とはいえ、上質なキュラソーにきっちり漬けてこまれば、そのままいただくより一段上の菓子素材になりますのに」

「あはは……あたし個人としては美味しければそんなに気にならな  
いっていうか……正直、あるレベルより美味しけりゃ、全部『すこ  
い美味しい』でいいと思うんですけど……」

つらつらと流れていく話題を聞きながら、美琴はふと、窓の外へと  
視線を投げる。

（そろそろあいつ、あの子たちに会えた頃かしらね……）

気にしないと決めたはずのことがこころに浮かんで、少女は少しだ  
け眉を寄せた。

（つて、何考えてんのよ私は）

昨日たまたま知ることになった子供たちの退院に立ち会うことを、  
どこか間の抜けたふさわしくない行動だと感じて、結局こちらに来  
ることを選んだ美琴は、だが浮かんできた思考に戸惑っていた。

（べ、別にこれでいいのよ、これで。言っちゃなんだけど、今まで  
その子たちのことを全然気にしてこなかった私が退院にいきなり顔  
出してみたっておかしいだけだし。あいつは……あいつは、ちゃん  
とずっと面倒見てたんだから）

掌の中、グラスの中の氷がカラン、と滑る。

（そりゃ、今の今までこつちに一言もなかったのはさすがにどうか  
と思うけど。……うん、そう、無関係じゃない私に一言もないのは  
ありえないわよね。これは後でとっちめてやらないと……）

「……………さん？」

(そう、とっちめてやると言えばあのバカもよ。なんなの昨日のあれは。ヒトが街中で見かけたからあいさつしてやったっていうのにどうしようもないくらいフツーに返事してきて！)

とりとめない思考の中、矛先がゆらりとスライドする。

黒髪の青年をいったん保留した脳裏に、今度は昨日たまたま出会ったツンツン頭の少年を思い出して、美琴は眉をしかめた。

(あんな場面にどこかのヒーローものよろしく登場して、なおかつ私には何も言わないままいつの間にか消えておきながら、「よ、御坂……だったな、元気か？」ってなによ。あんなのに巻き込まれたんだからもつとこう、言うべきことがあるでしょいると。まさかあいつら、なんか示し合せてないでしょうね。何訊かれるのか身構えながら声かけた私が馬鹿みたいだったじゃない。ああもう、なんかモヤモヤする )

「……………御坂さん！」

美琴にとっては唐突に自分の名前を呼ばれ、視線をあげる。そこには、どこか困り顔の佐天が目前でぱたぱたと手を振っていた。

「どうかしたんですか御坂さん、もしかして熱でも？」

あわてて美琴は手の中のグラスを持ち上げる。

とりつくるようにそれをひとくち口に含んで飲みこんでから、あらためて視線を後輩へと向けた。

「いいえ、なんでもないわよ」

「そうですか？なんか、心ここにあらずって感じでしたよ？」

軽いのに、真剣に相手を心配しているのがはつきりとわかる口調。その佐天の気遣いを嬉しく思いながら、美琴はこたえた。

「考え事してただけよ。たいしたことじゃないんだけど、考えだしたらついつい、ね。心配してくれてありがとう」

なんのてらいもなく放たれた、素直な感謝の言葉に少女の頬が赤く染まる。

(うう、うわあ。こりゃ白井さんが参っちゃうのもわかる気がする…  
…こういう時、この人ってホント、『お姉様』って感じたもんね。  
うう、あぶないあぶない)

そう、内心でだけつぶやいて、佐天はことさらに明るく今日仕入れた話題を振った。

「いえいえ。それより聞いてほしい話があるんですよ！なんと学園都市に、新しいヒーローが現れたかもしれないんです！..！」

「はあ。ヒーロー、ですか？」

「いきなりヒーローって言われても……」

「ひ、ヒーロー、ねえ……」

ヘッドロックをゆるめた黒子はきょとんと、助かった初春はいぶかしげに、そしてその言葉に少し思うところのある美琴はどこか受け



止めづらそうに。

三者三様の、でもまともに取り合う気だけはなさそうなところは共通している反応に、佐天は声を大きくして話す。

「いや、ホントなんですって！昨日の夕方、アケミが第六学区の外れでタチの悪い不良たちに絡まれちゃって、なんか囲まれて、お財布と学生証取られそうになっちゃったそうなんですけど」

その話を聞いた三人の表情が変わる。

「第六学区、って昨日の……！」

「ええ、昨日重点的に警邏した区域ですわね。たしかに直情的で野蛮なグループが数組、縄張りでもめてらっしゃる場所ですけど」

「そ、そんなところで絡まれたなんて……大丈夫だったんですか？」

にわかに真剣味をおびた三人に、黒髪の少女は得意げに言った。

「それがね、もうだめだー！って思った時に、一人の青年が現れたんですよ……！」

「現れた……？単に『風紀委員』（ジャッジメント）の誰かが間に合っただけではないのですの？」

やはりいぶかしげに問いかける黒子に、ちつちと指を振りながら、佐天は続ける。

「その人が、たったひとりだけで何の能力も使わずに、それも素手でアケミを不良の集団から逃がしたとしても？」

その言葉に、美琴の心臓が跳ねた。

(……っ!?)

だがそれには誰も気づかないまま、話は進んでいく。

「ひとりで？それはまた無謀な……。確かに、それは『風紀委員』(ジャツジメント)ではなさそうですね……。それで、その殿方はどうやってアケミさんを助けたんですの？」

「それがよくわかんないですよね……。アケミも、なにがなんだかわかんないうちに周りを囲んでた怖い人たちが次々に倒れて、目の前が開けたと思っいたらいきなり『行け!』って言われて必死で走って逃げたって話なんで……」

「それならやっぱり何かの能力だったんじゃないですか？そんなマンガや小説みたいに素手ではったばったと不良さんたちを倒せちゃう人なんか、そうそういないような……。ですよねえ、御坂さん？」

「え!？」

初春に話を振られて、美琴は一瞬、たじろぐ。

(ま、まさか、まさか、よね……)

勝手に浮かんでくる心当たりを振り払いながら、美琴は口を開いた。

「の、能力なしじゃやっぱり難しいんじゃない？なんだかんだで人数差って大きいものだし……。佐天さん、他になにかそいつの特徴

みたいなのはなかったの？」

そうして尋ねられた少女は、長い髪を揺らしてやはりうれしそうに答える。

「ええ、能力とかはわからないんですけど、すごい特徴的な恰好をしてたそうです。だからヒーローっていう話になるんですけど、なんと、その人は頭から足まで全身『黒づくめ』だったそうなんですよー!」

ぶっつ、と、少女が出すには不釣り合いな声が美琴の口から吹き出す。

(あんのバカ……なにやってんのよ……)

「み、御坂さん? どうしました?」

「い、いえ、なんでもないわ、続けて」

清潔なおしぼりを手に取りながらなんとかそう言った美琴に、

「……そうですか?」

と頷いて、だが困ったように頬をかいた。

「といっても、アケミから聞いた話はほとんどこれで全部なんですよ。それで聞いたかったんですけど、みなさんはそういうことが出来そうな人、知りませんか?」

問われて、黒子は難しい顔で首をかしげる。

「レベル3以上の能力使用を前提とすれば、そう難しいことではないとは思いますが……。見ただけでは何が起こっているかわからない能力も多いです。しかし、あのあたりでたむろしているスキルアウトに、真っ向から一人でケンカを売る人間ですか……」

「そんなに強い人ってことなら……。もしかしてそれ、須臣さんじゃないですか？」

何も考えてなさそうな声色で、初春の声が響く。

また、何かをふきだす美琴。

幸い今度は、口にあてたおしぼりにさえぎられて大きな音は出なかったが。

「ああ、あの方ならやりかねませんわね。風的能力なら、パツと見で把握できなくてもおかしくはありませんし。……あら、お姉様、どうなさいましたの？」

尋ねる黒子に、おしぼり越しに首をふるふると横に振ることだけで美琴は答える。

呼気が気管に入ったのか、彼女の目はかすかにうるんでいた。

そして、続けられた言葉にその目のはつと見開かれる。

「あたしも最初にそう思ったんですけど、桐さんじゃないと思います。だってその人、『すごく乱暴で怖かった』ってアケミが 助けられたコが言ってましたし」

確信があるのか、やけにきっぱりと佐天はそう言い切った。

(…………え?)

「たしかに、乱暴で怖い須臣さんというのも、想像しづらいですね……」

「うーん、確かに。おしとやかで愛らしい白井さんぐらいありえないんじゃないかと……ああ、痛い痛い痛いですっ!」

それに同調する、美琴以外の二人。

だがそのふたりの声は、もう耳に入らなかった。

ぐい、とおしぼりで口元をふくと、美琴は席を立つ。

「ごめん、ちょっとお手洗い」

携帯の感触を確かめつつ、早足でトイレへと向かい、洗面台の前でそれを耳に当てる。

数コールもしないうちに、その通話はつながった。

「……もしもし?」

電話の相手は、カエル顔の医者。

耳に響いた、どこか探るようなその声色に構わず、美琴は単刀直入に尋ねる。

「すみません、昨日お話していた、今日退院する子供たちのところにあいつは……須臣は顔を出しましたか?」

前置きも何もない、直接的な質問。

答えが返ってくるまでの5秒間が、ひどく長く感じる。

「……いいや、退院祝いには彼は来なかったね、君はなにか知

っているのかい？」

どこか怪訝な調子で返された言葉はやはりというべきか、予想通りだった。

適当に後をごまかして、美琴は電話を切る。

（だいたい、あいつが『黒づくめ』であの製薬会社に入ったのは一昨日深夜から昨日の早朝にかけて……。昨日の夕方もその格好だった。たつてことは、二日続けてあの恰好で動がなくちゃいけないような事態が起きた……。？それに、いつも憎たらしいくらい余裕があつて、『柔らかい』あいつが『乱暴』で『怖い』だなんて……。)

そして一緒にいた3人とも喫茶店で別れ、美琴はある場所に向かった。

PDAを通じて調べるまでもなく、その住所はPDA自体に入っている。

あの日、病院で製薬会社に忍び込む話をした段階で、年上の青年自身に明かされていた住所。

「ここ、みたいね……」

それは、とあるありふれた学生寮の廊下。

安っぽくて素っ気のない、『須臣 桐』という表札がかけられた扉の前で、美琴はそうつぶやいた。

（状況証拠が揃い過ぎてる以上、勘違いだとは思えない。全部、説明してもらつわよ……！）

かすかに荒れた息を整え、気後れする自分を鼓舞するように大きく  
頷くと、少女は、

目の前の扉に、遠慮のないノックを見舞った。

E  
X  
T

T  
O  
N

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8453s/>

---

とあるナニカの音声魔術士(ヴォイス・ソーサラー)

2012年1月14日00時33分発行